

神戸市北区

日下部遺跡2

—新名神高速道路 箕面～神戸間(兵庫県域)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成30(2018)年1月

兵庫県教育委員会

神戸市北区

日下部遺跡 2

—新名神高速道路 箕面～神戸間(兵庫県域)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 30 (2018) 年 1 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



遺跡の立地（北東方面を望む）



北地区・中央地区北半部全景（上が北）

巻頭カラー一写真図版 2



中央地区南半部（上が北）



下段南地区（上が北）



上段南地区（上が北）



西地区経塚集石SX01（南から）

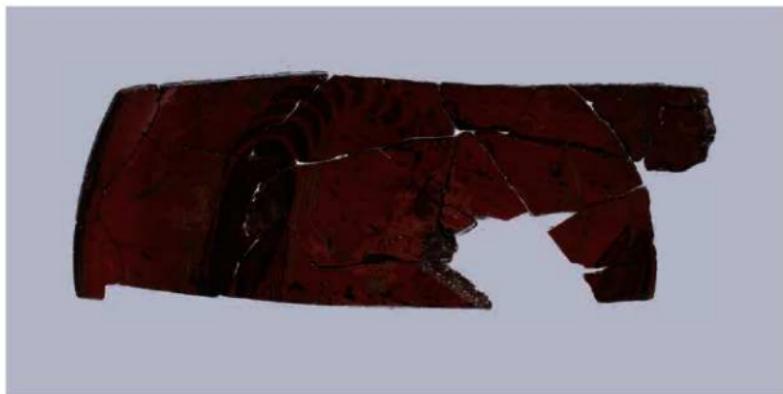
巻頭カラー写真図版 4



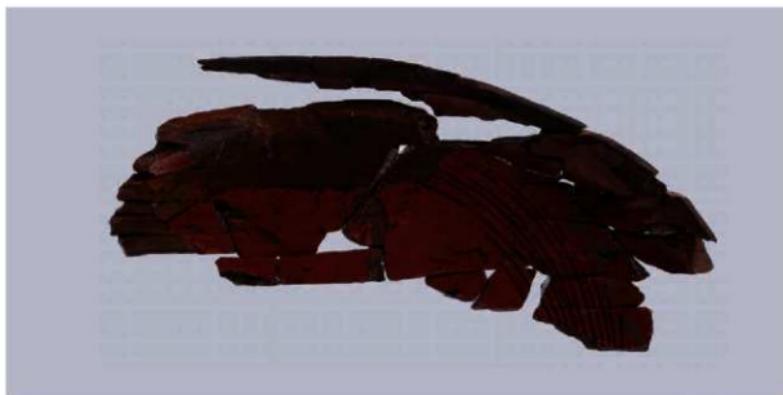
上段北地区SK224土器出土状況（北から）



SK224 出土土器



下段北地区 SK608 出土漆器大皿 W65



北地区 SK510 出土漆器大皿 W67



北地区 SK621 出土漆器碗 W79

(下)中央地区包含層
出土木製品 W114

(上)北地区 SR415
出土漆器碗 W10・W11

巻頭カラー写真図版 6



北地区 SR415 出土木製品 W16



北地区 SE419 出土木製品 W69



北地区 SE419 出土木製品 W68



北地区 SK608 出土木製品 W66



北地区 SR415 出土木製品 W31

例　言

（なかへ）

- 1 本書は、兵庫県神戸市北区有野町二郎に所在する日下部遺跡の発掘調査報告書である。日下部遺跡の発掘調査については、すでに「兵庫県教育委員会 2001.3 「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第 215 冊」として刊行されている。本書で報告する地点は、前記報告地点とは離れ、間に「二郎宮ノ前遺跡」を挟んでいるが、神戸市教育委員会との協議の上、同じく日下部遺跡として調査を実施し、「日下部遺跡2」として報告する。
- 2 本調査は、新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 本書は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の岸本一宏、西口圭介、村上泰樹、大本朋弥、別府洋二及び、兵庫県立考古博物館の山本誠が執筆し、一般社団法人文化財科学研究センター出土木製品の樹種同定をお願いし、第6章に掲載した。編集は別府が池田悦子の協力を得て実施した。
- 4 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 5 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 6 発掘調査・報告書作成にあたっては、
西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所
神戸市教育委員会
金原美奈子（文化財科学研究センター）
岡田章一 松井良祐（以上、兵庫県立考古博物館）
株式会社藤原組 松浦興業 株式会社ジオテクノ関西 河南測量設計
森井光治 伊藤三千人 清浦武志 西本寿子 西山はるみ 中祖晴海
以上の方々（敬称略、順不同）のご教示、ご協力を得た。

兵庫県



神戸市

日下部遺跡



遺跡の位置

目 次

卷頭カラー写真図版 1	遺跡の立地	北地区・中央地区北半部全景
卷頭カラー写真図版 2	中央地区南半部	下段南地区
卷頭カラー写真図版 3	上段南地区	西地区経塚集石 SX01
卷頭カラー写真図版 4	上段北地区 SK224 土器出土状況	SK224 出土土器
卷頭カラー写真図版 5	出土木製品 1	
卷頭カラー写真図版 6	出土木製品 2	

本文目次

第1章 遺跡の環境 ······	1 (別府洋二)
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の経緯と経過 ······	7 (西口主介)
第1節 調査に至る経緯	
第2節 各調査の経緯と整理作業	
第3章 遺構	
第1節 調査の概要 ······	11 (別府、大本朋弥)
第2節 下段の遺構 ······	12 (別府)
第3節 上段の遺構 ······	19 (岸本一宏、西口、別府)
第4章 遺物	
第1節 土器	
1. 下段出土土器 ······	35 (別府)
2. 上段出土土器 ······	42 (岸本、西口、別府)
第2節 木製品 ······	54 (別府)
第3節 金属製品 ······	65 (別府)
第4節 石製品 ······	67 (別府・山本 誠)
第5章 西地区 (日下部経塚) の調査 ······	69 (村上泰樹)
第6章 日下部遺跡における樹種同定 ······	73 (文化財科学研究所センター)
第7章 まとめ ······	87 (別府)

挿図目次

第1図 周辺の遺跡 ······	6	第2図 繩文土器 ······	11
第3図 調査区周辺の露頭 ······	72	第4図 日下部遺跡の木材 I ······	80
第5図 日下部遺跡の木材 II ······	81	第6図 日下部遺跡の木材 III ······	82
第7図 日下部遺跡の木材 IV ······	83	第8図 日下部遺跡の木材 V ······	84
第9図 日下部遺跡の木材 VI ······	85	第10図 日下部遺跡の木材 VII ······	86

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	5	第2表 日下部遺跡における樹種同定結果	79
第3表 日下部遺跡出土土器一覧	92	第4表 日下部遺跡出土木製品一覧	99
第5表 日下部遺跡・日下部経塚出土金属製品一覧	101		
第6表 日下部遺跡出土石器・石製品一覧	102		

図版目次

図版 1 調査地点位置図	図版 2 調査区全体図
図版 3 下段北地区構配図	図版 4 下段中央地区構配図
図版 5 下段南地区構配図	図版 6 下段 SR400 土層断面図
図版 7 SR400 断面位置図と土層注記	図版 8 SR415・SE416 土層図
図版 9 下段 SE417 他	図版 10 下段中央地区柱穴列
図版 11 上段北地区構配図	図版 12 上段中央地区構配図
図版 13 上段北地区南側壁土層断面図	図版 14 上段北地区 SR218
図版 15 上段北地区掘立柱建物跡平面図	図版 16 上段北地区掘立柱建物跡断面図
図版 17 上段北地区 SK224	図版 18 SK224
図版 19 上段北地区 SK323・329・SD337 他	図版 20 上段北地区 SD363・SK220・SD310 他
図版 21 上段北地区 SE368	図版 22 上段北地区 SE219・362
図版 23 上段中央地区 SK819・834・862 土層図	図版 24 上段中央地区 SK01・02 他
図版 25 上段中央地区 SK13・25 他	図版 26 上段中央地区 SK78・70 他
図版 27 上段中央地区 SK43	図版 28 上段中央地区 SK64・65・SD174
図版 29 上段南地区構配図	図版 30 SX1007・SK72・71
図版 31 上段南地区・南西地区 大歳神社旧境内	図版 32 SX1007・南地区土層注記
図版 33 上段南地区南部構配図 SX1001・1004 他	図版 34 SF1053・SK1035 他
図版 35 SX1041	図版 36 SX1040
図版 37 下段 SR400 出土土器	図版 38 下段 SR400・415 他出土土器
図版 39 下段 SE416・SK465 他出土土器	図版 40 下段 SK908・575 他出土土器
図版 41 下段 SK435・736 出土土器	図版 42 下段包含層出土土器
図版 43 上段北地区 SR218・SD363 他出土土器	図版 44 上段北地区 SK224 出土土器
図版 45 上段北地区 SD273 他出土土器	図版 46 上段北地区包含層、中央地区 SK834 他出土土器
図版 47 上段中央地区 SK01 他出土土器	図版 48 上段中央地区 SK78・70 他出土土器
図版 49 上段南地区 SX1007 出土土器	図版 50 上段南地区 SX1001 他出土土器
図版 51 南地区 SX1037 他、南西地区出土土器	図版 52 南地区包含層出土土器
図版 53 SR400 出土木製品	図版 54 SR415 出土木製品 1
図版 55 SR415 出土木製品 2	図版 56 SR415 出土木製品 3
図版 57 SE416 出土木製品	図版 58 SK501 出土木製品 1
図版 59 SK501 出土木製品 2	図版 60 SK501 出土木製品 3
図版 61 SK608・510 出土木製品	図版 62 SE419・601 他出土木製品

図版 63	SK575・621・736 出土木製品 1	図版 64	SK736 出土木製品 2
図版 65	SK888・包含層出土木製品	図版 66	包含層他出土木製品
図版 67	出土金属製品 1	図版 68	出土金属製品 2
図版 69	出土石製品 1	図版 70	出土石製品 2
図版 71	出土石製品 3	図版 72	西地区全体図
図版 73	西地区 SX01	図版 74	西地区 SX01 遺物出土状況
図版 75	西地区 SX01 銅鏡出土状況	図版 76	西地区 SX01 下層
図版 77	西地区 SX02・テラス 1・2	図版 78	西地区出土遺物

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景	写真図版 2	遺跡遠景
写真図版 3	調査区全景	写真図版 4	調査区全景
写真図版 5	調査区全景	写真図版 6	調査区全景
写真図版 7	調査区全景	写真図版 8	調査区全景
写真図版 9	下段の遺構 流路・溝	写真図版 10	下段の遺構 流路・溝
写真図版 11	下段南地区的遺構 流路・溝	写真図版 12	下段の遺構 溝
写真図版 13	下段北地区的遺構 流路・溝	写真図版 14	下段北地区的遺構 流路・溝
写真図版 15	下段北地区的遺構 石組水溜	写真図版 16	下段北地区的遺構 石組水溜・土坑
写真図版 17	下段北地区的遺構 石組水溜	写真図版 18	下段の遺構 石組土坑
写真図版 19	下段北地区的遺構 埋埴他	写真図版 20	下段の遺構 埋埴他
写真図版 21	下段北地区的遺構 埋甕他	写真図版 22	下段中央地区の遺構 柱穴列
写真図版 23	上段の遺構	写真図版 24	上段北地区的遺構
写真図版 25	上段北地区的遺構	写真図版 26	上段北地区的遺構
写真図版 27	上段北地区的遺構	写真図版 28	上段北地区的遺構
写真図版 29	上段北地区的遺構	写真図版 30	上段北地区的遺構
写真図版 31	上段北地区的遺構	写真図版 32	上段北地区的遺構
写真図版 33	上段中央地区的遺構	写真図版 34	上段中央地区的遺構
写真図版 35	上段中央地区南半部の遺構	写真図版 36	上段中央地区的遺構
写真図版 37	上段中央地区南半部の遺構	写真図版 38	上段中央地区的遺構
写真図版 39	上段中央地区的遺構	写真図版 40	上段南地区全景
写真図版 41	南地区遠景	写真図版 42	南地区全景
写真図版 43	上段南地区的遺構	写真図版 44	上段南地区北半部の遺構
写真図版 45	上段南地区北半部の遺構	写真図版 46	上段南地区北半部の遺構
写真図版 47	上段南地区中央部の遺構	写真図版 48	上段南地区北半部の遺構
写真図版 49	上段南地区南半部の遺構	写真図版 50	上段南地区南半部の遺構
写真図版 51	上段南地区南半部の遺構	写真図版 52	南西地区全景
写真図版 53	南西地区的遺構	写真図版 54	南西地区的遺構

- 写真図版 55 出土土器 1 (繩文土器・SR400)
写真図版 57 出土土器 3 (SR400)
写真図版 59 出土土器 5 (SR400)
写真図版 61 出土土器 7 (SR415 他)
写真図版 63 出土土器 9 (SK608 他)
写真図版 65 出土土器 11 (SK575 他)
写真図版 67 出土土器 13 (下段包含層)
写真図版 69 出土土器 15 (SK220・224 他)
写真図版 71 出土土器 17 (SK224)
写真図版 73 出土土器 19 (SK224 他)
写真図版 75 出土土器 21 (SK834 他)
写真図版 77 出土土器 23 (SK01 他)
写真図版 79 出土土器 25 (SK43 他)
写真図版 81 出土土器 27 (SK71・SX1007)
写真図版 83 出土土器 29 (SX1007・1001 他)
写真図版 85 出土土器 31 (SX1010・1039)
写真図版 87 出土土器 33 (上段南地区包含層)
写真図版 89 出土土器 35 (上段南地区包含層)
写真図版 91 出土木製品 1 (SR400・415)
写真図版 93 出土木製品 3 (SR415)
写真図版 95 出土木製品 5 (SK501)
写真図版 97 出土木製品 7 (SK501・608)
写真図版 99 出土木製品 9 (SK510)
写真図版 101 出土木製品 11 (SK575・621・736)
写真図版 103 出土木製品 13 (SK888・包含層)
写真図版 105 出土金属製品 1 (SK739・SR415 他)
写真図版 107 出土石製品 2 (SR415・SE416 他)
写真図版 109 西地区全景
写真図版 111 西地区的遺構
写真図版 113 西地区的遺構
写真図版 115 西地区出土遺物 (SX01 他)
写真図版 56 出土土器 2 (SR400)
写真図版 58 出土土器 4 (SR400)
写真図版 60 出土土器 6 (SR400・415 他)
写真図版 62 出土土器 8 (SE416 他)
写真図版 64 出土土器 10 (SK621 他)
写真図版 66 出土土器 12 (SK435・736 他)
写真図版 68 出土土器 14 (SR218 他)
写真図版 70 出土土器 16 (SK224)
写真図版 72 出土土器 18 (SK224)
写真図版 74 出土土器 20 (SD273 他)
写真図版 76 出土土器 22 (上段中央地区包含層)
写真図版 78 出土土器 24 (SK70・78)
写真図版 80 出土土器 26 (SK43・64 他)
写真図版 82 出土土器 28 (SX1007)
写真図版 84 出土土器 30 (SX1041 他)
写真図版 86 出土土器 32 (SX1037 他)
写真図版 88 出土土器 34 (上段南地区包含層)
写真図版 90 出土土器 36 (上段南地区包含層)
写真図版 92 出土木製品 2 (SR415)
写真図版 94 出土木製品 4 (SE416・SK501)
写真図版 96 出土木製品 6 (SK501)
写真図版 98 出土木製品 8 (SK608)
写真図版 100 出土木製品 10 (SE419・601・SK464・449・65)
写真図版 102 出土木製品 12 (SK736)
写真図版 104 出土木製品 14 (SK739・包含層)
写真図版 106 出土金属製品 2・石製品 1 (SE419・SR400 他)
写真図版 108 出土石製品 3 (SR400・415 他)
写真図版 110 西地区的遺構
写真図版 112 西地区的遺構
写真図版 114 西地区テラス 1・2

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

日下部遺跡は、神戸市を南北に分ける六甲山系の北麓に位置しており、4.5km北は三田市、900m東南は西宮市と接した、神戸市の北東端に存在する。六甲山の北斜面は比較的緩やかであり、武庫川の中流域に広がる三田盆地の南端部に当たる。日下部遺跡はその支流であり六甲山に源をもつ北流する有野川の西岸に拡がる。遺跡は有野川によって形成された小規模な段丘上から、丘陵裾及び小扇状地まで広がっており、丘陵の北端を回り込んで八多川流域にまで及んでおり、さらに八多川を北に超えた範囲を含んでおり、その中心は八多川と有野川の合流域に立地している。

日下部遺跡の現在の住所は、神戸市北区道場町日下部となる。今回の調査地点は、日下部遺跡としては南端に当たり、北区有野町二郎に所在し町を異とする。東を北流する有野川と西の丘陵に挟まれた南北に長い範囲である。西側の丘陵も東から北東方向に開く大小の谷地形が刻まれており、現在では溜池がつくられ用水として利用されている。調査範囲の南北は比較的大きな谷によって限られている。

調査地点の北西の丘陵中腹には布袋寺があり、谷地形の対岸となる。調査範囲内の南地区や南西地区は大歳神社の旧境内であった。ここは調査地点と同じ谷地形の北西岸であり、一部埋め立てて整地していることが今回の調査で判明している。

有野川は日下部遺跡の北部で西南から来る八多川と合流し、道場町道場で武庫川第2の支流である有馬川に注ぎ、さらに長尾川を合流し東へ向かって武庫川に注ぐ。武庫川は、三田盆地の南端を限る鎌射山から南東方向へ向かい、その下流を隔絶する急峻で狭小な武田尾の峡谷を抜けて宝塚、伊丹から尼崎へと南流し、大阪湾へと注ぐ。有野川、有馬川を週れば温泉で有名な有馬へと結ばれている。

武庫川に注ぐ有野川・有馬川・八多川・長尾川などの支流は、神戸層群と呼ばれる新第三紀中新世の地層を侵食して、開析の進んだ奥深い谷を形成しており、平地は細長い丘陵と谷が交互に連なる様相を示している。神戸層群中にあったと思われる珪化木が調査中にも出土している。

遺跡の立地する有野川による谷は、幅が400m程の狭小な地形であるが、約10kmの長さで南から北へと抜けている。この谷は、現在でも神戸電気鉄道三田線や県道神戸三田線が通り、かつては有馬軽便線（国鉄有馬線）も東縁部を通っており、重要な交通路として利用されている。六甲山を南北に越える交通路であり、有馬温泉に通じる交通路としての役割である。さらに日下部遺跡の北を走る生瀬を通るルートは、武庫川から長尾川に沿って遡り加古川に至る、裏山陽道とも言えるルートで、中世から重要な交通路であったことが知られている。この東西の道と有馬温泉の湯山に通じる湯之山道との四つ辻にあたる道場河原は、元禄年間には宿場駅として栄えていた。

調査地点は神戸電気鉄道の二郎駅から有野川を渡った西側に広がっている。太陽と緑の道と名付けられたハイキング道路が現場内を抜けており、山と川と田園が望める自然に恵まれた地域であった。

現在では、「二郎いちご」として名の通った特産品を生み出す反面、丘陵上はニュータウンが開発され、道路や駅の周辺には郊外型の店舗や住宅地などが増えつつある。牧歌的な景色を残しながら、錯綜する大型交通網に分断されている状況である。

第2節 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡（第1図）

既に指摘されているように、日下部遺跡は様々な時代、性格の遺跡の集合体である。今回報告する地点は日下部遺跡の中でも最も南に位置し、間にには二郎宮ノ前遺跡を挟んでいる。

日下部遺跡①の既存の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代後期～7世紀の飛鳥時代頃の竪穴住居・掘立柱建物などが検出されており、同時期の集落が存在している。平安時代前半の遺物も出土しており、平安時代末～中世前半にかけては、広い範囲で掘立柱建物などが検出されている。出土遺物には石帶・墨書き土器・風字硯・縁釉陶器・灰釉陶器など平安時代の優品が含まれ、中世後半の土器も出土しており、規模は縮小するが集落は存在している。

二郎宮ノ前遺跡②では、7世紀前半から9世紀頃の竪穴住居や掘立柱建物群が検出され、間にわたりて12世紀末～15世紀前半にかけて屋敷群から居館への集約がたどれる掘立柱建物群が検出された。園地や堀を伴った居館は15世紀中頃に姿を消す。

下二郎遺跡③は有野川東岸に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代～中世にかけての集落の存在が推定されている。

日下部遺跡の西背後のか陵上にも多くの遺跡が存在する。14世紀末～15世紀前半の火葬場が検出されたた垣内遺跡④が新名神高速道路関連事業に伴い調査されている。さらに北側のか陵先端部周辺では、小坂遺跡⑤として「小坂砦跡」「大橋山古墳群」「坂本山墳墓群」の試掘調査が行われている。調査では绳文時代早期の神宮寺式～高山寺式の押型文土器が出土しており、近隣では最も古い遺物となる。

小坂遺跡⑤では古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の遺物も出土している。小坂砦跡では堀切・堅堀・土塁・石壁等が見つかっている。大橋山古墳群は7基の4世紀後半から6世紀中頃までの木棺直葬あるいは小型石室を主体とする円墳・方墳が確認されている。その他、坂本山墳墓群として中世の塚や墳墓も多数確認されている。

武庫川と有馬川に囲まれた沖積地に立地する塩田遺跡⑥は、弥生時代前期から中期後半にかけての拠点的な集落址として知られるが、中期～後期の遺跡は丘陵上に点在し、後期になって平野部の所々に展開するようになる。また、同遺跡では12・13世紀の塩田莊に連なる居館や墓も検出されている。

古墳時代の集落は日下部遺跡の他、宅原遺跡⑦、八多中遺跡（中遺跡）⑧、平田遺跡⑨などで検出されており、古墳では三角縁仏獣鏡が出土した前方後円墳である塩田北山東古墳や、4世紀末頃の木棺直葬墳である北神NT内遺跡⑩など前期古墳の時代から、在来の墓制の中に畿内中央の影響が既に色濃く見えている。6世紀中頃まで前方後円墳がつくられており、後期に入つて多くの群集墳が造営される。有野川流域ではオキタ古墳群⑪、二郎古墳群⑫、二郎遺跡⑬、籠谷古墳⑭が知られているが、多くの古墳群が下流の合流地付近や長尾川流域に集中する傾向がある。

日下部遺跡①からはこれまでに奈良時代から平安時代前期の遺物は出土しているが、その量は少なく、遺構に伴っていない。日下部遺跡北東の有野川東岸の日下部北遺跡⑮流路からは大量の奈良時代の土器が出土しており、近隣に同時代の遺跡が存在することが窺われる。

日下部遺跡から八多川に沿った位置にある八多中遺跡（中遺跡）⑯では、飛鳥時代・奈良時代後半～平安時代中期・平安時代末～鎌倉時代にかけての集落が見つかっている。その上流には12世紀末葉から13世紀前半に位置づけられる須恵器窯の小名田窯跡⑰とその工房址とされる清水廻り遺跡⑱が存在している。

その上流の下小名田遺跡⑩では、飛鳥・白鳳時代の建物や奈良時代後期～平安時代初頭の大構、平安時代後期～中世前半までの大型の建物を含めた集落が検出され、石帶・銅印・墨書き土器等が出土している。

さらに上流の上小名田遺跡⑪からは、平安時代中頃から鎌倉時代にかけての70坪を超える大型建物を含む49棟以上の掘立柱建物が検出され、綠釉陶器・灰釉陶器や石帯、木簡などが出土している。その上流にも同時代の集落と思われる吉尾遺跡・附物遺跡が存在している。

長尾川流域の宅原遺跡⑫では、大型の掘立柱建物・墨書き土器（郷長・五十戸・評）・円面硯・亀形石硯・人形・彫申・木彫面等が出土し、有馬郡衙の有力な候補地とされている。宅原遺跡では9～10世紀まで掘立柱建物が建てられるが、10～11世紀には縮小する。12世紀末には再び掘立柱建物が見られ、14世紀頃まで存続している。16世紀に入ても小規模な園地が構築されており、17世紀～19世紀の遺構・遺物も確認されている。

中世後半には松原城跡⑬などが築かれ、塙田中世墓、北神NT内遺跡⑭などで集石墓や火葬墓が造られる。

（2）史料等からみた周辺

三田盆地周辺の現在の地名には、当該遺跡名にもなった「日下部」をはじめとして「八多（秦）」「貴志」など古代氏族名を想起させるものが多く、古墳時代から奈良時代にかけて三田盆地周辺における開発の背景を想像させている。日下部氏は仁徳天皇の皇子・皇女の御名代から起きた姓で、天平神護二（766）年には武庫大領日下部宿禰一族のことを見る。

日下部遺跡のある有野町周辺は、奈良時代には摂津国有馬郡に属し、有馬郡には春木、幡多、羽束、大神、忍壁の5郷があったとされている。中世に入ると、四天王寺領阿理野庄（有野庄）として永仁四（1296）年に記録が残る。有馬郡は14世紀末、分郡守護として赤松有馬氏が支配しており、郡内の下鴨社領や四天王寺領を一括で請け負っていたらしい。

今回の調査地点の大字名に残る「二郎（にろう）」の名の元となったのは、壇ノ浦で戦死した平教経の遺臣である平家の落人の子孫、宮崎彈正「二郎」広綱が室町時代末期の大永年間（1521～1532）になって、その昔に領有していたというこの地に入り、「二郎」の名を付けたとも、「ニラ」の生息地だったともいわれている。

二郎村の氏神である大歳神社は宮崎氏入部の際に有間神社を勧請したものと言われているが、調査地点（南地区・南西地区）にあった大歳神社社殿も元々の位置ではないと言われている。調査地点の北西にある現在の曹洞宗月亭山布袋寺は大永二（1522）年に自天靈性の開基とされ、同じく宮崎広綱縁の寺院である。宮崎家の墓は寺の南西にあると言われおり、五輪塔などが見られる。また、その屋敷も近くにあったが、江戸時代には後嗣が絶え、荒れ地に返ったとされている。宮崎家は二郎の地のみならず近隣の道場川原にある法性寺に元禄七（1694）年に「涅槃図画像」を寄進したとされている。

また、「摂津国有馬郡下二郎村大庄屋芝家文書」によると、慶長年間（1596～1614）に有馬郡中村馬場に移住し、豪農となった芝家は、元禄年間（1688～1703）から領主や三田藩などに金銀を貸し付け、苗字帯刀も許され、大庄屋も努めた。文化年間（1804～1817）には二郎、山口村に分家している。二郎芝家は三田藩の用達を努めており、本家同等の格を有している。近世、二郎の地に有力者が在住していたことは確かであろう。

また、同じ有馬郡では長尾町宅原の鶴屋五兵衛の伝承など、江戸時代にかけての豪農などの有力者が存在していたとする伝承や記録が残されている。さらに有馬郡の南西に接した八部郡山田荘の栗花落家、上谷上の板屋家などではその家に代々伝わった古文書が残されており、戦国時代に村落内の有力者であったその家が土地を買取して土豪となり、地侍となって被官した家や、庄屋となって有力農民のまま近世を迎えた家のことが知られている。中世から続く有力農民が近世・近代を超えて存続していた事例である。

日下部遺跡の北の独立丘陵に位置する松原城は、郡内に所領を持つ土豪で有馬氏の被官である松原氏が城主と伝えられている。松原氏は数代にわたって有馬氏に仕え、その中核を成す者とされている。

有馬氏は分郡守護として室町期以来、湯山をも含んだ有馬郡を支配している。戦国時代には数家に分かれ、分郡守護や將軍近習として活躍している。

有馬郡守護としては、西の三木城に寄り東播磨八郡の守護代となり勢力を増していた別所氏とは対立・確執が生まれる。三田城は荒木村重の甥によって支配され、城下町を造るにあたって道場川原の住人の移転を強いた。三木合戦の際には、荒木重堅の籠もる三田城や別所方の淡河氏の籠もる淡河城と対立して織田方に組しており、戦後には有馬家庶流が淡河城主となっている。天正七（1579）年には秀吉によって湯山の阿弥陀堂に対し、寺領を安堵しており、道場川原では戦乱で避難した地下人・町人の還住を命じている。

有馬氏はその後、秀吉の御輿衆として近仕し、関ヶ原合戦前夜には家康側近としてその立場を固めている。三田城主ののち、筑後久留米藩主として大名となっている。

有馬郡二郎村は幕府領、武藏岩槻藩阿部政次（大坂城代）領、上飯野藩保科氏（大阪定番）領となり、日下部村は田安徳川家領となる。二郎村は上下に分かれていたらしく、寛政十（1799）年には上二郎には家18軒があったとされる。また、享保十二（1718）年村明細帳には日下部村には酒屋2、鍛冶1、桶屋1、木挽2、大工2などがあった。日下部は米どころであったが、江戸時代の大きな洪水の被害が報告されている。

近代になって有野・唐櫃・二郎が合併して有野村となっている。

【参考文献】

- ・神戸市教育委員会1987 「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」
- ・神戸市教育委員会1992 「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」
- ・神戸市教育委員会1996 「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」
- ・神戸市教育委員会1998 「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」
- ・神戸市教育委員会2008.3 「塙田北山東古墳」
- ・神戸市教育委員会2014 「唐櫃城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書」
- ・新修神戸市史編集委員会1988.4 「新修 神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古」神戸市
- ・新修神戸市史編集委員会2010.3 「新修 神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世」神戸市
- ・淡文文化財協会1992 「下小名田遺跡その1」
- ・妙見山麓遺跡調査会1988.3 「宅原遺跡 宮之元地区の調査1986年」
- ・妙見山麓遺跡調査会2002 「宅原遺跡 豊浦地区の調査1987年」
- ・妙見山麓遺跡調査会2005 「下小名田遺跡」

- ・兵庫県教育委員会1998.3 「八多中遺跡・清水廻り遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第173冊
- ・兵庫県教育委員会2000.3 「三田城跡発掘調査報告書」兵庫県埋蔵文化財調査報告第194冊
- ・兵庫県教育委員会2000 「公園都市線(第2期)車両留置施設設置事業に伴う二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」
兵庫県文化財調査報告第220冊
- ・兵庫県教育委員会2001.3 「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第215冊
- ・兵庫県教育委員会2014.3 「堂垣内遺跡・小坂遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第470冊
- ・兵庫県教育委員会2011.3 「兵庫県遺跡地図」

第1表 周辺の遺跡

①日下部遺跡	②二郎宮ノ前遺跡	③下二郎遺跡
④堂垣内遺跡	⑤小坂遺跡	⑥塩田遺跡
⑦宅原遺跡	⑧八多中遺跡(中遺跡)	⑨北神NT内遺跡
⑩オキダ古墳群	⑪二郎古墳群	⑫二郎遺跡
⑬籠谷古墳	⑭日下部北遺跡	⑮平田遺跡
⑯小名田窯跡	⑰清水廻り遺跡	⑱下小名田遺跡
⑯松原城跡	⑲上小名田遺跡	⑳二郎南古墳群
㉑丸沢遺跡	㉒宅原城跡	㉓東二郎遺跡



第1図 周辺の遺跡

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、兵庫県土木部建設課より依頼を受け、平成10年度に神戸市北区神戸市JCT（仮称）～川西市の区間について兵庫県教育委員会が分布調査を行い、遺物の散布を認め、No18地点とした地点である。新名神高速道路建設（旧称：第二名神高速道路建設）箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴い調査を実施した。日下部遺跡は、周知の遺跡として、過去に神鉄道場南口周辺において調査が行われ、報告書も刊行されている。今回の調査地点は、新名神高速道路計画路線内にあたり、大きく南に離れた地点である。

分布調査では、No18地点に加え、有野川右岸のNo17地点、No18地点の北西尾根端に位置する、備前焼水屋窯297を採取したNo19地点が遺跡の候補として挙げられていた。

平成26年度より西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所の依頼を受け兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財調査課（以下、埋蔵文化財調査課）が順次確認調査を実施したところ、No17地点（遺跡調査番号2014014）・No19地点（遺跡調査番号2014136）では遺構が認められず、No18地点（遺跡調査番号2014039・2014102）において遺構・遺物が認められ、当該地が本発掘調査の対象となった。

本発掘調査は平成26年7月8日付 関兵工第521号により開始した（遺跡調査番号2014116）。調査範囲は有野川左岸、布袋寺の開析谷を挟んだ南側から大歳神社境内までとし、地目は畑地・現屋敷地・大歳神社境内である。

当初、対象範囲の北端（旧A・B区）より順次行う予定であったが、いちご温室の撤去など地元との協議を経て、大歳神社境内を含む南半（上段南地区南部・調査実施時C・D区）のごく限られた範囲の調査を先行した。

残る調査範囲の内、畑地・現屋敷地（北地区・中央地区・上段南地区北半部・下段南地区）については平成27年3月9日付 関兵工第1775号により実施した（遺跡調査番号2015049）。

大歳神社については調査と並行して移転が行われ、坪殿・本殿の確認調査・本発掘調査は埋蔵文化財調査課によってE区として実施している（平成27年2月9日付 関兵工第1586号 遺跡調査番号2014137）。

また、No18・19地点の中間地点にあたる東向き斜面の雜木林中に直径3m前後の人が集石を認め、分布調査（遺跡調査番号2014135）、確認調査（遺跡調査番号2014153）を実施した。本発掘調査は、引き続き平成27年2月9日付 関兵工第1586号により埋蔵文化財調査課が実施し（遺跡調査番号2015011）、経塚と判明した（日下部経塚 西地区・旧F区）。

以上の各地点の調査のほか、周辺において幾つか遺物を採取している。

1ヶ所は、大歳神社南側の尾根東斜面である。ここからは、伐木集積に伴うバイロットの掘削土から瓦器片が出土している。尾根上には平成21年度調査の堂垣内遺跡が存在しており、尾根上面が著しく削平されていることが判明している。尾根上に中世の前期に遡る遺構が存在していた可能性がある。

須恵器捏鉢296は堂垣内遺跡の約50m南方、南東に張り出す支尾根端において伐木集積に伴うバイロットから採取されている。

当該地は、旧『太陽と緑の道』上の南向き緩斜面にある。周辺では人頭大の亜円窓も顔を出しており、立地から推して中世前期の火葬墓が存在していた可能性がある。この地点については遺物発見時には既に工事が開始されていたこともあり、更なる精査はかなわなかった。

第2節 各調査の経過と整理作業

(分布調査)

遺跡調査番号 980063
所在地 神戸市北区・宝塚市・川西市・川辺郡猪名川町
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第2班 池田正男・吉誠雅仁・西口圭介・
池田征弘・松野健児・佐々木俊彦・戸田真美子
調査期間 平成10年5月6日～5月13日
調査面積 約1,300.000m²
概要 平成10年5月6日～5月13日に新名神高速道路路線内、施工対象範囲約1,300.000m²について
分布調査を行い、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高い地点としてNo17～19が挙げられた。
遺跡調査番号 2014135
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成27年1月20日
調査面積 600m²
概要 経塚状石積み地点周辺

(確認調査)

新名神No17地点

遺跡調査番号 2014014
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成26年5月1日
調査面積 15m²

新名神No18地点

遺跡調査番号 2014039
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成26年6月9日～11日
調査面積 78m²

日下部遺跡（大歳神社境内・参道部分）

遺跡調査番号 2014102
所在地 神戸市北区有野町二郎

調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成26年10月15日
調査面積 22m²

新名神No19地点

遺跡調査番号 2014039
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成27年2月9日
調査面積 26m²

新名神No19-2地点

遺跡調査番号 2014153
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成27年2月23日～3月24日
調査面積 174m²
概要 経塚状石積み地点周辺

〔本発掘認調査〕

日下部遺跡 (上段南地区南半部 旧C・D区)
遺跡調査番号 2014116
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査第2課
西口圭介・鐵 英記
調査期間 平成26年9月24日～平成27年2月20日
調査面積 854m²

日下部遺跡 (上段南地区南半部 旧E区)

遺跡調査番号 2014137
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 山本 誠
調査期間 平成27年3月10日～平成27年3月17日
調査面積 226m²

日下部遺跡 (西地区 旧F区)

遺跡調査番号 2015011
所在地 神戸市北区有野町二郎

調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財調査課 村上泰樹
調査期間 平成27年4月7日～平成27年5月1日
調査面積 297m²
日下部遺跡（上下段北地区・南地区 旧A・B区）
遺跡調査番号 2015049
所在地 神戸市北区有野町二郎
調査主体 兵庫県教育委員会
調査担当者 公益財團法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査第2課
別府洋二・岸本一宏・西口圭介・渡瀬健太・渡辺正子
調査期間 平成27年5月20日～平成27年9月28日
調査面積 4024m²

〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成26年度・平成27年度（本発掘調査時）に一部の遺物洗浄を実施し、平成28年度に接合・補強・写真撮影・保存処理等、29年度に実測・製図・レイアウト等の作業を実施した。

調査担当者：村上泰樹・別府洋二・岸本一宏・西口圭介

整理保存課：菱田淳子・深江英憲・大木朋弥

大前篤子・桂 昭子・東郷加奈子・太田泉穂・児玉昌子・嶺岡美見・小野潤子・

佐々木愛・沼田眞奈美・荻野麻衣・今村直子・中井 翠

柏原美音・池田悦子・宮田麻子・藤中貴子・柏木明子・河合たみ

第3章 遺構

第1節 調査の概要

1. 調査区の概容

前章で述べられたように、日下部遺跡の本発掘調査は用地の取得、本体工事の都合や遺跡範囲の広がり等の理由で調査区が分割された状況で調査を実施した。細分化された地区名は便宜的なものであり、報告書の制作に当たって、現況及び調査後の地形に合わせて区域分けを整理した。有野川に近い東側の部分を下段、そこから調査前の現状で約1m上がった位置にあり、調査後も0.8mほどの段で上がった山側の範囲を上段として区域を分けた。下段の標高は調査前で、174.3～174.7m、調査後では173.3～174.3mとなり、上段では調査前では175.7～176.3m、調査後では175.0～175.9mを測る。

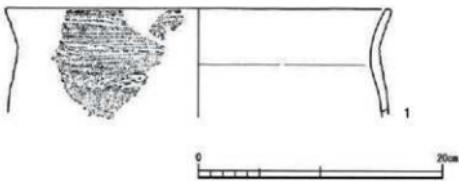
さらに上段で検出された東西方向の溝SD746を境にして北地区と中央地区を分け、石組の護岸を有する溝SD174を境界として中央地区と南地区を分けた。この東西方向の溝は下段までは続かないが、両者とも比較的古い段階から近世まで複数回にわたって溝を掘り直していることから、遺構のまとまりを区分できるものと考えた。下段では部分的に東西方向の溝が検出できたが、上段のものとはつながらない。下段で検出できた東西方向の溝は近世以降の屋敷塼を示すものと考えられる。

上段の南地区の南西では大歳神社本殿があった地点の本発掘調査が2014年度末に行われており、南北地区と呼称する。また、その北西の丘陵斜面を平坦にして経塼が営まれており、西地区と呼称した。

調査の結果から見ると、上段の北地区や中央地区では中世前半の建物跡などの居住域が確認できだが、下段では流路SR400以外には顕著な同時代の遺構は広がらず、16世紀後半以降の屋敷地として利用されていたことが判明しており、上段と下段では広がる遺構の性格が大きく異なることがわかった。

遺跡が立地する地形は有野川の氾濫原から段丘、支流水の扇状地、丘陵斜面にわたっている。調査区外北側及び南側には北東や東に開く大きな谷地形が広がり、居住区域を限っている。遺構面と認定した土層はシルト質極細砂層であるが、調査区の南東部では亜円礫層が遺構面直下で現れている。また、西側の丘陵から派生する小谷が上段部では複数箇所確認できる。その一つが弥生時代終末期の土器が出土したSR218であり、縄文時代後期の土器（第2図1）が含まれていたSR81の落ち込みや、湧水が著しいSX1007の落ち込みもその地形上に位置する。今回、本発掘調査を実施した遺跡の範囲や遺構の配置はそのような地形的な制約に規制されているものと捉えられる。

1は平口縁の深鉢で、口縁部は二枚貝条痕、胴部はケズリ調整を施す。口縁端部は丸く取め、キザミはない。晩期中葉藻原式古段階に位置づけられる。



第2図 縄文土器

この縄文土器に関して、周辺の動向と地域における位置づけをすると、六甲山南麓および播磨地域では滋賀里I～IIIa式の遺跡数が少なく、篠原式期になって遺跡数が大幅に増加する傾向がある。一方で、北摂地域では晩期前葉～中葉の遺跡がほとんど見つかっておらず、対中遺跡などで突帯文土器がわずかに出土しているにとどまっていた。今回出土した土器は当該地域での時期的な空白を埋めるものとして評価することができる。

以下に下段、上段の順に記述し、できるだけ遺構の種類別に北側から報告する。旧大歳神社境内にあたる南西地区は、南地区に含めて報告する。また、西地区については遺構の性格が異なることから、別に章立てを行い、第5章として掲載した。

SRは流路、SDは溝、SEは井戸、SKは土坑、SPは柱穴（一部Pと省略）、SFは建物基礎の性格をもつものと考えており、SXはいずれにも当てはまらないものや性格不明の遺構に附した。同じ構造の遺構でも溝内に構築されたものを水溜井戸としてSEとしたものもあるが、名称は基本的に調査時点のものを踏襲している。すべての遺構に通し番号を附しており、調査年次が異なる遺構にも重複がないようとした。但し、第5章の日下部経塚についてはSX01、SX02、テラス1、テラス2の呼称を用いた。

第2節 下段の遺構

1. 流路・溝

SR400（図版6・7、写真図版9～11）

SR400は下段の北端から南端に掛けて約100mの長さで検出された流路である。南端部では上段の裾を走っており、中央地区・北地区でも農道となっていた部分などでは流路西肩から続いて上段への斜面となる。このため上段から下段への落ち斜面も元々は自然流路によって形成された可能性が高い。SR400が完全に直線的ではなく、わずかに左右に振りながら走っていることも、本来自然流路であった可能性をしめすものである。

但し、このSR400は何回かの改修が土層断面でも観察され、水路として活用されていたものと考えられる。また薬研堀状の断面をもつこの流路の方向がわずかに変わる地点は地山に疊層が続く位置に当たることや、一部その疊層を切り込んで掘削されており、明らかに人為的な溝としての機能を付加されたものである。

現況で調査区の東を北流する用水路は、北側に広がる有野川左岸の平地への基幹水路としての機能をもっており、このSR400も取水部は確認できなかったが、おそらく同様に有野川から取水した用水路としての機能を有していたものであろう。埋土中には大小の礫が多く含まれており、ラミネーションが見られる部分が多い。底付近には滞留性の堆積物が観察される。

底付近の山側に石が並んでいる状況が南地区で確認できたが、これも近世以降に再利用された際のものと捉えている。また、中央地区でも大型の円形の土坑が切り込まれている周辺で巨石が並んだ状況が見られたが、重機掘削の際に取り除いており、性格は不明である。

流れは有野川と同様の南から北へと向かうものと思われるが、調査区内での底の比高差は0.2m程度である。深さは1mを超える部分もある。幅は一定ではないが、5m前後の規模を有する。南端部が2.3mと最も細くなり、中央地区北端の東へ突出して分岐する位置では6mを超える幅をもつ。その北側では一

且幅を狭めるが、再び5mほどの幅を持つ。北端部は東西方向の水路SR415によって途切れるが、その北側にも続いている状況が確認できた。

北地区では一段浅くなつて西側へ広がり、その部分に石組のSE938などが検出された。SR400埋没後の上面で遺構が検出されるのは、北地区が顕著である。遺構としては不明瞭ながら、北地区の上段から掘が溝状にくぼみ、SR400に合流するのが、北地区南端から中央地区にかけての範囲で認められる。但し流れの方向から見て、北流するため、SR400が分岐した可能性がある。

中央地区北端の分岐は浅く、4mほど延び、その先は石組の護岸の残るSK608へ向かう。この枝溝からは18・28・48などの須恵器・白磁が出土したが、W2のような近世の木製品も含まれている。

埋土には須恵器の环Aや环Bなど古くに漁るものも含まれているが、糸切り底部の須恵器塊が多く出土しており、水路として使用を開始した時期を推定することができる。また、中世後半のベトナム製陶器（38・39）などを含んだ陶器器、近世にまで下る陶器器の出土は何回かの改修を経てこの水路が使われていたことを伺わせるものである。上層からは桶柄や提灯の部品と思われる木製品（W1～9）、石臼S13なども出土している。

SD115・SD114・SD94・SD101（図版4～6、写真図版10・12）

中央地区南半ではSR400が埋没した後に掘削されたSD115やSD114が検出された。SD115は、SR400がほぼ平坦に埋没した後にSR400の東肩近くに掘削された幅0.5m、深さ0.25mほどの溝で、中央地区北半部ではSR400と重複した近世以降の溝によって失われたと思われる。SD114はSR400の東を並行して走る幅0.4m、深さ0.35mの溝で、SD115を切っているものと思われる。埋土中から須恵器塊58が出土しており、SR400出土の須恵器との時期差は認められない。

SR400が埋没した後の近世以降にも重複して溝が設けられていた。中央地区南半部のSD94はSR400の西を並行して走る石組溝で、南端部は石組をもつSE203に取り付いている。また、SD94の北端近くから東西に走る石組をもつ溝SD101が検出された。この溝は一部に石の蓋をもつもので、SR400上面を横切って作られている。この石組をもつ溝は、発掘調査直前まで存在していた家屋に沿うことから近代の排水溝かもしれない。SD94からは瀬戸美濃焼皿59や砥部焼瓦片101が出土している。

また中央地区でもSR400内から直方体を呈した巨大な石材が数個並んで出土したが、下層のSR400の調査を優先したため重機で除去した。その近辺では大型の円形の土坑などがSR400内に設けられており、近世の水溜などの機能が考えられるものである。水の湧く状態であったため、詳細な調査は実施しえなかつたが、遺物の出土は非常に少なかつた。

SR415（図版3・8、写真図版13・14）

下段でも東西方向の溝が検出された。これらの溝は上段には続かず下段に配された近世の屋敷を区画するものであろう。

北地区的北端部で検出された東西方向の大規模な溝である。この溝の西端には石組水溜のSE416が設けられている。SE416の西では不明瞭な溝状の落ち込みが断続的に見られ、石組をもつ水溜土坑SE417等が構築されている。SR415は幅4.5m、深さ0.67mの規模を持ち、東側は調査区外へと続く。幅は東端が広く6.0m、深さは南側岸が高く0.92mの深さとなる。SR415とSR400の切り合う地点の際で陶器壺57がSR415北側斜面に傾くような状態で出土している（SK940）。出土土器の報告ではSR415出土のものとして取り扱っているが、単独の埋甕の可能性が高い。

SR415埋土上層からは53～56・310・311の土器や卸金M10、石製品（S6・9・17・18）、漆器や挽物など木製品（W10～31）が出土し、中層からは桜と思われる丸太材が数本並んだ状態で巨石とともに出

土しており、意図的に埋め戻したものかもしれない。おそらく複数の面が存在したものと考えられる。西側の谷からの湧水が著しく、地下水の通り道に構築された溜池や排水のための施設と思われる。下層からはほとんど遺物は出土しなかった。

SD622（図版3、写真図版12）

北地区の南東部で検出された石組をもつ溝で、幅1.0m、深さ0.2mの規模をもつ。調査区東端から6.3m続き一部に石列をもつ。同じく石組をもつSK608に取り付くようであるが、先後関係は不明である。

SD916（図版5、写真図版12）

南地区的礫ベースの面で検出できた幅0.8m、深さ0.1mの東西溝で、上面が削平されている。埋土は旧耕土と変わりない。半分に割れた石EIS15が出土した。上段で検出されたSD1003に続くものかもしれない。

上段を区切るSD916とSD105間の距離が約36m、SD105とSD622間の距離が約43m、下段を区切るSD622とSR415の中央との距離は約30mを測る。

2. 井戸・土坑他

下段で検出された多くの遺構が近世以降のものである。土坑や水溜井戸（溜井）には平面形態が方形を呈するもの、円形を呈するもの、不定形のものがあり、それぞれ壁面に石を積み上げ、或いは並べたものがある。湧水点まで掘り下げ、石や木材で井側を組んだ通有の井戸は検出されていない。

石組をもつ方形土坑

平面形が方形を呈した石組をもつ土坑で、水路内や現在でも湧水が多い位置に設けられたもの（SE416・417・938や上段のSE368）で、水溜井戸の機能をもつものであろう。残存する石組は1～2段に積み上げており、一方が開口する「コ」字形を呈している。開口部が下流側のものが多い。他に方形の石組をもつ土坑には浅いもの（SE465）や、石組を有する池状の大型の土坑（SK608・上段のSX1041）がある。

SE416（図版3・8、写真図版15）

北地区的SR415西端部分で検出された。平面はやや歪んだ矩形を呈し、東端の石組は残存していない。内法規格は西端で南北約2.5m、残存部東端で南北約1.9mである。東西規格は北端で約2.3m、南端で約3.1m遺存していた。石組は1ないし2段が残存しており、その高さは約30cmで、底は石組下よりもさらに約30cm深く掘り込んでいる。ただし、もとの石組の高さは不明である。SR415の埋没後に構築されたことが判明しており、底はSR415と同一面であることから、SR415の埋没面を考慮すると、もとの石組はもう少し深く、60cm程度であった可能性がある。

南側の石組内部に水平に置かれた石があり、石の北西側に接するように杭が存在するとともに、この石の南側には立った状態の石もあり、さらにその部分の石組の石は比較的大きなものを使用していることから、これらの石はステップとして置かれ、石がずれないよう杭で止めていたものと判断される。

埋土はシルト～極細粒砂が大半で、青灰色～緑灰色～オリーブ黒色を呈することから、水が溜まっていたことを示すが、一部砂礫層が入ることから、部分的に崩れたようである。

SE416からは60・66・312・313の土器類、木製の横樋や箸、曲物、鍋蓋（W32～42）や、石製品S8が

出土している。

先述のように、SE416はSR415が埋没したのちに掘削・構築されているが、SE416のすぐ東側にSR415の埋土土層観察用の畔を設けており、その断面には4条の石組の溝が確認されている。石組溝はSR415と同一方向のもので、SE416と重複する位置や高さのものがある。石組溝はいずれもSR415の埋没後に構築されたものであることから、それらの石組溝とSE416の構築順について述べておきたい。

図版8のSR415の埋土断面図をみると、石組溝がA～Dの4条存在している。溝幅は南端の溝Aが約28cm、溝Bが約67cm、溝Cと北端の溝Dは溝幅約32cmである。構築順としては、SR415が人工か自然のものかの判断は別として、SR415の埋没後に構築されているという点ではSE416と4条の石組溝は同じである。ただし、埋土中の溝については、石組溝の裏込め土を削って重複しているものがあり、この切り合い関係から、石組溝の構築順を判断できる。それによると、溝Bよりも溝Aと溝Cが新しく、溝Cよりも溝Dの方が新しいことが判断できよう。次に、溝Aと溝C・Dとの前後関係であるが、石組溝の規模は、溝B→溝C・Dの順に幅が狭くなっていると同時に、石組溝の底のレベルが高くなっているという点からすると、溝Aの幅が約28cmで溝C・Dの約32cmよりもやや狭く、底のレベルが溝Dよりも12cm高い点からすると、溝Aは溝Dよりも新しいと判断できるであろう。したがって、SR415埋没後のSE416や溝A～Dの構築順序は、SR415埋没→SE416構築→溝B構築→溝C構築→溝D構築→溝A構築という順になろう。また、構築順を追うごとに石組溝の幅が狭くなり、石組溝の底のレベルも高くなるということは、流れる水量が徐々に減っていったことを示しているのであろう。

その後、水量はさらに減少したと思われ、発掘調査を実施した際には、溝部分は水田（いちご畑）と化しており、溝はさらに北側の水田畦畔北側で、水田面と同じ程度の高さになっていた。

なお、SE416内やSR415埋没後の石組溝を流动していた水の供給先は、水田や畑といった農業にかかるものであったことは想像に難くないであろう。

SE417（図版3・9、写真図版16）

北地区の上段から下段へ落ちた部分に構築された石組で、上段側はしっかりとした地山がなく抉られていた。小扇状地状を呈した谷地形の湧水点に設けられたものであろう。斜面裾の上流側にL字形に石を並べ、内部に大きめの石を配して南側は襷を敷いたように検出された。最大の内法で $2.4 \times 1.3m$ を測る。

SK465（図版3、写真図版16）

北地区のあまり湧水の見られない礫ベースの部分で検出された。南北214m、東西1.25mの長方形土坑内の三辺に石を並べている。深さは0.22mほどである。埋植SK464に切られている。土坑埋土からは絵唐津焼皿67や唐津焼の塊68が出土している。

SE938（図版3、写真図版16）

北地区的SR400西沿いで検出された。この地点ではSR400の西岸が幅を2mほど広げて中段を形作っており、近世頃に掘り直されたものと思われる。但しこの抜幅部は北側では途中で途切れている。溝掘削中に検出されたため、掘方の規模は不明である。北側の開いた三方に石を並べて囲んでおり、内法は $1.7 \times 1.8m$ を測る。

SK608（図版3、写真図版17）

北地区の中央部で検出された最大で南北14.2m、東西約5.0mの平面形が長方形を呈する池状の土坑である。南端部は幅が大きくなるため別の造構が切り合っていることも考えられるが、擾乱が著しく埋土の変化を検出できなかった。北東部は襷群によって埋没しており、意図的に埋められたものと思われ

る。礫を丁寧に除去すると、北東の肩の一部と西辺の一部に石を2段ほど積み上げた護岸をもつことがわかった。東辺では南半部でも小石が並べられた部分が確認されている。

土坑の北西部や東辺部では円形の土坑が切り込んでおり、埋土の変化は判断できなかった。SK608の北辺は2段になっており、北西隅に突出した部分に続く可能性があるが、この突出部分をSK510とした。

SK510は幅0.8m、深さ0.25mで北に2.0m延びている。埋土はSK608と類似しており、同一個体或いはセットと考えられる漆器大皿（W65・67）が出土したことから、同時期に埋められた可能性を想定している。

SK608からは中世に溯る土師器、17世紀の唐津焼、丹波焼（69～74）の他、海老の絵が描かれた漆器大皿、杓子、下駄などの木製品（W62～66）が出土している。木製品は礫で埋められた下層から出土したものが多い。SK510からは漆器大皿W67の他、墨書きのある瓦器塊75が出土している。

SE203（図版4・9、写真図版18）

中央地区で検出された。南北2.5m、東西1.7m、深さ0.6mの楕円形土坑内に東及び北側を直線的に、南西側はやや湾曲して石を並べたものである。東壁の石列は延長すると北側に延びるSD94東壁と一致している。この石組土坑と石組溝は土坑に溜めた水を排水する溝か、溝の一部を土坑に作り直したものであろう。一本引き描目の丹波焼描鉢片が出土している。

石組をもつ円形土坑

平面形が円形を呈し、石を周辺に積み上げているもの（SK850・719-2・189・上段のSK72）があり、SK72のように桶の底板が残存し、水の湧くような場所に作られたものは水溜の性格を附しても良いだろう。但し石の積み上げ方が乱雑であるため、礫で埋め戻したものとの区別が付きにくい。

SK850（図版3、写真図版18）

北地区南端のSR400西肩で検出され、SR400を一部切って作られている。直径1.5m程度の土坑内に石を並べて直径0.8mの空間を確保している。おそらく桶を内部に納めたものであろう。出土した土器は掘方からは土師器、須恵器片とSR400由来のものであり、内部埋土からは赤土部のかかった丹波焼片が出土している。

SK719-1・719-2（図版4、写真図版18）

中央地区のSR400東肩部で検出されたが、この周辺ではSR400に重複するように近世以降の大型の溝や土坑、石組が混在しており、的確には検出しえなかった。SK719-2もSR400に切られているように検出されたが、その北側の小型の石を並べたSK719-1やその前面の深い土坑、SK719の南にある土坑などが最終的に分別できたが、遺物の出土も見られなかった。SK719-2は20～40cm程の石を土坑内の周間に並べるものである。SK719-1は比較的小型のこぶし大の石を土坑内周間に配している。土坑の大半を失っているため、方形の土坑の可能性もある。

埋桶

平面形が正円形のものの多くが埋桶と思われる。木製の桶の底板・樽板すべてが残るもの、底板のみが残るもの、蓋の痕跡しか残らないもの、木質が残存しないものがある。肥桶としての機能が最も可能性が高いが、埋桶の周囲を比較的大きな石で固めるもの（SK850・SK189・SE72）は、水路近くにあることから流水を溜める溜井としての機能が考えられる。桶底板の直径が1m程度の大きさのものが最も

多いが、掘方の直径が2m大のものも存在する。直径約23cmの小型の桶W97を埋めたSK888も検出されており、様々な機能が存在するものと考える。

埋桶の多くは下段北地区に集中しており、20基を超える。北端のSR415に近い範囲の円形の土坑は非常に浅く、桶の底板が残存していたものでも博板は高さ10数cmしか残存していなかった。浅い桶を埋めていたとは考えにくく、ある時期に盛り土がなされ、その上から掘り込まれたものが削平されたものと考える。

SK464 (図版3、写真図版19)

直径が0.9~0.96mの底板が残存し、博板が底板から12cm程の高さしか残存していなかった。石組土坑であるSE465の一部を切って作られており、その性格を受け継いだ可能性がある。

SK419 (図版3、写真図版19)

SR400とSR415の交点付近で検出されたSK419は、直径1.8mの円形の土坑内の南側に接するように、直径1.0mの桶底板が残存しており、深さは0.2m以下しか残っていなかった。桶の内部から木製杓子や竹箆、墨書のある木製容器蓋など (W68~72) や、火打金M11が出土した。

SK501 (図版3・9、写真図版20)

北地区中央部で検出されたSK501は、東西1.8m、南北1.3mの楕円形の土坑を掘り、底板径1.2m程度の桶を埋め込んだものである。博板は外されて桶の中に入れられ、周辺部は崩されていた。博板と共に木製の鍋蓋や擂り粉木、下駄、箱 (W43~61) が出土した。

SK503 (図版3、写真図版20)

同じく北地区中央部で検出されたSK503は、直径が2m近い土坑内に桶を据えていたもので、最終的に糠を投入して埋められており、深さは0.5mを超える。内部埋土からは唐津焼皿82が出土している。

SK450 (図版3、写真図版19)

同じく北地区中央部で検出されたSK450は、直径1.2m、深さ0.3mの円形土坑で、SK503と同様に内部に糠を投入して埋められている。SK450からは煙管の吸口M7や美濃焼天目茶碗315、須恵器捏鉢片が出土した。

SK449 (図版3、写真図版19)

SK450を切り込んで作られているSK449は、直径1.3m、深さ0.4mほどの円形土坑の底に木製の桶底板 (直径1.0m) が残存していた。丹波焼ひさご形壺85や木製の塗箸W75が出土した。18世紀後半か。

SK736 (図版3、写真図版19)

北地区南端のSR400東肩上面に設けられた直径1.4mの円形土坑で、直径1.2mの桶底板が良好に残存していたが、側板は30cm弱しか残存していなかった。大きく削平されたものと思われる。内部の埋土には糠が多く投入され意図的な埋め戻しが想定される。その中からは丹波焼壺91や土師器皿92、漆器椀、箸、竹箆、切匙、下駄などの木製品 (W81~96) が出土している。

SK189 (図版4、写真図版18)

中央地区南東隅で検出された直径1.3~1.4m、深さ0.55mの円形土坑で、東側の壁に沿って石が並んでいたが、埋桶を押さえる裏込め石と思われる。染付磁器碗86が出土している。

土坑

SK437 (図版3、写真図版20)

SK437は北地区のSR400沿いに掘られた直径1.1m、深さ0.3mほどの平面形が不整円形の土坑で、桶の

痕跡は残存しない。内部には礫と共に割れた石臼SI4を投入している。

SK621（図版3、写真図版21）

SK621は、北地区南東部のSD622の南で検出された、東西3.5m、南北2.5m以上の隅丸長方形の平面形をもつ土坑で、深さは0.24mを測る。埋土から土師器皿・炮烙（78～81）、曲物底板・漆器椀・下駄（W78～80）が出土した。

SK575（図版3、写真図版21）

SK575は北地区東端で検出された東西3.0m以上、南北2.2m、深さ0.4mの隅丸長方形の平面形をもつ土坑で、東側には小型の礫が配される。底には比較的太い杭列が東西に並び（P895・896）、柱根が残存していた。埋土から丹波焼鉢84や木製の把手W77が出土した。

SK601（図版3）

SK601は北地区北端のSR415に接するように掘られた南北2.1m、東西1.6m、深さ0.4mの楕円形の平面形をもつ土坑で、理桶かかもしれないが桶材は残存していなかった。埋土から漆器椀W73が出土した。

SK151・152（図版4・9、写真図版20）

中央地区東で検出された土坑で、SK151は直径1.7m、深さ0.4mの円形を呈しており、理桶の痕跡かもしれない。

埋甕

下段からは3ヶ所、埋甕が検出された。上段では南地区SX1001も埋甕である。

SK940（図版3、写真図版14・21）

SR415の北西部の肩斜面で丹波焼甕57が傾いた状態で検出された。SR415に伴って設置されたもの、或いはSR415埋没後に設置された埋甕がSR415埋土やその肩を構成する砂層の軟弱性から傾いたものと思われる。SR415以北では遺構の密度は極端に低くなることから、屋敷の外と思われる。

SK435（図版3、写真図版21）

SR400東岸に沿った位置にあり、0.95×0.7mの楕円形の土坑に大谷焼大甕90が埋設してあった。すでに大きく破碎されており、接合できた破片も周辺に広がっていた。埋設掘方も非常に深い。

SK739（図版4、写真図版21）

SK739は中央地区北端のSR400が分岐する位置で検出された。丹波焼甕88が口縁部を失い、底部を残した状態で割れて検出された。復元すると底径20cmで50cm以上の器高を有する丹波焼である。内部の中央には円筒形に黒く落ち込む堆積があり、柄杓などの有機質の容器が入れてあった可能性がある。内部からは、銅製の田螺形水滴M5や髪盤89が出土した。

柱穴（図版10、写真図版22）

下段部では様々な大きさの柱穴状の小土坑を検出した。その中には柱根の木材を残すものも存在しており、建物や柵列などを構成するものと思われるが、建物等は復元できなかった。

その中で一部に柱根を残し、比較的大型の柱穴が一列に並ぶものが中央地区で確認できた。埋没したSR400を跨ぐように5基の柱穴（SP91・207・121・119）が東西に並んでいる。柱穴の大きさは直径0.6m内外、深さは0.3m程度で、礫を詰め込んでいる。柱間は1.8～2.0mを測る。P121から京焼系の施釉陶器塊片、SP119から丹波焼系の施釉陶器鉢片が出土しており、18世紀後半以前のものと思われる。

SP720（図版4）

SP720は中央地区のSR400東肩で検出された比較的小型の柱穴で、青磁碗87が出土した。SR400に伴うものかもしれない。

下段の中央地区東半部や南地区では亜円礫層が遺構検出面直下で現れており、もともと遺構を掘削しにくい立地であり、さらにすでに削平されて失われてしまった可能性が高い。

第3節 上段の遺構

1. 北地区の遺構（図版11・13、写真図版23）

上段北地区的地形は、基本的には東に傾斜するが、詳細には北西部が高く南西部が低くなっている。北西部および西部が水田造成により堆積土が削平されていた。その部分での遺構は耕土直下の地山に刻まれた部分のみ遺存し、遺物包含層は北地区の東半部および南半部で認められた。

上段北地区南端での土層関係は、西端では耕土直下が明黄褐色の地山となっており、地山上部は土壤化により変色している。そこから上段北地区中央部にかけては地山上に水田嵩上げ層（第4層）や旧耕土（第3層）の堆積が認められる。水田嵩上げ層は上段北地区中央部～東部にかけて厚くなっている（第2層）、この断面部分では溝（SD307）の埋土が下層に存在する。水田嵩上げ層の下に旧耕土（第7層）と第11層の遺物包含層が溝埋土上面に存在する。なお、東部の地山は礫を多く含んでいるが、上部が大きく削平されているためと思われる。

上段北地区で検出した主要な遺構は、北端で弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路SR218、南東部で検出した掘立柱建物跡SB01とそれに付随すると思われる土坑SK224、近世の円形井戸SE219とSE362、近世～近代の方形石組井戸SE368がある。そのほか、中世～近世の溝・土坑・柱穴が主として上段北地区南半部で認められた。

1. 流路

SR218（図版11・14、写真図版24）

上段北地区北東部で検出した幅約3.5～4mの流路で、長さ約12m以上にわたって検出した。北東部は上部が削平されているため底が浅くなり深さ0.3m、幅も約2mと狭くなっている。遺物がほとんど出土しなくなったため途中で調査を放棄した。南東側は造成による落差約1.4mの大きな段差となっており、そこで削られたため途切れている。東端での流路検出面からの深さは約0.6mである。なお、調査した範囲での北西端と南西端での底の高低差は約25cmで、2.5%の傾斜をもって南東方向へ流れていることは明らかである。

流路埋土は地山と色や質が似ていたため識別が困難であったことから、サブトレンドを設定して掘削したところ、底で砂礫の埋土を確認し、土器も出土したことから流路跡と断定できた。なお、付近での地山は25Y7/4 浅黄（乳黄灰）色のシルト質極細粒砂、流路埋土は乳灰色から灰色のシルトであった。流路底付近には砂礫層が薄く堆積しており、埋土中および底付近の砂礫層部分で比較的大きな破片が出土した。

出土位置を記録したものには、南東端の溝底に近い砂礫層直下から壺体部104、東部の溝底に近い埋土中から壺上半部107、底部の西側下端に近い部分の埋土（乳灰色シルト）から壺口縁部106、北西寄りの西側溝斜面から壺102、北西部の溝底に近い乳灰色シルトから台付鉢110と鉢上半部111、110・111の東側で溝埋土上層より壺または壺の体部などがある。また、乳灰色シルトの埋土中から壺上半部103や105・109の壺口縁部のほか、底部113・114・116が出土し、砂礫層から壺口縁部108、壺底部115が出土した。なお、壺底部112も乳灰色シルト出土と思われる。

これらの土器は113を除いて弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期で、流路内に投棄されたものと思われる。土器は流路の南西・北東側から投棄されたと想定されるが、南西側では当該時期の遺構は検出されていないことを考慮すると、北東側の丘陵尾根先端部分の微高地が集落跡の可能性がある。

なお、今回報告する調査区内では、当該時期の遺構は本流路に限られる。

2. 掘立柱建物跡

SB01（図版11・15・16、写真図版25）

上段北地区南東部に存在する、南北5間、東西2間あるいは3間以上と判断される総柱建物跡で、南側に1～1.1mの間隔をおいて列または欄が付設されている。東端柱列のさらに東側にも建物が続いている可能性もあるが、柱穴を検出した面の高さから削平により40cm程度掘り下げられているため確認できない。

棟方向はほぼ真北の座標北からN14°W方向で、柱芯距離で南北規模は9.74m、桁間は1.76～2.08mであるが、大半は1.92～1.97mの範囲におさまることからほぼ均一である。東西規模は2間の場合6.07mで、梁間は2.96～3.4mで平均3.13mである。ただし、東側の梁間が平均3.04m、西側は平均3.25mで、東側が狭くなっている。北西部にもう1間分があるが、梁間は1.74m・2.0mと短い。この部分が南北全体に存在していたか、あるいはこの部分のみ張り出していたかどうかについては、南側が搅乱坑により破壊されているため判断できない。

建物跡の内部にはSK323・329などの土坑やいくつかの柱穴があるが、この建物跡に伴うものかどうかの判断はしがたい。ただし、北西側に約2.5m離れて存在する土坑SK224は本建物と関わりの深い遺構であると判断している。また、南側に存在する溝SD307は建物跡と同じ方向であるが、規模が大きすぎる点と、上層で近世の遺物が出土していることから、建物に伴っていたとは考えにくい。同時に、北西部の溝SD274・250は、建物跡と重複するSD345・337と方向が同じであるが、建物跡の方向とは異なっていることから、地割の方向からみても本建物跡との関係は薄いと判断される。

掘立柱建物跡の検出面は東側および南側に傾斜しているが、東側は削平の段もありやや著しいが、南側への傾斜は僅かである。柱列の断面をみてみると、東西方向では柱穴底の高さが東側でやや深くなっている。このことは、建物が存在していた時点で東に少し傾斜した地形であったことが推察される。ただし、南北方向の断面ではその傾向は窺えない。

柱穴掘方の規模は、平面の直径18～32cmの円形で、柱痕は径9～12cmの円形である。太い柱痕には大きな掘方となっていることは当然であるが、掘方直径に対する柱痕直径の比率は0.5～0.83であるが、0.54～0.68が大部分を占め、平均は0.62で、柱の太さに対する掘方直径がほぼまとまっているようである。しかし、検出面からの掘方の深さについては12～42cmで24～40cmが多く、まとめりは認められない。

柱穴からは平安時代後期末の12世紀末～鎌倉時代初頭の13世紀前半の須恵器・土師器の破片が出土しているが、特にSP335では柱痕から13～14世紀代の須恵器鉢121が出土し、須恵器塊小片が柱穴上面、土師器細片が柱痕から出土している。これらとSK224の出土遺物が示す年代を合わせて考えれば、平安時代末の12世紀後半～鎌倉時代初期の13世紀前半の間に掘立柱建物跡SB01が機能していたと判断することができるであろう。

図示できなかった遺物が出土した柱穴は、SP334の柱痕から須恵器塊片、SP336の柱痕から土師器・須恵器の細片、SP285の柱痕から須恵器塊片、掘方から土師器細片、SP333の上面から須恵器塊片、掘方から須恵器片、SP332の掘方から須恵器壺片、SP328の柱痕から須恵器塊片、SP315の柱痕から土師器細片、掘方から土師器・須恵器の細片、SP321の柱痕・掘方から土師器・須恵器の小片、SP327の上面から土師器細片、柱痕から須恵器小片、SP316の柱痕から須恵器塊片、掘方から土師器・須恵器の小片、SP303の上面から土師器・須恵器小片、柱痕から須恵器細片、SP326の柱痕から土師器細片、SP324の掘方から土師器細片がそれぞれ出土しており、建物跡の時期と齟齬がない時期の遺物が出土している。

堀部分の柱穴のうち、SP300の柱痕からは土師器・須恵器の小片、堀柱穴の可能性があるSP306の柱痕から土師器細片が出土している。

また、西側張り出し部分にあたる柱穴のうち、SP349の柱痕から土師器・須恵器塊の破片、SP346の掘方から須恵器塊片、さらに西側に存在するSP284の上面から瓦器塊片、柱痕・掘方から土師器・須恵器片が出土しており、柱穴の時期は建物跡と同時期であると判断される。

なお、柱痕内には柱の根固めや礎板石と思われる礎を検出したものがある。

3. 土坑

SK224（図版11・15・17・18、写真図版27～30）

掘立柱建物跡SB01の北西側に存在するSK224は、10～30cm程度の亜円礎を中心とした石で壁を構築するとともに底も礎敷きとしていたと判断される石組土坑である。平面形は一辺1.8m程度の隅丸方形に近いが、やや歪である。石組の壁は東側を除いた部分が遺存していたが、西側では2段、南側では一部分で最大4段、北側では1段のみである。遺存した石組の状態から南北内法1.1mで、東側の石組は遺存していなかったものの、内法が一辺1.1mの方形石組が想定でき、辺の方向は掘立柱建物跡と同一方向である。底に敷かれた亜円礎は10～25cmの大きさで隙間がやや多く、上面の凹凸も認められることから、丁寧に敷いたものではない。

検出面から底の礎上部までの深さは最大45cmで、底の礎上部には黒色（主観的には暗濃褐色）を呈しやや粘質で炭化物を多く含む極細粒砂～細粒砂（第5層）、その上部には赤褐色焼土混じりで灰白色を呈する粘土状の粗粒シルト～極細粒砂（第3層）、第3層上部には暗褐色（主観では灰褐色）の極細粒砂～細粒砂、最上層には黒褐色（主観では暗灰褐色）の極細粒砂～細粒砂が堆積しており、いずれの層にも礎と須恵器・土師器等が炭化物とともに含まれていたが、北半部に偏って検出された粘土状の第3層では、土層内および下面に多くの土器類が炭化物とともに含まれていた。

礎は壁体を構築していたものが崩落したと推定され、土器類は土坑廃絶時およびその後に廃棄されたもの、粘土状の土も同時に廃棄されたものと判断される。また、土器類は底の礎上からも検出された。それらの土器のうち、完形～ほぼ完形に復元できたものには須恵器塊が11個体、須恵器皿は3個体、土

師器壺が7個体あり、器種としては須恵器壺が最も多く、図示できたもの27点、次いで土師器皿17点である。その他の器種としては4個体分の土師器壺（土鍋）や須恵器鉢2個体分、ほぼ完形の瓦器壺1個体と破片2点がある。また、輸入陶磁器の青白磁と白磁の破片があり、土錐も1点出土した。SK224出土土器は生活に直接関わる器種であることが特徴である。また、土器類は主として北側に集中していることから、北から投棄されたものと判断される。

土坑掘方は平面隅丸方形で一辺1.9m、底はほぼ平らで検出面からの深さは50cmであった。掘立柱建物跡の検出面から想定すると大きな削平が認められないことから、この土坑についても石組の高さは50cm程度であったと推定できるであろう。

本土坑の機能については不明な部分が多く推定しがたいが、溜井戸のような水溜施設であった可能性がある。ただし根拠は薄く、周間に近世以降の溜井戸が多く存在していたことが理由である。

SK280（図版II・15）

この土坑はSK224の南約1.4mに存在し、掘立柱建物跡のすぐ西に位置している。平面形は隅丸の矩形に近く、南北1.7mである。東側肩部は削平により消失しているが、1.5m程度であったと推定される。検出面からの深さは30cmで、埋土は最下層が10YR5/2.7にぶい黄褐色で粘質のシルト質極細粒砂、その西部に10YR5.6/3にぶい黄橙色の極細粒砂、上層には7.5YR5.5/3にぶい褐色で粘質の粗粒シルト～極細粒砂、最上層には7.5YR3.6/1褐灰色で粘質の粗粒シルト～極細粒砂が堆積していた。埋土中から須恵器壺の破片と土師器の細片が出土した。掘立柱建物跡やSK224と同時期の可能性がある。

SK329（図版II・15・19、写真図版32）

掘立柱建物跡内に存在する土坑で、南北0.9m、東西1.1mの楕円形を呈する。底は皿形に近く、検出面からの深さは12cmである。埋土は主観では暗灰褐色で、中世初期の埋土色を呈しており、図示できなかつたが、埋土から土師器小片と須恵器壺片が多数出土している。

SK323（図版II・15・19、写真図版32）

本土坑も掘立柱建物跡内に存在し、径65cmの円形を呈する。検出面からの深さは11cmで、底は皿形に近い。埋土は主観では暗灰褐色と暗褐色で、中世初期の色調であり、埋土から土器片が出土した。

SK329とともに掘立柱建物跡内部に存在し、中世初期の可能性があるが、建物跡に伴うものかどうかは判断できない。遺物は須恵器壺119が出土している。図示した以外にも土師器・瓦器・須恵器の小片が出土している。

SK371（図版II）

上段北地区の南部中央に存在した大規模な攪乱坑により大半が破壊され、東側肩部にかろうじて残っていた土坑または溝である。長さ1.4m、最大幅25cmで、検出面からの深さは10cmであった。埋土から須恵器壺の細片が出土しているが、遺構の時期を確定することはできず、掘立柱建物跡との同時性も不明である。

SK352（図版II）

上段北地区の中央東端付近に位置する径45cmほどの円形土坑で、検出面からの深さは15cm、底は平らである。埋土は上下2層に分かれ、その色調は上層が10YR4.5/2灰黄褐色、下層が10YR4/3にぶい黄褐色を呈していた。須恵器壺の小片が出土しているが、埋土の色調などから、近世のものと思われる。

SK220（図版II・20、写真図版32）

上段北地区の中央東部、SD273の南側に位置する。一辺1.55mの平面隅丸方形を呈するが、北辺は小規模な溝により切られているものの、南北も同規模と思われる。検出面からの深さは12cmで、底は平ら

ではほぼ水平である。埋土は3層に分かれており、最上層の第1層は砂層である。この砂層は後世に掘られた穴に砂が溜まつたものと判断している。第2層の主觀による色調は暗灰褐色で、通常、平安時代後半～中世前半の埋土はこの色調を呈している。第3層は西部にのみ堆積していたもので、周辺の地山が流入・堆積したものと思われる。

第2層には中世初期の土器と炭化物が含まれており、須恵器捏鉢118が出土している。また、須恵器塊片多数が出土している。また、近世染付片も出土しているが、第1層出土である。

なお、土坑の機能については、深さが浅く、埋土や出土遺物にも特徴的なものが認められず、不明であるが、中世初期の所産ととらえている。

SK342 (図版II)

SK220の東隣に位置する平面矩形の土坑である。南北約1.4m、東西約1.1mで、南北方向に縦が4点並んでいた。埋土は主觀では灰褐色系で中世頃の埋土色であるが、北端部では砂層に近い埋土で東西南向の小規模な溝に切られている。この小規模な溝は近世以降のものと思われる。本土坑を検出できた最高所からの深さは38cmで、埋土から須恵器塊片多数と近世染付片が出土している。

SK353 (図版II)

上段北地区中央部東端に位置し、SK352の南側に存在する。平面三角形に近い円形を呈し、径は約90cmである。埋土は大きく2層に分かれ、上層の色調は2.5Y4.5/1黄灰色、下層もよく似た色調で、2.5Y5/14黄灰色である。埋土の色調から近世のものと思われ、丹波焼壺片と須恵器塊小片が出土している。また、下層には直径20cm程度の亜円窪が1点含まれていた。検出面からの深さは35cmで、底は丸くなっている。

SK237 (図版II)

上段北地区の中央部西寄りに位置し、南北方向の溝SD274とSD250の間に存在する。平面形状は三角形に近く、径55cm程度である。埋土は上下の2層に分かれ、上層の色調は10YR4.5/2灰黄褐色、下層は2.5Y6.4/4にぶい黄色で、上層には黄灰色のブロックを含む。また、検出面からの深さは12cm程度であり、落込み角度が緩く、底面の形状がやや歪であることと埋土の状況から、擾乱坑の可能性がある。

図示できなかつたが、埋土から弥生時代～古墳時代の可能性がある土師器片が出土している。

SK357 (図版II、写真図版32)

上段北地区の南東部、建物跡SB01の東側に存在した南北に長い土坑で、南北長約1.4m、東西幅55cmの規模である。検出面からの深さは17cmで、底は丸い。北端には直径15～30cm程度の亜円窪が4点入っていた。埋土は單一で、10YR6/1.2褐色の細粒砂混じり極細粒砂で、主觀的には乳灰色を呈する。遺物は出土しなかつたが、埋土の色調から、近世以降の所産と思われる。

4. 溝

SD310・SD307 (図版II・20、写真図版26)

上段北地区南端中央部、建物跡SB01の南西部に位置し、溝は建物跡の南西部を切っており、建物跡は柱穴も切られている。また、溝の北側は擾乱坑により破壊されているため、溝の北端位置は不明である。

溝は南東方向にのびた後、建物跡の南側で sondage の柱列と平行方向に曲がり、さらに東方向に続いている。建物跡南側の溝はSD307と呼称したが、上段中央地区北半部の調査時に同一の溝と判明した。これ

は、北地区調査の際、両溝が調査区南端に存在していたうえに、上段中央地区北半部を掘削する前の段階であったため、SD310が直角に近く曲がることが予想・判断できずに、調査区南端の土層断面で確認した溝SD307とは別のものと判断したためである。なお、SD307の位置および方向は、調査前の水田の南端畦畔ラインと一致する。

SD310部分の検出面での溝幅は2.1m前後、検出面からの深さは0.7mで、底は丸みをおびている。埋土のうち、第1～3層は主として西側から流入しており、主観的な色調は灰褐色や褐灰色である。第5～7層は主観的には灰色や暗灰色で、第6層の砂層は最大20cmの厚さで溝底に堆積していた。

SD307部分では、第7～11層の色調は主観的には茶褐色や褐灰色、灰褐色、褐色で表現できるもので、第12層の色調は主観的には灰色で表現できるものである。SD307の最大幅は西端部分にあり、1.3m程度、検出面からの深さは0.65mで、横断面の形状はSD310よりもV字形に近い。

溝底の高さはSD310部分で標高174.95m程度、SD307部分で標高174.91mとSD307部分が僅かに低く、水は東流していたと判断でき、溝底の標高がほぼ同じであった点も堆積土層の類似性とともに同一溝と判断した理由の一つである。

SD310の埋土からは飛鳥～奈良時代の須恵器壊細片、平安時代末頃の須恵器塊片のほか、土師器片が出土しており、SD307の埋土からは須恵器塊や土師器の小片のほか、丹波焼・施釉陶器・近世磁器の小片や朱泥の破片、燃し瓦の破片も出土している。近世以降の遺物は上層から出土していることから、SD307の第7・8層は近世に掘られていた溝と重複している可能性が高い。したがって、SD310・307は中世初期の溝と判断できると思われる。ただし、遺構の重複関係から、建物跡SB01とは同時には存在せず、建物跡廃絶後に掘削された溝と思われる。

SD309（図版11・19、写真図版26）

溝SD310の西側にある、南西方向から東西方向に曲がる「く」字形の溝で、北部では擾乱のために東側の肩は削平されていた。検出面での幅は75cm、最大深は28cmで北側に偏っていることから、削平される前の溝幅は1.1m程度であったと推定される。

埋土は3層に分かれしており、最上層は主観的には黄灰色に近く、地山ブロックが多く混じることから、擾乱坑の埋土残存部分である可能性が高い。中層および下層は主観的には灰褐色で、中世初期頃の埋土と同色である。埋土の土層観察を行った部分では柱穴と重複しており、この溝が埋まった後に掘られた柱穴である。埋土の色調から中世初期の柱穴と思われる。

本溝埋土から近世陶器片が出土しているが、最上層出土のものであろう。本溝の時期は埋土の色調から中世初期あるいは古代後期の可能性がある。

SD345（図版11・15・19、写真図版26）

建物跡SB01の中央北部にある南北方向の溝である。建物跡内にのびているが、柱穴とは重複していない。幅約45cm、長さ約6.3mの規模で、検出面からの深さは7cm程度である。溝底は丸みをもち、底の標高では南端が北端より2cm高いことから、水は南に流れる溝である。南端は途切れているものの、現状では、北端底の標高と南端肩部の標高が同じであることから、溝の南肩から水があふれるようになっている。埋土は主観的には暗灰褐色を呈し、北半部の埋土から平安時代末頃の須恵器塊・瓦器塊の破片が出土している。溝の時期は古代後期～中世初期の可能性がある。

SD337（図版11・15・19、写真図版26）

建物跡SB01の北部で、溝SD345の東隣で並行して存在する溝である。SD345と同様、建物跡内にのびているが、柱穴とは重複していない。幅約50cm、長さ約2.2mの規模で、検出面からの深さは14cmであ

る。底は丸みをもち、埋土はSD345と同一で、埋土には13世紀頃の土器片や炭化物を含んでいた。

SD746・SD861 (図版11・15・20、写真図版26)

上段北地区の南端から中央地区北部にかけて、東西方向の溝が3条存在していたが、そのうちの南側に位置する溝がSD746とSD861で、約2.1mと幅広い溝SD861の埋土を切って、ほぼ中央にSD746が掘られていた。SD861は検出面からの深さ約40cmで、底は緩いU字状を呈し、埋土の第3～6層がSD746に削られずに残っていた。埋土は主観的には灰褐色・褐灰色で、中世初頭頃の埋土の色に近い。ただし、SD861はSD307の南部を切っていることから、SD307が埋まってから掘られた溝である。SD861は斜面上部にあたる西側ではその幅を減じながら自然消滅し、東部ではSD307と重複している。

SD746はSD861が埋まつた後に掘られた幅85cmほどの溝で、埋土中には亜角～亜円礫を多く含み、主観的な埋土の色調が灰色や灰黄色であり、埋土から近世磁器や焼瓦片が出土していることから、近世以降の溝であることは確実で、礫が石組上に見える部分もあることから、水田に伴う暗渠の可能性が高い。

SD274・SD250 (図版11)

上段北地区中央西部に存在した南北方向の細い溝で、両者の位置から一連の溝であろう。SD274の幅は30cm、長さ約3.5mにわたって検出した。検出面からの深さは12cmで、底は丸味がある。南端は途切れているが、溝底の標高は北部で175.76m、南端付近で175.70mであることから、水は南流していたことがわかる。埋土は上層が10YR3/1.5黒褐色の極細粒砂混じり細粒砂、下層が10YR4/1.4褐灰色のシルト質極細粒砂～細粒砂で、主観によれば灰褐色系の色調であることから、中世の可能性が高い。埋土から近世と思われる土師器細片が出土しているが、北側に近世溝が存在していることが理由であろう。

SD250の北端はSK237の部分で途切れ、南端は大規模乱坑により削られており、検出できた長さは約6.5mである。北端での幅は約25cm、南端では約45cmである。検出面からの深さは北部で4cm、南部では8cmで、溝底の標高は12cmの差をもって南部が深くなっている。埋土は上層が7.5YR4/1.4褐灰色のシルト質極細粒砂～細粒砂、下層が2.5Y5.4/2暗灰黄色のシルト質極細粒砂混じり細粒砂で、主観によれば灰褐色や褐灰色系の色調であることから、中世の可能性が高い。埋土から土鍋の小片が出土している。

SD273 (図版11、写真図版26)

上段北地区中央部に位置する、東西方向でやや規模の大きな溝で、埋没後に石組井戸のSE368が構築されている。SD273の東端は水田構築のための造成により断ち切られ、溝の西端では北西側に分岐するが、西方へ続くものも含めて井戸SE219の部分で終息している。残存長は約15mで、東端付近での検出面幅は2.05mで深さ61cm、西端付近では幅0.7mで検出面からの深さは12cmである。溝底の標高は西端で175.7m、東端で174.8mであるから、90cmの差をもって6%の傾斜で水は東流する。溝の東端は調査区内ではその痕跡すら検出されなかったため、どこまで流れていたのかは不明である。

東端付近での埋土を観察すると、大きく2～3回に分かれて埋まっていたことが判断できた。埋没過程は、最初に2.5Y5.5/1.4黄灰色や10YR4.5/1.4褐灰色の極細粒砂や細粒砂で埋没したのち、幅1.4mの溝として掘削され、2.5Y5.1/1黄灰色・2.5Y5.4/4.5黄褐色・5Y5.5/1灰色・5Y4/1.5灰色の極細粒砂や細粒砂および砂礫層の堆積により埋まった後、幅0.65mの溝として機能していたようである。その溝の埋土は2.5Y4/1.2黄灰色や2.5Y4.5/1黄灰色の極細粒砂や細粒砂で、最後には10YR4/1.4褐灰色と2.5Y5/1.4黄灰色の細粒砂で完全に埋まっていた。埋土から一本引きの丹波焼鉢（181・182）、陶器碗183、土師器壠184が出土している。そのほか、硬質土師器の小片や15～16世紀の鉢片が出土している。

本溝が中世末～近世の所産とすると、その北西側に存在する井戸SE219も近世と考えられることか

ら、同時に存在していたとすれば、井戸からの水を流すための溝としての機能も有していたと推定できよう。

SD363（図版11・20、写真図版26）

上段北地区南東隅付近に位置する南北方向に直線的にびる溝であるが、北端は水田構築のための段差により、南側は井戸SE362や溝SD307・746・861により削られ、確認できた長さは5.5mである。なお、この溝は南側のSX873につながる方向にびており、同一溝の可能性もある。

検出面からの深さは15cm、溝幅は75cm前後で溝幅はほぼ均一である。北端と南端での溝底の標高での差は11cm北側が低いことから、水は北流していたと判断できる。溝埋土は2層に分かれ、上層は暗灰褐色系で古代～中世初期の埋土色に近い。下層は主観的には黄灰色系で、地山が土壤化したような色を示していた。埋土から須恵器高环IIが出土しており、ほかに奈良時代の須恵器環Bの破片や、丹波焼の鉢片、近世磁器片が出土している。さきにみた位置のみならず、出土遺物の内容からも、中央地区的SX873と一連の可能性がある。ただし、溝の時期を確定することは難しい。

SD356（図版11）

SD363の北西側に位置し、弧状を呈する溝で、検出面での幅40cm、深さ11cmで長さ約3mを検出した。溝底は丸く、南側は徐々に底が高くなり消滅している。北東端での溝底の標高は南端よりもやや低く、水は北流していたものと判断される。

埋土は上下2層に分かれ、上層は10YR6/2灰黄褐色の細粒砂混じり極細粒砂、下層は10YR4/2灰黄褐色の極細粒砂混じり細粒砂で、主観的には灰色が多く混じった褐色で、中世以降の埋土の色調を呈していた。南部の埋土中から土師器細片が出土しているのみで、この溝の時期を判断できるものではない。

5. 井戸

SE219（図版11・22、写真図版31）

上段北地区の西端に近い中央北部に存在したやや規模の大きな井戸である。平面円形に近い井戸で、検出面での直径は3.7～3.9m、深さは約1mで、浅い擂鉢状を呈し、底は梢円形で長径約2m、短径約1.5mの平坦な面となっていた。南東部分にのみ石積があり、60×40cm程度のやや大きな梢円形の亜円礫を少しずつずらしながら井戸斜面に沿って傾斜をもって積み上げられ、隙間には直径10～20cm程度の礫を詰めていた。石積の幅は2.2m程度、高さは約1mである。石積の下端では木杭が5本程度遺存しており、すべて積み上げた石の下端部分に接するような位置であることから、石積のずれ落ち防止のための杭と判断できる。なお、調査中も底に近い部分では湧水が認められた。

井戸廃絶後は主として南西方向の山側から土砂が流入し、埋土は大きく7層に分けられた。それらは大きく二つの単位に分けることができ、主観的な色調での乳灰色系の第1・2層と、黄褐色・黄灰色系の第5～7層に分割でき、後者はラミナが認められることから、水と一緒に地山まじりの土が堆積したもので、人為的に埋められた可能性もある。埋土から櫛描の丹波焼擂鉢片が出土しており、近世に機能していた可能性が高い。

なお、石組のある部分は溝SD273が途切れる位置と合致していることから、本井戸とこの溝とは密接な関係があると思われる。

SE368（図版11・21、写真図版31）

SD273の中央部に重複して存在した方形石組井戸で、SD273の埋没後に掘削・構築されていた。石組

の北辺は大半が崩落あるいは礫が抜き取られ、他の辺でも2~3段の石積が遺存していた程度であった。石組は垂直に積み上げられ、内法の規模は東西約2m、南北約1.1mの長方形で、石積の高さは、もとの高さは窺い得ないものの、最も良好な西壁の部分で45cmであった。石組に使用された礫は長さ30~60cm、幅30~50cm程度の亜円礫で、間隙には5~10cmの亜円~亜角礫を詰めていた。掘方にも平面長方形で、検出面での規模は東西約2.9m、南北約2.0m、底は平らに近く、東西約2.6m、南北約1.35mの規模で、南側は検出面の高さが低かったが、北側検出面からの深さは約70cmである。

埋土は下層に第5~7層の灰色砂層、その上部に黄灰色の粗粒シルトが10cm前後の厚さで存在し、その上層の第3層はふたたび灰黄色の砂層が堆積しており、第3層が最終段階での井戸底であったと判断されよう。第3層から上には多量の亜角~亜円礫が石組内部に存在していたことから、人為的に礫で井戸を埋めたと判断できる。埋土から一本引きの丹波焼鉢口鉢部187が出土しており、そのほか、東播系須恵器甕・丹波焼甕の破片や近代の磁器碗小片も出土していることから、近世~近代に構築されたものと思われる。

SE362 (図版II・22、写真図版32)

上段北地区南東隅、SD363の南端で重複して溝より後に掘削された井戸で、円形土坑の中に桶を埋めたものである。完掘はできなかったが、北半を調査した結果、掘方は径約1mで、桶側面の板は腐朽してほとんど残っていないが、底板はほぼ完存しており、径約80cmである。検出面から桶底までの深さは約40cmである。底板が存在することなどから、溜井戸であったと考えられる。

桶内の埋土は3層に分かれ、桶底付近には亜角~亜円礫、その上部で丹波焼火入れ鉢186が出土し、ほかに奈良時代の須恵器広口壺185が出土している。近世~近代の井戸と思われる。

SE902 (図版II、写真図版32)

上段北地区南東隅で中央地区北部北東端との重複部分に存在した径1.1m程度の平面円形に近い井戸で、素掘りと思われる。遺物は出土しなかった。溝SD307・746・861と重複しているが、前後関係は不明である。

SE935 (図版II)

井戸SE902の東側に存在し、SE902同様溝SD307・746・861と重複しているが、前後関係は不明である。径1.3m程度の円形井戸で、掘方内に円形にとりまくような礫が認められたため石組であった可能性もある。検出面からの深さは20cm程度であるが、元の深さは不明である。遺物は出土しなかった。

6. 柱穴 (図版II・15)

掘立柱建物跡SB01の内部に存在した柱穴のうち、SP354の柱痕からは須恵器塊片、SP319の柱痕から土師器小片、SP317の柱痕から須恵器小片、SP302の柱痕から土師器細片、北西側にあるSP282の柱痕から須恵器塊片、SP283の上面から須恵器塊片、柱痕から土師器・須恵器細片がそれぞれ出土している。

SB01周辺のうち、建物跡の南西側にあるSP313の柱痕上部から瓦器塊の底部120が出土しており、図示した以外にも柱痕・掘方から土師器片が出土している(写真図版32)。その北側にあるSP372の柱痕からも土師器小片が出土している。また、建物跡の東方にあるSP359の柱痕からは須恵器塊片が出土し、建物跡北側のSP343の柱痕・掘方から土師器・須恵器小片、さらに北側にあるSP339の柱痕から須恵器塊片が出土している。SK224の西側にあるSP289の柱痕からは土師器細片、SP287の柱痕からは土師器・須恵器の細片がそれぞれ出土し、北側のSP292の上面から須恵器塊片、柱痕から須恵器片が出土

している。

これら建物跡の周辺に存在している柱穴は、出土遺物を見る限り中世初頭の時期である可能性が高い。

また、さらに北側のSD273北肩に存在したSP370からも中世初頭の須恵器碗片が出土している。

上段北地区西部では、SD274・250の西側に存在した柱穴群のうち、南端に存在したSP279の柱痕からは須恵器碗の小片、北側のSP248の柱痕からは土師器細片、SP247の柱痕から土師器・須恵器の細片、SP233の柱痕からは須恵器鉢の破片、SP235の柱痕からは土師器壺細片、SP232の柱痕から須恵器小片がそれぞれ出土し、これらの柱穴も建物跡の時期と同じである可能性がある。

ただし、SE219の南側にあるSP269では、上面から硬質陶破片が出土しており、近世の可能性がある。

2. 中央地区北半部の遺構（図版12・23、写真図版33）

上段中央地区北半部では、奈良時代と思われる土坑や溝などが北東部に存在していたが、断片的であり、この時代の遺跡の性格は不明である。中世と思われる遺構には、土坑や柱穴が散在するが、建物跡の可能性がある柱列がある部分は削平されており、確認できなかった。ほかにも時期不明の土坑・溝・柱穴を検出したが、近世の遺物は出土しなかったことから、大半が中世のものとみている。

1. 土坑等

SK834（図版12・23、写真図版33）

北東部に存在した東西4.2m程度で検出面からの深さ10cmの浅い土坑で、埋土から奈良時代の土師器壺198と内面に暗文が残る土師器壺A199が出土している。図示した以外にも土師器壺片多数や須恵器壺口縁部片および陶器片が出土している。

SK873（図版12）

北東隅に存在した溝状遺構で、検出面からの深さ11cm程度を測る。埋土から奈良時代頃の須恵器壺Bの底部200が出土し、図示した以外にも須恵器壺片や土師器の小片が出土しており、位置や出土土器から、北地区のSD363と一連の溝の可能性がある。

SK862（図版12・23）

東西3.3m、南北幅80cm程度、深さ8cm程度で、奈良時代頃の可能性がある土師器片が出土した。

SK819（図版12・23、写真図版33）

南北1.8m、東西80cm、深さ19cmの墓に近い規模の土坑で、平安時代末頃の須恵器や土師器片が出土した。

SK882（図版12）

12×1.0mの矩形土坑で、深さは9cm、時期不明の土師器小片が出土している。

SK796（図版12）

南北2.7m、東西2m以上、深さ13cmの方形に近い土坑で、時期不明の土師器小片が出土している。

2. 溝

SD818 (図版12)

南北2.8m、幅40cm、深さ4cmで、古墳時代の可能性がある土師器片が出土している。

SD877 (図版12)

長さ3.6m、最大幅50cm、深さ11cmの不定形な溝で、奈良時代頃の可能性がある土師器片が出土している。

SD811 (図版12)

幅30cm程度、延長約9m、深さ5~16cmで東側が深い。土師器細片が出土したが、時期は不明である。

3. 柱穴 (図版12)

本地区内の柱穴のうち、遺物が出土した柱穴を述べる。

SP904では柱痕から繩文土器と思われるような破片、SP824では柱痕および掘方から奈良時代と思われる土師器片、SP828では上面から中世初頭と思われる土師器片、SP830では柱痕から奈良時代または平安時代末と思われる土師器片、SP832では柱痕および掘方から中世初頭と思われる土師器片、SP843では柱痕から中世初頭と思われる須恵器塊片、SP857では柱痕から中世初頭と思われる土師器片、SP867では掘方から中世初頭と思われる須恵器塊片、SP871では埋土から中世初頭と思われる須恵器塊片、SP766では柱痕から土師器片、SP767では柱痕・掘方から土師器片、SP776では柱痕から須恵器片、SP805では掘方から土師器片、SP806では柱痕・掘方から土師器片、SP810では掘方から土師器片、SP839では柱痕から土師器片、SP869では柱痕から土師器片がそれぞれ出土した。

3. 中央地区南半部の遺構

SK01・02・06・10~14・25・26・28・33・38・39・68~70・76~78 (図版12・24~26、写真図版35~37)

上段中央地区南半部では多くの土坑が検出され、ほぼ中央部の山側に集中している。この部分は西背後の丘陵から小さな谷が流れ出る位置に当たり、掘り込まれた土層は細砂質で柔らかい。この砂層から1の繩文土器が出土している。

土坑は浅いもの以外はほとんどが切り合っておらず、接するように掘られている。東西方向或いは南北方向に長軸を有する隅丸長方形の平面形をもつたものが多く、隅丸方形、楕円形、小型円形のものが一部含まれている。長辺が0.7~1.3m程度の大きさを持ち、深さは0.2~0.3m程度のものが多い。

埋土中に礫を含んだもの (SK01・68・78) があるが、土坑底や壁面に並べて石室状に構成されたものはない。一長辺に偏して配したもの (SK13・76) があるが、ほとんどが崩れており、礫を投入して埋めている。

赤褐色の焼土で覆われたもの (SK02) や、埋土中に炭を含んだもの (SK77・78・28・33) が存在する。このうちSK77・78では炭はまばらに含まれているが、炭が比較的多く含まれるSK28・33は小型円形のものである。埋土中にベースブロックや耕土を含むものも少なくないが、堆積はレンズ状を呈している。壁面は真っ直ぐ立ち上がるものは緩やかに立ち上がるものが多い。

出土遺物はほとんどないが、SK01からは鉄釘M19、SK10からは軒平瓦212や19世紀に入る瀬戸磁器片

が出土している。SK11からは土人形209、SK12からは明青花の碗もしくは皿210と色絵の陶器塊211、SK14からは瓦質土器213、SK78からは18世紀末以降の丹波焼擂鉢（214・215）が出土している。また、SK68からは銅鏡M8が出土している。

少し南側に距離を置いてSK68・69やSK38・39が検出された。

SK68は2.25×2.0mの不整隅丸方形を呈した土坑で、0.3mの深さをもつ。埋土下層では、短辺の中央付近に礫が集中する。SK69は1.9×1.5mの楕円形の平面系をもち、深さは0.2mの土坑である。

SK38は1.4×2.0m以上の隅丸長方形の土坑で、0.5mの深さをもつ。SK39は2.2×2.1m、深さ0.23mの隅丸方形の土坑である。SK38・39の周辺は空隙地状となる。

これらの中央地区に集中する土坑群は近世後半以降のものであり、墓址の可能性は低いものと考えるが、その性格は不明である。出土遺物には16・17世紀代のものも見られるが、多くは18世紀後半以降のものである。

中央地区南半の東よりでは大型の土坑が検出された。

SK70（図版12・26、写真図版36）

下段部への段により東端が失われるが、南北3.8mの方形の平面形を有し、深さが0.5mを測るもので、多くの礫とともに染付磁器等（216～218）、近世瓦片や釘（M15・16）が出土した。

SK65（図版12・28、写真図版37）

方形の土坑が2基並んで配されたような平面形態をもつSK65は南北7.7m、東西5.3m、深さは0.9mの規模をもつ。埋土には腐植層が確認できる。鉄製鋤先片M20や木製板材W76、三田青磁皿222が出土している。近世以降のものである。

SK64（図版12・28、写真図版37）

集石土坑SK64はSK65に一部切られており、直径15cmほどの礫を充填している。これは近接したSK43に類似しているが両者の先後関係は不明である。皿状に0.3mの深さをもち、東西の大きさは5.8mを測る。平面形は不整な楕円形である。明青花碗220やコンニャク印判手染付磁器碗221が出土している。

SK43（図版12・27、写真図版38）

集石土坑SK43は、南側を走るSD174と平行に走る東西方向に長い土坑である。東西長10m、幅1.3m、深さ0.25mの溝状を呈しており、埋土中には直径が30cmまでの円礫が充填されている。礫は西半部がやや大きい傾向があるが、東半部でも一部大きなものが含まれる。土師器炮烙・丹波焼擂鉢、染付磁器皿など（223～227）が出土している。

SK58（図版12・27、写真図版38）

SK58はSK43上から切り込んでいる。東西方向に長軸をおく東西1.0m、南北0.55m、深さ0.1m弱の土坑で、埋土には炭粒や焼土塊が多く含まれ、中層に炭の薄層が挟まれていた。

SD174・59（図版12・28、写真図版39）

集石土坑SK43の長軸方向に平行して、ほぼ東西に走る溝を検出した。この位置も西の山から続く谷地形となっている。溝の東端は下段へ向かう落ちで失われている。SD174は幅0.8～1.2m、深さは0.3m程度で、北岸には石列が並べられており、現状では2段程度の石垣となる。これは溝の護岸であろう。この石列を除去すると、東半部の下層からSD59が検出された。位置関係からSD174はSD59を踏襲して設けられたものと考えられる。SD174からは完形の白磁小碗228が出土した。下層のSD59からは明青花碗229が出土した。この溝をもって中央地区と南地区との境界としている。

4. 南地区及び南西地区の遺構

南地区の内、上段の南半部は旧の大歳神社境内となっており、そこに包括される南西地区は大歳神社境内の調査に含めて報告する。

大歳神社境内外の調査

上段南地区の内、北半は有野川に向かって形成された扇状地にあたり、有野川に流れ込む谷（もしくは旧河道）と中州の疊層の頭が出現している。調査前の現況はいちご畑（ビニールハウス）跡地である。ここからは谷部を埋め立てた跡SX1007や方形石組水溜遺構SX1040・1041、島跡、埋桶遺構、埋甕遺構、不整形土坑群、また調査区北西隅からはピット群などが見つかった。

くぼ地埋め立遺構（SX1007）（図版29・30・32、写真図版44・45）

2014年度・2015年度の調査区を跨ぐ形で、東西幅13.5m・全長13.5m以上、深さ約70cmの大きさで池状のくぼ地を検出した。2014年度に調査した南半部では、くぼ地の形は2段に落ちた不整な半円形を呈しているが、2015年度調査の北半部では不整な長方形を呈している。

元々は有野川に流れ込む谷（旧河道）であった所が徐々に埋まり、17世紀に入る頃には池状の凹みとなって残っていたと考えられる。しかし、SX1007南肩では人頭大の河原石が一部に敷かれおり、加えてくぼ地から東側へ幅約2mの溝（SD1003）が流れ出ている。また、北肩は区画溝と思われるSD174に並行して直線的になっており、くぼ地には人為的な改変が加えられている。

くぼ地は多量の土砂で埋められており、土砂の中から丹波焼鉢237～240や唐津焼皿244・245・247、明青花皿片248など16世紀後半から17世紀初頭の土器（233～240・243～245・247～249）が出土している。このことから、くぼ地は概ね17世紀前半代には埋め立てられたと推測できるが、最上層にあたるSX1007石敷き部分や北半部上層からは17世紀後半に下る丹波焼鉢241・242・甕246が出土している。くぼみは17世紀代を通じて解消されていったものと考えられる。

不整形土坑

SK71（図版29・30、写真図版45）

SX1007の上面や周辺からは、後述する埋桶・埋甕遺構群とともに隅丸長方形土坑SK71が検出されている。長辺約3.1m・短辺1.8m・深さ0.16mを測る、浅い皿状の土坑である。土坑底付近には炭・灰を多量に含み、土師器小皿232・寛永通寶M2や鐵釘M17が出土している。性格は不明である。

SK932（図版29・30、写真図版39）

SK932は上段南地区の北端で検出された土坑で、上段から下段にかけての斜面に位置する。長径2.85m、短径1.65mの歪な楕円形を呈しており、丹波焼甕231・鐵釘M18が出土した

埋甕・埋桶遺構群

SX1007・SD1003の東端を切り込んでSX1001・1004、その南隣よりSX1006を検出した。南北方向に一列に並んでおり、SX1001は丹波焼甕を、SX1004・1006は桶を埋め置いていた。これらは島作に伴う水溜の可能性が高いが、SX1001・1006は人頭大の石が多数落ち込み、SX1001では刃物（包丁）を作うことから、この2基については上部の石組が落ち込んだ土葬墓の可能性も残る。

SK75・72はSX1007の東肩を掘り込んで南北に並んで営まれている。このためSX1007の北東隅の本来の形状は不明である。SK72は底板材を土坑底に置き石積を巡らせた水溜遺構、SK75は埋桶遺構である。

SX1001（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.7m・幅約1.3m・深さ約70cmの卵形の土坑に、腹径60cmの丹波焼甕を据えている。甕の上半は内部に崩れ落ち、更に人頭大の石が多数内部に落ち込んでいる。

遺物は、上部から鉄製品（包丁）M21、内部から18世紀代の肥前系染付磁器碗が出土した。SD1003と切り合い新しい。

SX1004（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.8m・幅約1.4m・深さ約55cmの小判形の土坑に、径90cm前後の桶を据えている。SD1003と切り合い新しい。

SX1006（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.3m・幅約1.1m・深さ約68cmの小判形の土坑掘方に、径80cm前後の桶SX1006を据えている。人頭大の石が多数内部に落ち込んでいる。

SK75（図版29・30、写真図版45）

SX1007の東端部で一旦浅くなった位置で検出された。径1m前後の掘方に桶を据えている。残存深度は浅い。桶の底板が良好に残存していた。

SK72（図版29・30、写真図版45）

SX1007の東端部で一旦浅くなった位置で検出された。埋桶SK75と並ぶように検出されたが、前後関係は不明である。長軸約1.3m・幅約1.1m・深さ約50cmの土坑に径20～30cmの亜円錐を3～4段積んでいる。土坑底には桶の底板を敷いており、溜井として利用したものであろう。煉瓦230が出土している。

方形石組遺構

SX1040（図版29・36、写真図版47）

SX1041の南東に位置する水溜と考えられる石組土坑である。長軸約3.05m・短軸2.20mの不整な隅丸方形の掘方に内法長辺1.90m・短辺1.05m、深さ約40cmの方形石組を造っている。径30cm～50cmの石を横積みしており、2～3段の石積みを残している。

土坑内の上半は石材によって埋められており、下半には腐植質粘土が堆積する。粘土内より軟質施釉陶器（灯火具－ひょうそく）259が出土した。近世後半、19世紀代に機能していた水溜遺構と考えられる。

SX1041（図版29・35、写真図版47）

SX1040の北西に位置する水溜と考えられる方形石組土坑である。内法南北長6.8m・東西長6.1m以上、深さ約50cmの規模で検出した。西壁は調査区外にある。石組の各壁は主に径30cm～40cmの石材を2～3段に積んで構築している。土坑内は土山によって人为的に埋められており、直上に現耕土が被覆する。間に自然堆積土は認められなかった。理土内より古代の須恵器片が出土している。

遺構の時期は不明であるが、埋積状況と19世紀代以降に積まれた大歳神社の北石垣と向きを同じくすることを勘案すると、近代に下る可能性がある。

土坑SK1039（図版29、写真図版47）

SX1040とSX1055の間に位置する全長5m・幅1.8m前後の瓢箪形の土坑である。東半に集石をもつ。

土坑内から土師器小皿262・肥前系染付磁器碗263が出土しており、18世紀代の遺構と考えられる。

畠跡（図版30、写真図版48）

北半部東端にて検出した。調査区壁際に変色部を検出しており、これらの灰褐色土は、耕作土壤の様相を呈している。層序から推して近世の畠と考えられ、近接する埋甕・埋桶遺構群とセットになるものととらえられる。

不整形土坑群（SX1013～SX1016）（図版29・33、写真図版48）

畠跡の下層から楕円形あるいは隅丸方形状の土坑が検出されている。これらは上半部を畠耕作によつて搅拌され、崩されているため詳細は明らかではない。SX1013からは土師器小皿・丹波焼鉢・須恵器底部・古瀬戸四耳壺片が出土しており鎌倉時代に遡る遺構と捉えられる。規模は概ね全長1m前後、幅80cm前後、深さ10cm前後である。

ピット群（図版29、写真図版43）

上段南地区北西端においてピット10基を検出した。1基は土層断面にかかり、SX1007の埋土を切っていることから17世紀以降の時期である。性格は不明である。

大歳神社境内の調査（図版31、写真図版49～54）

上段南地区及び南西地区の内、南半部は山裾の微高地上にあたり、前述したように旧大歳神社参道の一部と拝殿前面の広場、拝殿・本殿が対象地である。調査前、広場には空閑地と戦後に建てられた木造の社務所兼倉庫が存在していた。2014年度に参道と拝殿前の境内、2015年度に拝殿と本殿及びその背後部分の調査を行った。

拝殿前の境内からは、近世の大歳神社境内地を限る北側の石垣SX1055と、近世の社殿敷地（本殿・拝殿など神社建物が建つ境内内の敷地）と参道・鳥居部分との間を限る大きな段落ちを検出した。また、拝殿前の敷地上からは、旧社殿基礎の一部SF1053や風倒木跡SX1036・1037、ピット群などを検出した。

これに対し、拝殿・本殿及び背後部分の遺構は少なく、土坑SK2001～2004・P2001～2003及び尾根斜面をカットした境内の造成跡を検出した。SK2001・2003・2004では河原石を内部に配した状況が観察できたが、SK2002から出土した瓦が示すように、全て近世に属する遺構である。

検出した境内の規模は、東西約23.5m・南北21.5m以上を測り、更に参道部分が取りついでいる。境内は火災にあっており、後述するSF1053や火灾片付けに伴う土坑からは炭や被熱した砕石、鉄釘などが出土している。また、境内の東側には鳥居と有野川側からの参道が伸びているが、取りつき部分以外は調査対象とはならなかった。境内と参道の間には約1.4mの高低差があり、現況では石段が取りついでいた。この落差を埋め立てた盛土の底からは、磁器碗295が出土している。北側の石垣（SX1055）前面の盛土と共に、幕末以降に造成を行い、境内を拡張していくと考えられる。

建物基礎（SF1053）（図版29・31・34、写真図版49・50）

社殿敷地上より逆F字状に並べられた石列とその間隙を埋める石敷きを検出した。

石列は南北長9m以上、東西長2.5m以上の規模を持つ。長さ30～40cm、幅20～30cm、厚み15cm程度の石材を一列に並べている。

SF1053は、その形状から建物の基礎であったと推測される。特に北半部は石敷きを伴っており、重量物に耐えられる土蔵などの性格をもった建物の存在が考えられる。この基礎は火災にあっており、出土した磁器碗と地元の方に記憶がないところをから推して、戦前もしくは戦後直ぐに焼失した可能性が高い。『有馬郡誌』には大歳神社に土蔵が存在した記載があり、対応する可能性がある。

風倒木跡 (SX1036・1037) (図版29・31・34、写真図版50)

建物基礎の西側に南北長約4.5m・東西長約2.5m・幅約1mを測る、「く」の字状の土坑を検出した。土坑は薬研状に落ち窪み、大きく2ヶ所の窪みとなっている。SX1036部分は約1m、SX1037は約80cmの深さを持つ。

土坑内からは、平安時代中期の須恵器壺底部、土師器坏片が出土している。

土坑の形状、地山ブロックを含んだ埋土の状況から、SX1036・1037は風倒木の跡と考えられ、樹木の根が平安時代中期の遺物を巻き込んだものと考えられる。

境内の北辺を区画する石垣 (SX1055) (図版29・31、写真図版49)

東西延長約10.5mに亘って石垣を検出した。石垣は径30cm前後の石を横積みしていた。基底部の1段から2段を残して崩落しているが、部分的に4段残存しており、更に社殿敷地上と石垣下との間に60mの落差があることから、当初は少なくとも4段の石積みを持った石垣と判断できる。SX1040と並行することから近世後半に築かれた可能性が高い。この石垣は境内の拡張によって埋没し、約4m北側に近代以降の新たな石垣が造られている。

社殿敷地の東辺を区画する段落ち (図版31、写真図版49)

建物基礎 (SF1053) の前面（東側）において、社殿と参道・鳥居との間を限る大きな段落ちを検出した。南北方向の延長約15m、その比高差は約1.4mを測る。

社殿の敷地は東側へ張り出す微高地上に立地しており、参道・鳥居のある境内は谷地形（旧河道）にあたる。旧地形の高低差を利用して、石垣SX1055と共に方形の社殿敷地を造り出していたと考えられる。

段落ちの底からは19世紀代の遺物が出土しており、近世後期に敷地が整備された可能性が高い。また、19世紀から現代に至るまで、境内の拡張に伴い数次の盛り土が行われ、段差が解消されていったことが判明した。

ピット群 (図版31)

上段南地区南東端と南西端に、径5～30cmのピットを検出した。建物跡として復元はできない。

境内背後の造成

本殿背後に尾根斜面をカットした段落ちを検出した。標高178.5mから177.1mにかけて約20°の急傾斜にカットし、境内の平坦面を造りだしている。カット部分のうち、西側に向けて凸部となっている場所は本殿が張り出していた部分と考えられる。また、裾部には溝を巡らせていた可能性がある。

第4章 遺物

第1節 土器

1. 下段出土土器

出土した遺物は、土器・木製品・石製品・金属製品に分けて掲載している。土器は上段と下段で造構の性格・時期が異なることから、下段・上段の順に記載し、下段では屋敷地割を示すと思われる溝から、井戸、土坑、埋桶、埋堀と出土した造構の種別毎に述べている。大歳神社旧境内にあたる南西地区出土の遺物は南地区的ものに含めて報告する。

流路・溝

① SR400（図版37・38、写真図版55～60）

下段を南北に貫いて走るSR400からは多くの遺物が出土したが、部分的には近世に入つても溝として使用され、また近世以降の土坑や水溜造構によって切り込まれていた。このため新しい時期の遺物も含まれている。土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・陶器・磁器が出土した。

土師器

2～5は皿である。2・3は、平底に外反する口縁部を持つ。4・5は手づくねで作られ、ユビオサエを残した底部から内湾気味に立ち上がる口縁部が続く。

6はあまり肩の張らない体部から緩やかに屈曲して聞く口縁部をもつ壠である。体部外面には横方向に平行なタタキを残し、内面は同心円状の當て具痕を残して横方向のハケによって仕上げる。口縁端部と外面はナデによって仕上げている。

7も壠口縁部である。横方向の平行タタキ目を外面に残し、ナデによって仕上げている。

黒色土器

8は黒色土器底部で壠と思われる。糸切り痕をもつ低い平高台から聞く体部に至る。内面は黒く、暗文状のヘラミガキが一部見える。

瓦器

9は低い輪高台を貼り付けた壠の底部と思われ、内面には暗文が施されている。

須恵器

10は口縁端部を欠くが壠B蓋である。埋土下層から出土した。宝珠形の扁平なつまみから水平に開き、緩やかに下る。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデの後、一方向の仕上げナデを施す。

11は壠Aである。底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。

12・13は壠Bとするが、厚手である。回転ヘラ切りの底部に輪高台を貼り付け、強くナデする。内面には仕上げナデが見られる。壠A・B・同蓋は北地区から出土している。

14～30は壠である。回転糸切りの底部に丸く取めた口縁部を有するもので、底部内面には一方向の仕上げナデを施すものが多く、多方向のナデのものも見られる。口縁端部には重ね焼きの痕跡を残す。内湾気味に立ち上がるるものと、直線的に聞くものがあり、後者には器高の低いものも見られる。14・15のように平高台状に突出し、内面中央が窪むものも見られる。

29の外面下部には「匁」状の記号の墨書きが描かれており、内面にも使用により摩滅した痕跡が見られ

る。30の底部外面にも「ト」状の墨書きが見られる。

日下部遺跡の西、八多川流域では小名田窯跡が調査されており、塊・皿を中心とした須恵器を焼成しており、SR400出土須恵器塊に類似している。同窯跡は12世紀後半～13世紀前半に操業されたとする。

31は小皿である。やや瓦質様に焼成されている。糸切り底部から内湾気味に短く立ち上がる。

32～35は鉢である。32は内湾した体部から外反する口縁部をもつもので、片口が付く。内面には自然釉が付着する。神出古窯跡群森内編年の鉢Dにあたり、11世紀の古段階に相当する。

33・34は東播系須恵器捏鉢で、口縁部を上方に肥厚させ、端面が外側に傾斜するもので、33の内面は摩滅しており、よく使用されている。14世紀後半～15世紀前半にかけてのものである。34は底部屈曲部外面に高台が剥がれた痕跡が残る。口縁端部は四角く、上に少し摘み上げられる。12世紀後半～13世紀後半にかけてのもので、小名田窯跡と時期が重なる。

35は欠損するが、高台を有する片口捏鉢であるが、緻密で硬質な胎土・焼成は丹波焼に近い。直線的に広がる体部から上端部を少し摘み出した片尖りの口縁部に続く。内面は不定方向の仕上げナデを残すが、よく使用されている。

36・37は短く屈曲して広がる甕口縁部である。口縁部は外側に面をもち、上面を窪ませている。37の肩部外面には平行タキ目が残る。

陶器

38・39は、ベトナム製或いは中国南方産のものと思われる。38は無釉陶器壺である。底部を欠くが、細く直立気味に開く体部には輪廻目を残し、体部上半から緩やかな肩部には3条の沈線を巡らせる。直立する口縁部は一旦内湾気味に内側に曲げた後、外側に折り返すことで丸く肥厚させる。折り返し部分にも沈線を巡らせる。胎土はしっとりと層状をなし、外面は備前焼風に焼成されるが、内面は須恵質の焼締陶器長胴壺になる。大阪府堺環濠都市遺跡屋敷地の埠列建物（茶室遺構）では、切溜花生として用いられ、近隣では三田城跡で16世紀後葉～17世紀初頭頃のベトナム製陶器として報告されているものに類似する。

39は小判形の平面形をもつ器高の低い盤で、短く立ち上がって内傾する口縁部へ続く。口縁部の四隅を内側に窪ませて隅入角皿風とする。未調整の底面は上げ底気味となり、周縁を面取り状に粗く削って立ち上がりとする。短辺の側面に円形浮文を水平方向に貼り付ける。赤褐色の土部様の釉薬を掛けた後、白泥様の釉薬を掛けているため、底面の同心円状の溝に白く溜まる。近世以降の丹波焼の可能性もあるが、類例を見ないためベトナム製陶器とする。茶の湯における建水として用いられたものか。

40～42は丹波焼描鉢である。直線的に開く体部の内面に笠一本引きの描目を引く。40・41の口縁部は丸く作り、外面を1条浅く窪ませ、内面にも小段や窪みを作る。42の口縁部は横方向にヘラを当てて尖らせ気味に収める。端部に煤が付着している。16世紀後半～17世紀中頃にかけてのものである。

43はSR400西肩の攢乱から出土している。陶器皿で、底部を欠く。内面に段を有して開き、口縁部はさらに水平に開く。端部は丸く取め、上面が窪む溝縁口縁となる。灰白色釉を掛けるが、外面下半は露胎で、回転ケズリを施す。唐津焼溝縁皿である。

44は陶器皿で、低い高台から開き、やや内湾した後小さく屈曲して直線的に開く口縁部へと続く。白灰色の釉薬を掛け、内外外周に鉄釉で文様を描く。外面下半は露胎で、底面も含めて回転ヘラケズリが見られる。高台裏は使用のためかよく摩滅している。絵唐津折縁皿である。

45は低い高台から外反気味に開く皿で、全体に灰白色の釉薬が掛かる。口縁部は16弁の輪花に作る。軟質系のさっくりした胎土であることから美濃焼かと思われる。

46は低い高台から内湾して開く皿で、灰白色の釉薬を掛けしており、高台裏中央のみ露胎でケズりがみられる。さっくりした胎土で、釉薬の貫入が目立つ。志野焼（御深井手）と思われる。

磁器

47・48は白磁碗で、玉縁の口縁部を有する。

49は最下層出土の青磁碗底部で、直立した高台を持ち、器壁は厚い。高台内側と底部内面は露胎である。外面にはわずかに蓮弁文の一部が見られる。

50は青花碗である。細く直立した高台を有し、高台疊付のみ釉薬を削り取って露胎とする。外面には草花文、内面には渦巻状に円弧を4重ね、周囲を草花文で囲む文様を描く。景德鎮民窯か。淡河・萩原城遺跡から類例が出土している。

SR400からは他に、301～309の土師器、瓦質土器、須恵器、青磁、白磁、陶器が出土している。

② SR415（図版38、写真図版60・61）

SR415は下段北地区の北端を東西に横切る流路で、この流路以北では遺構・遺物が激減することから、この屋敷剝の北限となる遺構である。山から染み出す湧水に近世になって掘削されたと思われる。

土師器

51・52は手づくねで作られた皿である。口径6.7cmの小型の51は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として用いられている。復元口径8.9cmの52は口縁部外面にユビオサエを残しており、内面はナデによって仕上げる。

53は炮烙である。広く薄い底部から直角に立ち上がり、口縁部へ続く。全面ナデ・ヨコナデによって仕上げており、外面には煤が付着する。18世紀後半のものか。

陶器

54・55は丹波焼擂鉢である。54は底部を欠くが、直線的に広がる体部に四角く収めた口縁部が続く。内面の口縁部直下に段を巡らせ、9本単位の櫛書き擂目を引き、下半は摩滅している。外面は露胎のままであるが、内面には赤土部を施す。17世紀前半に属する。55は底部外縁に高台を貼り付け、直線的に広がる体部から屈曲して上方に延びる口縁部に続き、口縁部外面は2条の凹線状の窪みを巡らせ、端部上面も窪ませる。内面には6本単位の櫛書き擂目を引き、底面には同心円状に入れる。底面付近はよく磨り減っている。外面には赤土部を塗布している。底部外面の一部には砂が付着しており、高台裏は平滑に磨り減っている。18世紀後半頃のものか。

56は唐津焼塊で、低い削り出し高台から内湾して口縁部に至る。口縁端部は丸く收める。黄色系の釉薬を掛けしており、下半部は露胎となる。17世紀代。

57は丹波焼甕である。SR415の北岸斜面から傾いた状態で出土したため、ここに掲載したが、単独の埋甕（SK940）と捉える方が良い。肩の張った器高の低い器形で、体部上半と口縁端部に凹線状の条線を巡らせ、肩の2ヶ所には5花の不遊環浮文を貼り付ける。外面には土部を掛けている。体部内面に墨書きで円を描いている。17世紀中葉～後葉。

写真のみ掲載した310・311の陶器も出土している。

③ SD114（図版38、写真図版61）

SD114は南地区で検出された東西方向の溝である。58は須恵器塊で、内湾して立ち上がる体部から丸くヨコナデで收める口縁部へと続く。SR400出土の須恵器とは同時期のものである。

④ SD94（図版38、写真図版61）

SD94は南地区でSR400埋没後に西肩に重複するように設けられた南北方向の溝で、一部に石組を作

う。59は施釉陶器皿で、瀬戸美濃焼である。低い高台から外反して広がる口縁部へと続く。褐色の天目釉を浸け掛けし、外面下半は露胎である。内面には目跡が残る。

井戸・石組土坑・土坑

⑤ SE416（国版39、写真図版62）

SE416は先述のSR415の西端に設けられた方形の石組溜井である。土師器・陶器・磁器が出土した。

土師器

土師器皿が出土している。60は口径7.1cm、器高1.6cmを復元する手づくねの小皿である。61は口径10.2cm、器高1.9cmを復元する手づくねの皿で、底部を含めて3段にわたってユビオサエとナデを施す。口縁端部には煤が付着する。

陶器

丹波焼鉢が出土している。62はユビオサエを残して直線的に外に広がる体部から、外に面を持ち断面三角形状に広げる口縁部へと続く。内面には7本単位の櫛描きの瘤目が施される。外面下半は二次焼成を受けたように黒くなる。

63・64は施釉陶器塊である。削り出し高台から丸く内湾する体部へと続く。63は黒色の天目釉を掛けする。64は白透明の釉薬を浸け掛けしている。64の高台中央には楕円形の印が押される。京焼系か。

磁器

65は染付磁器皿である。低い高台から丸く広がる体部を持つ。全面に施釉し、高台疊付は露胎で、砂が付着する。体部内面には2条の園線内に線描きの文様を連ね、見込みには草花文を施す。

66は染付磁器碗である。直立する高台から内湾して立ち上がる体部へと続く。全面に釉を掛け、高台疊付は露胎で、砂が付着し、内面見込みは蛇目釉剥ぎとし、砂が付着する。外面の高台横に2条、底部に1条の園線を巡らせ、体部には雪輪草花文を描く。波佐見窯のくらわんか手である。

写真を掲載した312・313の染付磁器も出土している。

⑥ SK465（国版39、写真図版62）

SK465は北地区で検出された小型の方形石組土坑で、施釉陶器が出土した。

67は絵唐津皿である。低い高台から直線的に開き、一旦わずかに屈曲してさらに広がる口縁部へと続く。外面下半部をケズリで成形し、内面から外面上半部に緑灰色の釉薬を施釉する。口縁部内面に斜め放射状に2本の線を5組描き、見込みにも2本の平行線を偏った位置に描く。内面には焼成時の灰被りが見られる。17世紀前半に属する完形の折縁皿である。

68は低く太い高台を削り出し、内湾した体部へと続く天目塊である。内外に浅黄色の釉薬を浸け掛けし、底部外面は露胎である。17世紀前半の唐津焼である。

314の陶器盤も出土している。16世紀後半頃の備前焼或いは丹波焼と思われる。

⑦ SK608（国版39、写真図版63）

北地区で検出された石組を有する大型の方形土坑で、多くの土器や木製品が出土しているが、円形の土坑などが切り合っているため、遺物の一括性に乏しい。69~74の土師器・陶器が出土した。

土師器

69はやや硬質に焼成された場で、なで肩の体部から外反して直立する口縁部に続き、端部は丸く肥厚させる。肩部外面には横向方向に平行するタタキ目が残り、内面にも当て具状の円形の痕跡が残る。15世紀中頃に属するものである。

70は炮烙である。内湾する体部外面には斜め方向のタタキ目が残り、下半はハラケズリを施して薄く作る。内面にはユビオサエが残る。煤が付着する。17世紀中葉～後半頃のものであろう。

71は口径33.5cmを復元する大型の羽釜である。直線的に立ち上がる口縁部は端部を内側に摘み出している。外面には四線状の段を巡らせ、斜め上に湾曲する鶴を貼り付けている。内面には非常に細かいハケメ状の布ナデで仕上げている。内面に煤が付着する。15世紀代のものか。

陶器

72は丹波焼鉢で、小さな片口を有する。平底からユビオサエを残して直線的に広がる体部に続き、口縁部は内面に段を有する。5本单位の粗い櫛による掘目を施し、見込みには4回櫛を重ねる。内面は使用により著しく磨り減っており、底部外面も平滑になっている。土部を掛けている。17世紀前半～後葉のもの。

73は口径49.8cmを復元する大型の丹波焼盤で、板ナデを施した底部から大きく開いた体部へと続き、如意状に屈曲して口縁部は丸く収める。口縁部上面に沈線状の僅みを巡らせる。土部を掛けている。

74は唐津焼皿である。削り出した低い高台から大きく聞く体部へと続き、少し下方に曲げて端部を作る。灰軸を掛けるが、底部外面は露胎で、高台疊付に砂が付着する。内面見込みにも重ね焼きの痕跡が残る。17世紀前半の溝縁皿。

⑧ SK510（図版39、写真図版63）

SK510は北地区SK608の北西に付随する土坑で、両土坑からは同じ作りの漆器大皿が出土した。

75は瓦器塊底部で、低い高台が付く。内面には暗文が見られ、外面高台内に墨書きが書かれる。

⑨ SK404（図版39、写真図版63）

北地区的SR400埋没後に掘られた不整形の土坑で、土師器皿76が出土した。76は手づくねの小皿でやや上げ底の底部から斜めに広がる体部をもつ。写真を掲載した316の土師器も出土している。

⑩ SK578（図版39、写真図版64）

同じく北地区的SR400埋没後に掘削された土坑から瓦器塊77が出土している。77は低い扁平な高台を持ち、内湾気味に立ち上がる体部へと続く。

⑪ SK621（図版39、写真図版63・64）

北地区南東部で検出された格円形の比較的大きな土坑で、土師器皿・炮烙が出土した。78・79は手づくねの小皿で、ナデによって仕上げる。

80・81は炮烙で、皿状に湾曲する底部からやや内湾気味に立ち上がる体部に続く。80では口縁部直下に強くナデを施し、端部は外側に少し肥厚させて丸く収めている。81では内側に肥厚させる。底部は不定方向にケズリのように板ナデを施している。

この他に318・319の軒瓦が出土している。

⑫ SK503（図版39、写真図版65）

北地区中央で検出された罐を投入した大型の円形土坑で、施釉陶器皿82が出土した。削り出した低く四角い高台から大きく開き、一旦屈曲して更に広がる体部へと続く。灰軸を掛け、底部外面は露胎である。内面見込みには砂目が残る。高台底面にも3ヶ所砂目積みの跡が残る。17世紀前半の唐津焼折縁皿である。

⑬ SK908（図版40、写真図版65）

中央地区の上段裾で検出された不整形の浅い土坑で、SR400の一部の可能性がある。瓦質土器の羽釜83が出土した。83は小型の羽釜口縁部で、内湾気味に直立する口縁部の外面に口縁端部直下から断面三

角形の鈴を貼り付け、ナデによって仕上げる。体部外面は横方向のヘラケズリ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。鈴の下部に煤が付着する。

⑭ SK575 (図版40、写真図版65)

北地区東端で検出された長方形の土坑で、陶器擂鉢84が出土した。84は丹波焼擂鉢で片口を持ち、ヘラ描きの描目を引いている。平底から内済して聞く体部、断面三角形の口縁部へ続く。写真を掲載した321・322の備前焼甕破片も出土している。備前焼の出土は今回の調査では稀である。

⑮ SK449 (図版40、写真図版65)

SK449は北地区中央で検出された埋桶である。施釉陶器85が出土した。85は丹波焼ひさご形壺で、外面に褐色の釉薬を掛け、黒色の釉薬で文様を描いている。17世紀後半～18世紀前半のものとされる。

⑯ SE189 (図版40、写真図版65)

SE189は南地区東端で検出された円形の土坑で、86の磁器が出土した。86は染付磁器碗で、高台から丸く聞いた後、わずかに聞いて直線的に立ち上がる体部をもつ。高台疊付は露胎で、砂が付着する。外面には圓線上面に山水図が描かれ、口縁部直下にも圓線、高台には2条の圓線を巡らせる。高台内には「太明」を書く。

柱穴

⑰ SP720 (図版40、写真図版65)

中央地区SR400東肩で検出された小型の柱穴で、青磁碗87が出土した。87は青磁碗底部で、削り出された高台から丸く広がる。厚い底部の外面は露胎で、見込みには草花文が彫られる。

埋甕

⑱ SK739 (図版40、写真図版65)

中央地区北端部のSR400分岐部に設置された埋甕で、88の陶器が用いられていた。内部から89の磁器が出土した。88は丹波焼で、口縁部を欠くが、現存高51.1cm、最大径57.6cmの大甕である。ヘラ切り後ナデで仕上げた底部から指頭圧痕を残して粘土紐を積み上げており、継ぎ目には粘土を追加して成形している。内外を回転ナデで仕上げた後、赤土部を塗っており、内面にはハケを用いて塗った痕跡を残す。

89は磁器製甕（びんだらい）である。小判形の底部のみ残存しており、内外露胎であるが、体部外面には釉薬が見られる。内面の周縁を粗く引摺いて、体部との接合に備えている。底部外面には細かい布目が残る。一端には側面から底面に抜ける穿孔が見られる。墨書きが書かれるが、判読できない。

⑲ SK435 (図版41、写真図版66)

北地区中央で検出された埋甕である。90は比較的薄い底部からユビオサエを残して立ち上がり、肩部に最大径をもつ。屈曲した後、内済して上方に立つ口縁部は外面に凹線状の段を連ね、四角く収める。18世紀後半頃の大谷焼と思われる。内面には一部タタキ様の痕跡を残してナデで仕上げ、外面は回転ナデで仕上げる。砂粒の多い胎土で硬質に焼成される。器高62.8cm、口径48.2cmを復元する。

埋桶

⑳ SK736 (図版41、写真図版66)

北地区と中央地区にかけて、SR400埋没後に設けられた埋桶内部から陶器大甕91や土師器皿92が出土

した。91は丹波焼大壺で、底部を欠く。直線的に広がる体部から、内湾して肩部を作り、口縁部を水平に拡張する。肩部には連続して四線状の条線を巡らせ、不遊環状の摘みを貼り付ける。口縁上面にも四線状の窪みを巡らせる。内外にはハケを用いて赤土部を塗刷している。92は手づくねの皿で、口径10.8cm、器高1.9cmを復元する。ユビオサエを残して底部と体部の2段を作り、口縁端部はナデによって仕上げる。口縁端部外面の一部に煤コゲがのこり、口縁端部を除く内面全体が薄く黒くなっている。

遺物包含層（図版42、写真図版66・67）

93～101は下段遺物包含層出土の土器である。

93は北地区遺構検出中に出土した須恵器壺である。糸切り底部から内湾気味に広がる体部は塊状を呈している。

94～98は施釉陶器である。94は唐津焼丸形皿で、碁笥底を呈する削り出し高台は露胎で、内湾して広がる体部には灰釉を掛けている。内面には焼成時に土器片が付着した痕跡が放射状に見られる。16世紀代か。

95は高台部を失うが、口縁部直下が括れる天目茶碗の形態を有する。器表面の釉薬が未焼成の状態で、未製品或いは生焼けのものかもしれない。

96は唐津焼溝縁皿である。削り出した三日月高台は露胎で、体部は大きく広がり、外反する口縁部は上方に摘み上げている。内面見込みには段が付き、砂目跡が残る。白色透明な釉薬を掛けた。17世紀前半頃か。

97はひさご形壺で、外面に褐色の釉を掛けている。内面は露胎のままである。18世紀後半の丹波焼か。

98は小判形の器形をもつ蟹盤で、黄褐色の釉を施し、底部側面のみ露胎である。

99は丹波焼盤或いは鉢で、貼り付け高台から内湾して広がる体部、丸く内側に肥厚させる口縁部へと続く。高台内側を除いた内外面に赤土部を塗刷し、自然釉の灰被りが見られる。

100は唐津焼皿である。削り出した低い碁笥底から大きく開き、一旦屈曲して更に広がる口縁部へと続く。灰釉を掛け、底部外面は露胎である。内面見込みには胎土目が残る。16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。

101は北地区的擾乱内やSK608・503、南地区SD94から破片が出土した壺である。倒卵形の体部は外面にユビオサエを残しており、肩部の外面には縱方向の平行タタキ、同内面には円形の當て具痕が残るが、全面をヨコナデで仕上げている。屈曲して広がる口縁部は丸く収める。全体に赤土部を施しており、外面上部には灰被りが観察できる。復元口径58.6cm、残存高75.8cmの大壺で、内面下半部に白褐色の付着物が見られる。明治期の祇部焼との教示を得た。調査区内の整地の時期を示すものであろう。

写真のみ掲載した375は北地区的上段壺で採集された窓壁或いは炉壁片である。スサ状の凹みや砂粒を含んでいる。10.3×10.5×0.8cmの大きさで、一面のみが残存しており、一側面に残存面に直行する溝状の凹みが走る。この溝状を呈する痕跡が爐の羽口の挿入孔であるなら、上段北地区的SK224から出土した羽口小片や中央地区的P339から出土したスラッグの小破片等とともに鍛冶遺構が存在していた可能性が高い。

2. 上段出土土器

(1) 北地区

本地区では、弥生時代末～古墳時代初頭、飛鳥～奈良時代、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代の土器・陶器・磁器が出土している。以下、それらを遺構別に述べる。

① SR218 (図版43、写真図版68)

壺・甕・高坏・鉢・底部を図示した。

壺

102～104は広口または直口の壺である。102は接合の結果、口径13.6cm、器高28.9cmに復元できた。体部最大径はほぼ中央にあり、22.7cmを測る。底部は少し突出した平底で径4.3cmである。体部外面には右上がりのタタキ目が残り、下半にはヘラミガキを施している。底面には木葉痕が残る。

103は少し外反する口縁部で、端部は丸く収める。径12.2cm。体部上半部分の破片で、残存最大径は20.0cmである。器表が摩滅しているため、調整は不明である。

104は体部の破片であるが、丸みが強く扁平に近い形状から壺と判断した。体部最大径は23.4cmで、体部には水平方向のタタキ目が下から上に施されている。底部は尖底気味の丸底で、ヘラケズリを施す。体部内面は板ナデ調整で、103とは形態的に似るが、胎土色調が異なり、同一個体ではない。

105は短い口縁部の壺破片で、口径11.8cmである。端部は丸く収める。

106はいわゆるチョコレート色を呈し、胎土に角閃石を多く含む複合口縁の壺で、口径は26.4cmを測る。口縁端部には面をもち、径1cm程度の竹管円形浮文をやや疎らに配しており、その間隔は1.8cmである。屈曲部外面の稜線部分にはやや斜め方向の刻目を密に施している。頭部は径15.4cmで直立しており、外面はタテハケ調整である。残存高は9.9cmを測る。讚岐または生駒西麓の胎土である。

甕

107・108はともに甕で、体部から「く」字形に屈曲して少し外反する口縁部をもつ。107は復元口径12.6cmで、丸みが強い体部には右上がりのタタキ目を残す。108は復元口径13.5cmで、107と同様端部は丸く収める。

高坏

109は高坏と思われる口縁部片である。有縫のもので、端部は丸く収め、復元口径22.5cmを測る。複合口縁の壺口縁部の可能性も残す。

110は塊形坏部の高坏または台付鉢である。坏部は復元口径10.7cm、深さ4.6cmで、端部はやや尖り気味に丸く収め、内面はミガキに近い調整である。脚部は透孔が認められず、全体的に外反気味ではなく、やや歪である。脚端径は15.6cmで、丸く収めている。坏部との境付近にはタテハケを残している。

鉢

111はやや大型の鉢で、復元口径は27.5cmである。体部から外反して口縁部となるが、屈曲度は小さい。内外面は摩滅のため調整不明である。

底部

112～116は壺・甕あるいは鉢の底部である。112は外面のヘラミガキと体部へ開く角度から壺と思われる。ほとんど突出しない平底で、復元底径5.1cmである。内面はヘラケズリに近い。113は底径5.5cmで、底面中央がやや窪んでいる。調整は不明であるが、形態的に古い時期の可能性がある。114は復元底径4.6cmで外面には右上がりのタタキ目を残している。甕と思われる。115は復元底径3.2cmの小さな平

底から横外上方に開く体部であることから、壺と思われる。116の復元底径は5.2cmで、内面には板ナデが認められる。小片である。

SR218出土土器は、113を除き、体部や底部および調整の特徴から弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置付けられる。113は弥生時代中期の可能性が高い。

② SD363 (図版43、写真図版69)

図示したのは117の須恵器高坏1点である。

高坏

北部で出土した坏部片で、復元口径は10.2cm、残存高は3.6cmである。短脚のものと思われ、飛鳥時代と判断している。この溝からは飛鳥～奈良時代の坏B片も出土しているが、ほかに丹波焼鉢や近世磁器の破片も出土しており、溝の時期を飛鳥～奈良時代と断定するには無理があろう。

③ SK220 (図版43、写真図版69)

図示した118の須恵器鉢以外に塊の破片多数と近世染付が出土している。

鉢

東播系須恵器の鉢である。口縁端部は尖り気味で垂直に近い面を残すが、下方に少し拡張している。

復元口径30.0cm、残存高6.2cmで、使用痕は明瞭ではない。端部に軸が残る。13世紀代と思われる。

④ SK323 (図版43、写真図版69)

図示した119の須恵器塊のみ出土している。

塊

復元口径16.1cm、器高5.5cmを測る。口縁端部は少し膨らみ、丸く収める。回転糸切りの底部は突出しない。13世紀のものと思われる。

⑤ SP313 (図版43、写真図版69)

図示した120の瓦器塊の他には、柱痕・掘方から土師器の小片・細片が出土したのみである。

瓦器塊

底部の破片である。高台の断面は台形を呈するが、体部外面のヘラミガキは不明である。内面には横あるいはジグザグのような暗文を施している。底径は4.8cmで、12～13世紀のものと思われる。

⑥ SP335 (掘立柱建物跡) (図版43、写真図版69)

121の須恵器鉢以外には柱穴上面から須恵器塊小片・柱痕からは土師器細片が出土している。

鉢

東播系の鉢である。口縁部の形態がやや異なるのは、歪のためである。復元口径35.8cm、残存高11.5cmで、内面下半には使用による摩滅が認められる。口縁端部に軸が残る。13～14世紀代と思われる。

図示できなかった須恵器塊小片も同時期のものであろう。

⑦ SK224 (図版44・45、写真図版69～73)

本遺構からは須恵器塊をはじめ、須恵器鉢、土師器・須恵器の皿、壺、瓦器塊、青白磁など非常に多くの土器が出土した。遺構の性格は不明であるが、生活中にかかわる土器であることから、掘立柱建物に関連して廃棄されたものと判断できよう。

塊

122～148の27点を図示した。口径は16.6cm～15.1cmで128が最も大きく、133が最も小さいが、16.0cm前後が最も多い。器高は5.05cm～4.15cmで、125・128がもっと高く、146が最も低く、4.7cm前後が最も多くなっている。径高指数は31.4～25.3で140が最も大きく146が最小である。いずれも回転糸切りの底部

から内湾しながら外上方にのびて丸い端部の口縁部となるもので、ロクロ目を残すものも多い。

122～127は底部が若干突出するもので、径高指数も比較的大きくなっている。深みのある体部の窓がある。径高指数が31程度のものがやや多い。128～139はやや深みのあるもので、径高指数が29～30程度のものもあるが、底部は突出していない。体部と底部の窓は丸みのある128～136と後をもつ137～139があるが、径高指数等では分けられない。140～146は体部が浅い窓があるもので、径高指数が27～28代のものが多く、これらのうち最も大きいのは140で31.4、最も小さい146は25.3である。底部の形態もさまざまである。

これらの塊は形態的には12世紀末頃～13世紀初頭頃のものとみられ、20～30年の時期幅をもっているようである。この時期に塊を焼いた窓のうち、本遺跡に最も近いのは小名田窓跡で、本遺跡から直線距離で約1.4kmと至近距離にある。また、小名田窓跡から出土した塊の形態と本遺跡出土のものとは細部の形態においても類似しており、小名田窓跡から供給された可能性がある。

鉢

149・150のうち、150の口縁端部は上方に引きのばすのみで肥厚させていないことから、神出古窓跡群の鉢B 1あるいはB 3にあたり、149は口縁端部を拡張させるものの、その度合いは少なく、神出古窓跡群の鉢B 2類にあたる。150は森氏編年の第Ⅱ期第1段階に相当し、12世紀中葉～後半の時期が与えられている。149は第Ⅱ期第2段階にあたり、12世紀末葉～13世紀初頭に位置付けられており、塊との年代的齟齬はほとんどない。なお、小名田窓跡では同形態の鉢は認められない。

149は復元口径27.6cm、器高10.7cmで体部内面は左斜め上方向のナデで仕上げられ、内面下半はよく使用され、表面が摩滅気味になっている。150は復元口径32.6cmを測る。149・150ともに口縁端面には重ね焼きの痕跡が残っている。

小皿

151～167は土師器、168～170は須恵器である。土師器小皿の口径は最も小さい157の7.45cmから167の8.7cmまであるが、151～153・157・158のように7.45cm～7.8cmのものと、154～156・159～167のようないくつかの二種があるようである。器高は151の1.9cmが最も高く、166の1.2cmが最も低い。形態的には151～156のように口縁部が底部から屈折ぎみに外上方に立ち上がるものと、157～167のようにあまり顯著でないものの二種があるようにみえる。

すべて手づくねで、152・164では底部外面に掌の痕跡が残り、152・158・159のように平面形が橢円形を呈するものがある。165の胎土は角閃石を多く含んで灰褐色を呈し、他のものとは異なっている。

須恵器小皿はすべてロクロによる成形で、底部は回転糸切りである。口径は7.65cm～8.35cmとばらつきがあるが、器高は1.35cm～1.45cmとほぼ揃っている。168は底部がやや突出するが、復元口径は8.0cmで169・170の中間の値であり、形態と口径とは関係なさそうである。169の底部外端は丸みをもち、170では稜をもっている。須恵器小皿は塊の底部と同じ形態で、小名田窓跡でも出土していることから、同時期と判断できよう。なお、170は焼成が悪く、瓦質となっている。

堀

171～174の4点は土師器の堀である。播磨・丹波・北摂地域でみられるもので、内面に同心円文の当て具を当てながら体部外面を平行タキで成形するものである。171は口径25.6cm、残存高14.9cmである。口縁端部を屈曲させながら少し外側に拡張しており、体部上半も丸みをもつことから、塊などよりも時期的にやや新しい可能性がある。13世紀後半～14世紀であろうか。復元口径26.8cmの173も171に似た形態であり、端部の拡張程度と体部の丸みに若干の差があるものの、171とほぼ同時期と思われる。

172は復元口径25.2cmの口縁端部をほとんど拡張せず、端面が凹面となっており、体部上半は直線的に下外方にのびていることから、時期的にやや古く、13世紀前半代の可能性が高い。174の口縁部も壠としたが、古墳時代後期前半の壠の可能性も残している。復元口径は20.6cmで、口縁端面は内傾する面となっている。

瓦器

175～177は瓦器壠である。175は図上にはば完形品で、復元口径13.9cm、器高約5.3cmを測り、高台径は推定6.0cmとやや大きい。体部は深みがあり、内面に暗文を横方向に密に施し、見込み部分は斜格子状に施しているようである。外面には認められないことから、13世紀以降に編年されるものである。口縁部外面には強めのヨコナデを施し、端部は丸く收め、内面には1条の沈線を引いている。外面は型づくりのため、ユビオサエ痕が密である。176・177はともに瓦器壠の底部で、輪高台径は4.75cm前後、その横断面は台形に近い。176の内部には平行、177では斜格子状に暗文を施している。ともに密ではないことから、13世紀以降の製作時期が与えられよう。

青白磁・白磁

178は青白磁小壺の小片、179は白磁碗Ⅲ類またはⅣ類の底部小片である。178は復元底径3.95cmで、体部下半外面に鎧蓮弁文が3段以上彫刻されている。底部付近外面は露胎となっている。179の外面は露胎で内面はいわゆる釉トビとなっており、須恵器壠等と同時期と思われる。

土錘

180は土師質の管状土錘で、長さ3.75cm、中央部の最大径は1.02cm、中央の孔径は0.25cmで、重量は3.1gである。本遺構から出土した土錘はこの1点のみである。

⑧ SD273 (図版45、写真図版74)

本溝からは図示した丹波焼擂鉢・陶器壠・壠のほか、硬質土師器小片が出土している。特に丹波焼擂鉢の破片数が多い。

181は丹波焼擂鉢である。ヘラによる一本引きの擂目を施し、口縁端部は肥厚させずに内側に折り曲げたように上方にのばしたもので、復元口径は39.3cmを測る。15～16世紀に編年されるものであろう。

182は復元底径13.2cmの擂鉢底部で、ヘラによる擂目をやや密に施しており、内面は使用によりかなり平滑になっている。181と同時期と思われる。183は釉を内外面に施した陶器壠で、口縁部を欠失する。底部は削り出し高台で露胎となっている。復元底径は4.4cm、残存高は4.9cmで、残存部上端での径は10.1cmである。近世中頃以降のものと思われる。184は土師器の壠で、残存高は7.15cm、復元口径は20.7cmを測る。鈍部部分は退化して炮烙に近い形態となっている。外面はかなり摩滅しているが、体部には格子タタキを施しているようである。内面はヨコナデ調整で、16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。

⑨ SE362 (図版45、写真図版74)

本遺構からは図示した2点が出土している。

185は須恵器広口壺肩部の破片で、最大径は16.0cmを測る。奈良時代頃のものと思われるが、詳細不明である。重複する溝SD363から飛鳥～奈良時代の遺物が出土していることから、この溝に含まれていた土器が混入したものと思われる。

186は丹波焼の鉢で、火入れと呼ばれているものである。完形品で、口径9.8cm、器高5.5cm、底径8.0cmである。口縁部上端面には小さく丸い傷が多数認められる。18世紀前半ごろに編年できると思われる。

⑩ SE368 (図版45、写真図版74)

187は丹波焼擂鉢の口縁部小片である。擂目はヘラによる一本引きで、口縁端部の形態が181に近いこ

とからほぼ同時期と考えてよいであろう。本遺構からは図示したもの以外に東播系須恵器壺や丹波焼甕の破片や近世末～近代の磁器碗の破片が出土している。

⑪ その他の遺構

図示していないが、その他の遺構から出土している土器について簡単に述べる。

掘立柱建物跡を構成する柱穴のうち、SP285掘方・SP315柱痕・SP324の掘方・SP326の柱痕・SP327の上面から土師器細片が出土し、SP285柱痕・SP303柱痕・SP316柱痕・SP327柱痕・SP328柱痕・SP322掘方・SP333の上面と掘方・SP334柱痕から須恵器小片が出土しており、塊については12世紀末～13世紀前半のものと思われる。また、SP284の柱痕と掘方・SP303上面・SP315掘方・SP316掘方・SP321の柱痕と掘方・SP336の柱痕から土師器・須恵器の細片が出土しており須恵器については掘立柱建物跡と同時期であろう。なお、SP284の上面からは瓦器塊小片が出土している。

掘立柱建物跡に関連する可能性がある柱穴では、SP300柱痕・SP306柱痕・SP346掘方・SP349柱痕からは須恵器壺や土師器の細片が出土している。また、掘立柱建物跡内部に存在する柱穴・土坑のうち、SP282柱痕・SP283の上面と柱痕・SP302柱痕・SP317柱痕・SP319柱痕からは須恵器壺や土師器の細片が出土し、SK329の埋土からは土師器小片と須恵器塊片が多数出土しており、掘立柱建物跡と同時期である。

溝のうち、SD310からは飛鳥～奈良時代と思われる須恵器壺と土師器のほか、中世初頭の須恵器塊片が出土し、SD337とSD345からも中世初頭の須恵器壺や瓦器壺・土師器の小片が出土している。SD250からは中世後半の土壙の小片、SD309から陶器片、SD274から土師器細片が出土し、ともに近世のものである。

土坑では、SK237から弥生～古墳時代の可能性がある土師器、SK280・352・371からは中世初頭の須恵器塊片、SK353からは丹波焼甕・須恵器塊小片、SE219では近世の丹波焼擂鉢、SK342からは須恵器塊片多数と近世染付が出土している。

その他柱穴のうち、中世初頭の須恵器細片等が出土したのは、SP232柱痕・SP233柱痕・SP279柱痕・SP292上面・SP339柱痕・SP343掘方・SP354柱痕・SP359柱痕・SP370埋土があり、SP269の上面からは近世土師器の細片が出土した。なお、時期不明の土師器や須恵器の細片が出土した柱穴には、SP235・247・248・287・289・372があり、いずれも柱痕からの出土である。

⑫ 遺物包含層（図版46、写真図版73・74）

188～197の10点を図示した。土師器羽釜188は小片で、復元口径27.3cmを測る。鈞上部から口縁部にかけて段を有する。15世紀代のものであろう。189・190は播磨地域で特徴的にみられる土師器壺（鈞釜）である。口縁部下に鈞状の段を有し、体部は平行タタキで形成している。189は復元口径20.6cmで、硬質土師器に属する。190は小片のため口径は不明である。ともに14世紀後半～15世紀代のものであろう。

191・192は須恵器壺で、192は回転糸切りの高台部分が2mm程度突出する。191の底面には太さ6mmの縄のような圧痕が1条認められる。南西部の大規模な擾乱穴から出土したものである。192は復元口径15.0cm、器高4.2cm、径高指数は28で底部が突出して古いタイプのように見えるが、体部形状は塊形を呈さないことから、12世紀末～13世紀前葉に時期が与えられよう。小名田窯跡出土資料に同様のものが認められる。191も同時期と思われる。193の須恵器小皿は口径7.5cm、器高1.25cmで、SK224出土須恵器小皿に比べて小ぶりであるが、器壁がやや厚い観がある。回転糸切りの平高台底部から口縁部への境は丸みをもっている。SK224出土須恵器小皿と同時期と思われる。

194は明青花の磁器碗片で、復元口径は12.6cmを測る。粗雑なつくりで呉須の発色は不良、全体に貫入が認められる。文様は、外面口縁直下の幅広圓線に連続文様を加えているが、下部の花文様とつながる可能性もある。内面口縁部直下にも圓線を描き、底部付近には數本の直線文が認められる。漳州窯産の可能性がある。195は細蓮弁文の青磁碗で、器壁が厚く、内面に目跡が認められる。194・195の輸入磁器の時期は16世紀代であろう。196の碗と思われる青磁は径4.7cmの高台が低く、高台内は露胎で指先のような圧痕が6ヶ所認められる。龍泉窯系のもので、14～15世紀と思われる。

197は丹波焼鉢小片で、口縁端部は上方に引きのばされ、内面の掘口はヘラ描きで、15～16世紀代であろう。内面は使用により摩滅している。

（2）中央地区

本地区では、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代の土器・陶器・磁器・瓦が出土し、縄文時代の可能性がある土器も出土している。以下、それらを遺構別に述べる。

① SK834（図版46、写真図版75）

壺・坏・鉢を図示した。図示していないが、ほかに坏を含む土師器片多数と須恵器坏口縁部片、陶器片が出土している。

壺

198は長胴の土師器壺である。復元口径28.2cmで口縁端部は器表が剥離している。体部外面はタテハケ、内面は綫方向のヘラケズリ調整である。体部最大径は上位にあり、23.2cmを測る。外面には部分的に煤が遺存している。口縁部の形態から奈良時代、平城宮Ⅲ頃のものと思われる。

坏

199は土師器坏Aで、復元口径15.7cm、底部の大半を欠失するが、残存器高は2.9cmである。口縁部は屈曲して外上方に開き、口縁端部を内側に折り返して玉縁状に仕上げている。口縁部内面と底部内面には暗文が辛うじて遺存している。奈良時代、平城宮Ⅲ頃のものであろう。

② SX873（図版46、写真図版75）

溝状の遺構で、北地区SD363とつながっていた可能性が高い。200の須恵器坏Bが出土している。復元高台径は11.2cmで、外側に踏ん張るように貼り付けている。底部外面にはヘラ切り痕が残る。内外面には自然釉の灰被りがあり、奈良時代、平城宮Ⅲ頃の可能性がある。

なお、図示していないが、ほかに奈良時代の須恵器坏や土師器小片が出土している。

③ その他の遺構

図示していないが、その他の遺構から出土している土器について簡単に述べる。

SD818からは古墳時代の可能性がある土師器小片、SK862・SD877やSP824の柱痕・掘方からは奈良時代の可能性がある土師器小片が出土している。中世初頭の須恵器や土師器の小片は、SK819やSP828上面・SP830の柱痕・SP832の柱痕と掘方・SP857の柱痕・SP867の掘方・SP871から出土している。また、近世以降の土器・陶器・磁器の小片は、SD307・746からやや多い量が出土している。

なお、SP904の柱痕からは縄文土器と思われる小片が出土している。

④ 上段中央地区北半部遺物包含層（図版46、写真図版73・75・76）

201～206の須恵器・磁器・陶器・瓦の6点を図示した。

須恵器坏蓋201は中央に宝珠つまみが付く可能性が高い。復元口径14.8cmで断面はセビア色を呈する。飛鳥～奈良時代の飛鳥V期・平城宮I期と思われる。

202の青磁脚付鉢は復元口径21.7cm、残存高7.4cmで、口縁端部は外反して内側に折り曲げられていることから、蓋付きの可能性がある。施釉された脚は3方向に付いていたとみられ、2方向が遺存している。底面は蛇目で四形の低い高台となって、疊付部分は釉がかき取られ、褐色を呈し、砂が若干付着している。内面の彫刻文様は花弁のようであるが、正確なところは不明である。18世紀頃の肥前系であろう。

東播系須恵器鉢203の復元口径は27.7cmで、口縁端部を肥厚させている。12世紀末～13世紀初頭と思われる。

204の陶器擂鉢は口縁端部を肥厚させ、上方に少し引きのばしたものの、端面には擬凹線状のものが認められる。内面の擂目は5本一単位の櫛引きのもので、底部にも施しているが、使用による摩滅ではなく消えかかっている。復元口径35.4cm、器高13.4cmで内外面には褐色の土部が塗られている。丹波焼の悪い焼成のものとみられ、17世紀代の可能性がある。

205・206は焼し軒平瓦で、文様部分の区画はやや狭く、どちらも同じ唐草文様と思われるが、205は焼成が軟弱で文様の残りが悪く、206は文様の遺存部分が少ない。唐草文先端が丸く卷いており、17世紀代と思われるが、18世紀の可能性も残す。付近に存在した堂宇の屋根に上がっていたものであろう。中央地区の客土層から出土している。

上段中央地区の中央付近には小型の土坑が多く分布していた。

⑤ SK01（図版47、写真図版77）

集石土坑であるSK01からは施釉陶器壺207・208が出土した。207は寸胴な体部上端の外面に粘土を突起状に貼り付けて蓋受け状の口縁部を作る。内外面に褐色の鉄釉を施し、突端部は露胎で、その下から柄杓掛けで黒色の釉薬を垂らしている。上げ底気味の底部にも釉が掛かるが砂が付着している。丹波焼。208は大きく外反する口縁部で、頸部内面は板ナデを施している。外面には型押しで格子状の文様を並べる。頸部内面以外には赤土部を塗布している。丹波焼。

写真を掲載した330・331の陶器壺や軒平瓦も出土している。

⑥ SK11（図版47、写真図版77）

209は土人形である。型押しにより作られ、船に乗る人物（恵比寿像）を表している。

⑦ SK12（図版47、写真図版77）

210・211はSK12から出土した。210は明青花碗或いは皿底部で、高台疊付以外は施釉している。内外に圓線と草花文を描く。211は施釉陶器鉢で、太く四角い高台を割り出し、内湾して立ち上がる体部から外反する口縁部へと続く。底部外面以外を白泥掛けの後、内面に呉須と鉄釉による文様や文字を描いている。

SK12からは332・333の瓦質土器片や埠も出土している。

⑧ SK10（図版47、写真図版77）

212はSK10出土の焼し瓦である。軒平部が残存しており平瓦は棟瓦である。棟の一隅を切り落とす。軒平部には均等唐草文が配される。四面・凸面・側面とも周囲部は外周に沿った方向にナデ調整するが、凹面・凸面では横方向のナデを施している。但し凹面では斜め方向のナデも見られ、凸面には不調整の部分も見られる。

⑨ SK14（図版47、写真図版77）

213はSK14出土の瓦質の火舎香炉で、大きく外方に踏ん張った高台から内湾して立ち上がる体部へと

続く。口縁部の一部が大きく水平に開き、口縁部全体が波状を呈していたものと推定される。高台内面や口縁部外面にはケズリの痕跡が残り、外面はナデで仕上げ、内面は板ナデで仕上げている。体部内面の上端に煤が付着する。近世の線香立てと思われる。

⑩ SK78 (図版48、写真図版78)

214は施釉陶器擂鉢で、口径20.1cm、器高6.1cmの小型のものである。低い高台部分は露胎で内側に目跡が付き、口縁部は上面を作り、片口が付く。内面には10本/1cmの櫛描き擂目を入れ、見込み部には溝状に擂目を入れている。褐色の釉薬を掛けしており、内面にも目跡が残る。18世纪末以降の丹波焼。

215も擂鉢で、片口を持つ。上げ底の底部からまっすぐ開き、2段の凹線を巡らせ、口縁端部は両側に拡張して上面を作り、2条の沈線を入れる。内面には細かい櫛描きの擂目を密に入れている。口縁端部から内面には赤土部を薄く塗布している。底部外面には砂が付着し、輪状の破片が融着している。内面には6ヶ所の目跡が残る。

⑪ SK70 (図版48、写真図版78)

216~218はSK70から出土した。216は染付磁器徳利である。高台かららっきょう形の器形を経て、端反りの口縁部は端部を少し肥厚させている。内面体部以下と高台端部は露胎で、底部から体部外面には圓線で区切られた草花文を施している。

217は染付磁器碗である。細い高台から内湾する器形で、高台外面に圓線、高台内と外面に退化した雪輪草花文を描いたくらわんか茶碗である。

218は陶胎染付方形小鉢で、型作りである。白泥を掛け、高台疊付を削り、鉄絵・染付の草花文と口縁端部の縁取りを施し、透明釉を掛けている。

⑫ P32 (図版48、写真図版80)

219は小柱穴状のP32から出土した瓦質の壺口縁部である。中世に属するものである。

⑬ SK64 (図版48、写真図版79・80)

220・221は集石土坑SK64から出土した。220は染付磁器碗で、明青花である。細く直立する高台から直線的に聞く体部へと続く。高台疊付は釉薬を削っている。外面には高台外面に2条、体部に1条の圓線を巡らせ、内面には2条の圓線下部に細かい草花文を描いている。

221は染付磁器碗で、細い高台から丸く内湾する体部へと続く。高台内には圓線と文字文を描き、外面には2種類のコンニャク印判花文を2段に交互に施している。

SK64からは写真を掲載した334~337の青磁や染付も出土している。

⑭ SK65 (図版48、写真図版79)

222はSK64を切るSK65から出土した青磁皿である。型作りで、比較的太い高台は平面形が八角形を呈し、外形は輪花状を呈している。口縁部は体部から屈曲して水平に聞く。内面には蔓状の草花文に囲まれた中央に書物の開かれた書見台の後ろに帽子を被った人物像を描いている。同様のモチーフをもつ型が三田青磁の三輪明神窯出土品や山見氏旧藏の同窯関連資料に存在するが、いずれも口径25cmを超える鉢となり、いすの背もたれや周辺におかれた品々が描かれるものである。三輪明神窯出土品のものは、外周の花文も類似しており、年代的にも非常に近いものと思われる。同型には「□木人形デ焼 鉢古□ 文政九年戊□」の刻書が残り、1826年の年号を示している。

⑮ SK43 (図版48、写真図版79・80)

223~227は集石土坑SK43から出土した。223は上層から出土した土師器炮烙で、破片は周辺の包含層からも出土している。平らな底部から屈曲して直立する口縁部へと続く。19世纪前半以降である。

224・225は集石内や下から出土している無釉陶器擂鉢である。224はユビオサエを残してまっすぐ聞く体部から方形に収めた口縁部に続く。内面にはヘラ書きの描目が残るが良く使用されており磨り減っている。16世紀の丹波焼。225も丹波焼擂鉢で口縁部は丸く収めている。16世紀後半～17世紀初頭のもの。

226は青磁碗底部である。外面にわずかに蓮弁文が残る。

227は染付磁器皿で、削り出した高台のある底部は露胎で、やや内湾しながら広がる体部へと続く。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施され砂が付着する。薄い呉須で文様を描いている。SK43検出中に出土した。

⑯ SD174 (図版48、写真図版79)

SD174とSD59は中央地区と南地区とを隔てる溝である。SD59が先に東西方向に掘削され、それに重複するように石列をもつSD174が東西方向に設けられている。SD174からは228の磁器小碗が出土した。白灰釉を全面に掛け、染付けはない。

⑰ SD59 (図版48、写真図版80)

229は染付磁器碗である。非常に薄い器壁で、緩やかに内湾しながら広がり、口縁部に至る。内面の口縁端部と体部下半部に2条の圈線を巡らせ、さらに下半から見込みにかけて「○」状の草花文様を縦6列以上に繰り返して並べる。16世紀末～17世紀初頭の明青花。

(3) 南地区

① SK72 (図版48、写真図版79)

230はSX1007北東端に構築された周間に石を並べた円形の土坑SK72から出土した瓦である。白灰色に焼成されており、欠損部があるため、棟瓦になるかはわからない。側面はヘラ切りのままで、一部に甘い面取りが施される。凹・凸面はナデによって仕上げているようだが、風化が著しい。

② SK932 (図版48、写真図版80)

231はSX1007東の上段から下段への斜面で検出されたSK932から出土した陶器壺口縁部である。屈曲して内傾した口縁部は外側にくびれを持ち、拡張した端部は僅んだ上面を有する。外面には上部が掛かり、一部に灰釉状のものも見られる。丹波焼。

③ SK71 (図版49、写真図版81)

232はSX1007上層の北端で検出されたSK71から出土した主師器小皿で、丸みを帯びた底部から内湾気味に口縁部が立ち上がる。ユビオサエ整形を行い、内外面ともにナデ調整を行う。口縁部のみヨコナデ。口縁部内外面半分近くに煤が付着しており、灯明皿として使用されている。17世紀前半以降と考えられる。その他に寛永通寶の破片が出土している。

④ SX1007 (図版49、写真図版81～83)

233～249は上段南地区北端のSX1007から出土した。SX1007は調査年度を越えて南北と北半に分けて調査し、不定形の池状の溜まりで湧水が著しく平面形や底の状態が不明瞭である。233は須恵器壺である。内湾して広がる体部から丸く収めた口縁部へと続く。中世に属する。

234は陶器壺で、屈曲した口縁部は蓋受け状の凹みが上面に設けられる。外面は自然釉のため荒れているが、内面には赤土部を塗布している。丹波焼。

235は須恵器壺口縁部である。短く屈曲した口縁部は外側に四角く面を持つ。肩部外面には斜め方向の平行タタキが残る。中世に属するものである。

236は陶器甕で、内傾した肩部には7条の条線を巡らせ、不遊環を貼り付ける。短く屈曲した口縁部は外側に面を作る。外面には灰白色の釉薬を塗り、内面にも薄くハケ塗りしている。丹波焼。

237～242は丹波焼擂鉢で、237～239はヘラ描きの擂目を持ち、240～242は櫛描きの擂目を引く。237は口縁端部の外側に沈線を巡らせている。内面にはヘラ描きの擂目を入れており、外面には赤土部を塗布する。16世紀後葉～17世紀中頃。

238は外面にユビオサエを残して広がり、底部外面は横方向のヘラケズリで成形される。口縁部は四角く收め、内面に小段を有する。内面の小段以下にヘラ描き擂目を引き、見込みにも放射状に引かれる。内面と外面口縁部直下まで赤土部を塗布している。239の底部も同様の成形だが使用痕が顕著である。

240は直線的に広がる体部から四角く收める口縁部へと続く。口縁部の内面には小段が付く。内面の櫛描き擂目は4本一単位で、疊らに引かれる。口縁部内面の小段から外面には赤土部が塗布される。17世紀後葉か。

241は口縁部を上方に拡張し、外面を作つて凹線を巡らせるものである。6本一単位の櫛描き擂目を開けて引いている。17世紀末葉か。

242は底部外面を横方向にヘラケズリ後ナデによって調整し、引き上げ痕を残して開く体部から上方に大きく拡張させて外面を作る口縁部へと至る。口縁外面には2条の凹線を巡らせ、上面も窪ませる。内面には8本一単位のやや粗い櫛描き擂目を密に引き、見込みには同心円状に引いた中央に一方向の櫛描き擂目を引く。内面から口縁部上端まで薄く赤土部を塗る。17世紀後半～18世紀前半の丹波焼。

243は施釉陶器皿で、低い高台から緩やかに内済して開く口縁部へと続く。高台疊付以外に緑釉を掛けている。高台内には釉薬が剥離した焼台の痕跡が残る。瀬戸・美濃窯。

244は施釉陶器皿或いは塊で、削り出した基筒底は露胎で、高台の表裏に胎土目が残る。緑灰色の釉薬が掛かる唐津焼。

245は施釉陶器皿で、削り出された低い高台から底部外面は露胎で、内面に小段を付けて広がる口縁部から内面には施釉する。一部に剥がれた胎土目が残る。唐津焼折縁皿。

246は施釉陶器無頭壺で、口縁端部を内側に拡張して蓋受け状としている。外面は回転を利用したカキ目状に仕上げ、内面の口縁直下から底部外面まで土部を薄く塗り、口縁部から体部上半部に暗緑色の釉薬を重ね塗りしている。丹波焼か。

247は白磁皿である。細い高台から横方向に広がる体部へと続く。内面に砂目積み跡と思われる痕跡が残る。

248は染付磁器皿である。薄造りで、細い高台から開く体部へと続く。高台疊付以外は施釉し、高台外面に3条の團線、高台内に團線と宣德年製を崩して描く。16世紀末の明青花か。

249は染付磁器碗で、三角形に削り出された高台の端部から内側は露胎で、緩やかに内済する体部に続く。内面には2条の團線内に草花文を描き、外面には團線上部に文様を描いている。初期伊万里焼。

写真を掲載した338～344もこの遺構から出土している。

⑤ SX1001（図版50、写真図版83）

250は上段東端の埋甕SX1001に用いられた陶器甕である。薄い底部から粘土の雜ぎ目を残して引き上げられた倒卵形の体部に続き、水平に拡張して上面を作る口縁部に至る。肩部には幅の異なる凹線状の条線を巡らせ、7花の不遊環を貼り付ける。底面以外はナデによって仕上げ、土部を塗布する。内面と外面下半はハケの痕跡を残して塗り斑が目立つ。17世紀中葉～後葉の丹波焼。251は甕内の埋土から出

土した染付磁器瓶である。内湾する体部を持ち、高台と底部下半部に圓線を巡らせ、文様を描く。内面は露胎である。写真を掲載した345も出土している。

⑥ SX1010 (図版50、写真図版83)

252は土師器皿である。手づくねの灯明皿で、口縁部のはば全周に煤が付着する。

⑦ SX1013 (図版50、写真図版84)

253～258は上段東端のSX1013から出土した。253・254は手づくねの土師器皿で、器壁は比較的厚い。255は土師器壺口縁部で、播丹型と呼ばれるものである。

256は須恵器の底部で、回転糸切りの大型の製品である。内面には不定方向の仕上げナデを施す。257は無釉陶器壺の把手である。帯状の粘土を横方向に貼り付けて耳としている。表面に4条の沈線を刻む。古瀬戸の可能性がある。258は陶器鉢で、ユビオサエを残して内湾気味に広がり、口縁端部は上方に摘み上げる。外外面に赤土部を塗布しており、描目はないが丹波焼と思われる。

⑧ SX1040 (図版50、写真図版84)

石組土坑SX1040からは軟質施釉陶器の灯火具ひょうそく259が出土した。中央に貫通しない軸孔のある底部から外傾する体部へ続き、内面に掌の痕跡を残した別作りの天井部には相対する2方が突出した円孔を穿ち、灯心の支えに備える。内部の底部中央は突出し、内面は強いユビナデを残す。全体に赤土部を掛け、上面の一部に透明釉を施している。

⑨ SX1041 (図版50、写真図版84)

260・261は大型の方形石組土坑SX1041から出土した。260は須恵器の壺口縁部で、破片の出土ながら大型のものである。短く屈曲して丸く収めた口縁部に続く。261は染付磁器皿で、低い高台から内湾して開く体部へ続く。接合できないが、口縁端部は少し外側に屈曲させた破片から復元した。砂が付着した高台裏以外は施釉し、内面に草花文を描く。

写真を掲載した346・347の須恵器も出土している。

⑩ SX1039 (図版50、写真図版85)

262～264はSX1039から出土した。262は土師器皿で、手づくねにより成形され、ナデにより仕上げている。口縁部内外の広い範囲に煤が付着する。263は染付磁器碗で、内湾する体部を持つ。外面高台部には2条の圓線を巡らせ、体部には二重網目文を3段に描く。264は燃し瓦質の壺と思われ、残存する一辺が41.0cm、厚さ3.55cmの大型のものである。相対する二方の側面は直角に切られ、横方向のナデで仕上げているが、残る一方の側面は斜めに切られている。表裏面は成形台の痕跡か平行する筋状の跡が残り、裏面は一部に一方向のナデが施される以外は調整していない。表面は筋状の跡に直交したナデや斜め方向のナデで調整され、周辺部は周囲に沿った方向にナデを施している。348・360も出土している。

⑪ SX1037 (図版51、写真図版86)

265～267はSX1037から出土した。265・266は土師器皿で、やや肉厚の器形をもつ。266は静止糸切り痕を残す。267は須恵器壺で、上半部を失う。ヘラ切り底部に踏ん張った高台を貼り付ける。

⑫ SK1035 (図版51、写真図版86)

268はSK1035集石上面から出土した。瓦質土器で、厚い寸胴な器形を持ち、四角い口縁部外面直下に鈴を貼り付け、一部を窪ませる。口縁部外面には「×」条の文様を連続して刻む。内面は粗い櫛様の道具を縱方向に引く。写真を掲載した359も出土している。

⑬ SF1053 (図版51、写真図版86)

269・270は石敷遺構SF1053から出土した。269は土師器手づくね皿で、ユビオサエ・ナデが観察でき

る。270は須恵器塊で直線的に開き、口縁端部には灰が被る。

⑭ SX1043（図版51、写真図版86）

271は土師器手づくね皿で、外面にはユビオサエの痕跡を3段にわたって残し、ナデによって仕上げている。内面は口縁部以下をヨコナデ、底部をナデで仕上げている。口縁端部に1ヶ所煤の痕跡が残る。写真を掲載した356の皿も出土している。

⑮ 南西地区（図版51、写真図版86・89）

272・273は南西地区出土の土器である。この地区から出土した遺物は非常に少ないことから、ここに掲載する。272はSK2002出土の焼し瓦で、左棟瓦である。273は古式土師器高环で、脚部や口縁部を失った坏部の破片である。水平に開いた坏部から段を持って口縁部へと聞くものである。

⑯ 上段南地区遺物包含層（図版51・52、写真図版87～90）

274～278は大歳神社境内北側外包含層出土の土器である。274・275は土師器手づくね皿で、口縁部の広い範囲に煤が付着する灯明皿である。276は硬質土師器塊で、短く立ち上がった口縁部の外側を肥厚させている。播丹型である。277は施釉陶器塊である。削り出された高い高台から内溝する体部へと続く。内面と外面上部に黒褐色の釉薬を掛けている。瀬戸美濃焼の天目茶碗である。278は青磁碗口縁部で、オリーブ黄色の釉薬が掛かり、外面にはかなり便化した蓮弁文が描かれる。内面にも文様の痕跡が観察できる。279は焼し瓦質の塊と思われ、残存する一辺が23.3cm、厚さ4.5cmの大型のものである。残存する側面は直角に切られ、横方向のナデで仕上げており、表面側は面取りを施している。その内側には沈線を引いている。裏面は平行する筋状の跡が残り、一部にナデが施される以外は調整していない。表面はナデで調整され、周辺部は周囲に沿った方向にナデを施している。

280～295は大歳神社境内遺物包含層出土の土器である。280～288は土師器手づくね皿で、口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものである。口径が7cm以下の280・282や9cmを超える281・284・287・288がある。また、口縁端部をヨコナデで立ち上がらせる282・283・287・288がある。

289は施釉陶器灯明受皿で、内側に突帯を巡らせ、口縁部の一部に弧状の切り欠きを設けるものである。突帯端部と外面口縁部直下以下は露胎であり、灰白色の釉薬を掛けている。290は陶胎染付、291～293は染付磁器の碗である。290は底部が露胎のもので、外面に文様を描く。291は二重網目文を3段に描く。292・293は高く細い高台から斜めに広がる体部を持つ広東碗である。293の見込みには3ヶ所の窯道具（ハリ）の痕跡が残る。

294は陶器窯で、倒卵形の体部に続き、外側に肥厚拡張して上面を作る口縁部に至る。肩部には幅の異なる凹線状の条線を多数巡らせ、不遊環を貼り付ける。内面から口縁部外側まで赤土部を塗布し、口縁部上面から外面にかけて灰釉を施している。18世紀末葉の丹波焼。295は陶器窯下半部である。薄い底部から内溝気味に引き上げられた体部で、底部外面には横方向の彫書きを施し、上半部は横方向の板ナデやヨコナデで仕上げている。内面はヨコナデによって仕上げられる。体部には赤土部が塗布され、底部外面にも斑に塗られている。丹波焼。

⑰ 採集土器

296は下部遺跡本発掘調査地点から南に離れた斜面で採集された須恵器の捏鉢で、やや外反気味の体部から、三角形に大きく肥厚させた口縁部に至る。内面はよく使用されており摩耗が著しい。

297はNo19地点で採集された無釉陶器の底部である。胎土には砂粒は少ないが、大きな粒が含まれている。灰褐色に堅緻に焼成される。備前焼か。

【参考文献】

- ・森村健一20023「15~17世紀における東南アジア陶磁器からみた当時の日本文化史」
- ・国立歴史民俗博物館研究報告第94集 吉岡康暢編 国立歴史民俗博物館
- ・九州近世陶磁学会20002「九州陶磁の編年」
- ・三田市教育委員会2005「三田焼の研究」三田市文化財調査報告第20冊 ふるさと三田第23集
- ・兵庫県教育委員会19743「小名田窯跡」兵庫県文化財調査報告第157冊
- ・兵庫県教育委員会20043「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第270冊
- ・兵庫県教育委員会20112「神出窯跡群Ⅲ」兵庫県文化財調査報告第407冊
- ・兵庫県教育委員会20122「神出窯跡群Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第418冊

第2節 木製品

調査地点は有野川左岸に非常に近く、特に各地区の下段は湧水が多く、木製品が良好に遺存している。木製品が出土した遺構には、流路や溝、井戸、土坑、埋桶・埋甕などがあるが、ほとんどが近世以降のものである。W76のみ上段SK65からの出土である。木製品に利用された樹種は第6章の文化財科学研究センター報告による。

1. 溝・流路

① SR400 (図版53、写真図版91)

SR400は、下段を北地区から南地区まで貫いている流路で、南地区の一部では中世の掘削・埋没であったが、中央以北では近世以降の構と重複している。出土木製品はすべて近世以降のものと思われる。W1~9はSR400出土のもので、W2はSR400が中央地区で一部枝分かれして浅くなる部分から出土している。W1・3・4は下層からの出土である。W6は南地区出土のものである。

W1・2及び写真のみ掲載のW110は、細く割り裂いた棒状の針葉樹の一端が焼け焦げているものである。松明などに用いられたものであろう。W2はアスナロ属を用いており、器物の廃棄に伴って焼却されたものかもしれない。

W3は針葉樹板目板材の下端を湾曲させて削っており、曲物あるいは桶の底板と思われる。

W4はヒノキの板目材を用いた桶の博板材と思われる。長側面も斜めに削っている。小型で丁寧に作られたものである。表裏とも黒化しており、1面は柿渋などで塗装しているようである。もう1面は内容物の影響による変色か。

W5は二葉マツ板目材を円盤状に加工し、中央にも円孔を穿ったものである。直径11.3cm、円孔径5.1cm、厚さ0.45cmを復元する。外周に沿った位置2ヶ所に菊花形の銅製座金具を通して細い鉢が打たれており、鉢の足は木材を貫いた後、外方向に半環状に曲げられ、再び木材に先端を埋めている。飾り鉢は

おそらく円周の4方向に打たれたものであろう。鉢の内側の位置には直径0.4cmほどの小型の円孔が2ヶ所づつ設けられていたようである。円盤の裏面には細かい成形痕が残されており、中央の円孔内面も含めてわずかに黒ずんでいることから、煤が付着したものと考えた。形態から提灯の上輪の蓋の可能性が考えられる。

W6はSR400の南地区から出土したアカガシ亜属の丸太材を輪切りにして、円盤状に切り落としたものである。一部には樹皮が残されている。切断面には平行に走る刃物の痕跡が残されており、直線的な鉈様の工具で細かく削られたものであろう。

W7はスギの板目材を横方向にわずかに湾曲させた板材で、内面に縱方向の帯状に削った痕跡が残る桶の博板材である。上縁の外側は面取りを行い、内面の底板が落ち込む位置にも加工を加えている。

W8も桶の博板材と思われるが、柾目材で、あまり湾曲していない。

W9はツガ属の板目材を幅6.3cm以上、厚さ0.7cmほどの板状に加工したもので、長辺の木口端近くにV字形の切れ込みを入れている。

② SR415（図版54～56、写真図版91～93）

W10～31は北地区北東端に東西方向に掘削されたSR415から出土した。

W10・11は広葉樹横木取りの木胎をもった漆器碗である。W10はケヤキを用いており、底部を欠いているが、口径9.8cmの椀を復元できた。内外面とも赤色系漆で仕上げているが、下には黒色が覗いている。口縁部の布着せは観察できず、また赤色系漆を塗布する際の刷毛の痕跡を内外に残しており、あまり丁寧な仕上げではない。W11はトチノキを用いており、輪高台から水平によく張った体部をもち、内湾して立ち上がり口縁部へ続く。口径10.8cmを復元し、残存器高4.5cmである。外面は高台内側まで黒色の漆を塗布し、内面は赤色系の漆に塗り分けられており、赤色系漆は黒色漆の上に塗られている。体部下半の器壁は比較的厚い。口縁部等の布着せは観察できなかった。

W12は節の多いトチノキの横木取りの挽物で、比較的厚く、円盤状を呈していることから直径30cm弱の丸盆状の形態が推定できる。周縁部を幅1cm程削り残しており、裏面にも同様の痕跡が残るが、どの程度立ち上がっていたかは不明である。立ち上がりの基部などのごく一部に黒色の膜面が残されており、漆器であったものと思われる。

W13～15は箸である。針葉樹を削て断面多角形状・円形にしているが、W13は両端をほとんど細く成形していないが、下端は丸くなっている。W14はイスシデ節を用いており、下端部もやや細く削っている。W15は基部を欠損しているものの、先端部の6cmほどの長さで細く成形しており、先端は尖っている。

W16はスギを用いた半円形の柾目板材で、2枚の板を目釘2ヶ所でつないで円盤状を成していたもので、直径23.4cmを復元する。一方には目釘が残存している。偏った位置に直径2.7cmの円孔を穿っており、液体等を注ぐ用途と推定されることから、樽の蓋板と思われる。器表面両面が黒色を呈しており、柿渋或いは黒色漆を塗布して、液漏れを防いでいる。器表面には長円形を呈した切削痕が観察できる。筅などの工具を用いたものか。側面や接合部の弦にも一部塗装液がはみ出ているが塗布はされていない。表裏面と弧状の側面には白褐色の繊維質の物質が部分的に付着している。同様のものは円孔内でも観察できる。黒色を呈した表裏面には反転してやや白っぽく転写された文字が観察できる。赤外線画像を撮影し、その画像を反転したところ文字であることがわかった。文字には「有之由候彼・・」「五月中」などと読める部分があるが、文意はたどれない。二重に重なっているような部分もあり、文字は円弧

の中心に向かっている傾向がある。おそらく液体等の漏れを防ぐために塗料を塗り、その後、習書や手紙などに用いた和紙の反古を全体に貼り付けて蓋として嵌め込んだものであろう。文字列は手紙などの完結したものではなく、習書・手習いの類いと思われる。

W17は曲物或いは小型の桶の底板である。アスナロ属の柾目材を用いており、直径12.9cmの円形で厚さは0.7cmとやや厚い。円弧をなす外周面の一部には削った痕跡を残している。裏面の外周間に円弧に沿った算描き線が引かれている。表面には墨書の可能性のあるやや黒ずんだ部分があるが、文字として読み取ることはできない。

W18は長円形を呈する曲物の底板で過半を失うが、長径45cmを超えるものである。長側部及び上縁の縁に沿って直径0.3cmの円孔が9ヶ所確認できる。1ヶ所本釘が残存している。スギの板目板を用いている。

W19はアスナロ属半柾目材を用いた板材で、両短辺端を一面から直角方向に切れ込みを入れて段を作り、別材との接合に備えており、箱状の組物の形態が復元できる。接合面及び両側面以外の表裏面は黒色を呈しており、柿渋或いは黒色漆を塗布したものと思われるが、丁寧に重ね塗りを施したものではない。全長は12.2cmで、内寸は10.9cmを測る。

W20はモミ属の板目の薄板材を方形に成形したもので、直交する2側辺を作り出す。角の部分を丸めていることから折敷の底板と考えた。裏面はやや黒ずみ、短辺に沿ってわずかに窪む当たりが観察できる。

W21はヒノキの経木様の薄板材で、半柾目材を用いて15cmの長さに切りそろえられる。全容が不明であるが、W20よりさらに薄いことから屋根の桟葺き材などにも用いられたものであろうか。表面に浅く細い押圧状の痕跡が残る。W10も同様のものである。

W22は直径2.7cmの太さの竹で、一端は節のすぐ下で切断し、もう一端はちょうどその直上の節の部分で切り落としている。下側の節も抜かれている。

W23はアスナロ属を継木取りして円柱状に面取りした棒状の製品で、上端から1.3cmの位置に小段をもつことから袋状或いは環状の器物へ差し込まれた柄と考えた。材質はあまり強くはないことから工具類の柄ではなかろう。但し、中央部に0.3cmの円孔、さらに後部に方向の異なる一辺0.3cm程のやや方形の孔が貫かれている。また、下半部は焼け焦げていた。再利用時の痕跡と思われる。

W24は桶の傅板と思われる。マキ属板目材を用い、横方向に湾曲しており、節も平滑に削られている。側面も削られている。長さ24.6cm、幅6.7cm、厚さ1.0cmを測る。

W25~27は角材の小片である。部材を切り抜いた際の端材であろう。W25は針葉樹板目材を用いているが、側面はすべて折損している。W26は、6.4×7.3cmの針葉樹柾目角柱を切断した端材で、側面には斜め方向に手斧様の工具で削って成形した痕跡が観察できるが、表裏面には並行して走る細かい擦痕が残されており、鋸の痕跡と思われる。W27は、針葉樹のミカン削材の3面をヤリガンナや刀子様の工具で成形したもので、1面は樹皮は残存しないが木表のまま残る。長さ13.4cmの方柱状に成形するが、上半部の一部に押圧によって窪んだ痕跡が残ることから、総をかけて木鍤として用いたものかもしれない。

W28は直径6.3cm程の木を切断した丸太材で、一端は欠損する。切断は5方向から3回程度、細かい刃こぼれのある刃物で切り込まれている。また枝の部分も切り落とされている。二葉マツ。

W29・30は丸太材を用いた杭の先端部である。地面に打ち込まれていたもので、先端はやや潰れている。W29はサクランボの木と思われる黒色の樹皮が残り、4~5方向から1~3回程度、鋭いが0.1cm程の刃こ

ばれのある刃物を打ち込んで先端を尖らせている。

W30も同様の材を用い、顯著な刃こぼれのない刃物で、枝を落とし、先端を6方向から1~5回打ち込んで尖らせている。同様のサクランボ丸太材が流路の同一層中に並んで出土している。

W31は二葉マツの73.4cmの残存長、直径23.7cm以上の丸太材を樹芯の部分を避けて縦に挽いた半円柱から、さらに板材を挽き出す段階の木材である。上面は直線的な刃をもつ、刃幅8.5cm以上の手斧様の工具によって縦方向に3列以上刃を当てて平らにされている。縦方向にさらに3回鋸を入れ、厚さ1.7~1.9cmの板材を4枚切り出しているが、基部の左端を切り残しているため、一整がりとなっている。切り残した部分で見ると、鋸の刃の厚さは0.3cm程度で、斜め方向の擦痕を残している。下面は粗く小さく立っており、鋸で挽いたままの状態で、隅部に切り残しの割れ面があることから、さらにもう1枚つながっていたものかもしれない。側面は上の1枚、中の2枚、下の1枚に分けて手斧で削られており、下の1枚は面と直角に成形している。

2. 水溜・井戸

③ SE416 (図版57、写真図版94)

W32~42はSE416から出土した。SE416はSR415の西端部に組まれた石組方形の溜井である。18世紀後半頃の土器類が出土している。

W32~35は曲物或いは小型桶の底板である。W32はスギ柾目板を用いた長径12.2cm、短径11.5cmの円盤で、周縁3ヶ所に釘孔が見られる曲物の底板である。

W33はアスナロ属柾目板材を用いており、側面の一方を削ったため、長径12.6cm、短径11.5cmの歪な円形で、厚さは0.45~0.9cmと偏っている。上側の周縁を面取りしている。表面の一部を帯状に削った痕跡が残る。釘孔は見られない。表面が部分的に黒ずむが墨書きとは認識できない。

W34は目のよく詰まったアスナロ属の柾目材を用いた長径12.3cmの小判型を呈した器形で、厚さは0.9cmと分厚い。表面の一部を幅広い帯状に削った痕跡が見られ、外周に沿って算描き線が残る。釘孔は見られない。

W35は曲物側板或いは側板にはめた蓋の継ぎ部である。外面の桟縫じの外側に1本、内側に2本の縦方向の算描き線が刻まれる。桟皮結合の1例外2段縫じである。

W36は直径約23cm、厚さ1.47cmの二葉マツ板目材の円盤で、中心を通る直線上に5ヶ所の穿孔をもつものである。穿孔の1ヶ所には木釘が残存している。円盤の一方の周縁角は丸くなっているが、面取りか使用によるものかは不明である。一方の面には穿孔を繋ぐように帯状に変色しており、細かく鋭い刃物傷が残る。裏面は器表面が荒れており、刃物傷が残存する。円盤の割れ方向に直交する釘孔列は割れた材を繋いで補強するためとも考えられるが、別の材を打ち付けて把手とした鍋蓋と考えた。但し一部の刃物傷が把手が当たっていた痕跡の部分にも見られることから、再利用時の傷かもしれない。SK501出土のW46・47と類似する。

W37は箸である。両端部を欠くが、わずかに面をもつものの丁寧に断面円形にしており、太さは上下で変化がない。

W38はイスノキを用いた白木の横櫛である。歯の一部を失うが、直線的な背部は全長残っており、長さ8.5cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測り、基部の残る歯は79本を数える。男物とされる直線的な背は、角の面取りを丁寧に行い、断面はほぼ丸くなる。歯先端部は使用によるものが摩滅している。

W39・40は長方形の板材であり、箱形組物の部材である。W39はアスナロ属板目材を用いており、長側辺は欠損している。短辺木口面に1ヶ所づつと、一方の長辺に寄った中央に表裏を貫通する釘孔を残しており、内2ヶ所に断面方形の木釘が残っている。表裏面には鋸挽きの痕跡と思われる平行した痕跡が残されている。長さ22.8cmの板材で、別部材と木釘で接合された箱形の製品となる。側板は外側に付き、底板は内側に入る形態である。

W40はスギ板目材を用いており、幅4.45cm、厚さ0.7cm、長さ21.6cm以上の板材で、短辺中央に表裏を貫く一辺0.2cmの方形の孔があり、その一方の長側面にも径0.35cmの孔が抉られている。器表面には細かい斜め方向の刃物傷が残されている。底板を下面に、直交する側板が内側に組み合わさる形態をもつ。

W41・42は杭である。W41は、クリを用いた直径約1/4のミカン割材の先端を尖らせたものである。W42は樹皮を付けたままの丸太材を用いており、先端を7方向1~2回削って尖らせている。

3. 埋桶・土坑

④ SK501 (図版58~60、写真図版94~97)

W43~61はSK501から出土した。SK501はSR400とSR415に開まれた範囲で、石組護岸をもつSK608の北に接するように検出された。本来、埋桶であったものに多くの木製品などが投棄されていた。

W43~45は桶の博板と思われる横方向に湾曲した針葉樹板材である。W43ではほぼ全長が残っており、長さ33.6cm、上幅は6.2cm、下幅5.45cmである。下端から2~5cmの内面が凹み、また外面にも対応する位置が凹んでいる。内面の凹みは底板の位置を示し、外面の凹みは結構を縛る籠の痕跡と思われる。この博材は上縁から3cmの位置の側面に釘孔が認められ、博板相互に縫じあわされていたらしく。

W44はスギを用いた幅8.4cm、厚さ1.1cmの横方向に湾曲した博板様の板材の一端を4方から削って尖らせ、矢板状に加工したものである。結桶の緩んだ籠を縛める楔かもしれない。W45はあまり湾曲していないが針葉樹板目材を用いた幅8.75cmの板材で、風化の状況が他の桶材と類似している。

W46・47はスギ板目材の円盤状の破片で、直径30.7cmを復元する。厚さは1.2cm。同一個体の可能性がある。W46の長側辺は削れており、もう一方の側面には2ヶ所の目釘孔が穿たれている。表面には3ヶ所の円孔が残されている。W47の長側面には3ヶ所と1ヶ所の直径0.4cm程の目釘孔が見られ、木釘も残存している。数枚の板を縫って円盤を作っていたものである。繊維方向に直交する中心を通る直線上に円孔が複数穿たれ、一部には木釘が残存している。また、貫通していない孔も存在する。1面では円孔列部分を帯状に残して幅約2.5cm程の削りを施している。把手が取り付けられてW36と同様に鍋などの蓋と思われる。両者とも一面に黒色の物質が付着しているが、表面が平滑ではない。沈殿付着物であるなら、別の製品の可能性を考慮しなければならない。釘孔は桶の底板の補強或いは底板に十字に打ち付けた足のようなものを想定することができよう。

W48はスギを用いた組物で、箱などの部材と思われる。長さ31.25cm、幅5.95cm、厚さ1.55cmに丁寧に成形された板目材で、一方の短辺を幅1.0cm、深さ0.5cmに一段削り落としている。この段は鋸で溝を挽いた後に削っており、溝が一部残存する。木口面に1ヶ所目釘孔が認められる。また、一方の長側面にも目釘孔が3ヶ所穿たれるが、全体に偏った位置にあり、幅0.8cmの長方形の孔や、側面にかけて上下に貫通するものがある。内面の中心に2本の細い鋸引き線が軸方向に直交して引かれている。外面にのみ黒色の皮膜が付着するが、表面は平滑ではない。

W49は竹筒で、4ヶ所の節を含んだ長さ36cm弱の竹で、枝はすべて落としている。端部の一方は2回程

度刃を打ち込んで斜めに切り、もう一方は少し段が残るものと直交方向にきれいに切断されている。尖った側の節は抜けているが、他の節は残存している。節の残る部分の器壁には0.2~0.4cmの小円孔が4ヶ所と3ヶ所開いている。

W50は擂り粉木と思われる。直径4.4cmの樹皮を残した二葉マツの丸太材の細い側は、両面から直角に鋸で溝を入れて一段落として中心部を板状に残し、両側から円孔を穿って吊り手部を設けている。他端は丸く擦り減っており、擂り粉木としての使用が認められる。擂り粉木に用いられる木材には現在でもサンショウやシナノキ等があげられるが、マツ属複管束亜属の二葉マツ（クロマツ・アカマツ）はあまり使われない。

W51~53は下駄である。W51・52は、別側に作製した台部と歯を組み合わせた差歛下駄で、構造下駄に分類される。台部裏面に設けられた二本の溝の中のはぞ孔に嵌め込まれた歯が台部を貫通し、表から見える露明下駄である。台部は柾目材を用い、前幅が広がる長方形を呈し、裏面は四方から斜めに中央が高くなる形態である。W51はトネリコ属を用いた歯を失った台部で、鼻緒の孔は上面からは円孔を穿ち、下面からは盤を打ち込んだだけの方孔を穿っている。後ろの歯を装着する溝と方孔の一部が焼け焦げている。W52の歯は板目材を用い、中央1ヶ所に出はぞを作り出す。歯は使用により丸く擦り減っている。後ろの歯の方がより擦り減って、低くなっている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。台部と後ろの歯がカツラ、前の歯がクリを用いている。付け替えたものであろう。

W53は一本から台部と歯を作り出した一本下駄で、2本の直線的な歯を有する連歛下駄になる。モミ属の板目材を用いている。歯の前後の楔元に鋸の痕跡と思われる小溝が観察できる。歯はよく擦り減っており、特に後歯が低くなっている。また、両歯とも右側が低くなってしまっており、後の歯は欠けていて、補修のためか孔を穿っている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。

W54~56は針葉樹板目材を用いた板材で、釘孔を有し、おそらく建築部材に用いられたものであろう。W54は厚さ1.2cmの板材で、表面を斜め方向の手斧様の工具で削っている。刃物は一部刃こぼれが観察できる。W55はカヤを用いた厚さが1.85cmある頑丈な部材である。表面には斜め方向の細かい擦痕が残され剣を用いたものと判断した。裏面はより平滑で切削痕は観察できず年輪界が浮き出ている。おそらくこの裏面が本来の表面で、床材などに使用されていたものであろう。短側面は鋸で切った後、手斧様の工具で整えている。短側面に沿って2ヶ所の孔が穿たれるが、方形を成しており、細いノミを用いたものかもしれない。W31から挽き出された板材と厚さが通じる。

W56は厚さ1.0cmの板材で、48cm以上の長さをもつものである。一隅近くに円孔が穿たれている。

W57・58は角材である。W57は鋸によって切り落とされた端材で、表面には手斧様の工具による削りが残るが、裏面は調整されていない。W58は5.1×2.6cm、長さ25.95cmの二葉マツの角材で、両端部に釘が斜めに打ち込まれた痕跡が残るが、貫通は浅く、別部材に打ち付けたものではない。側面は鋸の痕跡を残しながらも、一部が非常に平滑で、鋸などを使用した可能性がある。

W59~61は杭である。丸太材の一端をW59では6方向から2~6回、W60は0.1cm幅の刃こぼれが1ヶ所ある刃物で、4方向、更に上部では7方向から1~4回削って尖らせている。上端部は風化によるものが劣化が著しい。W59ではクリを用いている。W61は長さ63.65cmで、直径3.9cmの丸太材を用いており、上端部にも切り込みや表面を削った痕跡が残ることから、ほぼ全長が残るものと思われる。下端部は7方向から1~2回程度、刃物を入れて尖らせている。先端は丸くなる。中央部分が大きく括れている。枝などは落とされているが、樹皮が一部残存しており、サクラの木かもしれない。

⑤ SK608（図版60・61、写真図版97・98）

W62～66はSK608から出土した。SK608は石組護岸をもつ大型の方形土坑である。石組の護岸は崩されて埋められており、北西部に突出するSK510との平面的な埋立の相違は観察できなかった。同時に埋没した可能性が高い。出土した土器類は17世紀後葉までの時期のものが出土している。

W62・63は一本下駄である。W62はスギの台部裏面の中央を削り、前部・後部に広い接地面をもつ露地下駄と呼ばれるものである。鼻緒の保護のため裏面の前壺周囲を方形に削り込む。鼻緒孔の目内部には一部に縦方向の刃筋が観察され、鑿などの工具で両面から円形に抉り込まれたものである。表側には使用による指の痕跡が残り、裏面の歯の前後が最もよく擦り減っている。W63は二葉マツを用いた材の四隅の角を丸めた形状で、側面には鉈や手斧様の工具で上下方向に削った成形痕が残る。歯はよく擦り減っているためか低い。歯の前後の根元には、削り出す前に挽かれた鋸の溝が残されている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。

W64はクリを用いた長さ35.3cmの棒状の形態で、基部は切断後、角を面取りしている。徐々に先細りとなるが、先端から15cmの位置から一側面に刃を付けるように削っている。先端近くの背には斜め方向の浅い切り込みが見られる。

W65はトチノキの横木取り挽物の漆器大皿で、直径30.4cmを復元し、器高2.8cmを測る。木地輻輳挽きの痕跡を残した高台は碁笥底を呈し、直径19.0cmの範囲で削り込まれている。外面には黒色漆が施され、内面には赤色系漆を塗布した上に海老2匹の文様を描いている。追いかけるように左方向を向き、尻尾は皿の中心に向かって曲げている。1匹の鰐は粘りが強く盛り上がるような黒色漆、もう1匹の鰐は足と同様の金色を呈し、金色或いは銀色の微細粒を混ぜた透明な漆を用いている。黒褐色を呈した甲殻は同じ微細粒を少量混ぜた薄墨色の黒色漆を用いている。口縁部の布着せは観察できない。赤色系漆の下には黒色漆が覗く。高台接地面や口縁端部が使用のために摩滅している。SK510出土のW67と同一個体の可能性があるが、接合できない。少なくとも対あるいはセットで作製・使用されたものであろう。

W66はコウヤマキを縱木取りで用いた杓子である。卵形の匙部から一旦厚さを減じて柄部に続くが、柄を欠く。柄は斜め上に続くようである。側面には成形痕が残る。欠損部以外はやや黒ずんでいるが、膜面は観察できず、柿渋などを塗布したものかもしれない。

⑥ SK510（図版61、写真図版99）

W67はSK510から出土した漆器大皿である。SK510はSK608の北西に付随するように検出された。碁笥底の底部を有する直径29.4cm、高さ3.3cm程の大皿が復元できる。外面は黒色漆が塗られ、内面には赤色系漆が塗られた後、海老の鰐が黒色漆で描かれる。底部接地面及び口縁端部が使用によるものか漆が剥がれている。トチノキを用いておりW65と同一個体或いは少なくともセットで作られた可能性がある。

⑦ SK419（図版62、写真図版100）

W68～72はSK419から出土した。SK419はSR400とSR415交点の角に設けられた埋植である。

W68は曲物の底板で、厚さ0.25cmの薄いスギ柾目板を円形に成形している。表面に墨書が残り、「□堂正藤」と読むことができる。上下が欠損していることから各々もう一文字書かれていた可能性はある。蓋として使われた可能性が高い。

W69はブナ属を用いた杓子である。短い柄に円形の匙部が連続する横杓子である。柄の端部は欠失するが、すでに細く薄くなることからあまり続かないものと思われる。匙部の割り込みは浅い。全体に成形痕を顯著に残す。全体に柿渋或いは黒色漆を塗布したものと思われるが、膜面は形成されず、成形痕を残すものである。

W70はスギの白木丸箸である。全体にはほぼ同じ幅を有するが、先端部及び基部近くのみ少し細くなるように削っている。基部端は真っ直ぐ切り落とし、先端部は使用のためか丸くなっている。長さ22.55cmを測る。

W71は竹製の箆で、幅1.06cmに竹表皮部分を残して薄く削り、断面はわずかに湾曲する。先端は丸く作っている。基部側は節の部分に当たる位置で失われているが、やや細くなるようである。

W72は建築部材と思われる。厚さ1.3cm、幅5.9cm以上の板材に長方形の釘孔を残した二葉マツ柾目の板材である。

⑧ SK601 (図版62、写真図版100)

W73はSK601から出土した漆器椀底部である。よく踏ん張った高台から丸みをもって立ち上がる。クリを用いた木胎が分厚いことからやや大型のものとなろう。高台径は6.4cmを測る。高台内面も含めて外面は黒色、内面は赤色系の漆で仕上げている。赤色系漆の下には黒色の下地が観察できる。

⑨ SK464 (図版62、写真図版100)

W74は埋桶SK464から出土した。カキノキ属丸太材を使用した棒状の木製品で、上端部は面取りのように周囲から細かく刃物を入れて丸く成形している。上端から1.7cmの位置に直径0.2cmの円孔が貫通している。

⑩ SK449 (図版62、写真図版100)

W75は埋桶SK449から出土した漆塗りの箸である。断面五角形に削られており、両端部を欠失するが、下端部は徐々に細くなる。下端から上端部近くまで赤色系漆を掛けているが、下地は不明である。上端部は黒色漆で仕上げており、塗り分けている。この部分の下地も黒色を呈している。タケを用いている。

⑪ SK65 (図版62、写真図版100)

W76は上段中央地区のSK65から出土した。上段出土で唯一図化できた木製品である。アスナロ属板目板材で、長さ21.35cm、幅5.15cm、厚さ0.3cmの薄板に仕上げている。表裏面には少し湾曲した刃物痕が斜め方向に細かい間隔で並んで観察でき、一方の面では異なる方向の痕跡も観察できる。当初鋸の痕跡と考えていたが、各痕跡が擦痕ではなく、段を有しており、手斧様の工具で細かく成形したものと考える。節のある部分も残る。

⑫ SK575 (図版63、写真図版101)

W77はSK575から出土した。SK575からは丹波焼鉢が出土している。アスナロ属を縦本取りした角材を削って把手状に作り出している。下半部を失っているが、外側の上方は斜めに削って小段を設けた後、直角に切り落としている。下方は斜めに削って統いでいる。内側の上方は3.6cmの長さで平坦に仕

上げ、別部材との接合に備えているが、その下はわずかに内縫りをもち、角を面取りして手の当たる部分を作っている。接合部には直径0.5cmの木釘を打って別部材に取り付けたものと思われるが、この面と内縫りの面の段差はほとんどない。

⑬ SK621（図版63、写真図版101）

W78～80及び写真のみ掲載したW111・112はSK621から出土した。SK621からは土師器皿・炮烙・軒瓦など18世紀後半までの遺物が出土している。

W78は曲物或いは小型桶の底板である。スギ板目材を用いている。直径9.7cm、厚さ0.9cmを測る。

W79は漆器椀である。口径11.0cmを復元し、器高3.5cmを測る。高台を削り出し、横方向に開いた後、緩やかに内湾して立ち上がる。ミズキ属を用いており比較的の器壁は薄い。全面赤色系漆で仕上げ、下には黒色漆が觀察できる。

この他、写真を掲載した赤色系漆を内外面に施した漆器椀の口縁部W111や、外面が黒色、内面に赤色系の漆を施した漆器椀W112も出土している。

W80は一本下駄の破片で角を落とした方形の台部をもつ。前壺の目がわずかに残り、歯の付け根には鋸痕跡と思われる細い溝が残る。歯は低く、前壺より前方の下面もよく摩滅している。上面中央に焼き印が押されている。二葉マツを用いている。

⑭ SK736（図版63・64、写真図版101・102）

W81～96はSK736から出土した。その他に竹の薄板を編んだ網代片が出土している。埋植であるSK736からは17世紀中葉～後葉の丹波焼甕などが出土している。

W81～85は針葉樹を用いた箸である。W82を除くと全体を削って断面円形に近づけている。W81は完形で長さ21.7cm、最大径0.6cmを測る。両端部は真っ直ぐに切り落としているが、下端部側をやや細く削っている。W82も完形で長さ21.0cmを測る。下半部では断面が扁平な四角形の各々の角を面取りした多角形を呈するが、上半部では成形は粗く一部が割り面のまま残されている。上端部幅は0.9cm、下端部幅0.4cmと細くなり、下端部は使用のためか丸くなる。また、下端部から8cm周辺には当たりが觀察できる。W83・84は類似した材を用いて作られており、端部は真っ直ぐに切られている。W81はヒノキ、W84はアスナロ属を用いている。

W86・87は竹製の箆である。共に中央に節の部分を配し、外面は堅い表皮を残し、内面は平らになる程度に削っている。W86は上端部が右下がりの斜めに切り落としているが、薄くして刃を作るものではない。下端部は左下がりの斜めに切るが、表皮側から内面が薄くなるように斜めに切って、刃を作り出している。一部がさきくれ立っており、使用によるものかもしれない。W87は下端部を真っ直ぐ切り落とすが、上端部は右下がりの斜めに切り、表皮側が薄くなるように刃を付けている。

W88・89は切匙である。W88は竹製で表皮も一部残している。刃部は表皮側を残して内側から削って刃を作っている。柄基部端に両面から刃物で穿った円孔をもつ。全長24.2cm、刃部長3.5cm、刃部幅2.25cmを測り、刃部先端は少し擦り減っている。W89はヒノキを用いており、W88よりは21.2cmと短めだが、刃部幅は2.95cmと太めで刃部長も4.4cmと大きい。刃は両面から削った両刃となるが、鋭さはない。柄基部端に両面から刃物で穿った円孔をもつ。刃部や柄の基部側は白木の木肌であるが、柄の刃部側は黒化しており、柿渋などが塗布されていて、使用により刃先や持ち手部が摩耗したものか。

W90・91は角材である。W90はカヤを用いており、割れたかけらの部分である。厚さ0.9cmの針葉樹

板目材の両面を丁寧に加工したもので、両面は使用によるものか黒ずんでいます。表面には細い刃物の古い痕跡が残される。W91は 3.3×2.6 cmの角材で、26.5cmの長さで残存する。下端近くに貫通する長方形の釘孔が見られ、さらに裏面に未貫通の釘孔がもう一つ見られる。下端部は対向する両面から切断しており、中央部は折り取っている。切断後に再利用したものが、下端の一部が黒ずんでおり、柿渋などが付着したものかもしれない。W58の角材とも長さはほぼ一致している。

W92は桶の底板で5枚の板を目釘によって繋いでいる。木取りは中3枚が柾目取り、両端が板目取りで、厚さも揃っていない。各々は目釘によって接合されるが、各材には隣り合った材に対応しない釘孔がある。但し中央の板には1ヶ所を除いては接合する材の対応する位置すべてに釘孔が存在している。破損に伴って補修されたもので、中央の材は新しく入れられたものであろう。5枚ともスギを用いている。現状で残存する目釘は、板状を呈しており、竹ではない。W93は桶板でスギ板目材を用いている。長さ29.6cm、幅5.75cmを測る。側面の1ヶ所に目釘孔が確認できる。

W94~96は二葉マツを用いた建築部材の板材である。W94は厚さ1.7cm、長さ55.15cmの半柾目材を用いており、一長辺と一短辺は直角に成形されるが、一長辺は斜めに削られている。下端部近くに1ヶ所、上端部に接して2ヶ所の釘孔が確認できる。表面には平行する細かい刃物傷が残る。W95は幅18.8cm、厚さ2.7cmの板目材に直径0.5cmの釘孔をもつものである。全長は残っておらず、表面の調整も不明である。W96は幅14.7cm、厚さ1.25cm、長さ51.2cmの板目材で、節の部分は斜め方向から手斧様の工具で丁寧に削って平らに仕上げており、その他の柔軟な部位の調整痕が観察できない程度に使用されたものと思われる。裏面には斜め方向の擦痕が残り、鋸挽きの製材痕と思われる。一方の長側辺はやや斜めに切られているが、もう一方は直角に切られ、面取りも行っている。一隅に近い位置に 0.4×0.3 cmの釘孔が開く。

⑮ SK888（図版64、写真図版103）

W97はSK888を構成する埋植である。小型の桶でスギを用いた17枚の桶板と一枚板の底板で結構を作る。桶板の最も残存の良い長さは28.8cmを測り、厚さは1.4cm程度の板目材を用いている。内面には縱方向に削った痕跡が残る。下から2~4cmの位置がやや凹み、当たりがあるため底板を嵌め込んだ位置と思われる。対応する外面上にはやや斜め方向のあたりが観察できることから、構成していた竹材は失われているが、崩を嵌めていた位置と判断した。下から17cmの高さの外面上にも同様の痕跡が見える。底板は樹芯近くの板目材で、厚さが2.0cmのものである。底板上面や桶板内面の下部表面には付着物が残る。

⑯ SK739（図版66、写真図版104）

W104はSK739の埋甕埋土から出土した竹筒で、下端は節の部分を斜めに4回以上刃を入れて切り落としている。切り口の裏面にも5回以上刃物を打ち込んでいる。他端は欠損している。

⑰ その他（図版65・66、写真図版103・104）

W98~103・105~109は下段北地区の機械掘削や遺構検出中に出土した木製品で、所属遺構が不明なものであるが、他の木器と同じ時期のものであろう。W98・99・102・103・105・108・109はSR415に属する可能性が高いが、大きく攪乱されており、上面から切り込んだ別の遺構の可能性も排除できないため、所属遺構は決定しなかった。

W98・99は桶の桶板と思われる。下端部は風化しているが残存しており、上端部は欠損する。W98の

内面には斜め方向に走る擦痕が見られる。W99の内面には4cmほどの幅に縦方向に削った痕跡が残る。外は風化が著しい。

W100は針葉樹板目材の幅7.7cm、厚さ2.6cmの板材で、長側辺の偏った位置に1×2cmの方形のはぞ孔を深さ1.2cm抉っており、建築部材の端材と思われる。W101は針葉樹半柾目材を用いた断面長方形を呈した角材で、一方の長側辺に釘孔2ヶ所が見られる。短側辺の一方は切削されているが、ほかの面や角はよく摩耗している。

W102・103は一本下駄である。W102はW62と同様の台部裏面の中央を削り、前部・後部に広い接地面をもつ露地下駄と呼ばれるものである。前壺周囲も削り込むが劣化が著しい。二葉マツ芯持材を用いている。歯となる部分はよく摩滅しており、特に前端部と後端部が著しい。W103はアスナロ属を用いており、縦半分に削れているが、方形の台部を有す。前の歯、後ろの歯とも前後両側に鋸で切れ目溝を入れ、前中後ろを削り落としている。歯はよく擦り減っている。鼻緒孔の内面は黒ずんでいるため、藍染めされた鼻緒が通してあった可能性がある。後ろ壺の鼻緒孔は前外方に当たりがある。

W105はスギの半柾目材を用いた板材で、表裏面は黒色を呈しており、黒色漆を塗布したものと思われるが、丁寧に重ね塗りを施したものではない。W19などと同様に調度品などの箱物の部材であろう。

W106は針葉樹柾目材の幅1.4cm、長さ27.7cm、厚さ0.6cmの細板で、一端には破損しているが、径0.1cmほどの釘孔が見られ、もう一端には厚さの中ほどで止まつた貫通しない孔が見られる。表面は丁寧に削って仕上げられている。

W107は厚さ0.9cmの板目材に円孔を穿ったもので、上端部には削った痕跡が見られ、下端部には切れ込みがあり、丸くなっている。円孔内も一部焼け焦げによるものか黒化している。W108は板目材に円孔を穿った部材であるが、欠損部が多い。両短辺が残存しているのであるなら、円孔ではなく凹部となる。凹部裏面は著しく摩滅している。W109はスギ柾目薄板で、上端部を斜めに切り落としていることから、屋根の隅部に用いられた柿葺きの絆木板と思われる。厚さ0.2~0.35cm、最大長16.0cmを測る。

この他に、整形されていない小さな角材に、赤色顔料が付着するもの（W114）などが出土している。

4. 小結

漆器の容器類には黒色系漆の盆、外墨内赤色系漆の椀や色絵の描かれた大皿、内外面が赤色系漆の椀がある。10点確認できたが、トチノキ・ケヤキ・ミズキ属・クリなどの広葉樹が用いられている。比較的薄造りの内外面赤色系漆椀にはケヤキやミズキ属が用いられており、黒色漆系の漆器にはトチノキやクリが用いられている。

これに対して器表面に膜面が観察できず、黒化しているものは柿渋を塗布したものと考えた。これらには箱物部材や杓子、桶材、切匙など9点があるが、主にヒノキ・スギ・アスナロ属・二葉マツ・コウヤマキなどの針葉樹が用いられており、杓子の1点に広葉樹のブナ属が使われていた。

下駄には連壺下駄と差壺下駄がある。連壺下駄にはモミ属・スギ・二葉マツ・アスナロ属が用いられている。差壺下駄台部にはトネリコ属・カツラが使われており、歯には台部と同じカツラとクリの別材を用いたものがあり、補修したものと考える。連壺下駄では針葉樹が用いられ、差し歎下駄では広葉樹が用いられている。

山名氏の此隅山城跡武家屋敷跡である宮内掘臨遺跡からは、16世紀前半から1580年の有子山城落城時

までの木製品が多く出土している。後半の安土桃山時代にはホオノキ等が含まれるモクレン属の差歛下駄・連歛下駄、二葉マツの連歛下駄が出土している。前半期の室町時代ではモクレン属の差歛下駄・連歛下駄、スギの差歛下駄・連歛下駄、ヒノキの差歛下駄、ヤナギ属・二葉マツの連歛下駄が出土しており、樹種、特に針葉樹が減っている。

17世紀前半～19世紀後半の明石城武家屋敷跡では、ヒノキ・スギ・二葉マツ・ネズコ・モミ・ツガ・カツラ・トネリコ属・ケヤキ・ホオノキ・スルデが用いられている。

【参考文献】

奈良国立文化財研究所1984.3「木器集成図録 近畿古代」奈良国立文化財研究所史料第27冊

兵庫県教育委員会1992.3「明石城武家屋敷跡」兵庫県文化財調査報告第109冊

第3節 金属製品 (図版67・68、写真図版105・106)

1. 銅製品

M1～4は銭貨である。

M1は上段中央地区SK820上面の攪乱部から出土した一銭銭貨である。

M2は上段南地区SK71出土。破損し折れ曲がるが、寛永通寶である。SK71からはM17の角釘も出土している。

M3は上段南地区包含層出土。寛永通寶 新寛永である。

M4は上段南地区の人力掘削の際に出土した寛永通寶（新寛永）で、裏面上部に「文」の字のあるいわゆる文錢である。1668～1683年江戸亀戸での鋳錢とされる。

M5は下段中央地区的埋甕SK739の甕内部埋土中から出土した銅製の水滴である。長さ4.4cm、幅2.7cm、高さ1.75cmの巻き貝を表しており、五本のらせんが表面に刻まれている。田螺であろう。体部中央の頂部に直径0.7cmの円孔を開け、らせんの先頂部に直径0.2cmの小円孔を開けて、水注としている。底板・筒部・上蓋部に分かれたものを接合しており、らせんは上蓋部のみに施されている。

M6は下段北地区の遺構面検出中に出土した。銅製の幅0.45cm、厚さ0.08cmの細長い薄板で、直角に折り曲げた部分から一方は直線的に作られ、もう一方はらせん状に円弧を描いて作られており、直線部と曲線部に作り分けられる。同様の形態には蚊取り線香立があるが、満巻き形の蚊取り線香は明治28（1895）年以降のものである。

M7は下段北地区のSK450の埋甕埋土から出土した銅製の煙管吸口である。薄い銅板を筒状に丸めておそらく蝋付けしたものである。

M8は上段中央地区SK68出土の銅鈴である。当初、青銅製の分鈴と考えていたが下部の溝の存在や、中実としては6.1gとやや軽く、X線透過写真で明瞭ではないが内部がやや透けていることから、本来内部が中空の鈴と判断した。上部に板状の突起が付き、0.2cmの円孔が両側に広がるように開いている。突起の上端部は両側から面取りを施してやや尖らせ気味になる。体部表面には溝状の文様のようなものが見られるが不明である。

M9は上段南地区南端部の調査中に出土した鉛製の玉で、鉄砲の弾丸であろう。直径1.4cm以下で一方が平たくなっている。11.7gの重さがある。

M10は下段北地区SR415の埋土から出土した。銅製の鉗金で、柄部を欠くが、羽子板形の両面目立てのものと思われる。縁のない下端部の幅10.0cmから徐々に幅を減じて柄の方へと向かう。側辺は二重に折り返して表裏に縁を作っている。目の細かい表面は、目立整を幅0.1cm、0.2cmの長さで縦横0.3cmの間隔で一方向から打って刃を作り出している。1列に26ヶ所程度打ち込んでいるが、前後の列では目をずらしている。裏面では整を幅0.3cm、0.3cmの長さで斜め方向から打ち込んでおり、目相互の距離は列内では0.5cm以上となり、粗くなる。1・2列目は下方から打ち込むが、その後は上方、下方と交互に打ち込んでいる。厚さ0.1cmの銅板の両面から目を立てて刃を作り出しているが、貫通している箇所はほとんどない。羽子板形のものは江戸時代には作られていたものとされ、1712年頃に描かれた「和漢三才図絵」には「わさびおろし」として掲載されている。

2. 鉄製品

M11は下段北地区SK419の埋桶埋土から出土した火打金で、方形の鉄板の両短辺と一長辺を薄くしており、その長辺の両隅から突起を突き出して木の把手への装着に備えている。一部に木質が残存する。火を切り出す部分は直線的でやや厚く、厚さ0.43cm、長さは8.1cmで隅は丸くなっている。

M12～19は鉄釘で、断面が方形を呈する角釘である。

M12は上段北地区的SK224埋土下半部から出土した。両端部を失う。

M13はSK342から出土した。SK342は上段北地区中央の東端にある段落ちである。下端部を失い、頭部も屈曲部を失っている。

M14は北地区的機械掘削の際に出土した。下端部を失うが、長さ3cm程度の小型のものである。

M15・16は上段中央地区SK70から出土した。M15は頭部を失うが、長さ5.2cm残存しており、小型のものと思われる。M16は下端部を失うが、長さ11.1cm残存しており、大型のものと思われる。頭部はあまり叩きつぶさずに曲げている。

M17は上段南地区北端のSX1007が埋まっていた後に掘られたSK71から出土した角釘で、両端部を失うが、上端部近くが屈曲しており頭部が近いものとすれば、残存長2.4cmから見て小型のものと思われる。

M18は下段南地区SK932出土の角釘で頭部を失うが、残存長8.62cmの大型のものである。

M19は上段南西地区SK2001埋土出土。0.5×0.6cmの断面方形のいわゆる角釘で、下端部を欠くが8.2cmの長さが残存していた。上端は薄く叩き伸ばして折り曲げている。上端から約8cmまで軸方向に直交する木質が残存しており、木に打ち込まれていたものである。

M20は上段中央地区のSK65の南半部から出土した板状の鉄片で、直線部には鈍い刃が付けられており、断面は鉢鉋状となる。0.6cmの厚さがあり、唐鋤等農具の刃と思われる。

M21は上段南地区SX1001出土の包丁で、茎端を失うが、全長25.0cm、刃部長21cmの刃先が上下から狹まる柳葉形の刃をもついわゆる出刃包丁である。大型のものであるが比較的薄造りである。

【参考文献】

永井久美男 1996 「日本出土銭範観」 戵庫埋蔵銭調査会

第4節 石製品（図版69～71、写真図版106～108）

石錠

S1は上段北地区のSK224北西の遺構検出面から出土したサスカイト製の石錠で、元々基部は凹基であった（意図していた）ようだが、平基状に再加工されている。長さ17.0mm、幅14.9mm、厚さ3.0mm、重さ0.5gである。形態・風化度合いを参考に、縄文時代後～晩期に属するものと類推した。周辺では数点のサスカイト剥片が採集されている。

碁石

S2～4は遺跡内で採集された碁石と思われる自然礫である。S2・3は下段北地区、S4は南地区的表面採集品であるため所属時期は不明であるが近世以降のものと考える。厚さ0.45～0.65cm、直径が最大2.5cmの扁平な円錐で、灰色から暗灰色の自然礫を用いている。

砥石

S5～12は砥石である。

S5は下段北地区のSR400西肩部の上層擾乱層・下層暗青灰色粘砂から出土した砥石である。泥岩質の砂岩を用いた方柱状の形状をもち、表裏面と一側面を使用している。一方の小口は折損のためか一部に整状の工具による抉りが見られ、突出部は摩滅している。器表面は平滑で、縱横斜めに擦痕が残る。

S6は下段北地区のSR415から出土した。ホルンフェルスと思われる暗灰色を呈した粒状の部分が観察できる石材を用いており、方柱状の一面を使用している。使用面は大きく窪んでおり、縱横斜めの擦痕が観察できる。中砥か。

S7は下段南地区のSR400上面から出土した。両端部を欠失した板状を呈しており、表裏面、一側面を使用しており、残る一側面は成型痕のみで使用していない。灰色から黄褐色の石英質に近い硬質な石材を用いており、仕上げ砥であろう。

S8は下段北地区SE416の埋土下層から出土した。白色の筋の入ったきめの細かい青灰色の石材を用いており、このいわゆる輝緑凝灰岩は篠山から三田にかけての丹波地域で産出するものとされる。一端を失うが、方形板状の角を落として成型しており、小口面や側面には成形時の削痕が残る。表面のみ使用しており中央部付近が大きく窪む。仕上げ砥であろう。

S9は下段北地区のSR415から出土した。両端部を欠失し、断面が平行四辺形を呈しており、最も狭小な面のみ風化した自然面で、残りの3面をよく使用している。使用された各面の両端は小段をもって盛り上がっている。大理石のような石英質に近い硬質な石材を用いており、仕上げ砥であろう。

S10は北地区の上段裾で採集された。層状を呈した粘板岩系の石材を用いている。方柱状の石材を用い、左側面は剥がれ落ちているが、一端部は磨かれて平滑になっており、破損後も利用し続けたものであろう。表面は中央が継やかに窪みよく使用されている。裏面は1/3の位置で屈曲し、各々使用している。右側面も平滑に使用されている。仕上げ砥或いは中砥であろう。

S11は上段南地区のSX1007の東肩から出土した。S8と同様の白色の筋や点の石紋が入ったきめの細かい青灰色の石材を用いており、層状に剥がれる。このいわゆる輝緑凝灰岩は遺跡近隣の丹波地域で産出するものとされ、同系統のものに中国の端渓硯も含まれるが、出土品は色が薄くやや軟質である。一端を失うが、方形板状の角を面取りして成型しており、小口面には横方向、側面には横方向とやや斜め方

向の成形時の削痕が残る。表裏面を使用しているが、裏面の過半は剥離している。仕上げ砥であろう。

S12は上段南地区のSK70から出土した。褐灰色の石材を用いており、端部と一個面を失うが、方柱状の形状をもち、4面を使用している。裏面は成形痕も認められず、割れた面を残す。一個面には横方向の溝状の工具と思われる痕跡が残り、成形痕と思われる。割れた面を含めて一部に火を受けた可能性がある。仕上げ砥或いは中砥であろう。

石臼

S13～15は花崗岩を用いた石臼である。全て半分に割れている。いずれも近世以降のものである。

S13は下段北地区のSR400上層から出土した。上臼でもの配りの供給孔、軸受け孔、横打ち込み式の把手の孔及びその予備の孔が残る。復元直径34.3cm、高さ18.9cmを測る。上面には縁が付き、窪んでいる。下面是平らで、ふくみは少ない。供給孔は両側から穿孔されている。下面には供給孔に向かう弧状の溝と、その溝や孔から放射状に刻まれた溝が3区画分残っている。全体は6区画に分けられていたと思われるが、彫り直しの可能性が高い。

S14は埋桶と思われるSK437から出土した下臼である。軸受孔の一部が残り、幅0.6cm程の細く浅い溝の痕跡が斜めに走っている。4区画分残っており、復元すると8区画のものと思われる。直径28.35cm、高さは10.0cmを測る。

S15は下段南地区のSD916から出土した下臼である。軸受孔の一部が残り、幅0.5cm程の細く浅い溝の痕跡が斜めに走っている。直径31.25cm、厚さは7.1cmと比較的の薄い。3区画分が残存しているが、5本、6本、8本と溝の数が異なり、目立てをし直した可能性が高い。

五輪塔

S16～18は五輪塔の地輪である。いずれも石組などの石材として再利用されたものであろう。今回の調査では五輪塔の他の部位は出土しておらず、利用しやすい直方体の石材を利用したものであろう。

S16は下段北地区のSR400上層の擾乱内から出土した。27.7×23.5cmのやや長方形で、高さは22.1cmを測る。下面が摩滅している。

S17は下段北地区のSR415から出土した。一辺21.5cmの方形、15.3cmの高さで、上面に直径4.5cm、深さ2.0cmの孔を穿つ。

S18は下段北地区のSR415から出土した。29.8×28.5cm、高さ22.9cmを測る。上面の中央部は直径15cmほど風化が認められない範囲があり、長らく水輪が乗っていたものであろう。下面是丁寧な整形は行つておらず、五輪塔としては土に少し埋まるような据え方をしていたものと思われる。

【参考文献】

三輪茂雄1978「ものと人間の文化史25　臼」法政大学出版局

第5章 西地区(日下部経塚)の調査

第1節 調査に至る経緯

平成26年9月から実施された日下部遺跡本発掘調査（遺跡調査番号：2014116）の際、調査区の北西側に隣接する斜面地での存在が確認された遺跡である。

遺跡は、神戸市北区八多町柳谷付近のキラシ山（標高443m）に端を発し、北に伸びる尾根先端部の東向斜面地に立地している。円形の積石塚状の遺構と、その上面周辺より土師器片が採集され、埋蔵文化財が存在する可能性があった。

このため平成27年2月から3月にかけてトレンチによる確認調査（No19-2地点・遺跡調査番号：2014153）を実施した。トレンチは西側斜面上方から東側下方に向けて幅1m、長さ123m～16mの規模で7ヶ所設定した。

調査の結果、南側に設定したトレンチ（T1）で墳墓ないしは経塚の可能性をもつ積石塚状の遺構と、さらに北側のトレンチ（T2・3）では2ヶ所の平坦面が確認され、297m²の範囲に埋蔵文化財が存在することが明らかになった。この範囲については調査前の現況を記録するため測量調査を実施した。

この成果をもとに、開発事業者である西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所と協議した結果、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は、平成27年4月7日から5月1日にかけて実施した。

なお、この西地区は他の地区とは離れており、立地や性格も他の地区が集落であるのに対して丘陵上の経塚と異なる。検出された遺構番号は、他の地区から独立して01番から付与した。

第2節 調査の方法

調査は人力掘削により埋土を除去した後、遺構面の精査を行い遺構を検出した。埋土はベルトコンベアにより調査区外搬出した。検出された遺構は必要に応じて写真撮影・遺構実測等の記録作業を行った。また遺跡の立地状況を記録するため調査区内の地形測量を電子平板（遺構くんCubic：株式会社CUBIC製）により実施した。

第3節 遺構

調査区は標高187～184mの東向斜面地に位置する。調査区南側で経塚SX01、中央付近で集石SX02、中央付近斜面下方と北端部で平坦面（テラス1・2）を検出した。以下遺構の詳細について述べる。

1. SX01（図版73～76、写真図版110～113）

調査区南側、標高187m～186m間に造成された平坦面上に築かれた積石塚状の経塚である。

平坦面は南北方向10m、東西方向4mの範囲に及び、その中央付近に南北方向6m、東西方向4.4mの範囲に梢円形に、大きさが5×5cm前後から40×20cm前後の亜角礫が敷き詰められている。石は中央部付近で2段前後、東側斜面部で3段前後積み上げている。中央部および南側は石の密度は高いが、北側は散乱した状況で人為的に破壊された様相を呈す。

中央部北寄りに35×35cm、厚さ10cmの扁平な石が敷かれており、石の上より土師器経筒底部片、中国

銭貨11枚が集中して出土した。扁平の石は石室の底板と理解でき、経筒の埋納場所と特定できる。

経塚の下部構造は斜面地を削平し、幅2.5m前後の狭小な平坦地を造っている。斜面上方側には溝状に削り出した痕跡が認められる。また平坦部の縁辺には東西方向2m前後、南北方向1.2mの土坑が掘削されている。遺物の出土はなかったが、10×15cm～20×30cm大の亜角礫が検出された。土坑の機能については不明である。平坦部造成後2層程度の土を盛上し塚を築いている。

経筒・副納品出土状況

経筒蓋298は底板を覆う埋土上層中より出土し、経筒口縁部・底部片299、中国銭貨（M22～32）11枚が底板直上ないしはその付近より出土した。このうちM32の皇宗通寶は底部破片の下、それ以外は底部破片の上より出土している。景祐元寶M24、元豐通寶M25、開元通寶M26、元豐通寶M28、元祐通寶M30、熙寧元寶M31は底部破片の直上より纏まって出土している。M23の元祐通寶はこれらの銭貨より少し浮いた状態、元祐通寶M22、皇宗通寶M27、嘉祐通寶M29は少し西に離れた状態で出土している。また天聖元寶M35は、銭貨が集中して検出された付近の表土中より出土している。

雁股鐵M33は埋納場所より30cm東の石の間より、鐵身先を南に向けて出土した。刀子M34は埋納場所の南西側1mのところで、切先を北に向かって出土した。

経筒・副納品は、盜掘を受け散乱した状況で出土したと考えられ、副納品は原位置をとどめていない。

2. SX02（図版72・77、写真図版113）

調査区の中央部斜面上方、標高186～187mの斜面地に立地する集石である。東西方向2.5m、南北方向2.0mの範囲に10×15cm～30×35cm大の礫が集中している。遺物は出土しなかった。

3. テラス1（図版72・77、写真図版114）

調査区中央、斜面下方の標高184～185mにかけて広がる平坦地である。南北方向10m、東西方向5m前後の規模である。平坦面は斜面地を2段に開削し、その後盛土で造成している。遺物は出土しなかった。

4. テラス2（図版72・77、写真図版114）

調査区北端、標高185～186.2mにかけて広がる平坦地である。斜面下方の東側部分の盛土は流出しており、全体の規模は不明確であるが、南北方向4m以上、東西方向2.5m以上の規模である。平坦面は斜面上方側を幅2.5mの規模で平坦に削り出した後、斜面下方部分の地山を削り出して整形している。

平坦面上方側には溝の痕跡が確認でき、SX01の下部構造と類似している。遺物は出土しなかった。

第4節 遺 物（図版78、写真図版115）

遺物はSX01より蓋付きの土師器製経筒と副納品の中国銭貨、鉄製雁股鐵・刀子が出土した他、表土中より須恵器杯身、銅製の笄が出土した。

1. 土師器製経筒（298・299）

298・299はSX01中央部より北側の扁平な石の上（299）および表土中（298）から出土した。経筒と考えられる土師器製の蓋付容器である。

蓋298は全体的に剥離が著しく遺存状況は悪い。器形は天井部が丸く、口縁部が外傾する丸底の皿状を呈する。口縁部は復元値で17.0cm、高さ3.0cmである。

筒身299は胴部を欠き、口縁部と底部の破片が遺存していた。口縁部は内傾し端部を丸く取めている。胴部には斜め方向のユビナデの痕跡が認められる。底部は丸底でユビオサエ調整の痕跡が顕著に残る。口縁部径は復元値で15.2cm、底径は13.8cmである。筒身の高さは26cm前後と想定しているが明確な根拠はない。

2. 須恵器

表土中より杯身300が1点出土している。口縁部は短く内傾し、先端は尖っている。外面体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ（右回転）が施されている。法量は復元値で口径11.9cm、受部径14.6cm、器高4.05cmである。

陶邑編年のTK209型に併行する時期と考えられる。

3. 金属製品 (M22~M36)

鉄製品 (M33・M34)

雁股鎌M33と刀子M34が出土した。いずれもSX01より出土している。

M33はSX01中央部東側より出土した大型の雁股鎌である。積石の直下で鍔身先端を南西方向に向け、ほぼ水平の状態で出土した。鍔身端・茎端部を欠損するが、残存長は10.05cm、残存幅は5.1cmを測る。股内側に刃をもつ片切刃造で刃部幅は1.9cm、厚さは0.35cmを測る。刃部は大きく反り返っている。

経塚から出土する太刀や刀子には折り曲げられたものがあることが知られており、同様の行為が行われた可能性が考えられる。鍔身部と茎部の境は台形闊で、茎部の断面形は四角形を呈する。

M34はSX01中央部付近より切先を北側に向けた状態で出土した。長さ20.2cm、刃幅2.5cm、刃の厚さ0.6cmの刀子である。刃先がわずかに反り上がり、直角の背闊を有して茎部へ続く。刃先は斜めに造られる。先細りの茎部の中央には直径0.6cmの比較的大きな目釘孔が穿たれる。

銅製品 (M22~M36)

中国錢貨 (M22~M32・M35) と笄M36が出土した。

中国錢貨はM35を除きSX01中央部より北側の扁平な石の上に集中して出土した。その内訳は元祐通寶3枚、元豐通寶・皇宗通寶各2枚、景祐元寶・開元通寶・熙寧元寶・天聖元寶各1枚である。M26の唐錢を除きすべて北宋錢である。

M22 元祐通寶（北宋、初鑄年1086 篆書）縁が幅広。M23 元祐通寶（北宋、1086 篆書）。M24 景祐元寶（北宋、1034 真書）。M25 元豐通寶（北宋、1078 篆書）やや厚い。M26 開元通寶（唐、621 真書）裏面に范ずれ。M27 皇宗通寶（北宋、1038 篆書）裏面わずかに范ずれ。M28 元豐通寶（北宋、1078 行書）。M29 嘉祐通寶（北宋、1056 真書）やや厚い。M30 元祐通寶（北宋、1086 篆書）。M31 熙寧元寶（北宋、1068 真書）。M32 皇宗通寶（北宋、1038 真書）裏面わずかに范ずれ。M35 SX01周辺表土中出土 天聖元寶（北宋、1023 篆書）裏面に范ずれ。

笄 (M36)

M36は調査区南西側の表土中より出土した銅製笄である。折れ曲がっているが長さ15.9cmの完形である。上端部は軸方向に直角に終わっており、背面は角を面取りしている。

基部の幅は1.55cmで、上端から8cmの位置以下から幅を減じている。基部表面の中央に幅0.5cm、深さ0.2cmの断面形がU字形の溝を10.5cmの長さで走らせており、溝の周囲は幅0.2~0.3cm、高さ0.1cmで盛り上がりて縁取りを施している。同じ縁取りは上端部にも見られる。この縁取り部や溝の底では白褐色の鉄が生成している。他に魚々子模様などの装飾は見られない。基部の両側面は刃をもつように薄くなるが、幅を減じた部分の断面は比較的丸い。

第5節 小 結

調査の結果、積石塚状の遺構SX01は雁股轍・刀子・中国銭貨を副納する経塚であることが判明した。その構造は地山を開削し、斜面下方に盛土することにより平坦面を造成している。その後さらに塚状に盛土を行い、盛土上に石を敷き詰め、土師器製経筒片と中国銭貨が集中して出土した扁平な石を底板とし周囲を石で囲い石室が構築されていたと考えられる。

ただ散乱する石や副納品の状況から盗掘による破壊を受けており、石室構造や経筒等の埋納状況は明らかにできなかった。

またテラス1・2についてもSX01と同様の基礎構造をもっており、複数の経塚の存在が想起される。

積石に用いられた石材は、周辺の露頭観察から判断すると、地山中に含まれる亜角礫ないしは円礫が使用されている。

土師器製経筒の出土した経塚は三田市下深田経塚、姫路市甲山経塚、赤穂市八祖山経塚、蘿山市上板井経塚、西山北古墳経塚・丹波市立石経塚、朝来市宮ノ谷古墳群経塚、豊岡市馬場ヶ先古墳経塚・田多地経塚などはじめ、日下部遺跡近隣の神戸市北区淡河町で萩原経塚・北別僧経塚がある。

なかでも本遺跡出土の経筒は、豊岡市馬場ヶ先古墳経塚出土の経筒と口縁部の形態、丸底の底部などが類似している点が注目される。

経塚の時期については、副納品の中国銭貨が参考となる。北宋銭のうち初鑄年代が一番新しい元祐通寶（元祐年間：1086~1093年）以降の時期が考えられるが、唐銭である開元通寶を除きすべて北宋銭で構成されている点を考慮すると、12世紀代までに取まる可能性が高いと考えられる。

【参考文献】 森内秀造1992「兵庫の経塚」博物館普及資料第10集 兵庫県立歴史博物館
水井久美男1996「日本出土銭幣観」兵庫埋蔵銭調査会



第3図 調査区周辺の露頭

第6章 日下部遺跡における樹種同定

1. はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 試料と方法

試料は、日下部遺跡より出土した提灯上輪、桶搏板、漆器椀、箸、樽蓋板、曲物底板、箱物、横櫛、鍋蓋、下駄などの木製品計77点である。なお、W52の下駄では差歛の状態が異なったため、またW92の桶底板では組合せの底板であったため、計4点を参考試料とした。時代は近世である。試料は第2表に記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（極目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

観察の結果、21分類群が同定された。第2表に結果を示し、分類群の顕微鏡写真を示す（第4~10図）。以下に木材構造の特徴を記す。

1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴から、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の济州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高く、弓などに用いられる。

2) マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで、多くの樹脂細胞が散在して見られる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイスマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50~80cmである。材は耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

3) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末

端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種であるため、温帯性のモミが考えられる。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

4) ツガ属 *Tsuga* マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2~4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴から、ツガ属に同定される。ツガ属にはツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20~25m、径50~80cmである。材は耐朽、保存性は中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

5) マツ属 複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と穏やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴から、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え、広く用いられる。

6) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強弱で、広く用いられる。

7) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強弱、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

8) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強弱でらい、耐

朽、耐湿性も高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

9) アスナロ属 *Thujopsis* ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、1分野に2~4個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からアスナロ属に同定される。アスナロ属には、アスナロ、ヒノキアスナロがあり、常緑高木で、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1mに達する。材は、耐朽、保存性が高く、建築など広く用いられる。なお、アスナロの特殊用途には漆器本地があり、輪島塗り（石川県）がそれである。

10) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科

小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は、同性で1~3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の特徴からクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

11) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、はだ木など広く用いられる。

12) ブナ属 *Fagus* ブナ科

小型でやや角張った道管が、単独あるいは2~3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2~数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イスブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20~25m、径60~70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密で、締性があり、保存性は低い。容器などに用いられる。

13) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以

上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

14) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が1~2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は單穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1~7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20~25m、径60~70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強韌で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

15) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2~3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~40本ほどである。放射組織は、異性放射組織型で、2細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15~20m、径50~60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で靭性があり加工しやすく、建築材などに用いられる。

16) イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが1~2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。多室の直立細胞には菱形結晶が見られる。

以上の特徴からイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

17) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2~数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の特徴からトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15~20m、径50~60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性が低いが、容器などに用いられる。

18) ミズキ属 *Cornus* ミズキ科

小型で丸い道管が、ほぼ単独で散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~35本ぐらいである。放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる單列のものと、2~5細胞幅ぐらいで紡錘形を呈する多列のものからなる。

以上の特徴からミズキ属に同定される。ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭など

に用いられる。

19) カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

中型の道管が、単独および放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性放射組織型で1~2細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列し、リップルマークを呈する。

以上の特徴からカキノキ属に同定される。カキノキ属は、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

20) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1~3列配列する環孔材である。孔圈部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は單穿孔である。内部にはチローシスが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1~3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属には北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運動道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

21) タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は本部と師部からなり、その周間に維管束鞘が存在する。放射断面及び接線断面では柔細胞及び維管束、維管束鞘が押軸方向に配列する。

以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

4. 所見

同定の結果、日下部遺跡の本製品は、77点中57点が針葉樹であり、過半を占める。多いものからスギ23点、マツ属複維管束亜属13点、アスナロ属11点、クリ5点、トチノキ5点、ヒノキ4点、カヤ2点、モミ属2点、ケヤキ2点、カツラ2点、ミズキ属2点、マキ属1点、ツガ属1点、コウヤマキ1点、クマシデ属イヌシデ節1点、ブナ属1点、コナラ属アカガシ亜属1点、イスノキ1点、カキノキ属1点、トネリコ属1点、タケ亜科1点であった。

スギが最も多く、桶博板、櫛蓋板、曲物底板、桶底板、箱物、鍋蓋、下駄、箸に利用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる樹木である。次いでマツ属複維管束亜属が多く、提灯上輪、鍋蓋、下駄、擂り粉木、角材、板材、丸太材に利用されている。重硬で水湿に良く耐え腐りにくい樹木である。アスナロ属は、曲物底板、箱物、柄、把手、下駄、箸、付木、板材に利用されている。アスナロ属は、ヒノキには劣るが木理通直、肌目緻密であり、耐久・保存性が高く、水湿にはヒノキよりもよく耐える樹木である。そのため建築や桶などの用材としてよく用いられる。ヒノキは、桶博板、絹木板、箸、切匙に利用されている。木理通直で大きな材が取れる良材であり、保存性が高い樹木である。特に心材は耐久・耐湿性が高く、用途は広汎で工作が容易で表面の仕上がりはきわめて良好で光沢が出る。カヤは、棒状木製品、板材に利用されている。耐久・保存性が高く水湿に耐える材であり、加工が容易で削製しやすく、表面の仕上がりが良好で光沢が出る樹木である。モミ属は、絹木板、下駄に利用されている。モミ属は温帶性のモミと考えられ、耐久・保存性は低いが、軽軟なため加工が容易な樹木である。マキ属は、桶博板に

利用されている。耐久・保存性は高く水湿に強くやや重硬で強靭な樹木である。ツガ属は、板材に利用されている。重硬で耐久・保存性は中庸で切削・加工はあまり容易でない樹木である。コウヤマキは、杓子に利用されている。耐湿性に特に優れ、針葉樹の中では最も加工が容易な材である。古代以前に多用され、また自然の繁殖力が弱いこともあり中世以降の報告例は少ない。クリは、漆器椀、下駄の歯、柄、杭に利用されている。なお、下駄は台と片方の歯はカツラであったが、もう片方はクリであった。クリは重硬で保存性が良い材であり、柱材などの建築材として比較的よく用いられる樹木である。トチノキは、漆器椀、漆器大皿、円形挽物などの容器に利用されている。耐久・保存性は極めて低く、切削・加工が容易な柔らかい材で、剖物の容器によく用いられる。ケヤキは漆器椀に利用されている。高木になり大きな材が取れ、概して強く強靭で従曲性に富み、耐久・保存性は高く水湿にもよく耐える樹木である。ケヤキは繩文時代以降現在まで伝統的に本地に用いられる材で、剖物に普通に使われるが、漆椀では挽物が多い。カツラは、同一個体の下駄の台と歯に利用されており、もう一方の差歛はクリであった。軽軟均質で、耐久・保存性は低いが、切削・加工が極めて容易な樹木である。また、明石城武家屋敷跡から出土した下駄の歯もカツラであった。ミズキ属は、漆器椀に利用されている。緻密で重さ、堅さとともに中庸で、加工が容易な樹木であり、材は白く、磨くとつやが出るため盆や椀などの容器や器具の柄、杓子などに用いられる。なお、容器では椀などの丸物の木地に特に用いられる。クマシデ属イヌシデ節は、箸に利用されている。弾力性に富み、強さ中庸の材である。ブナ属は、杓子に利用されている。強さ中庸、切削・加工も中庸であるが、弾性と従曲性に富む材である。コナラ属アカガシ亜属は、輪切り材に利用されている。堅硬な材であり、広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。イスノキは、横櫛に利用されている。材質は耐久・保存性にすぐれるが、重硬で切削・加工が困難な材であり、櫛によく利用される。表面仕上げが良好であるため、細かい細工や器具類にもよく利用される。カキノキ属は、棒状木製品に利用されている。カキノキ属は概して堅硬な材と言える。トネリコ属は、下駄に利用されている。概して強靭で堅硬な材で、従曲性が非常に大きく、割裂は容易である。タケア科は、塗り箸に利用されている。材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え剖塑性に富み、また細工が容易であるので、さまざまな素材として利用される。

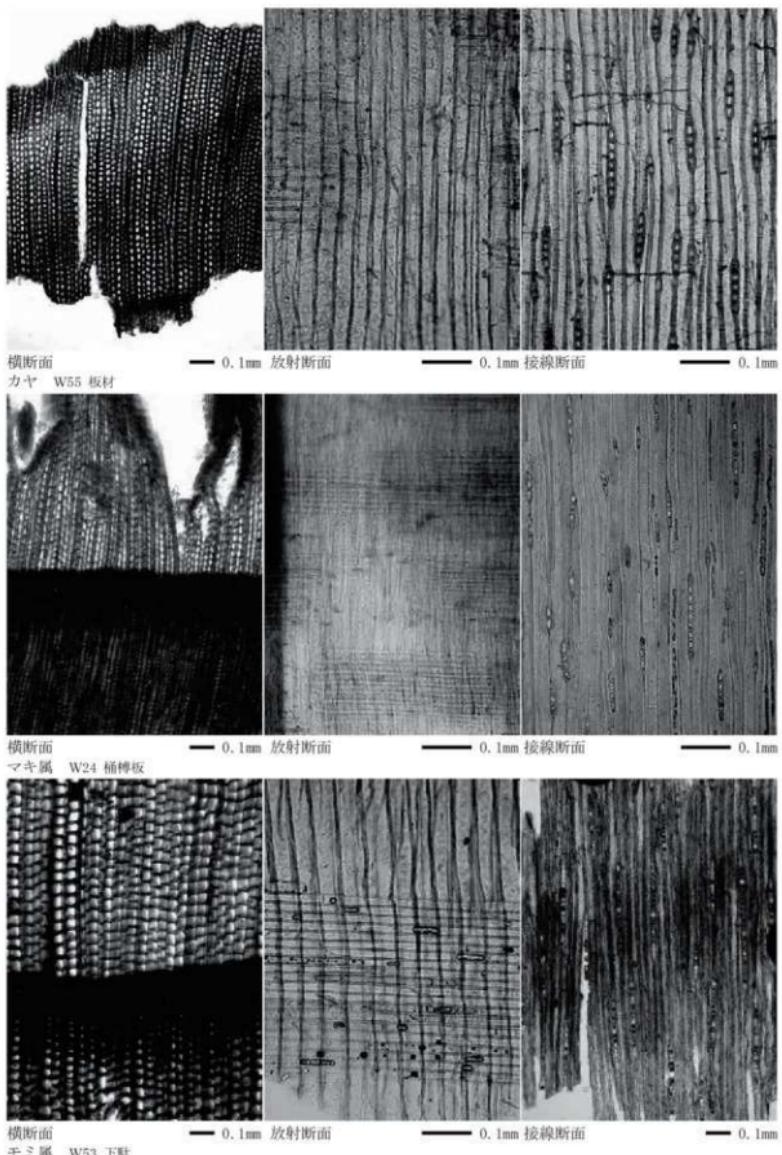
本遺跡で同定された樹種は温帯に広く分布する樹木が多い。桶博板や箱物などの板状木製品や底板、鍋蓋などには加工が容易で水湿によく耐える針葉樹を用いて、椀や皿などの容器、横櫛などには広葉樹の中でも比較的の加工が容易であるが丈夫で木目がきれいなものを用いる傾向が見られる。なお、一般に椀などの容器は剖物・挽物であり、その用材には形を整えやすく加工が容易であり狂いや割れが少ないとから、広葉樹の中でも比較的の硬いものが選定されることが多い。下駄には手に入れやすく加工が容易で水湿に耐える針葉樹を用いるが、一方で広葉樹のカツラを用い、破損部にはクリを利用し修繕しているものもある。同定された樹種は遺跡周辺や近隣地域より流通によってもたらされたと推定される。

【参考文献】

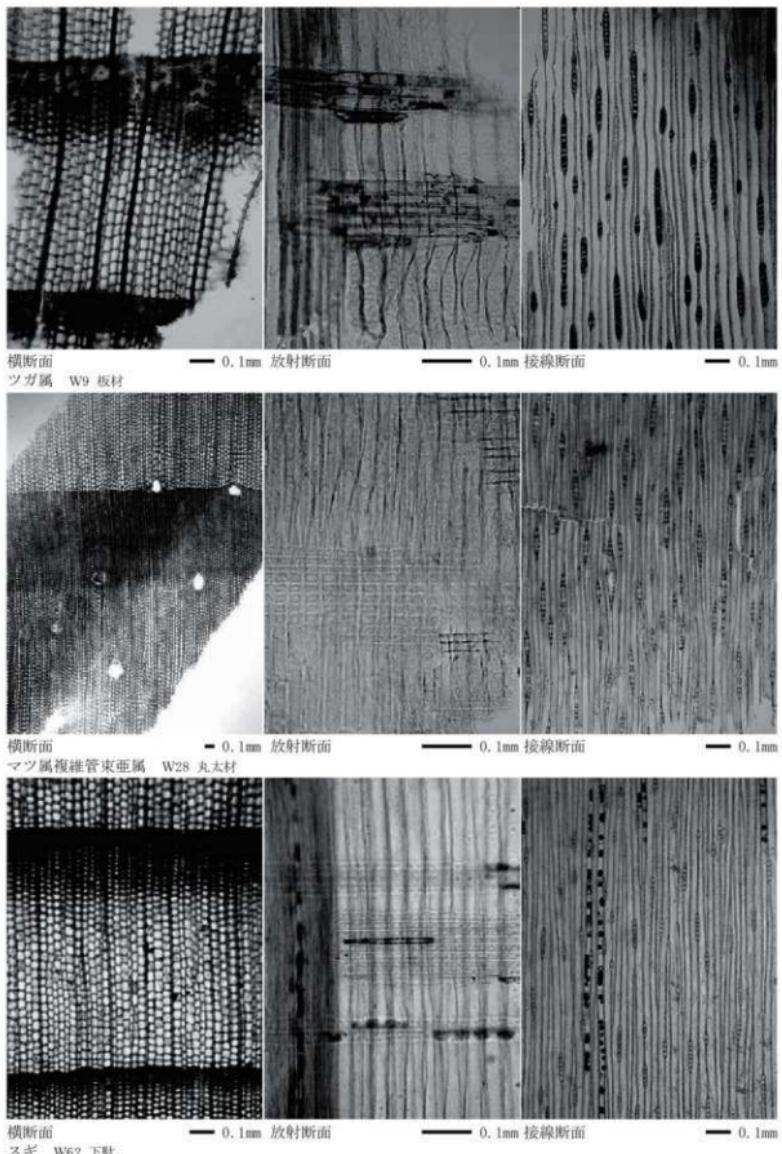
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。雄山閣。p.449.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造。文永堂出版。p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造。文永堂出版。p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品叢覧。雄山閣。p.296.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号。植生史研究会。p.242.

第2表 日下部遺跡における樹種同定結果

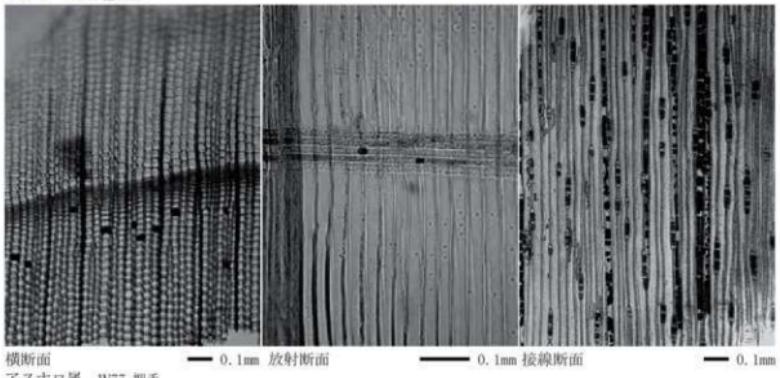
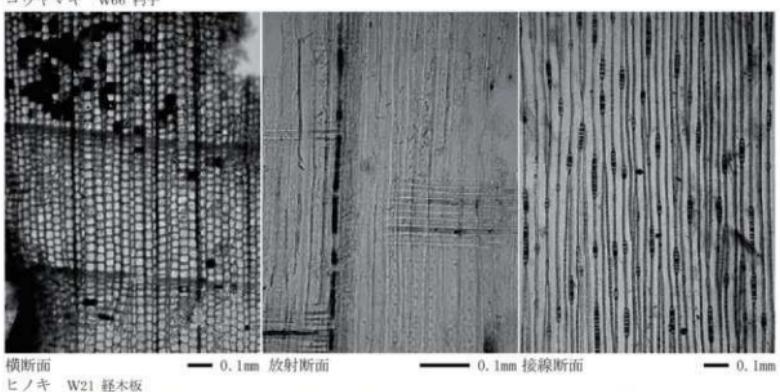
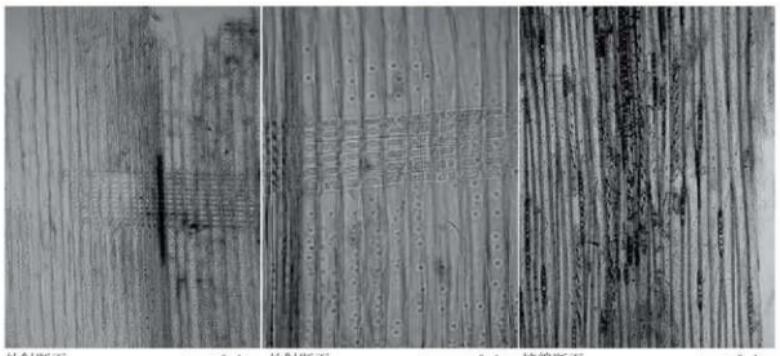
番号	製品名	結果(学名・和名)	地区	位置	遺構	土層	備考
W 2	日本	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	中央	SR400 住居			
W 4	漆器	<i>Chamomyropsis obsoleta</i> Endl. リゾノキ	北端	SR400	中下層	小型壺	
W 5	籠(ト)箱	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北端	SR400	上層	漆器	
W 6	漆器	<i>Quercus suber</i> Cytisophyllous ツバキ属 樹皮	南	SR400	上層		
W 7	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR400	上層		
W 9	和紙	<i>Tsuga</i> ツガ属	北	SR400	上層(木太列) 切り込み		
W10	漆器	<i>Zelkova serrata</i> Makino カセキノキ	南	SR415	壺内	赤色土壺	
W11	漆器	<i>Aesculus turbinata</i> Blume ハチノキ	北	SR415		外壁内赤色土壺	
W12	円形模物	<i>Aesculus turbinata</i> Blume ハチノキ	北	SR415		黒色漆器	
W14	漆器	<i>Carpinus sect. Carpini</i> ハマシノ属イヌシヤ属	北	SR415		黒色漆器	
W16	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR415		黒色	紅写文字
W17	漆器	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SR415	外壁(木太列上)	灰色乳白色	
W18	円形漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR415	外壁(木太列上)	内丸	
W19	漆器	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SR415	外壁	黑色	
W20	漆器	<i>Abies</i> キシノ属	北	SR415	外壁	赤色	
W21	漆器	<i>Chamomyropsis obsoleta</i> Endl. リゾノキ	北	SR415	外壁	赤色	
W22	漆器	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SR415	外壁	内丸	
W24	漆器	<i>Podocarpus</i> ポドカーパス	北	SR415	外壁	内丸	
W25	人骨	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SR415	壺内		
W26	漆器	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SR415	外壁下層		
W27	漆器	<i>Diospyros lacrymosa</i> Sieb. et Zucc. ハシノキ	北	SR415		破壊壺	
W28	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR415		壺内底面	封丸
W29	漆器	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SR415		壺内底面	封丸
W30	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR415		壺内底面	本丸
W41	丸	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ハリ	北	SR415		壺内底面	
W44	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK301		矢板状凸出	
W45	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK301		桶底	
W46	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK301		桶底	
W48	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK301		桶底	
W50	漆器	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK301		桶底	
W51	漆器	<i>Prunus</i> ブラックザクラ属	北	SK301		桶底	
W52	漆器	<i>Ceratopeltites japonicus</i> Sieb. et Zucc. ハリノキ	北	SK301		桶底	
W53	漆器	<i>Ceratopeltites japonicus</i> Sieb. et Zucc. ハリノキ	北	SK301		桶底	
W54	漆器	<i>Abies</i> キシノ属	北	SK301		桶底	
W55	板付	<i>Tortrix maderae</i> Sieb. et Zucc. ハリ	北	SK301		桶底	
W56	角材	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK301		桶底	
W59	丸	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ハリ	北	SK301		桶底	
W60	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK301		桶底	
W62	下駄	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK608	北端石割内	漆地	
W63	下駄	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK608	北端	漆地	
W64	靴	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ハリ	北	SK608	北端	漆地	
W65	漆器	<i>Aesculus turbinata</i> Blume ハチノキ	北	SK608		外壁内赤色土壺	
W66	竹子	<i>Scindapsus verticillatus</i> Schlecht. ハコヤシキ	北	SK608		外壁内赤色土壺	
W67	漆器	<i>Aesculus turbinata</i> Blume ハチノキ	北	SK510	北端石割内	漆地	
W68	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK608	中央底部直角	外壁内赤色土壺	
W69	竹子	<i>Polygonatum</i> ハコヤシキ	北	SK608	中央底部直角	外壁内赤色土壺	
W70	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK619	壺内	黑色	
W72	6.6H	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK619	壺内	黑色	
W73	漆器	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ハリ	北	SK601		外壁内赤色土壺	
W74	板付木製品	<i>Diospyros</i> ハシノキ属	北	SK601		外壁内	
W75	漆器	<i>Bambusa</i> バンブス	中央	SK449	壺内附上		
W76	板付	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	中央	SK65	壺内附上	赤色土・黒色漆	
W77	把手	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SK575		本丸	
W78	曲木或曲板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK621		漆地	
W79	漆器	<i>Cornus</i> イヌキ属	北	SK621		赤色土壺	
W80	下駄	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SK621		漆地	
W81	漆器	<i>Chamomyropsis obsoleta</i> Endl. リゾノキ	中央	SK736	壺内附上		
W84	漆器	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	中央	SK736	壺内附上		
W89	切削	<i>Chamomyropsis obsoleta</i> Endl. リゾノキ	中央	SK736	壺内附上		
W90	丸	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc. ハリ	中央	SK736	壺内附上		
W92	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK736	壺内附上	鏡み台せき	
W93	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK736	壺内附上		
W94	漆器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK736	壺内附上		
W95	板付	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	中央	SK736	壺内附上	漆地	
W96	板付	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	中央	SK736	壺内附上	漆地	
W97	埋木 249 ~ 266	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SK698		埋木組み上げ	
W102	下駄	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SR400	東半側及	漆地	
W103	下駄	<i>Thujopsis</i> ツガノ属	北	SR400	東半側	漆地	
W105	動物	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don クマツノ属	北	SR400	東半側	漆地	
W108	下駄	<i>Pinus sylvestris</i> Diplycarpus ツガ属 樹皮	北	SR400	東半側	漆地	
W111	漆器	<i>Aesculus turbinata</i> Blume ハチノキ	北	SK621		外壁内赤色土壺	
W112	漆器	<i>Cornus</i> イヌキ属	北	SK621		赤色土壺	
W113	漆器	<i>Zelkova serrata</i> Makino カセキノキ	北	SK621		赤色土壺	



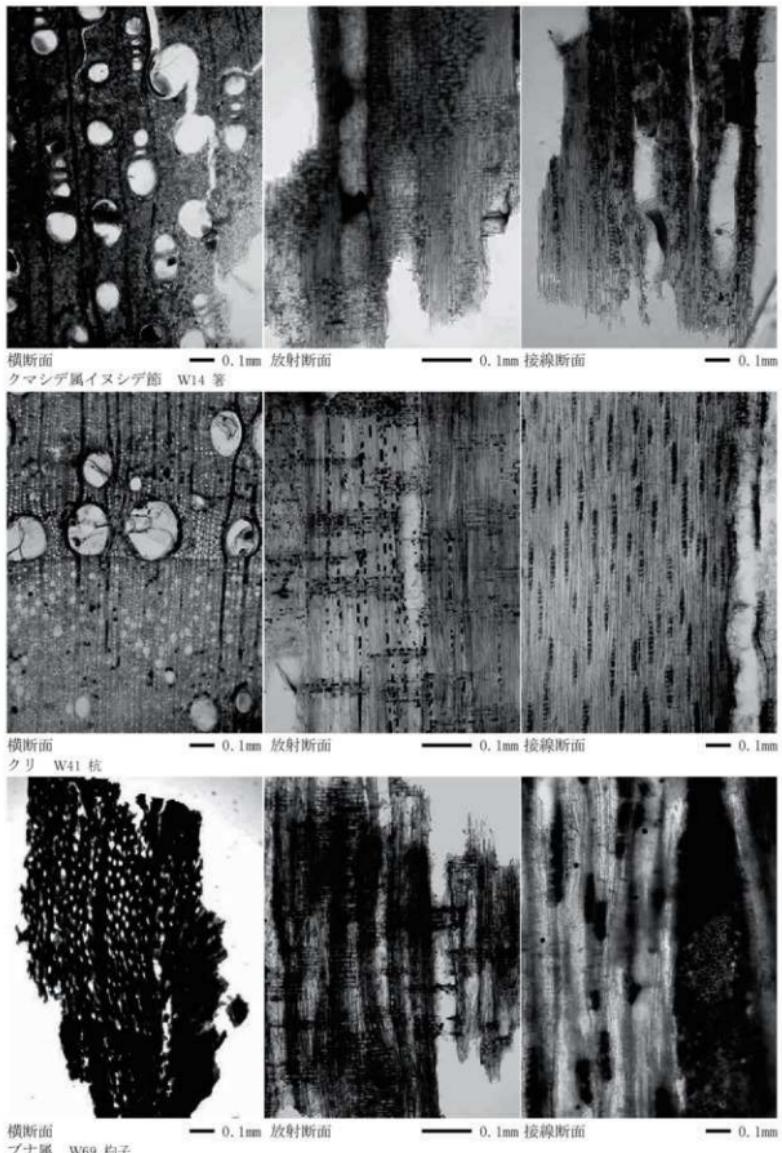
第4図 日下部遺跡の木材I



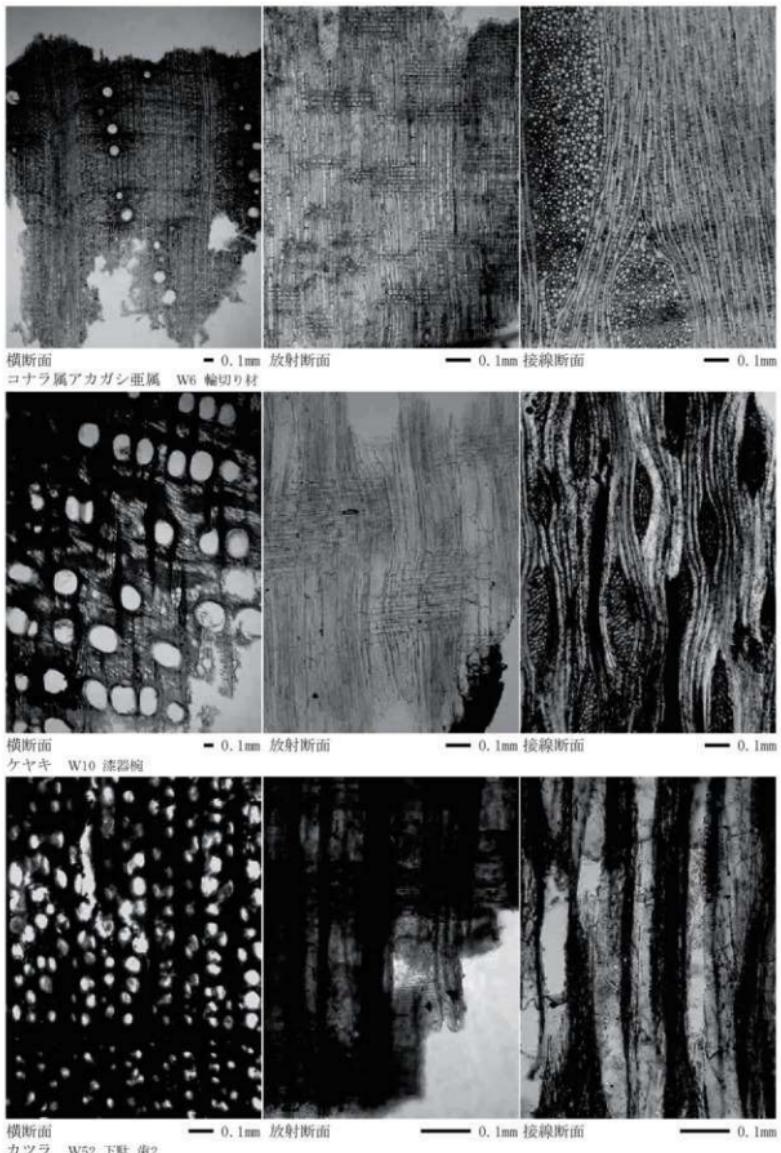
第5図 日下部遺跡の木材II



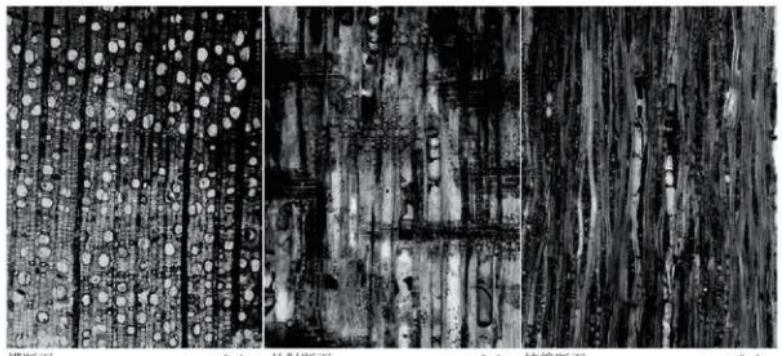
第6図 日下部遺跡の木材III



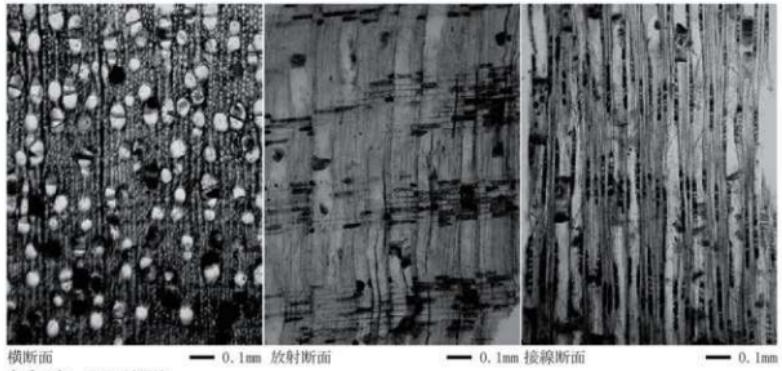
第7図 日下部遺跡の木材IV



第8図 日下部遺跡の木材V



イスノキ W38 横櫛

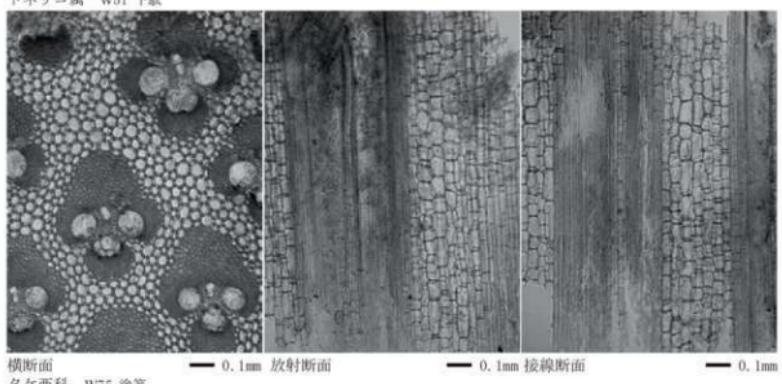
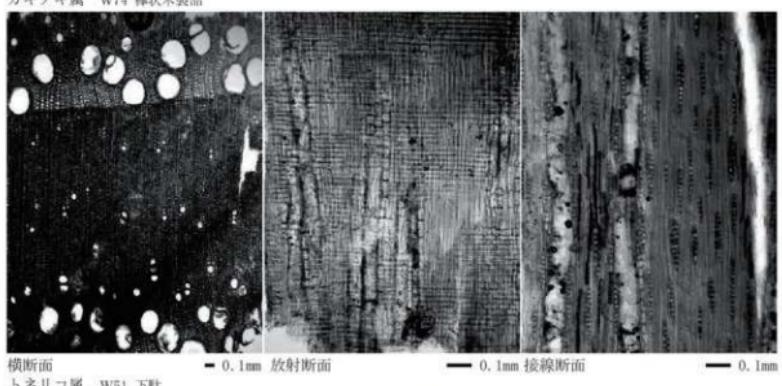
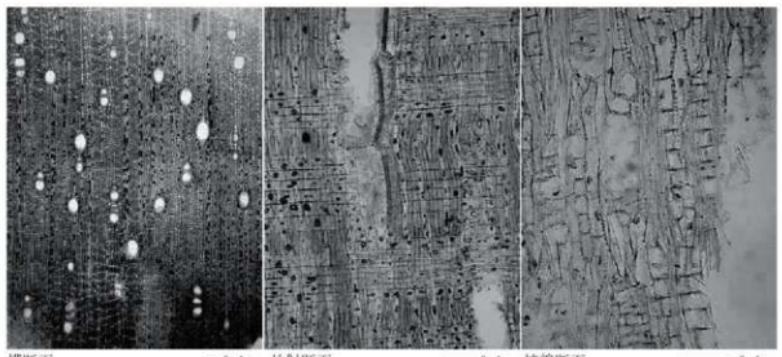


トチノキ W111 漆器柵



ミズキ属 W79 漆器柵

第9図 日下部遺跡の木材VI



第10図 日下部遺跡の木材VII

第7章 まとめ

(1) 遺構について

調査区は上段と下段に大きく分かれ、中世前半の遺構は上段に集中し、下段の北地区・中央地区に近世の屋敷に関連した遺構が集中することがわかった。

下段ではSR400を除くと多くが近世以降に作られた遺構であることがわかった。これらの近世の遺構では、水路や溜井など排水・用水施設を上段や下段の縁辺部に配していることが何れ、埋桶や柱穴などが集中する部分が屋敷の中心を占めている。中でも北地区と中央地区南半部に偏っており、おそらく一~二軒程度の屋敷が建っていた可能性が推定できる。

下段で検出された遺構はほとんどが近世のものであるが、18世紀後半以降の遺構は非常に浅くしか残存していなかった。これはさらに後世に削平されたものと思われるが、16・17世紀までの遺構がより残存していることから、発掘調査中には明確にできなかったが、一旦部分的に整地されていた可能性が考えられる。特に下段北地区は湧水が著しく、SR415のような大規模な排水施設を構築すると同時に生活面を嵩上げしていたのであろう。嵩上げした上面から掘り込まれた遺構は、それ以前の同種の遺構よりも浅い位置までしか掘削されなかつたためであろう。

検出された埋甕・埋桶には近世家屋に当然配置される便槽である便甕・便桶の性格を有するものがあると思われる。桶が2基東西に並んで検出されたのは北地区の東端部のSK533・534やSK574・572であるが、これらには切り合いがあるようで、併置されたものではないようである。またやや大型の埋桶はSK608の近く屋敷区画の南寄りに配されている。

埋桶・埋甕から食事具（木製椀・箸・杓子・搔り粉木など）や文房具（水滴）が出土する状況は食器を洗うなどの炊事や墨を擦る際の水を溜めていた水桶・水甕であった可能性が高いものと考えている。

調査区内からある程度の瓦や塼が出土している。塼は南地区上段周辺に集中しており、瓦もその周辺に多い。下段北地区からも出土するが、下段では積極的に瓦葺建物が存在した状況ではない。少なくとも瓦葺建物を解体して、廃材を埋めたような様子ではなかった。

上段の南地区や南西地区では、大歳神社の旧境内が検出された。北側の区画溝や整地層内からは16世紀に遡る遺物が検出されているが、神社関連の施設は江戸時代のものとおもわれる。

(2) 遺物から見た遺跡の変遷

今回の調査地点は、日下部遺跡の中でも最も南に位置しており、日下部遺跡の中心を占める位置ではない。河川と丘陵及び丘陵からの谷地形に開まれた、比較的独立性のある地形内に立地する。

今回の調査地点からは、縄文時代晚期・弥生時代中期・弥生時代終末期～古墳時代初頭・奈良時代・平安時代末～鎌倉時代前半・室町時代後半・江戸時代前半・江戸時代後半とそれ以降の時期の遺物が出土したが、遺構に伴い比較的まとまって出土したのは、平安時代末～鎌倉時代前半と室町時代後半・江戸時代前半・江戸時代後半の時代である。

日下部遺跡の他の調査地点で検出された弥生時代後期半～古墳時代前期の堅穴住居や方形周溝墓、古墳時代後期～7世紀の飛鳥時代頃の堅穴住居・掘立柱建物などは見つかっていない。

縄文時代の土器は、西側の丘陵からの谷地形内から出土した1点のみ図化できた（第2図1）。縄文時代晚期中葉の篠原式古段階にあたる。サヌカイト製の石巿（SI）も同時代に属するものであろう。北浜

の六甲山北側は同時期の遺跡の希薄な地域にあたり、資料を付け加えることとなった。

弥生時代中期に属すると思われる土器片はわずかな出土である。また、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器は流路（SR218）内からまとまって出土しているが、集落や墳墓が検出されたものではない。古墳時代後期の土器片も数点出土しているが、調査区内に遺構は存在しておらず、西側の丘陵上に何らかの遺跡が存在していた可能性が高い。丘陵北側には大橋山古墳群が存在するが、今回の調査地点西側ではすでに削平を受けて大きく失われており、本来ならば様々な時代の人々が痕跡を残していたことと思われる。

奈良時代から平安時代前半の土器もわずかで、後の時代の遺物とともに出土しているものがほとんどである。日下部遺跡の北東にある日下部北遺跡では同時期の遺物が大量に出土している。

平安時代末～鎌倉時代前半の時期には、掘立柱建物が建てられ人々が生活していた。復元できた建物は周囲を搅乱されており全容は不明ながら、5×3間以上の規模をもつ。この時期には集石土坑（SK224）や大規模な水路（SR400）が設けられている。土師器皿・壺、瓦器塊、須恵器塊・皿・鉢・甕、白磁碗や青白磁小壺が出土している。西側の斜面を整地して経塚を構築したのもこの時期であろう。

この日下部遺跡の南端にあった集落は、一旦途絶えるようである。13世紀後半～15世紀前半にかけての遺構・遺物はほとんど確認できない。その後、室町時代の後半に入つて生活の痕跡が再び確認できる。但しこの時期の明瞭な遺構は不明である。土師器の煮炊具や東播系須恵器鉢、退化した蓮弁文の青磁碗などが一定量出土している。

続く戦国時代から江戸時代初期には、溝（SD59）や水溜状の石組土坑（SE465）など生活の痕跡が見られ、明の青花磁器・ベトナム製陶器・胎土目唐津・絵唐津・初期伊万里など普通の農村集落では見かけないような陶磁器が含まれている。中には天目茶碗や建水、花生など茶の湯の道具類が含まれている。

17世紀中頃～後半になると土師器の煮炊具が炮烙形になり、丹波焼の擂鉢・甕が増える。護岸に石列を配した大型の土坑（SK608）などはこの時期のものと思われ、そこから出土した一部の木製品もこの時期に属する。備前焼は貯蔵具の大甕が少量入ってはいるが、擂鉢はほとんど見られない。

17世紀後半～18世紀前半は、丹波焼などの在地産の土器が多く、一般の集落との差異は認めにくくなる。

18世紀後半～19世紀後半の時期には、一部に三田青磁などの在地の優品が見られるが、くらわんか茶碗、広東碗など通有の肥前陶磁器が見られる。遺物量は減少し、調査区北端のSR415等からも出土するが、南端の旧大歳神社境内に近い位置から出土する傾向が高い。瓦類が出土するのも上段の南地区や中央地区が多く、埠を用いた建物などが神社に関連してあったのかもしれない。

木製品・石製品・金属製品のほとんどは、経塚出土のものを除くと、近世後半の時期のものと思われる。食事具には漆器椀・大皿・箸、切匙、杓子、鍋蓋、擂り粉木・鉗金、包丁など生活に密着したもののが揃うが、漆器大皿など一般の家では見られないものも含まれる。この漆器大皿もよく使用されており、各時期の擂鉢も非常に磨り減っていることからも、ここで生活する人数が多かったことを示している。

下駄も1軒の家としては多く見られ、焼き印の押された下駄も含まれており、多くの人間が出入りしていたことを想像させる。提灯の部品とした木製品も一般の農家ではなく商家や庄屋など格を表す、あるいは格上の者を迎えるような家に備わった品であろう。その反面、歯を補修した下駄や、補修したと思われる桶の底板、丸太から切り出す材質途中の板材なども出土している。

水滴は文書を認めるための道具だが、石の硯は見つかっていない。砥石は非常に多い。

明治時代の砥部焼の破片が調査区内の広い範囲で検出されており、明治時代以降に屋敷は廃され、整地されて農地へとなったものと考えられる。

以上のように遺物を中心に調査地点における遺跡の変遷を通して観察したが、考古学的に見て集落或いは屋敷としてある程度定着し安定するのは、A.平安時代末から鎌倉時代初頭の時期と、B.戦国時代から江戸時代初期にかけての2時期が挙げられる。

(3) 周辺の状況

三田盆地の南縁部に六甲山北麓から手の指のように広がる細長い間折谷。これらの狭小な谷内において、古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代にかけて続々と入植が見られ、開発が進んでいく。その中で木簡・墨書き器・硯や鉢等が出土する遺跡があり、その地域の中核である官衙やそれに準ずる性格をもつものと考えられ、一部の遺跡は後代へと継続している。

その後、早くも平安時代中頃、多くは平安時代末～鎌倉時代にかけてさらに多くの場所に開発の手が入り、所々に並立的に屋敷が構えられるようになる。莊園開発としての性格が附される小規模な屋敷や集落は、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期に面的に広がり、細かく分布するようになる。周辺には平安時代中期に超大型の掘立柱建物を有する集落も存在し、他の地域を凌駕している。

播磨や摂津における発掘調査例では、これらの莊園開発の背景には平家一族による所領掌握や、その後の平家没官領に入部する関東武士の存在が考えられているが、検出遺構や出土遺物からはまだ裏付けられてはいない。

二郎宮ノ前遺跡では、9世紀までに一旦集落が途絶えるが、12世紀末頃に再び広い範囲に掘立柱建物が建てられるようになる。13世紀後半にはそれまで並立的だった周辺の中小規模の建物が排除されて居館と呼ばれる屋敷が成立している。これは15世紀中頃に突如姿を消す。

八多川を遡ると、既に10世紀の後半に9×4間の四面庇の建物や、床面積が250m²を超える8×5間の大型の掘立柱建物が建てられる上小名田遺跡がある。この遺跡では平安時代末～鎌倉時代にはさらに大型の掘立柱建物も建てられている。集落は鎌倉時代の中で収斂し、次に人々の生活の痕跡が現れるのは近世になってからである。

日下部遺跡の今回の調査区の集落も並立的なものの一つである。建物の規模も通有であり、上小名田遺跡で検出された同時期の掘立柱建物に遠く及ばない。この比較的規模の小さい集落は長くは続かず、おそらく二郎宮ノ前遺跡の居館に集約されていったのであろう。二郎宮ノ前遺跡との間に谷地形があり、今回の調査地点とは区切られているが、その生活領域は共通する。現在では二郎宮ノ前遺跡周辺の水田には、両遺跡を隔てるこの谷を堰き止めた溜池の水が使われており、大規模な水路(SR400)を踏襲すると考えられる現在の水路はより東側の田畠を潤している。有野川と西側の丘陵に挟まれた可耕地の水利を管理する位置に今回検出された掘立柱建物は存在するが、二郎宮ノ前遺跡背後の山からの湧水も発掘調査で検出された池や堀・溝によって利用されており、比較的の水利には利便性が高く、水源地に近い集落の優位性は高くはない。

戦国時代、周辺にも戦乱の炎が及んでいた。有馬温泉の温泉城の戦(1540年)をはじめとする有馬氏対別所氏の攻防。織田方の荒木村重の侵入(1574年)と村重の変心による三田城周辺の攻防(1578年)や三木城攻め(1580年)など、それ以前からも直接、間接的に戦の影響は及んだことであろう。三田城

跡の調査では城に係わる遺構が形成され始めるのが15世紀の後葉であり、廃城となるのが1633年の九鬼氏入封時である。

16世紀後半～17世紀初頭に明の青花や、ベトナム製陶器などの輸入陶磁器が出土する遺跡は限られている。ベトナム製陶器が出土したのは、近隣では三田城跡などの城郭内の屋敷跡からであり、貿易都市である堺では屋敷内の茶室といった極めて限られた場所からのみ出土している。

唐津焼皿は二郎宮ノ前遺跡からも一定量出土しており、16世紀後半までの土師器や明青花も含まれるが、今回調査分の日下部遺跡より少なく、遺構は激減する。八多中遺跡のカイモリ地区でも15世紀まで継続するようである。宅原遺跡では16世紀に入っても園地など特殊な遺構をもち、集落は近世まで継続している。

（4）日下部遺跡集落の画期

A.平安時代末から鎌倉時代初頭

この時期は、日下部遺跡内や二郎宮ノ前遺跡で広い範囲に並立的に屋敷が営まれている状況が判明している。周辺の三田盆地南縁部でもよく見られる状況であり、比較的短期間で消え去るものが多い。継続して後代へ続く遺跡は限られており、園地などを有する居館を構成するようになる。

日下部遺跡南端のこの屋敷では、掘立柱建物や土坑などがあり、スラッグなど鍛冶に関連した微細な痕跡が観察できた。墓址は確認されていないが、背後の丘陵上に経塚を築いていることが特徴の一つである。

経塚は集石をもって塚を築いており、土師器筒形容器を経筒（もしくは有機質製の経筒の外容器）として用い、刀子（短刀）や鐵を入れ、銭貨を撒く所作を行っている。土師器筒形容器を経塚に用いる例は、近隣では三田市下深田経塚が知られ、また丹後地方や但馬地方に多く見られるものである。

副納品の鉄製武器を有しており、経巻の護持のために副納されたものであろう。雁股歛は多くが鏑矢として用いられており、神事における破魔の作法に使用される。雁股歛は豊岡市田多地経塚や京都府私市丸山経塚、静岡県堂ヶ谷経塚などでも出土しており、經典理納前に一部が副納されたことがわかっている。出土した大型の雁股歛は刃の部分が折れ曲がっており、堂ヶ谷経塚や兵庫県江ノ上経塚などで出土した折り曲げられた太刀や短刀との共通性が見られる。

経塚で銭貨が用いられる例はやや後出するようだが、新温泉町対田清水谷経塚などでは埋納の途中やその最終段階で銭貨を撒くような所作が観察されている。今回検出された日下部経塚でも盗掘を被っているものの、経塚を造営する際の様々な所作が観察でき、新知見や類例の追加を行うことができた。

B.戦国時代から江戸時代初期

出土遺物から見ると15世紀後半頃の土器が少量出土しており、16世紀に入って溝や溜井が設けられ、同じ性格の遺構が重複、或いは近くに作り続けられていく様子が見られた。15世紀以降の状況は二郎宮ノ前遺跡の集落・居館が廃絶するのに引き続いており、生活の場の移動とも捉えられる。

また、伝承では大永年間（16世紀前半）にこの地に入り、17世紀末にも近隣の寺院に仏画を寄進するような有力者、宮崎弾正二郎広綱一族が二郎の地にいたとされ、文献によると大庄屋芝家が19世紀に二郎に分家を立て、三田藩の御用を務める大家となっており、二郎の地に土豪・豪農と呼ぶことのできる家があったことが知られており、両者は時期的に重複していないようである。

それでは日下部遺跡の南端のここに居住した者の性格はあくまでも農民であるのか、それとも、例え

ば湯山城や三田城を拠点としていた有馬氏や、近くの松原城に城郭を構えていたとされる松原氏の被官となった地侍的な性格をもつものなのか。

一般に中世後半期に新たに營まれる居住に関連した集落遺跡は、城館など時代的な背景を色濃く表した性格を有する事が多くなるが、ここでは検出された遺構や出土遺物からはそのような状況は観察できない。遺跡の立地や周辺の状況として、今回の調査地点の東には有野川、西にSR400の流路や丘陵を背負う防御的な立地を持つことと、背後の丘陵上に平坦面・堀切・堅堀・切岸・土壘・石垣等を備えた、いわゆる小規模城館とされている「小坂砦」が存在することだけが、丘陵の麓に屋敷を構えた地侍的な存在を想定させる根拠となり、可能性はあまり高くはない。

では、三田城等でも見られる肥前産の陶磁器や到来物の茶道具を有してここに居住していた家はどのような階層に属していたのであろうか。茶道具の所有であれば、武家だけではなく寺院や商家であっても可能である。秀吉が逗留し茶会も開かれたであろう有馬温泉や、茶の湯に通じていたとされる荒木村重一族が一時入っていた三田城が控え、丹波・但馬・播磨と畿内の都や港町を結んでいた街道筋にあたるこの地は大きな流通の通過点であったことは想像に難くない。周辺部にまで力を及ぼしうる有力な農民層の土豪が茶道具を有していたとしても、不思議ではない。

六甲山北麓の内陸部にあたる近隣には、山田荘の栗花落家や上谷上の板屋家、有名な箱木の千年家などがあり、16世紀頃に次々と土地を手に入れて行くような古文書を残して、中世から続いてきた土豪とも呼ぶことのできる有力者が存在している。少なくともこの場所にも土豪的な存在がおり、今回の調査地点にその痕跡を残したものとすることは可能であろう。

同じように文献や伝承と発掘調査が一致するような事例が、下宅原遺跡大前II地区で行われている。現在、宅原遺跡に包含されているが、江戸時代末期に当地方で私札を発行するなど、財力を誇った鶴屋五兵衛の屋敷跡と伝承される所で、17世紀～19世紀にわたる陶磁器が多量に出土している。

今後、三田城跡・淡河萩原城跡などと日下部遺跡や宅原遺跡・箱木千年家などの発掘調査資料を検討することで、六甲山北麓における武士階級と土豪の階層の流通の偏位などが明らかにできるのではないかろうか。

【参考文献】

- ・神戸市教育委員会1987「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」
- ・神戸市教育委員会1998 「平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報」
- ・新修神戸市史編集委員会1988.4 「新修 神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古」神戸市
- ・新修神戸市史編集委員会2010.3 「新修 神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世」神戸市
- ・淡神文化財協会1992「下小名田遺跡その1」
- ・妙見山麓遺跡調査会1988.3「宅原遺跡 宮之元地区の調査1986年」
- ・妙見山麓遺跡調査会2002「宅原遺跡 豊浦地区の調査1987年」
- ・妙見山麓遺跡調査会2005「下小名田遺跡」
- ・兵庫県教育委員会2000.3 「三田城跡発掘調査報告書」兵庫県埋蔵文化財調査報告第194冊
- ・兵庫県教育委員会2000「公園都市線（第2期）車両留置施設設置事業に伴う
- 二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第220冊
- ・兵庫県教育委員会2001.3 「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う
- 日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第215冊
- ・兵庫県教育委員会2014.3 「堂塙内遺跡・小坂遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第470冊

第3表 日下部遺跡出土土器一覧(1)

番号	房別	器質	種類	器種	法量(cm)			現存	備考1	出土地区	出土遺構	層位	備考2
					口幅	高さ	底径						
1	Ⅱ2Ⅲ	縹文土器	深鉢	(33.3)	(8.9)	-	1/12	-	-	上段	中央地区	SR831	縹文底丸込 み内表縁
2	37 55	土師器	小鉢	(11.2)	(1.75)	(8.0)	1/8	1・8 以下	-	下段	中央地区	SR400	柱溝 セイシヨン
3	37 55	土師器	盤	(11.6)	2.3	(7.6)	1/4	1/4	-	下段	南北区	SR400	中層
4	37 55	土師器	盤	13.2	2.25	-	5/6	完存	-	下段	南北区	SR400	灰土 畔以北
5	37 55	土師器	盤	(14.8)	3.1	-	1/8	-	-	下段	中央地区	SR400	曲面
6	37 56	土師器	壺	(23.1)	9.0	-	1/6	-	侈基上半 1/6	下段	北地区	SR400	灰土
7	37 56	土師器	壺	不明	(6.3)	-	わざか	-	-	下段	南地区	SR400	下層(青灰 砂質)
8	37 55	黑色土器	壺	-	(1.25)	(7.2)	-	1/4	-	下段	南北区	SR400	灰土 畔以北
9	37 55	瓦器	壺	-	(1.0)	4.5	-	2/3	文あり	下段	南北区	SR400	灰土 畔以北
10	37 56	陶器	壺B 直	-	(2.3)	-	-	-	天井部1/2 つまみ穴有	下段	北地区	SR400	下層
11	37 56	陶器	壺A	(11.9)	2.7	(8.0)	1/8弱	1/4弱	侈基1・8弱	下段	北地区	SR400	灰土
12	37 56	陶器	壺B	-	(3.3)	(11.8)	-	2/5	-	下段	北地区	SR400	柱溝色粘質 以下
13	37 56	陶器	壺B	-	(4.2)	(11.0)	1/4	-	侈基 丁字 1/4 高台	下段	北地区 アセ南北	SR400	下層
14	37 56	陶器	壺	-	(3.25)	6.0	-	完存	-	下段	南北区	SR400	上層
15	37 56	陶器	壺	-	(3.7)	7.2	-	完存	-	下段	中央地区	SR400	中・下層
16	37 55	陶器	壺	(35.3)	4.7	5.5	1/3	1・6	-	下段	中央地区中央	SR400	下層
17	37 57	陶器	壺	(34.7)	4.75	(5.8)	1/6	3・4	-	下段	南北区	SR400	下層
18	37 57	陶器	壺	(35.4)	5.0	5.4	1/3	1/2強	-	下段	中央地区南北	SR400	上層
19	37 57	陶器	壺	(35.6)	(4.45)	(6.2)	1/6弱	-	-	下段	南北区	SR400	上層
20	37 57	陶器	壺	(35.5)	5.0	(6.4)	1/4	わざか	侈基1/1	下段	北地区 アセ南北	SR400	下層
21	37 57	陶器	壺	(44.3)	(4.05)	(6.1)	2/5	1/3	国上復元	下段	南北区	SR400	下層
22	37 55	陶器	壺	(16.65)	4.85	6.1	1/5	完存	-	下段	南北区	SR400	北季 土器より
23	37 57	陶器	壺	(36.0)	5.2	(7.0)	1/3	1/3	-	下段	中央地区中央	SR400	下層
24	37 57	陶器	壺	(35.3)	(4.7)	6.5	1・9	1/2	-	下段	南北区北側	SR400	上層
25	37 55	陶器	壺	(36.5)	(5.05)	5.6	1/3	3・4	-	下段	北地区	SR400	北端
26	37 57	陶器	壺	(36.8)	4.3	(6.4)	1/5	1・3	-	下段	北地区南端	SR400	中・下層
27	37 57	陶器	壺	(15.0)	(4.0)	(4.9)	1/5	わざか	-	下段	北地区 (SE308下層)	SR400	下層
28	37 55	陶器	壺	(15.7)	3.7	(6.2)	2/5	1/2	-	下段	中央地区	SR400	柱溝
29	37 55	陶器	壺	-	(2.9)	(5.2)	-	1/4	彫文「ト」あ り	下段	中央地区	SR400	下層
30	37 55	陶器	壺	-	(1.3)	(5.7)	-	2/5	-	下段	南北区	SR400	中央部西岸
31	37 55	陶器	小鉢	(7.3)	1.45	4.9	1/2	完存	-	下段	中央地区	SR400	セラ ジョン
32	37 56	陶器	片口鉢	(32.4)	(9.0)	-	1/8弱	1/3	-	下段	北地区	SR400	
33	37 58	陶器	呑鉢	(31.0)	(6.5)	-	1/8	-	-	下段	中央地区南北	SR400	
34	37 58	陶器	呑鉢	(32.6+ 呑鉢 a)	(30.9)	-	-	1/4	片口部残存 高台	下段	北地区	SR400	柱溝色粘質 以下
35	37 58	陶器	呑鉢	不明	(5.2)	-	わざか	-	-	下段	南北区	SR400	上層
36	37 58	陶器	甕	(18.7)	(4.4)	-	1/4	-	-	下段	南北区	SR400	柱溝 (青灰 砂質)
37	37 58	陶器	甕	(21.7)	(5.1)	-	1/4	-	-	下段	南北区	SR400	中央部西岸
38	38 58	無釉陶器	甕	(9.9)	(21.8)	-	1/3	1/3	柄部1・7 侈基1・4	下段	北地区	SR400	西斜 柱溝
39	38 58	無釉陶器	甕	(36.9)	3.45	(17.4)	1/2	1/3	六寸十斗型 身	下段	北地区南端	SR400	中・下層
40	38 60	無釉陶器	盆鉢	(30.8)	(6.85)	-	1/8以下	-	舟形燒 1本 引当	下段	中央地区北端	SR400	中・下層
41	38 60	無釉陶器	盆鉢	不明	(8.9)	-	破片	-	舟形燒 1本 引当	下段	北地区南端	SR400	最上層
42	38 60	無釉陶器	盆鉢	(31.0)	(13.0)	-	1/11弱	-	舟形燒 1本 引当	下段	北地区	SR400	灰土
43	38 59	施釉陶器	直筒	(11.7)	(2.6)	-	1/7	1/4	南津燒	下段	北地区南北	SR400	西斜 柱溝
44	38 58	施釉陶器	直筒	(12.1)	(4.1)	5.1	若干	完存	船形燒	下段	北地区南端	SR400	最上層
45	38 59	施釉陶器	輪花	(30.0)	(2.7)	(5.7)	1/7	1/4	美濃燒 身	下段	北地区南端	SR400	最上層
46	38 58	施釉陶器	直筒	(11.0)	2.7	(6.0)	3/7	1/2	志野 輪花	下段	北地区	SR400	
47	38 59	白磁	碗	(17.6)	(2.7)	-	1/12	-	志野 輪花	下段	南北区	SR400	上層
48	38 59	白磁	碗	(15.6)	(3.2)	-	1/8	-	志野 輪花	下段	中央地区	SR400	柱溝
49	38 59	青磁	碗	-	(2.85)	(4.7)	-	3/5	青花 青花 紫地銀裏墨少	下段	南北区	SR400	近世鐵瓶刷 印
50	38 59	青白磁	碗	-	(2.85)	5.25	-	完存	青花 青花 紫地銀裏墨少	下段	北地区	SR400	曲面
51	38 60	土師器	小鉢	6.7	1.65	-	-	-	白明鏡	下段	北地区北東	波路SR415	
52	38 60	土師器	小鉢	(8.9)	1.96	5.9	わざか	完存	-	下段	北地区北端	SR415	灰土下 砂より
53	38 61	土師器	壺	(30.2)	(5.05)	-	1/8	-	-	下段	北地区北端	SR415	
54	38 61	無釉陶器	盆鉢	(28.0)	(9.9)	-	1/4	-	舟形燒 輪相	下段	北地区北端	SR415	穀城含む
55	38 61	無釉陶器	盆鉢	(36.4)	(16.35)	(21.0)	1/6	1/8	舟形燒 輪相	下段	北地区北端	SR415	
56	38 60	施釉陶器	壺	19.0	4.0	2.5	以上は完存	-	舟形燒	下段	北地区北端 の上	SR415	人力
57	38 60	無釉陶器	甕	34.7	35.7	20.2	111弱	完存	青花 内面墨 青白	下段	北地区	SK940	SB115 北肩
58	38 61	無釉陶器	甕	(15.5)	(4.35)	-	1/6	-	-	下段	南北区	SD114 南端	
59	38 61	施釉陶器	甕	(10.3)	2.1	(5.6)	わざか	1/4	青花 内面墨 青白	下段	南北区	SD94	灰土

第3表 日下部遺跡出土土器一覧（2）

番号	器形	器名	種類	器種	法量 (cm)			現存	備考 1	出土地区	出土遺構	層位	備考 2	
					口径	高さ	底径							
60 39 62	土師器	小瓶	(2.7)	(1.6)	-	1/2	1/2			下段 北地区北部	SE416	灰土	磚の西側	
61 39 62	土師器	瓶	30.2	1.9	6.4	1/2	1/2			下段 北地区	SE416	灰土	灰土層 石器井戸	
62 39 62	無釉陶器	桶形	(23.6)	(22.85)	-	1/4	1/4			月夜焼、脚粗	下段 北地区北端	SE416	灰土	東端付近
63 39 62	施釉陶器	丸桶	8.8	6.5	4.6	1/4	1/4	定存	天日燒	下段 北地区北端	SE416	灰土	東端付近	
64 39 62	施釉陶器	壺	(11.7)	(7.4)	(5.5)	1/7	2.5		京阪系か	下段 北地区北端	SE416	灰土		
65 39 62	柴往物器	瓶	13.34	2.92	6.14	1/2	1/2	定存	落基1/2號	下段 北地区	SE416	灰土	下層 石器井戸	
66 39 62	柴往物器	甕	10.15	4.95	4.3	1/6	1/6	定存	西花見塚	下段 北地区北端	SE416	灰土	東端付近	
67 39 62	施釉陶器	壺	11.4	3.1	4.5	1/2	1/2	定存	信津燒	下段 北地区	SK465	灰土	方折右頸内 外	
68 39 62	施釉陶器	甕	(9.5)	3.45	4.5	1/3	1/3	定存	信津燒	下段 北地区	SK465	灰土	方折右頸内 外	
69 39 63	土師器	甕	(16.2)	(4.95)	-	1/5	-		信濃型か	下段 北地区南部	SK608	灰土	集石部分	
70 39 63	土師器	壺	(25.8)	(5.2)	-	1/12	-		タツキ	下段 北地区	SK608	灰土	下層	
71 39 63	土師器	引釜	(33.5)	(6.55)	跨徑 (42.3)	1/8	-		跨1/6	下段 北地区	SK608 西端	石列		
72 39 63	無釉陶器	片口	(32.8)	(17.75)	(15.0)	1/4	1/2		丹波燒、脚粗	下段 北地区	SK608 東端	石板内		
73 39 63	無釉陶器	甕	(49.0)	(6.2)	(36.0)	1/18	1/4	脚粗	丹波燒	下段 北地区南端	SK608	灰土	集石部分	
74 39 63	施釉陶器	甕	(11.0)	2.7	4.0	1/2	1/2	定存	信津燒	下段 北地区	SK608	北端	下層	
75 39 63	瓦器	甕	-	(0.9)	(4.6)	-	1/4		漆器あり	下段 北地区	SK510	灰土	一段下げ	
76 39 63	土師器	小瓶	8.3	1.65	4.05	4/5	1/2	定存	下段 北地区	SK494	灰土			
77 39 64	瓦器	甕	(11.3)	(0.8)	-	1/4	-		下段 北地区	SK378	灰土	SH400上		
78 39 63	土師器	小瓶	6.9	1.4	-				下段 北地区	SK621	灰土			
79 39 63	土師器	小瓶	(8.2)	(2.15)	-	1/2	-		下段 北地区	SK621	灰土			
80 39 64	土師器	壺	(27.0)	(6.5)	-	1/2	1/2		下段 北地区	SK621	灰土			
81 39 64	土師器	壺	(26.0)	(7.0)	-	1/2	-		下段 北地区	SK621	灰土			
82 39 65	施釉陶器	甕	(12.1)	3.3	5.0	1/2	1/2	定存	春日跡・信津燒	下段 北地区	SK303	灰土		
83 40 65	瓦質器	引釜	(7.0)	(4.75)	跨徑 (22.3)	1/9	-		跨1/5	下段 中央地区	SK908	灰土		
84 40 65	無釉陶器	片口	(28.6)	15.0	(12.2)	1/8	1/8	わざか	丹波燒、1本引	下段 北地区	SK375	(底重)		
85 40 65	施釉陶器	ひきこ	(7.1)	-	-				信濃のみ 1/3	下段 北地区中央	SK449	灰土内埋土		
86 40 65	柴往物器	甕	(8.0)	6.5	4.1	わざか	定存	信濃1/2	下段 南地区	SE189	灰土			
87 40 65	青磁	甕	-	(3.2)	5.2	-		定存	信濃1/2	下段 中央地区	SP720	灰土		
88 40 65	無釉陶器	甕	-	(51.1)	(20.1)	-		定存	信濃上半 2.5cm 下段定存	下段 中央地区	SK729	灰土		
89 40 65	信筒	蟹窓	-	(0.65)	10.5	1/2	5.5		信濃以外 2.5cm 点打	下段 中央地区	SK729	灰土	室内埋土	
90 41 66	無釉陶器	甕	(48.2)	62.8	22.3	1/3	若干欠損		所要 芦井大 行燈	下段 北地区	SK435	灰土		
91 41 66	施釉陶器	甕	(36.4)	(35.3)	-	1/5	-		所要 丹波燒	下段 中央地区	SK736	内部埋土	信筒	
92 41 66	土師器	瓶	(30.8)	(1.9)	-	1/4	-		行燈	下段 中央地区	SK736	内部埋土	信筒	
93 42 67	柴往物	环	(13.3)	4.5	6.3	1/2	4/5		下段 北地区	逃櫛出中	灰土			
94 42 67	施釉陶器	甕	(36.0)	(3.15)	(5.6)	1/4	1/2		信津燒、若狭 船	下段 北地区		灰土		
95 42 67	施釉陶器	天目	(11.2)	(6.25)	-	1/2	若干		信濃品か 船	下段 北地区南端		人力		
96 42 67	施釉陶器	(底縫) 甕	-	(3.95)	(5.5)	-	3/4		信津燒	下段 北地区北		機械		
97 42 66	施釉陶器	ひきこ	3.5	0.9	2.1	-	1/2		丹波燒	下段 北地区		東北部遺物 集中地		
98 42 67	施釉陶器	蟹窓	-	3.4	-	わざか	1/4		丹波燒	下段 北地区		東北部遺物 集中地		
99 42 66	無釉陶器	甕 or 井	(33.6)	(6.5)	(23.4)	1/6	1/8		丹波燒	下段 北地区		東北部遺物 集中地		
100 42 67	施釉陶器	甕	(15.16)	4.4	(3.6)	1/12	3/4		信津燒、若狭 船	下段 北地区南端		人力		
101 42 66	無釉陶器	甕	(58.6)	(75.8)	跨徑 (72.6)	1/12	若干		信濃上手は 定存 下手は 手打	下段 北地区	東半擾乱	機械・SD94		
102 43 68	衛生土器	甕	13.6	28.5	4.25	2/3	定存		信濃焼 (近代)	上段 北地区	SR218	灰土	置置回り	
103 43 68	衛生土器	甕	12.2	(10.5)	-	1/2	定存		脚粗	上段 北地区	SR218	灰土	中央部西面	
104 43 68	衛生土器	甕	-	(15.9)	(2.14)	-	1/2		信濃上手は 手打	上段 北地区東端	SR218	灰土	置置回り	
105 43 68	衛生土器	甕	(11.8)	(3.8)	-	1/4	-		上段 北地区北	SR218	灰土	中層下		
106 43 68	衛生土器	甕	26.4	(9.9)	-	1/2	脚粗		脚粗定存	上段 北地区	SR218	灰土	置置回り	
107 43 68	衛生土器	甕	(12.6)	(7.75)	-	1/3	脚粗		脚粗	上段 北地区北	SR218	灰土	置置回り	
108 43 68	衛生土器	甕	(13.5)	(3.55)	-	1/8	-		信濃焼	上段 北地区	SR218	灰土	砂礫層	
109 43 68	衛生土器	甕	(22.5)	(3.95)	-	1/9	-		信濃焼	上段 北地区	SR218	灰土	中層下	
110 43 68	衛生土器	甕 or 井	(10.7)	8.75	(15.6)	1/2	1/4		信濃焼	上段 北地区北	SR218	灰土	置置回り	
111 43 68	衛生土器	井	(25.0)	(7.65)	-	1/7	-		信濃焼	上段 北地区北	SR218	内	置置回り	
112 43 68	衛生土器	底盆	-	(5.2)	(5.1)	-	2/3		信	上段 北地区	SR218	内	置置回り	
113 43 68	衛生土器	底部	-	(2.95)	5.5	-	1/2	定存	信	上段 北地区北	SR218	内	乳状色シルト ト	
114 43 68	衛生土器	底盆	-	(2.15)	(4.6)	-	1/3		信	上段 北地区	SR218	内	東西北部シルト ト	
115 43 68	衛生土器	底盆	-	(2.3)	(3.15)	-	3/4		信	上段 北地区	SR218	内	灰の砂礫層 東半部のみ	

第3表 日下部遺跡出土土器一覧(3)

番号	房間	器表	種類	器種	法量(cm)			現存	備考	出土地区	出土遺構	層位	備考2	
					口径	高さ	底径							
116	43	68	陶生土器	灰陶	-	(1.85)	(5.2)	-	1/3		上段	北地区北区	SR218	灰砂質 中層下部
117	43	69	陶生土器	白陶	(10.2)	(3.6)	-	1/2	-		上段	北地区	SD063(北)	
118	43	69	陶生土器	白陶	(29.6)	(6.2)	-	1/30	-		上段	北地区	SK220	灰褐色土
119	43	69	陶生土器	灰陶	(15.6)	(5.45)	(6.7)	1/5	若干	伴隨1/5	上段	北地区	SK223	
120	43	69	瓦器	陶	-	(1.15)	4.8	-	若干欠損	留文あり	上段	北地区南端	SP213	柱上部
121	43	69	陶生土器	片口鉢	(35.8)	(11.4)	-	1/6	-		上段	北地区	SP235	柱側
122	44	69	陶生土器	碗	(15.7)	4.9	(6.9)	1/4	1/2	伴隨1/4個	上段	北地区	SK224	位置図あり
123	44	69	陶生土器	碗	36.5	4.7	6.1	2/3	完存	各部はばら 存	上段	北地区	SK225(北半部)	
124	44	70	陶生土器	碗	(15.5)	(4.45)	(5.1)	1/7	1/4		上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
125	44	69	陶生土器	碗	16.2	5.05	5.7	3/4	完存		上段	北地区	SK224(北半部)	
126	44	69	陶生土器	碗	15.8	4.95	5.8	一部欠損	完存		上段	北地区	SK224	灰土下半 底まで
127	44	69	陶生土器	碗	16.3	4.9	5.6	4/5	完存		上段	北地区	SK224	位置図あり
128	44	69	陶生土器	碗	36.6	5.05	(7.2)	4/5	1/2		上段	北地区	SK224	位置図あり
129	44	69	陶生土器	碗	15.84	4.9	6.3	1/2強	全体	1/2強	上段	北地区	SK224	位置図あり
130	44	70	陶生土器	碗	15.5	4.7	6.3	1/2強	1/2強		上段	北地区	SK224	
131	44	70	陶生土器	碗	(15.9)	4.8	(4.9)	2/5	1/4		上段	北地区	SK224	灰土下半 底まで
132	44	70	陶生土器	碗	36.0	4.75	5.5	-	-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	位置図あり
133	44	70	陶生土器	碗	35.1	4.7	6.15	-	-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
134	44	70	陶生土器	碗	(16.0)	(4.6)	(6.3)	1/4	若干		上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
135	44	70	陶生土器	碗	15.9	4.7	6.3	1/2	完存	全体1/2	上段	北地区	SK224	
136	44	70	陶生土器	碗	(15.8)	(4.7)	(5.8)	1/2弱	若干		上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
137	44	70	陶生土器	碗	(16.3)	4.75	(6.6)	わかん	1/2弱	全体1/4弱	上段	北地区	SK224	
138	44	70	陶生土器	碗	(16.5)	(4.75)	(5.8)	2/5	2/3		上段	北地区	SK224	位置図あり
139	44	70	陶生土器	碗	16.65	4.7	5.9	3/4	ほぼ完存		上段	北地区	SK224	埋土下層 底まで
140	44	70	陶生土器	碗	15.5	4.7	6.5	-	-	完形	上段	北地区	SK224	位置図あり
141	44	70	陶生土器	碗	(15.6)	(4.5)	(5.5)	1/4強	1/2強	全体1/4弱	上段	北地区	SK224	位置図あり
142	44	70	陶生土器	碗	(16.1)	(4.55)	(6.4)	1/7	2/3		上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
143	44	70	陶生土器	碗	16.15	4.4	5.9	4/5	完存		上段	北地区	SK224	灰土下半 底まで
144	44	70	陶生土器	碗	36.1	4.5	6.05	1/2強	3/4		上段	北地区	SK224	
145	44	71	陶生土器	碗	(15.7)	(4.25)	(6.0)	1/10	1/2		上段	北地区	SK224	
146	44	71	陶生土器	碗	(15.0)	(4.15)	(5.8)	1/6	1/4		上段	北地区	SK225(北半部)	
147	44	71	陶生土器	碗	(16.0)	(4.2)	-	1/6	-		上段	北地区	SK224	埋土下層
148	44	71	陶生土器	碗	(15.8)	(4.0)	-	1/3	-	全体1/3	上段	北地区	SK224	位置図あり
149	44	71	陶生土器	碗	(27.6)	10.7	(8.5)	1/4弱	わかん	全体1/4弱	上段	北地区	SK224	位置図あり
150	44	71	陶生土器	碗	(32.6)	(4.4)	-	1/8以上	-		上段	北地区	SK224	埋土下層 底まで
151	45	71	土師器	小瓶	(2.7)	1.9	(6.6)	1/6	3/4		上段	北地区	SK223(北半部)	
152	45	71	土師器	小瓶	(2.8)	1.45	-	1/5	ほぼ完存		上段	北地区	SK224	位置図あり
153	45	72	土師器	小瓶	7.6	1.7	-	1/4	1/4		上段	北地区	SK224	位置図あり
154	45	71	土師器	小瓶	8.1	1.6	6.7	わかん	2/3	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	北半部
155	45	71	土師器	小瓶	(8.2)	1.6	6.8	3/4	11/12		上段	北地区	SK224	位置図あり
156	45	71	土師器	小瓶	(8.2)	1.35	(7.1)	1/8強	1/2		上段	北地区	SK223(北半部)	
157	45	71	土師器	小瓶	7.45	1.4	-		-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	底近く 位置図あり
158	45	71	土師器	小瓶	7.6	1.7	-		-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	北半部
159	45	71	土師器	小瓶	8.25	1.75	-		-		上段	北地区	SK224	位置図あり
160	45	72	土師器	小瓶	(8.2)	(3.35)	-	2/5	2/5		上段	北地区	SK224	埋土下層
161	45	71	土師器	小瓶	8.2	(1.4)	7.1	2/3	2/3		上段	北地区	SK224	北半部
162	45	71	土師器	小瓶	(8.2)	1.3	(6.8)	1/3	1/3		上段	北地区	SK224	北半部
163	45	72	土師器	小瓶	(8.0)	1.35	-	1/4	1/3		上段	北地区	SK224	位置図あり
164	45	72	土師器	小瓶	(8.0)	1.3	わかん	ほぼ完存			上段	北地区	SK224	位置図あり
165	45	72	土師器	小瓶	(8.0)	(1.45)	-	1/8	1/8以上		上段	北地区	SK224	埋土下層
166	45	72	土師器	小瓶	(8.0)	1.23	-	1/5	1/8以下		上段	北地区	SK224	埋土下層
167	45	72	土師器	小瓶	(8.2)	(1.4)	-	1/2	1/2		上段	北地区	SK224	位置図あり
168	45	71	陶生土器	小瓶	(8.0)	1.15	5.6	1/4	2/8		上段	北地区	SK224	埋土下層 底まで
169	45	71	陶生土器	小瓶	7.65	1.45	4.9	-	-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224	灰褐色土 南半部
170	45	71	陶生土器	小瓶	8.25	1.4	(5.65)	2/3	ほぼ完存		上段	北地区	SK224	位置図あり
171	45	73	土師器	瓶	25.6	13.94	-	6.7	-		上段	北地区	SK224	位置図あり
172	45	71	土師器	瓶	(25.2)	(9.05)	-	6.7	-	ほぼ完形	上段	北地区	SK224(北半部)	
173	45	72	土師器	瓶	(26.8)	(9.14)	-	1/2	若干	全体1/4	上段	北地区	SK224	位置図あり
174	45	71	土師器	瓶	(20.6)	(6.8)	-	1/4	-		上段	北地区	SK224	
175	45	73	瓦器	瓶	(13.9)	(5.1)	-	-	3/5		上段	北地区	SK224	位置図あり
176	45	73	瓦器	瓶	-	(1.6)	(4.8)	-	1/3	瓶台1/2	上段	北地区	SK224	埋文あり
177	45	73	瓦器	瓶	-	(1.7)	(4.7)	-	1/4		上段	北地区	SK224	埋文あり
178	45	73	青白磁	小瓶	-	(2.0)	(3.95)	-	1/3	全体1/3	上段	北地区	SK223(北半部)	
179	45	73	白磁	瓶	-	(2.0)	(5.65)	-	1/3		上段	北地区	SK224	埋土下層 底まで
180	45	73	土製品	土瓶	3.75	1.01	-		-	ほぼ完形 孔径0.25cm	上段	北地区	SK224(北半部)	
181	45	74	無釉陶器	搖籃	(39.3)	13.75	(22.4)	わかん	-	全体1/2弱 (江戸型)	上段	北地区	SD273(西)	
182	45	74	無釉陶器	搖籃	-	(5.9)	(13.2)	-	1/8		上段	北地区	SD273(西)	
183	45	73	無釉陶器	瓶	-	(4.9)	(4.4)	-	3/4		上段	北地区	SD273(東)	
184	45	74	土師器	広口瓶	(20.7)	(7.15)	-	1/4	-		上段	北地区	SD262	
185	45	74	土師器	広口瓶	-	(4.8)	-	-	-	埋文あり 1/6	上段	北地区	SD262	
186	45	73	無釉陶器	火入れ	9.8	5.5	8.0	-	-	完形	上段	北地区	SD262	
187	45	74	無釉陶器	搖籃	不明	(5.4)	-	わかん	-	丹波焼 1本 引手	上段	北地区	SD268	下半部(移 居屋)内 セクション 内

第3表 日下部遺跡出土土器一覧(4)

番号	房別	器質	種類	器種	法量(cm)			現存	備考1	出土地区	出土遺構	層位	備考2		
					口幅	高さ	底径								
188	46	74	土加器	羽釜	(27.0)	(6.8)	(29.2)	若干	1/18	上段	北地区西半		人力		
189	46	74	土加器	壺	(26.6)	(6.5)	(23.0)	1/9	-	上段	北地区 南半		費城		
190	46	74	土加器	壺	不明	(5.25)	-	わざか	-	上段	北地区 北半		人力2回目		
191	46	74	須恵器	壺	-	(3.55)	6.25	-	ほぼ完存	底部に縄目様 削跡	上段	北地区南西部	大羅丸	埋土(下層)	
192	46	74	須恵器	壺	(35.0)	(4.2)	(5.1)	1/4	1/4	上段	北地区 中央 東半		小段旧墳土 人力		
193	46	73	須恵器	小瓶	7.5	1.25	4.9	1/2弱	2/3	上段	北地区 南半		費城		
194	46	74	染付器	壺	(32.6)	(5.45)	-	1/9	-	明音花 漆草花	上段	北地区 南半		費城	
195	46	74	青磁	碗	-	(3.55)	(5.7)	1/2弱	-	上段	北地区		上層塗付層		
196	46	74	青磁	碗	-	(1.8)	4.7	-	ほぼ完存	黒釉質	上段	北地区 南半		費城	
197	46	74	無釉陶器	盆鉢	不明	(9.85)	-	若干	-	破片	上段	北地区	遺物検出中		
198	46	75	土加器	長颈壺	(28.2)	(20.3)	-	1/8	-	器部1/4	上段	中央地区	SK634	一段下げ	
199	46	75	土加器	壺A	(15.7)	(2.9)	-	1/18	-	前文あり	上段	中央地区	SK634	一段下げ	
200	46	75	須恵器	壺B	-	(2.3)	(11.2)	-	1/9	-	上段	中央地区	SK673	昭和期	
201	46	75	須恵器	环盞	(14.8)	(2.1)	-	1/5	-	上段	中央地区 北半・小字		黑色土道壁?	費城	
202	46	73	青磁	(脚付) 鉢	(21.7)	(7.4)	(10.0)	1/6	1/2弱	肥腹系	上段	中央地区		人力	
203	46	75	須恵器	片口鉢	(27.7)	(6.65)	-	1/7	-	上段	中央地区 北端		遺物検出時 含む		
204	46	75	施釉陶器	搖籃	(54.4)	13.4	(15.0)	1/8	1/3	丹波焼、施粗	上段	中央地区 東端		費城	
205	46	76	瓦	軒平瓦	瓦8.2 軒11.9	26.5	1.7	左当輪瓦 軒瓦部1/4 前	-	数値は長さ、 幅、厚さ	上段	中央地区	横乱瓦	埋土	
206	46	76	瓦	軒平瓦	瓦15.9 軒11.2	26.0	1.6	瓦当3/4 軒瓦部1/3	-	数値は長さ、 幅、厚さ	上段	中央地区		横乱瓦	
207	47	77	施釉陶器	壺	(11.6)	9.1	9.3	1/4	完存	丹波焼	上段	中央地区	SK601	漆石土瓦	
208	47	77	施釉陶器	壺	(26.9)	(5.15)	-	1/4+1/4	-	上段	中央地区	SK601	漆石土瓦		
209	47	77	土製品	土人形	(3.8)	1.75	(2.2)	-	不明	比世寺山 数値は長さ、 幅、厚さ	上段	中央地区	SK11		
210	47	77	染付器	碗C型	-	(1.95)	(5.6)	-	1/4	明音花	上段	中央地区	SK12		
211	47	77	色絵陶器	壺	(7.6)	8.5	7.7	1/4	尚存7.8	上段	中央地区	SK12			
212	47	77	瓦	軒枝瓦	26.4	2.3	1.9	瓦当2.3 半+軒瓦 1/3	-	数値は長さ、 幅、厚さ	上段	中央地区	SK110		
213	47	77	瓦質土器	火盆	-	(9.7) (13.7)	(21.4)	-	1/4	轆轤立	上段	中央地区	SK14-E	下履里灰砂	
214	48	78	施釉陶器	搖籃	片口2.1	6.1	10.3	1/2	1/2	丹波焼、施密	上段	中央地区	SK78		
215	48	78	施釉陶器	搖籃	片口2.1	13.4	15.0	1/2	完存	丹波焼、施密	上段	中央地区	SK78		
216	48	78	染付器	德利	5.9	(21.1)	7.8	1/3強	1/4	徳利(11.7) cm	上段	中央地区	SK70		
217	48	78	染付器	小瓶	(9.3)	5.1	4.0	1/5	完存	徳利1/5 瓶高2/3	上段	中央地区	SK70		
218	48	78	陶軽量	小鉢	8.1	2.4	4.7	3/4	3/4	数値は幅、 高さ	上段	中央地区	SK70		
219	48	80	瓦質土器	壺	(27.5)	(3.75)	-	1/8.13	1/1	-	上段	中央地区	FS2		
220	48	80	染付器	壺	-	(2.3)	(6.2)	-	1/7	明音花、紫紺	上段	中央地区	SK654	石の下	
221	48	79	染付器	壺	9.9	3.45	4.55	3/4	ほぼ完存	コシニヤカ印 手判	上段	中央地区 南半	SK664		
222	48	79	青磁	壺	(8.0)	2.3	4.3	1/3	ほぼ完存	三田青磁	上段	中央地区	SK655		
223	48	79	土加器	他器	(28.4)	(4.95)	-	1/3	1/8以下	-	上段	中央地区 南半	SK43 岡廻	人力	
224	48	80	無釉陶器	搖籃	(30.4)	(11.55)	(10.7)	1/9	1/4	丹波焼、王本 引引き	上段	中央地区	SK43	石の下	
225	48	80	無釉陶器	搖籃	不明	(7.9)	-	罐片	-	丹波焼、王本 引引き	上段	中央地区 南半	SK43W	集石溝断ち 割り	
226	48	80	青磁	碗	(3.35)	(5.3)	-	-	1/3	数値は長さ、 幅、厚さ	上段	中央地区	SK43		
227	48	79	染付器	壺	(11.9)	3.7	3.9	1/4	ほぼ完存	-	上段	中央地区 南半	SK43 岡廻	人力	
228	48	79	白磁	小瓶	6.4	3.05	2.7	-	ほぼ完形	既往見度	上段	中央地区 南半	SK77	写真あり	
229	48	80	染付器	壺	(13.0)	(4.05)	-	1/9	-	明音花	上段	中央地区	SK659		
230	48	79	瓦	瓦	28.55	25.3	20.5	-	7/8	数値は長さ、 幅、厚さ	上段	南地区 南半	SK72		
231	48	80	無釉陶器	壺	(26.4)	(6.0)	-	1/3強	-	別部1/5	上段	南地区	SK652		
232	49	81	土加器	壺	9.1	2.0	6.1	9/10	完存	丹波焼	上段	南地区	SK77		
233	49	81	須恵器	壺	(15.0)	(5.15)	-	1/18	-	-	上段	南地区	SK77	既往引セク シル降去時	
234	49	81	無釉陶器	壺	(13.4)	(4.95)	-	1/4	-	丹波焼	上段	南地区	SX1007 西半	褐色赤	
235	49	81	須恵器	壺	(15.7)	(4.8)	-	1/5	-	-	上段	南地区	SX1007 東半	砂利中	
236	49	81	無釉陶器	壺	不明	(8.2)	-	わざか	-	丹波焼	上段	南地区	SX1007 東半	砂利	
237	49	82	無釉陶器	搖籃	(28.6)	(6.9)	-	1/4	-	丹波焼、王本 引引き	上段	南地区	SX1007 東半	主に櫛内	
238	49	82	無釉陶器	搖籃	(32.7)	(14.5)	(13.8)	1/7+1/6	1/3	丹波焼、王本 引引き	上段	南地区	SX1007		
239	49	82	無釉陶器	搖籃	-	(6.5)	(13.2)	-	1/8以上	丹波焼、王本 引引き	上段	南地区	SX1007 東半	黄褐色赤壁 人鳥的押土	
240	49	82	無釉陶器	搖籃	(47.9)	(10.9)	-	1/12	-	丹波焼、施粗	上段	南地区	SX1007 東半	主に櫛内	

第3表 日下部遺跡出土土器一覧（5）

番号	房室 区分	器表 模様	種類	器種	法量 (cm)		現存 数	備考 1	出土地区	出土遺構	層位	備考 2		
					口縁 直角	高さ								
241	49	82	無釉陶器	鋤形	4-9	(4.3)	1/8-11.7	手挽焼、櫛目	上段 南地区	SX1007	東邊櫛目			
242	49	81	施釉陶器	鋤形	27.7	11.35	13.65	2.5 2/3	手挽焼、櫛目	上段 南地区	SX1007 東竈	写		
243	49	83	施釉陶器	瓶	(10.3)	(2.7)	(6.0)	1/7	1/3	鶴川美濃	上段 南地区	SX1007 東手	王に難内	
244	49	83	施釉陶器	瓶 or 瓢	-	(1.9)	(3.9)	-	1/3	手挽焼	上段 南地区	SX1007 東手	黄褐色砂礫 人為的上	
245	49	83	施釉陶器	瓶	(33.0)	3.3	(5.0)	1/9-12.7	1/4	手挽焼	上段 南地区	SX1007 中央 沙砾中		
246	49	81	施釉陶器	無柄瓶	(30.8)	13.55	(12.0)	1/4	1/3	手挽焼	上段 南地区	SX1007 東竈		
247	49	83	白磁	瓶	-	(2.1)	-	-	3/4	手挽焼	上段 南地区	SX1007 W	条短沙砾	
248	49	83	柴付陶器	瓶	-	(1.25)	(6.0)	-	2/3	白面わずか	上段 南地区	SX1007	乳脂繪引出	
249	49	83	柴付陶器	瓶	-	(3.4)	5.8	-	完存	初期伊万里焼	上段 南地区	SX1007 東手	薄壁	
250	50	83	施釉陶器	瓶	(30.8)	6.76	20.4	1/2	完存	手挽焼	上段 南地区	SX1001		
251	50	83	柴付陶器	瓶	-	(4.9)	5.0	-	完存	手挽焼	上段 南地区	SX1001		
252	50	83	土師器	瓶	8.5	1.7	-	-	-	ほば定形	明里皿	上段 南地区	SX1010	瓦瀬より
253	50	84	土師器	瓶	(9.8)	(2.35)	-	1/3	-	手挽焼	上段 南地区	SX1013 アゼ		
254	50	84	土師器	瓶	(9.8)	(2.05)	-	1/7	-	手挽焼	上段 南地区	SX1013		
255	50	84	土師器	瓶	4-9	(2.0)	-	1/12	-	手挽焼	上段 南地区	SX1013	アゼ	
256	50	84	須恵器	瓶 (底部)	-	(2.35)	(12.1)	-	1/4 割	手挽焼	上段 南地区	SX1013 アゼ		
257	50	84	無釉陶器	瓶 (把手)	不明	(4.4)	-	-	-	把手のみ	鶴川焼	上段 南地区	SX1013 アゼ	
258	50	84	無釉陶器	片口	(30.0)	(9.35)	-	1/10	-	手挽焼	上段 南地区	SX1013		
259	50	84	施釉陶器	ひょうき	1.85	4.4	3.0	-	ほば定形	天井部と足 部分は残存 部分3-5	手挽焼 6.5cm	上段 南地区	SX1010	土坑底近く 薄茶色土
260	50	84	須恵器	瓶	(32.0)	(5.5)	-	1/9	-	手挽焼	上段 南地区	SX1041		
261	50	84	柴付陶器	瓶	(12.6)	(3.5)	-	1/11	1/2	手挽焼	上段 南地区	SX1041		
262	50	85	土師器	瓶	(8.7)	1.5	-	1/3	1/3	手挽焼	上段 南地区北	SK1009	珪化木も出土	
263	50	85	柴付陶器	瓶	10.0	5.4	3.7	1/2	完存	手挽焼	上段 南地区北	SK1009	珪化木も出土	
264	50	85	瓦類	埠	41.0	(38.5) 最大 31.7 3.55	(33.5) 最大 31.7	-	3/5程度	手挽焼は長さ・ 幅・厚さ	上段 南地区北	SK1009	珪化木も出土	
265	51	86	土師器	瓶	(9.6)	(1.3)	-	1/12	-	手挽焼	上段 南地区	SX1037	全幅	
266	51	86	土師器	瓶	-	(1.05)	5.0	-	1/4?	手挽焼	上段 南地区	SX1037	全幅	
267	51	86	須恵器	壺	-	(4.7)	7.8	-	3/4	手挽焼	上段 南地区	SX1037	全幅	
268	51	86	瓦質土器	豆皿	(29.4)	(11.8)	-	1/7	-	手挽焼	上段 南地区	SK1035	施石上面まで	
269	51	86	土師器	瓶	(7.2)	(1.5)	-	1/3	-	手挽焼	上段 南地区	SF1063	薄茶色土、右 引數子、右 ?	
270	51	86	須恵器	壺	(12.0)	(3.2)	-	-	1/10	手挽焼	上段 南地区	SF1063	伍介屋 (古世)	
271	51	86	土師器	瓶	(7.9)	(1.8)	(5.4)	5/6	5/6	手挽焼	上段 南地区	SX1043		
272	51	86	瓦類	瓦片瓦	(38.0)	(15.7)	(1.7)	-	-	手挽焼は長さ・ 幅・厚さ	上段 南地区	SX1043		
273	51	88	土師器	高杯	-	(3.1)	-	-	-	脚部破損のみ	上段 南地区	SCK002	舟形柄 精食	
274	51	87	土師器	瓶	8.3	1.8	-	1/2強	-	手挽焼	上段 南地区	SX1037	造形まで	
275	51	88	土師器	瓶	(30.8)	(1.5)	-	-	-	手挽焼	上段 南地区南	SX1037	火照砂埋	
276	51	88	土師器	壺	(19.9)	(3.15)	-	1/18	-	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	造形面まで	
277	51	88	施釉陶器	月持系	-	(4.0)	(4.2)	-	1/4	鶴川美濃	上段 南地区北	未だ下へ移 確	砂埋 王	
278	51	88	青磁	碗	(13.9)	(3.55)	-	1/10	-	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	未だ下へ移 確	砂埋 王
279	51	87	瓦類	埠	(22.3)	(39.8)	4.5	-	? 前後は長さ・ 幅・厚さ	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	造形面まで	
280	51	88	土師器	瓶	6.3	1.9	-	3/4	-	手挽焼	上段 南地区	SX1037	北丘頭	
281	51	87	土師器	瓶	(9.9)	(1.6)	(6.6)	1/8	1/2	手挽焼	上段 南地区	SX1037	北段落部	
282	51	87	土師器	瓶	(6.7)	(1.4)	-	1/5	-	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	薄茶色土、 王	
283	51	87	土師器	瓶	(8.6)	1.8	-	1/2強	4/5	手挽焼	上段 南地区	SX1037	圓筒形	
284	51	87	土師器	瓶	(9.0)	1.7	-	1/8	1/8	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	造形面まで	
285	51	88	土師器	瓶	8.7	1.6	2.7	5/6	ほば定形	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	薄茶色砂土	
286	51	88	土師器	瓶	8.8	1.9	6.5	1/3	ほば定形	手挽焼	上段 南地区	SX1037	北段落部	
287	51	87	土師器	瓶	(9.3)	1.6	(9.0)	1/4	1/4	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	薄茶色砂土	
288	51	87	土師器	瓶	(9.0)	1.5	(7.1)	1/3	若干	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	薄茶色砂土	
289	51	88	施釉陶器	灯明	10.7	2.3	4.0	3/4	ほば定形	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	造形面まで	
290	51	89	陶胎骨付	碗	(9.2)	(5.2)	(7.8)	1/12	わざか	手挽焼 1/5	上段 南地区	SX1037	北段落部	
291	51	89	柴付陶器	碗	(9.9)	5.05	4.0	わざか	定形	手挽焼	上段 南地区	SX1037	東側面	
292	51	89	柴付陶器	碗	-	(5.65)	(6.0)	-	1/2弱	手挽焼	上段 南地区	SX1037	東側面	
293	51	89	白磁	碗	(10.9)	6.5	6.44	7/36	定形 底台はほ れ有	仁東碗	上段 南地区北	SX1037	薄茶色砂土	
294	52	90	施釉陶器	碗	(37.0)	(25.2)	-	1/4	-	手挽焼	上段 南地区	SX1037	我燒王に移 の下	
295	52	90	無釉陶器	碗	-	(31.5)	20.25	-	定形	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	前前國にあり	
296	52	90	須恵器	西鉢	(23.5)	(6.45)	-	1/15	-	手挽焼	上段 工事地	SX1037	表様	
297	52	90	無釉陶器	碗	-	(6.3)	(21.0)	-	1/7-1/9	手挽焼	上段 南地区北	SX1037	No 19 領立	

第3表 日下部遺跡出土土器一覧（6）

番号	器質 固形	容積 ml	種別	器種	法量(cm)			現存 状況	備考 1	出土地区	出土遺構	層位	備考 2			
					口径	底面 直径	底深 mm									
298	78	115	土加器	絆筒 (直)	-	3.0	(12.0) 底	-	1/6 底		西地区	SX301	表土中	日下部絆筒		
299	78	115	土加器	絆筒 (身)	(15.2)	(6.0) *	(13.8)	1/6	4/5 木柄台		西地区	SX301	底板上	日下部絆筒		
300	78	115	須恵器	环身	(11.9)	(4.05)	-	1/6	-		(西地区) No.19-02 地点		表土中			
301	79	55	瓦質土器	羽茎						脚部	下段	南地区	SR400	埋土	畔以北	
302	79	56	土加器	縄						タクテ	下段	北地区	SR400	セタ シエラ半	近井	
303	79	56	土加器	羽茎							下段	中央地区中央	SR400	下層		
304	79	56	土加器	縄							下段	下段中央地区	SR400	セタ シエラ		
305	79	56	須恵器	縄							下段	北地区	SR400	埋土		
306	79	59	青磁	碗							底部	下段	北地区	SR400 北部	暗灰色シル ト以下	
307	79	59	白磁	碗							底部	下段	中央地区	SR400		
308	79	60	無釉陶器	盤							丹波地?	下段	北地区	SR400	埋土	
309	79	60	施釉陶器	壺							肩部耳付	下段	北地区	SR400	埋土	
310	79	61	施釉陶器	片口鋤							内面のみ施釉	下段	北地区北東	流路 SR415		
311	79	61	無釉陶器	鉢							輪削痕・窓印	下段	北地区北東	流路 SR415	鐵械含む	
312	79	62	施釉陶器	碗							底部渦幅	下段	北地区北部	方形石組井 P/SEA16	埋土	畔の西側
313	79	62	染付陶器	壺								下段	北地区北部	P/SEA16	埋土	畔の西側
314	79	62	無釉陶器	盤							輪削痕 or 丹波 焼	下段	北地区	SE465	一段下げる	
315	79	62	施釉陶器	天目 盃碗							美濃焼	下段	北地区	SE450	一段下げる	
316	79	64	土加器	縄							京都系	下段	北地区	SK404	埋土	
317	79	64	無釉陶器	壺							無施塗	下段	北地区	SK501		
318	79	64	瓦	軒丸瓦							巴文	下段	北地区	SK621		
319	79	64	瓦	軒平瓦								下段	北地区	SK621		
320	79	65	施釉陶器	瓶							信濃燒・藤口	下段	中央地区	SK625		
321	79	65	無釉陶器	壺							輪削痕	下段	北地区東端	SK375	上層	
322	79	65	無釉陶器	壺							輪削痕	下段	北地区東端	SK375	上層	
323	79	66	無釉陶器	瓶							丹波焼・藤粗	下段	中央地区南手	SR400 (鐵械含む)	上層	
324	79	67	施釉陶器	碗							信濃燒・藤口	下段	北地区	SK625	費械	
325	79	67	施釉陶器	小瓶							信江美濃灰輪	下段	北地区		表様	
326	79	66	青磁	碗							繩文文	下段	北地区北西端		人力	
327	79	66	青磁	碗							印花文・印字 打ち	下段	北地区北西端		人力	
328	79	66	染付陶器	皿							明治花底盤	下段	北地区北半		費械	
329	79	71	無釉陶器	片口 瓶							丹波焼 1本 引け	上段	北地区北半		人力	
330	79	77	施釉陶器	壺								上段	中央地区	SK001	集石土坑	
331	79	77	瓦	軒平瓦								上段	中央地区	SK001		
332	79	77	瓦質土器	短鉢								上段	中央地区	SK12		
333	79	77	瓦質	縄								上段	中央地区	SK12		
334	79	80	染付陶器	皿							純ノ目輪調芳	上段	中央地区	SK604	石の下	
335	79	80	染付陶器	瓶子								上段	中央地区	SK604	石の下	
336	79	80	染付陶器	碗							純ノ目輪調芳	上段	中央地区南手	SK604		
337	79	80	青磁	瓶							伊万里焼・耳 付き	上段	中央地区	SK604	石の下	
338	79	81	無釉陶器	甕							丹波焼底足	上段	南地区	SX1007 中央	砂礫中	
339	79	82	無釉陶器	瓶							丹波焼 1本 引け	上段	南地区	SX1007	瓦礫裡泊り	
340	79	82	無釉陶器	瓶							丹波焼	上段	南地区	SX1007	圓底茶シル ト	
341	79	82	施釉陶器	甕							瓶土引	上段	南地区	SX1007		

第3表 日下部遺跡出土土器一覧（7）

番号	写真 回数	器種	種別	器種	法量(cm)				現存	備考1	出土地区	出土遺構	層位	備考2	
					口径	底面	底径	口縁							
342	写真のみ	82	施釉陶器	大瓶						砂打跡	上段	南地区南端	SX1007 W	赤褐色	
343	写真のみ	83	施釉陶器	壺						削溝痕、底十日形	上段	南地区	SX1007 東手渠底	主に裡内	
344	写真のみ	83	青磁	碗						三田青磁か	上段	南地区	SX1007 東福禮羽目		
345	写真のみ	84	施釉陶器	壺							上段	南地区	SX1001	一段下げ	
346	写真のみ	84	陶器	壺						肩部	上段	南地区	SX1041		
347	写真のみ	84	黑漆器	壺						肩部	上段	南地区	SX1041		
348	写真のみ	85	瓦組	堆							上段	南地区北東場	SX1039	珪化木も出土	
349	写真のみ	85	瓦組	堆							上段	南地区	SX1040		
350	写真のみ	85	瓦組	理							上段	南地区	SX1040		
351	写真のみ	85	瓦組	堆							上段	南地区	SX1040		
352	写真のみ	85	瓦組	理							上段	南地区	SX1040		
353	写真のみ	86	土師器	瓶						赤切り	上段	南地区	SX1036		
354	写真のみ	86	土師器	瓶						赤切り	上段	南地区	SX1036	全幅	
355	写真のみ	86	染付鏡器	鏡						緑色釉薬	上段	南地区	右岡上炭跡		
356	写真のみ	86	土師器	小瓶						不明直	上段	南地区	SX1043		
357	写真のみ	86	土師器	小瓶						不明直	上段	南地区	SX1042	J型	
358	写真のみ	86	黑漆器	壺							上段	南地区	SX1054		
359	写真のみ	86	染付前器	鏡							上段	南地区	SX1035		
360	写真のみ	86	染付前器	鏡							上段	南地区北東場	SX1039	珪化木も出土	
361	写真のみ	87	土師器	小瓶						手捏ね 灯明 瓶	上段	南地区北東場	遺構面まで		
362	写真のみ	87	土師器	小瓶						手捏ね 灯明 瓶	上段	南地区北東場	遺構面まで		
363	写真のみ	88	黑漆器	施						系切り	上段	南地区西半中央		人力	
364	写真のみ	89	無釉陶器	瓶子							上段	南地区北東場	遺構面まで		
365	写真のみ	89	染付前器	筒形瓶						18C後半	上段	南・西北地区	遺構面まで		
366	写真のみ	89	染付前器	瓶						乾ノ目輪調	上段	南地区北東場	遺構面まで		
367	写真のみ	89	染付前器	小瓶							上段	南地区	遺構面まで		
368	写真のみ	89	染付前器	鏡							上段	南地区	遺構面まで		
369	写真のみ	89	染付前器	瓶						乾ノ目輪調	上段	南地区東半		機械主に作の下	
370	写真のみ	89	染付前器	鏡							上段	南地区北東半		遺構面まで	
371	写真のみ	90	瓦組	堆							上段	南地区	北半段落部		
372	写真のみ	90	瓦組	道具瓦						瓶瓦	上段	南地区	遺構面まで		
373	写真のみ	90	無釉陶器	壺						舟渡燒	上段	南地区省半	谷部底		
374	写真のみ	90	無釉陶器	壺						船首突起	上段	南地区北西竹林上		Nd.19 地丘	
375	写真のみ	96	土製品	黒漆 or 純漆						丸あり	下段	北地区上段斜		表張	

実測図の断面
白抜きは陶生土器、土師器、瓦器
黒塗りは漆器
網点は陶器

第4表 日下部遺跡出土木製品一覧 (1)

番号	因版	写真因版	製品名	備考1	地区	位置	造構	土層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考2
W1	53	91	付木		北	SR400 上端	暗灰色(43)15 F	86	0.9	0.65		
W2	53	91	付木		中央	SR400 杖頭		114	0.8	0.8		
W3	53	91	曲物 or 植 底板		中央	南手	SR400	下層	(127)	(31)	0.8	
W4	53	91	植薄板	小型植 植底か	中央	北端	SR400	中下層	113	2.45	0.45	
W5	53	91	提灯上輪	鋼製	北	SR400	上層	(9.8)	315	0.45		
W6	53	91	輪切り材		南	SR400	埋土	86	8.1	1.7		
W7	53	91	植薄板		北	SR400	上層	319	8.3	1.3		
W8	53	91	植薄板		北	SR400	上層	295	5.0	1.1		
W9	53	91	板材	切り込み	北	南手	SR400	上層極丸同上	(36.2)	(6.3)	0.7	
W10	54	C5・91	漆器碗	赤色系漆	北	SR415	町内	(9.8)	(31)	(5.8)	数枚は口模、蓋高 底径	
W11	54	C5・91	漆器碗	外黒内赤色系漆	北	北東	SR415		10.8	(4.4)	(5.4)	
W12	54	91	円形挽物	黒色漆塗	北	北東	SR415		(20.6)	(12.1)	2.65	(30.0) 底径
W13	54	92	箸		北	北端	SR415		22.45	0.6	0.5	
W14	54	92	箸		北	北部東手	SR415	町懸吊時	(24.3)	0.7	0.7	
W15	54	92	箸		北	SR415		(18.4)	0.55	0.65		
W16	54	C5・92	柵蓋板	黒色・転写文字	北	SR415			23.4	(16.8)	1.05	
W17	54	92	曲物底板	墨書き	北	北東部	SR415	灰色粘質砂	(6.75)	0.7	12.9 底径	
W18	55	92	長円形曲物 底板	円孔	北	北東	SR415		(45.3)	(5.2)	0.75	
W19	55	92	植物	黒色 植底か	北	北端	SR415		(12.2)	4.1	0.9	
W20	55	92	絞木板	折板	北	北端	SR415	人力	(6.9)	(3.4)	0.3	
W21	55	92	絞木板	絞底	北	北東	SR415		15.0	(3.6)	0.15	
W22	55	92	竹筒	竹	北	SR415	埋土除去中	10.8	2.7	2.3		
W23	55	93	柄	円孔	北	北端	SR415		22.8	1.6	1.9	
W24	56	93	植薄板		北	SR415	町内	24.6	6.7	1.0		
W25	56	93	角材		北	北東部	SR415	機械合せ	(7.8)	(3.2)	1.55	
W26	56	93	角材		北	北端	SR415	埋土下平	7.3	6.4	3.03	
W27	56	93	角材		北	北端	SR415	埋土下平	13.4	2.7	2.8	
W28	56	93	丸太材		北	北部	SR415	埋土下平	(48.3)	8.8	6.0	
W29	56	93	杭		北	北端	SR415	埋土下平	(18.0)	4.4	4.4	
W30	56	93	杭		北	北端	SR415		(16.5)	4.8	4.9	
W31	56	C5・93	製材板	横挽き	北	北端	SR415		(73.4)	23.1	7.4	
W32	57	94	曲物 or 植 底板	鋤孔	北	北端	SE416	埋土末端部	12.2	11.5	0.6	
W33	57	94	曲物 or 植 底板		北	SE416	埋土	12.6	11.5	0.9		
W34	57	94	曲物 or 植 底板		北	北端	SE416	埋土下層		(6.75)	0.9	12.3 底径
W35	57	94	曲物底板	抜 植底	北	北部	SE416	埋土下層	(5.7)	(2.0)	0.7	
W36	57	94	調査	植底少	北	北部	SE416				1.5	23.0 底径
W37	57	94	箸		北	北部	SE416	埋土下層	(10.4)	0.55	0.55	
W38	57	94	楓櫛		北	北端	SE416	埋土末端部	8.5	4.2	0.8	
W39	57	94	植物	木釘	北	北部	SE416	埋土下層	22.8	(6.4)	0.75	
W40	57	94	植物		北	北部	SE416	埋土下層	(21.6)	4.5	0.7	
W41	57	94	杭		北	北部	SE416	埋土下層	(24.4)	2.05	1.4	
W42	57	94	杭		北	北部	SE416	埋土下層	(16.4)	(31)	2.8	
W43	58	94	植薄板	木釘孔	北	SK501			33.6	6.2	1.0	
W44	58	94	植薄板	矢張状再加工	北	SK501			22.5	8.4	1.1	
W45	58	94	板材		北	SK501			(19.8)	8.75	1.4	
W46	58	95	調査	植底少	北	SK501			(24.3)	(5.25)	1.2	
W47	58	95	調査	植底少	北	SK501			30.7	(6.5)	1.1	
W48	58	95	植物	鋤孔 植底少	北	SK501			31.25	5.95	1.55	
W49	58	95	竹筒	竹	北	SK501			35.95	2.3	2.3	
W50	58	95	縦引材木		北	SK501			26.9	4.4	4.25	
W51	59	96	下駄	前脚	北	SK501			21.3	9.35	2.45	
W52	59	96	下駄	前脚	北	SK501			21.65	9.35	2.4	57 器高
W53	59	96	下駄	連脚	北	SK501			21.05	8.9	3.3	
W54	59	97	板材	鋤孔	北	SK501			(28.7)	(5.7)	1.2	
W55	59	97	板材	鋤孔	北	SK501			(32.15)	(8.75)	1.85	
W56	59	97	板材	孔	北	SK501			(48.1)	(13.5)	1.0	
W57	60	97	角材		北	SK501			10.2	4.9	2.7	
W58	60	97	角材	鋤孔	北	SK501			25.95	5.1	2.6	
W59	60	97	杭		北	SK501			(36.95)	4.1	4.15	
W60	60	97	杭		北	SK501			34.75	3.75	3.3	
W61	60	97	杭		北	SK501			63.7	3.9	3.5	

第4表 日下部遺跡出土木製品一覧（2）

番号	因版	写真因版	製品名	備考1	地区	位置	遺構	土層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考2	
W62	60	97	下駄	通南 露地	北		SK608	北端石組内	21.95	(5.7)	3.4		
W63	60	97	下駄	通南	北		SK608北端	下層	22.0	9.8	2.6		
W64	60	97	柄		北		SK608北端	下層	33.3	2.3	1.7		
W65	61	C5・98	漆器大皿	外黒内赤系漆 老鶴	北		SK608		(30.4)	2.8	(19.0)	数値は口径、器高、底径	
W66	61	C5・98	杓子	柄洗か	北		SK608	北端石組内	(13.4)	7.0	1.65		
W67	61	C5・99	漆器大皿	外黒内赤系漆	北		SK510	中央部西寄り	(29.0)	(3.3)	(19.0)	数値は口径、器高、底径	
W68	62	C5・100	曲物板柾	蓋 罫書き	北		SK419	埋土	11.95	(7.55)	0.25		
W69	62	C5・100	杓子	黒色 柄洗か	北		SK419	埋土	(13.7)	8.9	0.9	16器高	
W70	62	100	箸	竹	北		SK419	埋土	22.55	0.65	0.65		
W71	62	100	匙	竹	北		SK419	埋土	(13.3)	10.6	0.13		
W72	62	100	板柾	釘孔	北		SK419	埋土	(17.4)	5.9	1.3		
W73	62	100	漆器碗	外黒内赤系漆	北	北平	SK601			(36)	6.4	数値は器高、底径	
W74	62	100	棒状木製品		北		SK464	桶内埋土	(9.9)	1.6	1.6		
W75	62	100	筆筒	赤色系、黒色漆	中央		SK449	桶内埋土	(15.5)	0.5	0.5		
W76	62	100	板柾		中央	上段中空	SK65	上段	21.35	5.15	0.3		
W77	63	101	把手	木釣	北		SK575		10.3	2.4	2.0		
W78	63	101	曲物 or 植	板柾	北		SK621		9.7	9.7	0.9		
W79	63	C5・101	漆器椀	赤色系漆	北		SK621		(11.0)	3.5	(5.3)	数値は口径、器高、底径	
W80	63	101	下駄	通南 烧き印	北		SK621		(12.7)	(4.2)	1.5		
W81	63	101	箸	中央	SK736			桶内埋土	21.7	0.6	0.6		
W82	63	101	箸	中央	SK736			桶内埋土	21.0	0.7	0.5		
W83	63	101	箸	中央	SK736			桶内埋土	(18.7)	0.65	0.65		
W84	63	101	箸	中央	SK736			桶内埋土	(11.45)	0.55	0.55		
W85	63	101	箸	中央	SK736			桶内埋土	(10.6)	0.6	0.65		
W86	63	101	匙	竹	中央	SK736		桶内埋土	11.9	1.4	0.4		
W87	63	101	匙	竹	中央	SK736		桶内埋土	15.7	2.5	0.4		
W88	63	101	切匙	竹	中央	SK736		内部埋土埋植	24.2	2.25	0.6		
W89	63	101	切匙	柄洗か	中央	SK736		内部埋土埋植	21.2	2.95	0.9		
W90	64	102	角材		中央		SK736	桶内埋土	(12.1)	(1.0)	0.9		
W91	64	102	角材	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	(26.5)	3.3	2.6		
W92	64	102	植底板	組み合わせ	中央		SK736	桶内埋土	29.7	(30.6)	1.5		
W93	64	102	植桿板		中央		SK736	桶内埋土	29.6	5.75	1.25		
W94	64	102	板柾		中央		SK736	内部埋土	(55.15)	16.8	1.7		
W95	64	102	板柾	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	30.7	18.8	2.1	27器高	
W96	64	102	板柾	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	51.2	14.7	1.25		
W97	65	103	埋植	埋植組み上げ	北		SK888		36.8	(28.8)	35.2	数値は幅、器高、底径	
W98	65	103	植桿板		北 東			東半埋丸	(29.25)	4.05	1.25		
W99	65	103	植桿板		北 東			東半埋丸	(29.8)	4.25	1.25		
W100	65	65	103	建築部材	北 南半部			埋丸合掌	人力	(21.1)	7.7	2.6	
W101	65	103	建築部材		北 南部			道標焼付時	(10.25)	(3.8)	2.65		
W102	65	104	下駄	通南 露地	北 東			東半埋丸	機械	21.15	9.25	3.25	
W103	65	104	下駄	通南	北 東			東半埋丸	機械	(21.15)	(4.8)	2.1	
W104	66	104	竹筒	竹	中央		SK739	裏内埋土	(13.1)	1.8	1.7		
W105	66	104	油物	黒色 柄洗か	北 東			東半埋丸	機械	(8.95)	(5.55)	0.8	
W106	66	104	穿孔耐板	板柾	中央 北西端			近世落込	機械	27.7	1.4	0.6	
W107	66	104	加工角材		北 西西北			人力	(8.4)	1.5	0.9		
W108	66	104	加工板柾		北 北東			東半埋丸	機械	10.15	(4.65)	1.25	
W109	66	104	絆木板	絆き	北 北東			東半埋丸	機械	(16.0)	(3.0)	0.35	
W110	写真のみ	91	付木		北	北平		流路南					
W111	写真のみ	101	漆器椀	外黒内赤系漆	北		SK621						
W112	写真のみ	101	漆器椀	赤色系漆	北		SK621						
W113	写真のみ	101	漆器椀	赤色系漆	北			表様					
W114	写真のみ	C5	角材	赤色系釦料	中央 東端			包合頬及び 椎丸					

第5表 日下部遺跡・日下部経塚出土金属製品一覧

番号	図版	写真 図版	種別	製品名	種類	出土地区	遺構	土層	備考	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
M1	67	105	銅製品	錢	一錢銅貨	上段	中央	SK820	上面盤乱坑	一錢銅貨	2.75	3.75	0.20
M2	67	105	銅製品	錢	寛永通寶	上段	南	SK71	SX1007と切りあう 方形土坑	寛永通寶	(2.00)	(1.70)	0.10
M3	67	105	銅製品	錢	寛永通寶	上段	南		包含層	寛永通寶	2.30	2.30	0.15
M4	67	105	銅製品	錢	寛永通寶	上段	南		北端人形	寛永通寶	2.50	2.10	0.10
M5	67	105	銅製品	水滴		下段	中央	SK739	裏内埋土	田螺形	4.40	2.70	1.75
M6	67	105	銅製品	帶状金具	銀香立て	下段	北		中央部遺構上面檢 出中	鉢取り銀香?	7.35	0.4	0.05
M7	67	105	銅製品	燈籠	吸口	下段	北	SK450		吸口	5.90	0.90	0.90
M8	67	105	銅製品	錘		上段	中央	SK68	上層		6.1g	2.10	1.55
M9	67	105	鉄製品	鉄砲玉		上段	南		北東季～中央溝灰 褐色土主		11.7g	1.35	1.40 (1.10)
M10	68	105	銅製品	鉗金	両面鉗金	下段	北	SR415	埋土堆内	両面使用	(12.30)	10.20	0.65
M11	68	106	鉄製品	火打金		下段	北	SK419	埋土		8.10	3.18	0.43
M12	68	106	鉄製品	釘		上段	北	SK224			(2.50)	0.55	0.60
M13	68	106	鉄製品	釘		上段	北	SK342	(南)		(2.95)	0.60	1.00
M14	68	106	鉄製品	釘		上段	北		包含層		2.95	0.65	0.65
M15	68	106	鉄製品	釘		上段	中央	SK70			(5.20)	0.70	0.55
M16	68	106	鉄製品	釘		上段	中央	SK70			(11.10)	0.55	1.35
M17	68	106	鉄製品	釘		上段	南	SK71	SX1007と切りあう 方形土坑		(2.40)	0.45	0.40
M18	68	106	鉄製品	釘		下段	南	SK932	西		(8.62)	0.98	0.75
M19	68	106	鉄製品	釘		上段	西北	SK2001	埋土		(8.20)	2.05	1.32
M20	68	106	鉄製品	鍔先		上段	中央	SK65-S			(6.80)	(4.53)	0.60
M21	68	106	鉄製品	包丁		上段	南	SX1001	主に埋地中		(25.00)	5.00	0.45
M22	78	115	銅製品	錢	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086 真青	2.50	2.50	0.15
M23	78	115	銅製品	錢	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086 真青	2.40	2.40	0.15
M24	78	115	銅製品	錢	景祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1034 真青	2.50	2.50	0.15
M25	78	115	銅製品	錢	元豐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1078 真青	2.40	2.40	0.20
M26	78	115	銅製品	錢	開元通寶	経塚	西	SX01	底板上	唐621 真青	2.25	2.25	0.10
M27	78	115	銅製品	錢	皇宋通寶	経塚	西	SX01	底板上	1038 真青	2.40	2.40	0.10
M28	78	115	銅製品	錢	元豐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1078 行青	2.40	2.40	0.10
M29	78	115	銅製品	錢	嘉祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1056 真青	2.50	2.50	0.15
M30	78	115	銅製品	錢	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086 真青	2.50	2.50	0.10
M31	78	115	銅製品	錢	熙寧元寶	経塚	西	SX01	底板上	1068 真青	2.40	2.40	0.10
M32	78	115	銅製品	錢	皇宋通寶	経塚	西	SX01	底板上	1038 真青	2.40	2.40	0.10
M33	78	115	鉄製品	鉄鏹	雅殷鏹	経塚	西	SX01	積石内		10.05	5.10	0.35
M34	78	115	鉄製品	刀子		経塚	西	SX01	積石内		20.20	2.50	0.60
M35	78	115	銅製品	錢	天聖元寶	西	No 19 ~ 20 地点	表土中		1023 真青	2.50	2.50	0.10
M36	78	115	銅製品	斧		西	調査区南西部	表土中			15.90	1.55	0.30

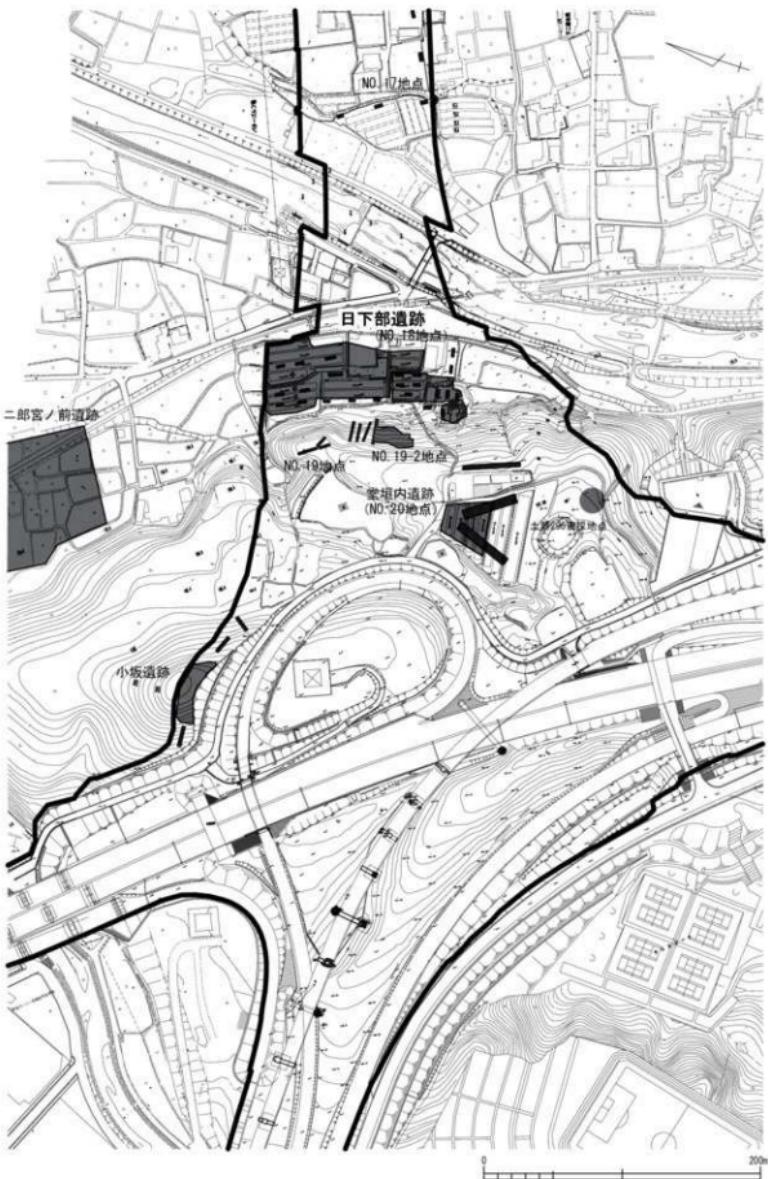
日下部遺跡

日下部
経塚

第6表 日下部遺跡出土石器・石製品一覧

番号	図版	写真 図版	器種	出土地区	出土遺構	層位	備考	法量				
								器高 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
S1	69	106	石礫	上段 北地区 中央部		遺構面上	精査中		17.0	14.9	0.30	0.5
S2	69	106	碁石	下段 北地区			表探		2.1	1.8	0.65	3.6
S3	69	106	碁石	下段 北地区			表探		2.2	2.1	0.45	3.4
S4	69	106	碁石	下段 南地区			表探		2.5	1.7	0.55	3.7
S5	69	106	砾石	下段 北地区 南半部	SR400 西脇	上層擾乱層+ 下層暗青灰粘 砂			9.1	4.5	3.4	172.7
S6	69	107	砾石	下段 北地区	SR415		東北部遺物 集中地點		8.02	4.4	2.68	134.5
S7	69	106	砾石	下段 南地区	SR400	上面	機械掘削		19.4	5.1	5.85	792.0
S8	70	107	砾石	下段 北地区	SE416	埋土下層 石組井戸			8.93	3.98	1.71	83.9
S9	70	107	砾石	下段 北地区	SR415		東北部遺物 集中地點		10.08	5.55	2.9	186.4
S10	70	107	砾石	下段 上段湖北地区			表探		13.95	2.4	3.3	133.7
S11	70	107	砾石	上段 南地区	SX1007 東脇				12.45	5.95	1.7	234.2
S12	70	107	砾石	上段 南地区	SK70				9.2	3.15	2.75	107.5
S13	71	108	石臼	下段 北地区	SR400	上層近世擾 乱		18.9 (347)		18.9		
S14	71	108	石臼	下段 北地区	SK437			10.0 28.35	-	9.5		
S15	71	108	石臼	下段 南地区	SD916			7.9 31.25	-	7.1		
S16	71	108	五輪塔地輪	下段 北地区	SR400	上層近世擾 乱		22.1		27.7		
S17	71	108	五輪塔地輪	下段 北地区北東端	SR415			15.25		21.5		
S18	71	108	五輪塔地輪	下段 北地区北東端	SR415			22.9		29.8		

図 版

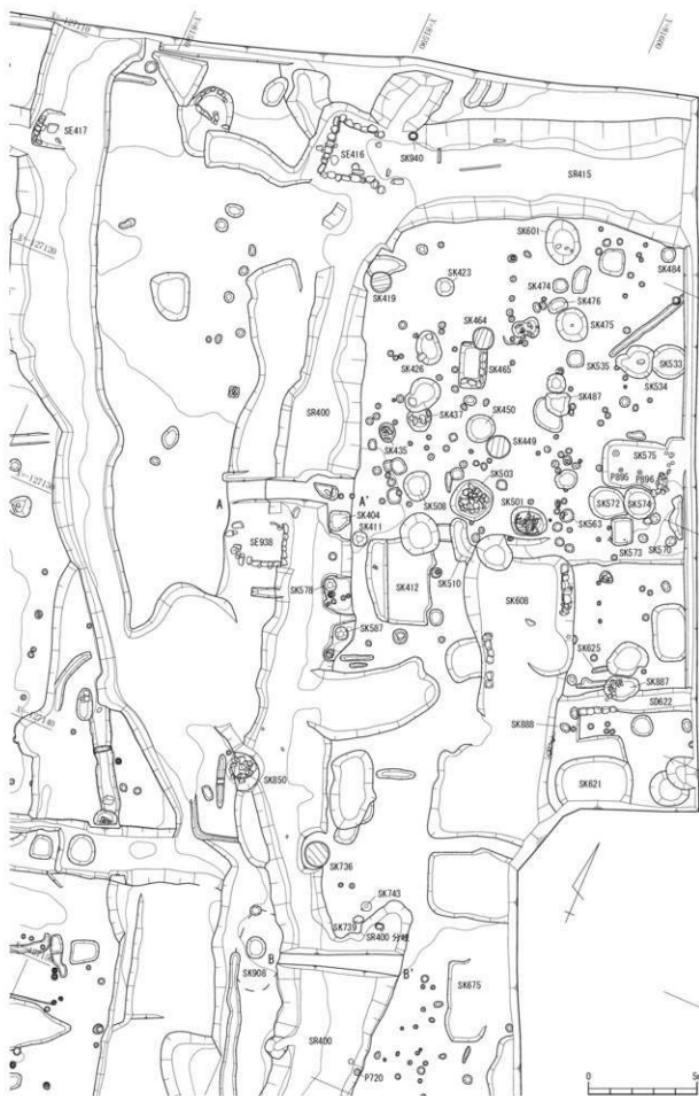


調査地点位置図

図版 2



調査区全体図



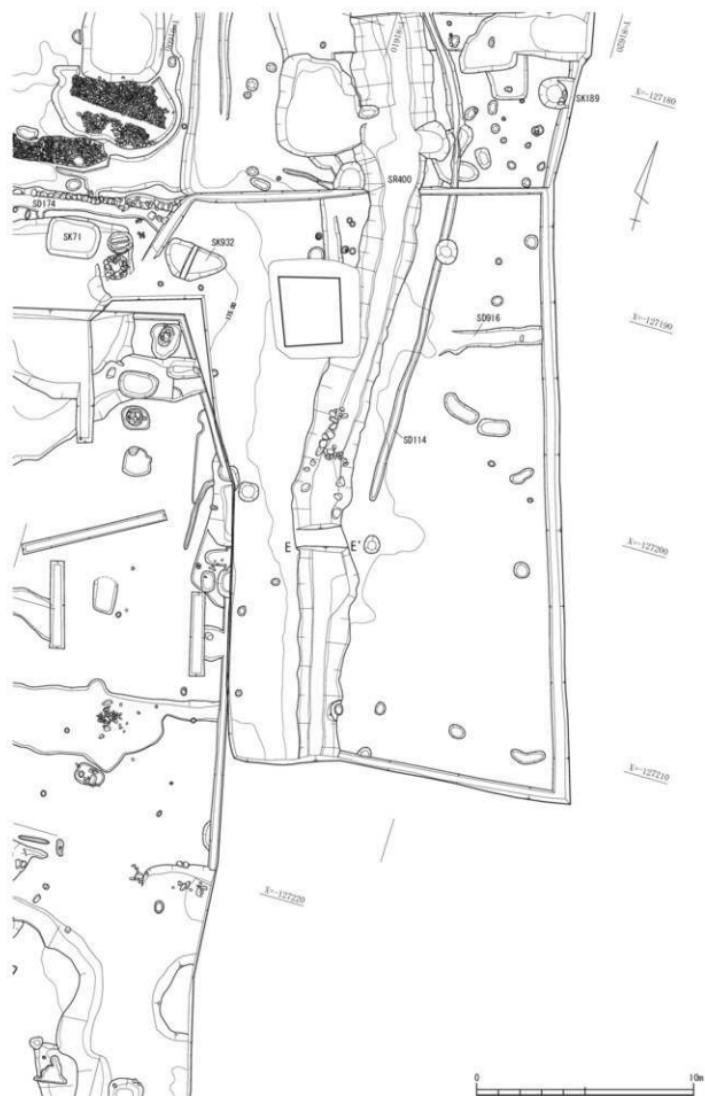
下段北地区遺構配置図

図版 4



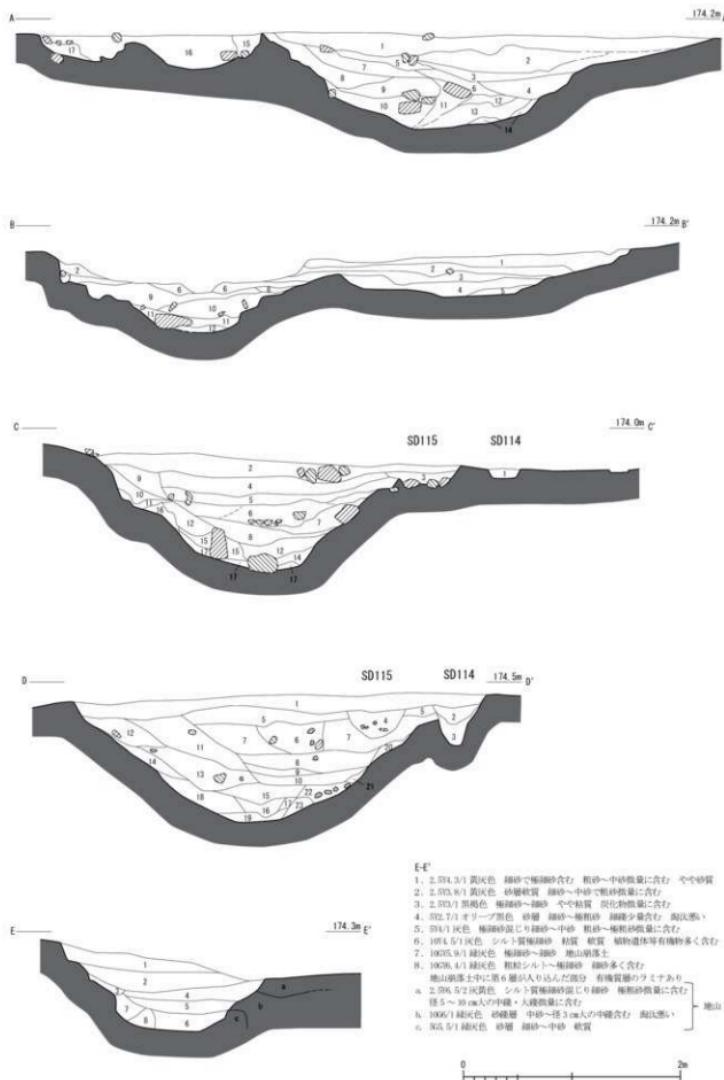
下段中央地区遺構配置図

図版 5

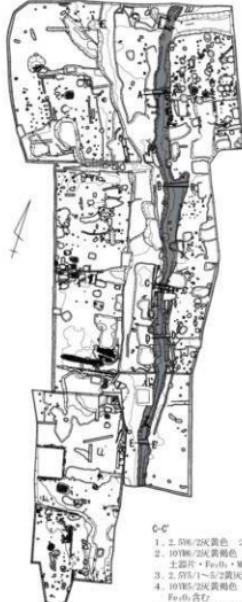


下段南地区遺構配置図

図版 6



下段 SR400 土層断面図



A-A'

1. 7.3303/1黒褐色、細胞状～細緻で中砂～細緻含む、径5mm～径30mmの大粒含む
2. 5.52/4.1黒褐色、細胞状じり中砂～粗砂～細緻含む
3. 砂礫層±5%/25%黄褐色、砂粒～細緻で5cm以上の砂礫少く含む 海底灘
4. 5.52/6.6黒褐色、細胞状まで細緻～粗砂、砂礫～細緻少く含む 海底灘
5. 砂礫層±5%/25%黄褐色、細胞状～細緻で5cm～10cmの大粒、大粒少く含む 海底灘
6. 2.55/4.5/1黒褐色、細胞状～中砂の必要で粗砂～細緻少く含む 海底灘
7. 2.55/1/1黒褐色、細胞状まで細緻 中砂少く含む やや粗粒
8. 2.55/2/1黒褐色、粗粒にシートじり細緻で細緻少く含む 粗粒
9. 5.54/1黒色、シート質植物細緻～細緻 岩山等のワール状にまじる
10. 2.55/2/1黒褐色、細胞状～粗粒質、本質質有機質含む 地山のラズナあり
11. 2.55/3/1黒褐色、細胞状～粗粒質、多量にい 烈砂少く含む
12. 2.55/4/1黒褐色、細胞状～粗粒質、多量にい 烈砂少く含む
13. 7.50/5.5/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻で1層がアック状にまじる
14. 2.50/5.5/オリーブ色、粗粒シート～粗粒細緻で細緻多く含む 粗粒
15. 砂礫層±30%/75%黄褐色、細胞層つまり疊層で径5cmの大粒含む 海底灘
16. 7.50/5.5/1黒褐色、シート質植物細緻～細緻少く含む 植物遺体含む
17. 7.50/4.5/1黒褐色、細粒細緻で細粒少く含む 粗粒
- 塊山7.50/6/1緑褐色、細緻で中砂無含む

B-B'

1. 1.07/0.5/2黒褐色、細胞状～細緻 で粗粒～粗粒砂少く含む、やや砂質
2. 1.07/0.5/5.1/2黒褐色、細胞砂少くじり粗粒細緻で中砂～粗粒、径2～3cmの中砂少く含む 砂礫層に沿う 海底灘
3. 7.55/4/9黒褐色、砂礫層(細化第一段の色)細緻～細粒細緻 固く結まる
4. 2.50/2/25%黄色、砂粒 細緻～中砂～7cmの(沈着ラズナあり)
5. 0.5/2.1/1黒褐色、細胞層つまり疊層で細粒少く含む、中砂少く含む
6. 2.55/2/25%黑色、細胞層つまり疊層で細粒少く含む、中砂少く含む
7. 2.50/2/25%黄色、細粒～粗粒で粗粒砂～粗粒2cmの大粒多く含む 砂礫層に沿う 海底灘
8. 1.07/0.5/25%黄色、砂礫層 中砂～粗粒～径1cmの大粒含む、海底灘
9. 2.55/2/25%黑色、粗粒層で粗粒少く含む、中砂多く含む 砂礫層に沿う(ワタリ)
10. 2.55/4/12/5.1/2黒褐色、砂礫層 中砂～粗粒で径5cm～1cmの中砂多く含む 海底灘
11. 50/5.5/オリーブ色、シルト質植物細緻で植物遺体少く含む やや粗粒
12. 16/21.5/5/1黒褐色、粗粒シート～粗粒細緻で灰質を主とし、マトリックスは粗粒～細粒 全体的に粗粒

C-C'

1. 2.50/25%黄褐色、シルト質植物細緻～細緻 7cmの大粒含む Fe(OH)₃含む(SB114土)
2. 1.07/0.5/25%黄褐色、粗粒砂少くシルト質植物細緻～細緻 細胞層含む 10cm～20cmの大粒(前角礁から並円礁)含む
3. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細緻～粗砂、細胞層さらに含む 10cm～15cmの大粒(並円礁)近部に含む(SB115土)
4. 1.07/0.5/25%黄色、細粒砂少くシルト質植物細緻～細緻 径1～3cmの(前角礁)まばらに含む 土器片や骨片に含む
5. 2.55/2/4/1.5/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻 8～10cmの大粒(並円礁～前角礁)わざわざに含む 物質化物質に含まれる
6. 2.55/2/1/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻 ライト～下部に3～10cmの大粒(並円礁～前角礁)の縦層入る
7. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細緻～細緻 1～2cmの大粒(並円礁～前角礁)の縦層入る
8. 2.55/1/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻 ライト～中砂の(前角礁)に含む、細胞層少く含む
9. 2.55/2/5.5/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻 5cmの大粒(前角礁)に含む、Fe(OH)₃含む
10. 1.07/0.5/25%黑色、シルト質植物細緻～細緻 ライト～中砂の(前角礁)に含む、Fe(OH)₃含む
11. 2.55/2/1/1黒褐色、シルト質植物細緻～細緻 Fe(OH)₃少く含む
12. 2.55/2/25%黑色、粗粒砂少くシルト質植物細緻～細緻 10cmの大粒(シルトフロア)まばらに含む 物質化物質に含まれる
13. 2.55/2/25%黑色、粗粒砂少くシルト質植物細緻～細緻 10cmの大粒(シルトフロア)まばらに含む 物質化物質に含まれる
14. 2.55/2/1/1黒褐色、シルト～粗粒、植物遺体含む、炭化物多く含む 黏性高
15. 2.55/2/25%黑色、細粒砂少くシルト 製物遺体含む、長さ30cmの前角礁含む
16. 2.55/2/1/1黒褐色、シルト～粗粒、植物遺体含む Fe(OH)₃含む
17. 2.55/2/25%黑色、粗粒砂少くシルト質植物細緻～細緻 1～2cmの大粒中砂含む 是下部にシルト層付帯層 東側砂粒層から
18. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細緻～細緻 Fe(OH)₃含む(塊山)
19. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細緻～細�痣 Fe(OH)₃含む(塊山)

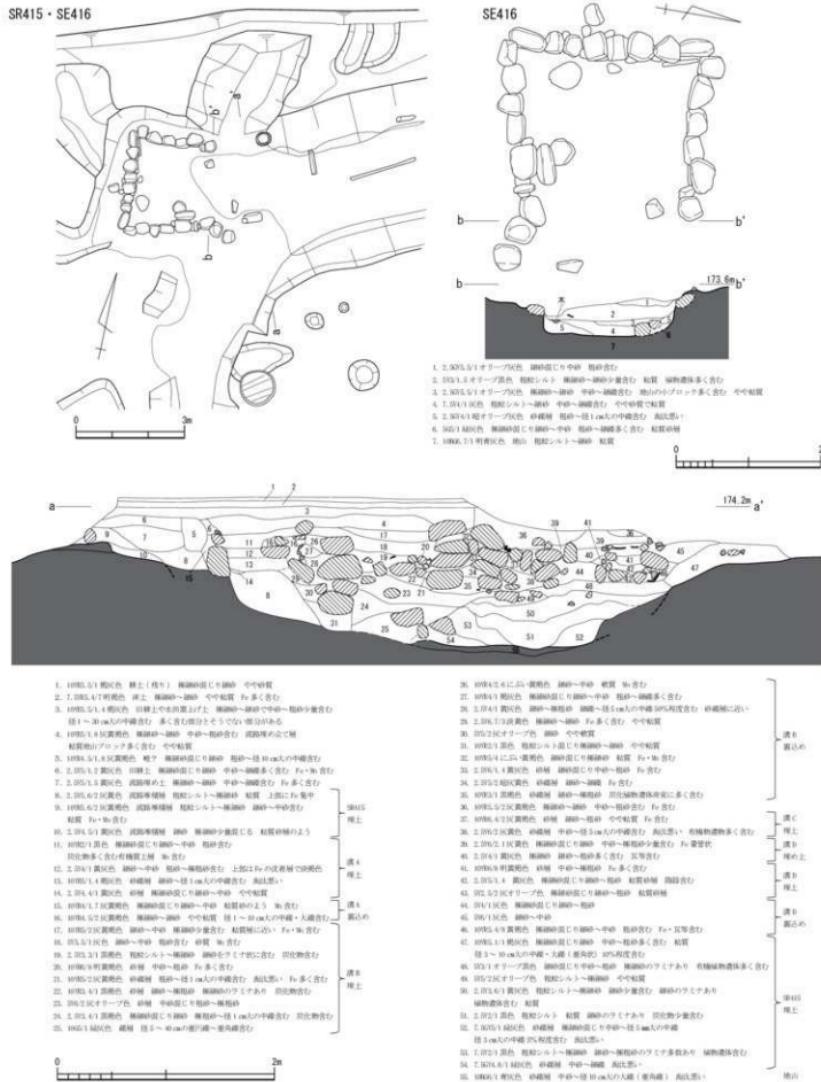
D-D'

1. 2.55/2/25%黄褐色、細粒砂層にシルト質植物細緻～細緻 1～5cmの大粒の前角礁～円礁含む 士器・炭化物含む
2. 2.55/2/25%黄褐色、細粒砂～粗砂、細粒砂多く含む(SB114土)
3. 1.07/0.5/25%黄褐色、シルト混じる細粒砂～細窌 1～5cmの大粒の前角礁～円礁含む Fe(OH)₃少く含む
4. 1.07/0.5/25%黑色、粗粒砂～細粒砂、細粒砂多く含む 上半部第1段の影響により砂粒が細粒(SB115土)
5. 1.07/0.5/25%黄褐色、シルト質植物細緻～細窌 細胞層～5cmの大粒、2.5cmまでは含有 Fe(OH)₃含む 北側アゼ第4層と対応
6. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒(前角礁)に含む Fe(OH)₃少く含む
7. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌 細胞層～5cmの大粒中砂まばらに含む 土器片含む Fe(OH)₃含む
8. 2.55/1/1黒褐色、シルト混じる細粒砂～細窌 ライト～中砂の(前角礁)に含む
9. 2.55/3.1/1黒褐色、シルト混じる細粒砂～細窌 ライト～中砂の(前角礁)に含む
10. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒含む、細粒砂少く含む 炭化物含む
11. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒含む、細粒砂少く含む 炭化物含む
12. 2.55/2/25%黄褐色、シルト質植物細窌～細窌 10cmの大粒中砂に含む Fe(OH)₃含む
13. 2.55/2/1/1黒褐色、粗粒砂混じるシルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒含む 炭化物少く含む
14. 1.07/0.5/25%黑色、シルト～粗粒、炭化物含む、径1～3cmの大粒(前角礁)に含む Fe(OH)₃少く含む
15. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒(前角礁)に含む Fe(OH)₃少く含む
16. 2.55/1/1黒褐色、シルト質植物細窌～細窌 ライト～中砂の(前角礁)に含む 炭化物含む
17. 2.55/1/1黒褐色、シルト混じるシルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒(前角礁)に含む 炭化物含む
18. 2.55/2/25%黑色、細粒砂混じるシルト質植物細窌～細窌 1～2cmの大粒(前角礁)に含む 炭化物含む
19. 2.55/2/25%黑色、シルト混じる細粒砂～細窌 細粒砂少く含む 炭化物含む ライト
20. 2.55/2/25%黑色、シルト質植物細窌～細窌
21. 2.55/2/25%黑色、粗砂～細粒砂(塊山)
22. 2.55/2/25%黑色、シルト混じる粗粒砂～細粒砂 1～10cmの大粒・中粒(前角礁～円礁) 多く含む(塊山)
23. 1.07/0.5/25%黑色、シルト混じる粗粒砂～細粒砂 高度高(塊山)



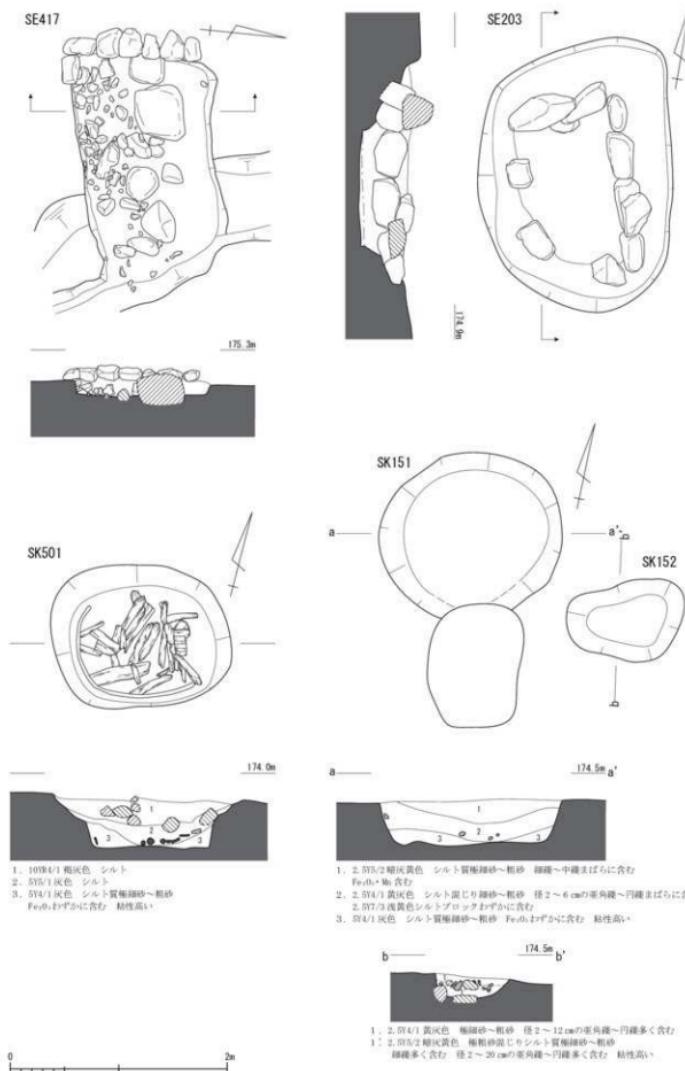
SR400 断面位置図と土層注記

図版 8



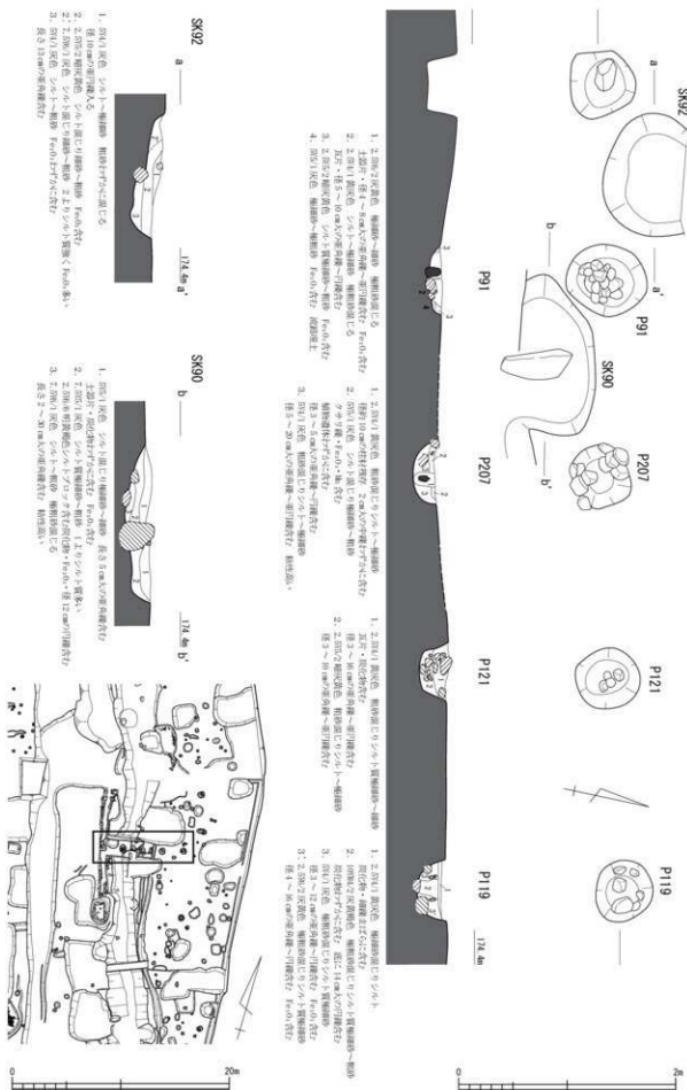
SR415・SE416 土壌層

図版9



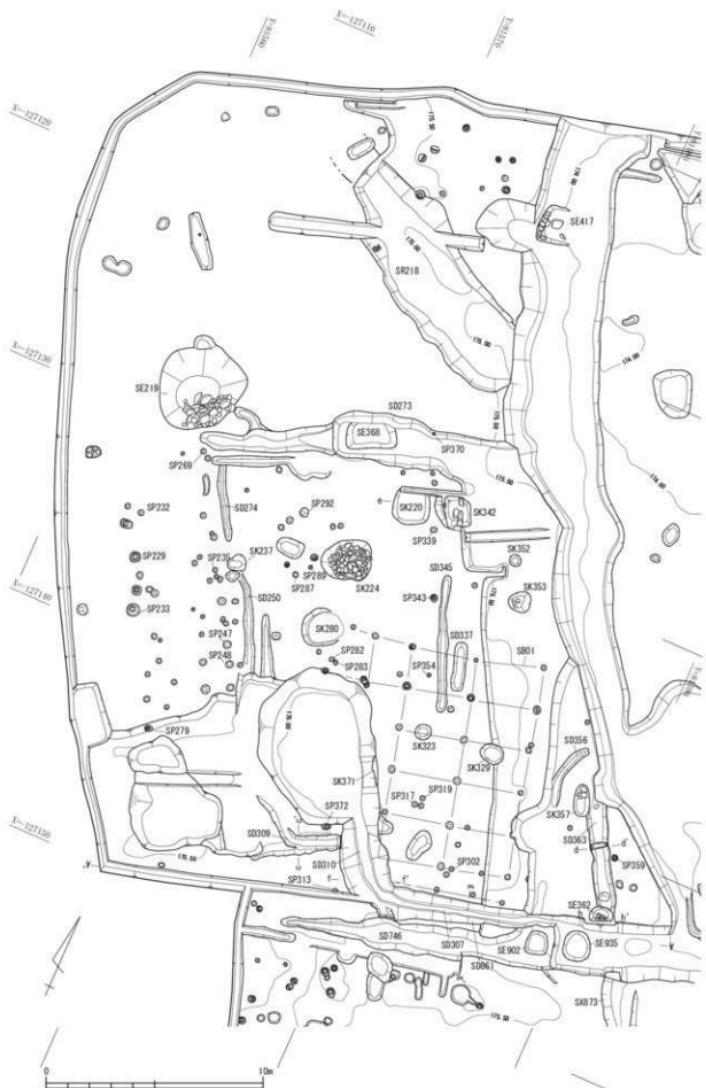
下段 SE417 他

圖版 10



下段中央地区柱穴列

図版 11



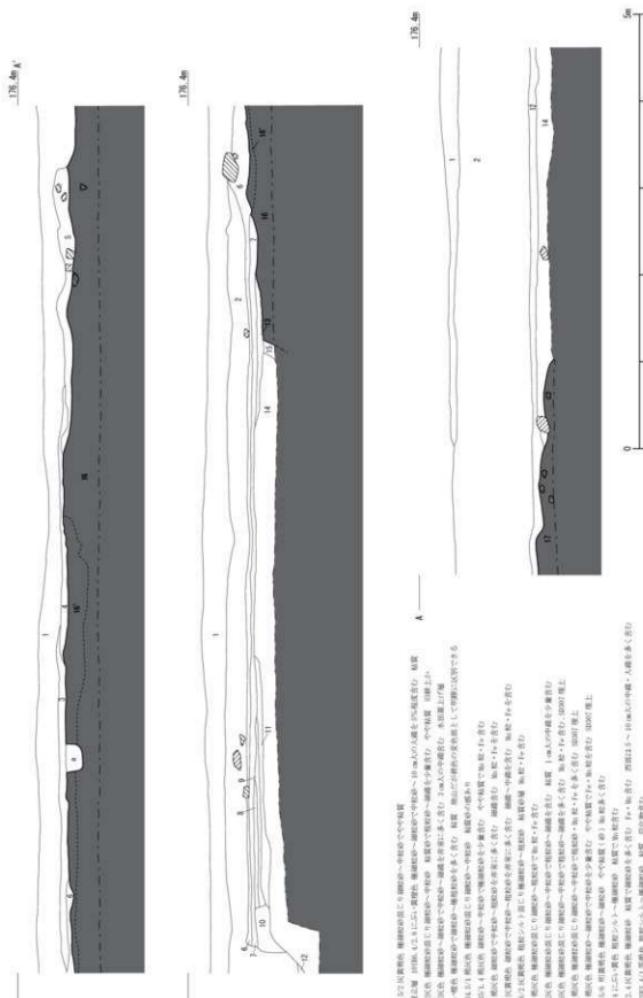
上段北地区遺構配置図

図版 12



上段中央地区造構配置図

圖版 13



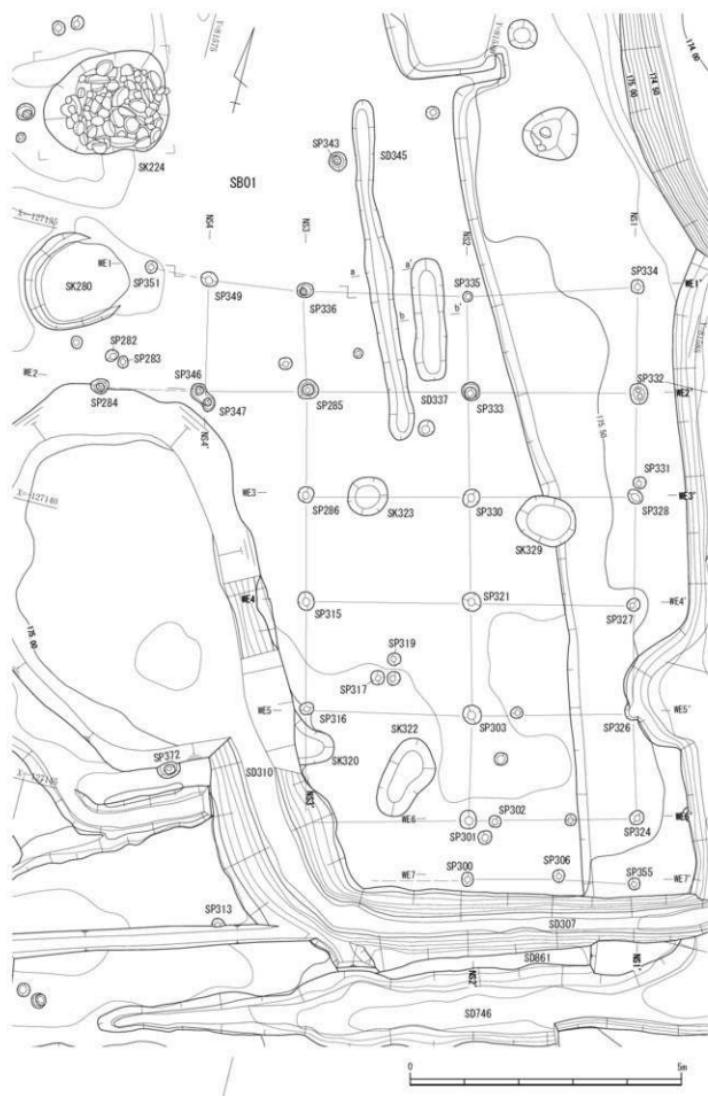
上段北地区南侧壁土层断面图

図版 14



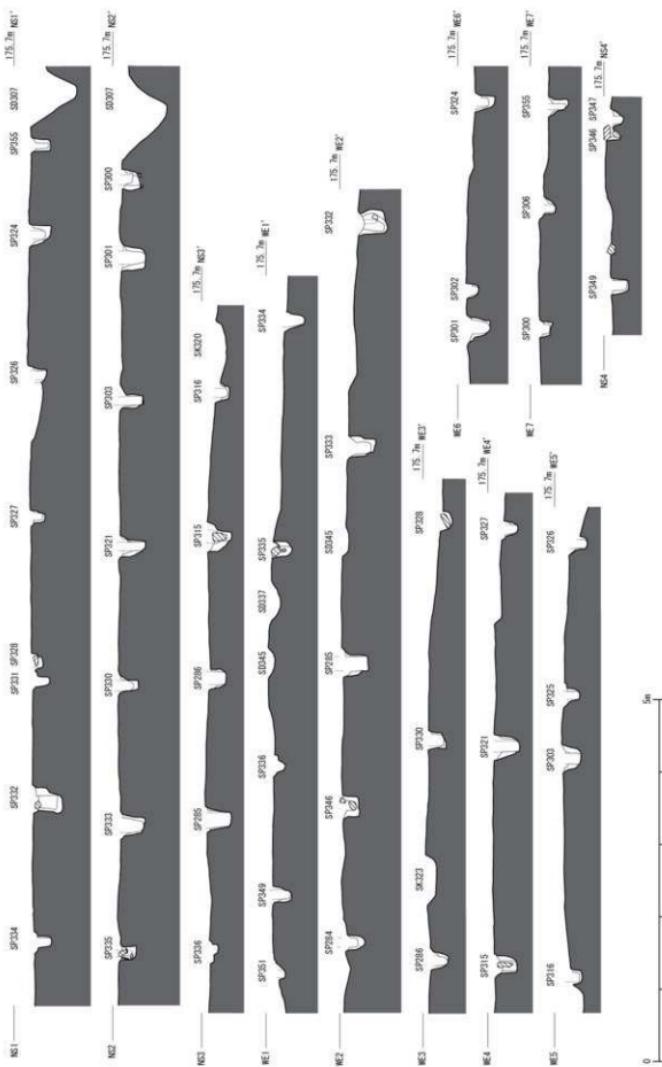
上段北地区 SR218

図版 15



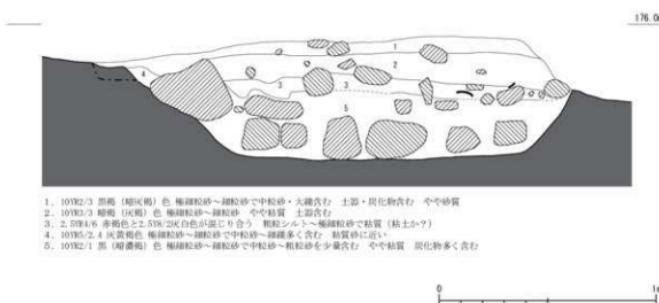
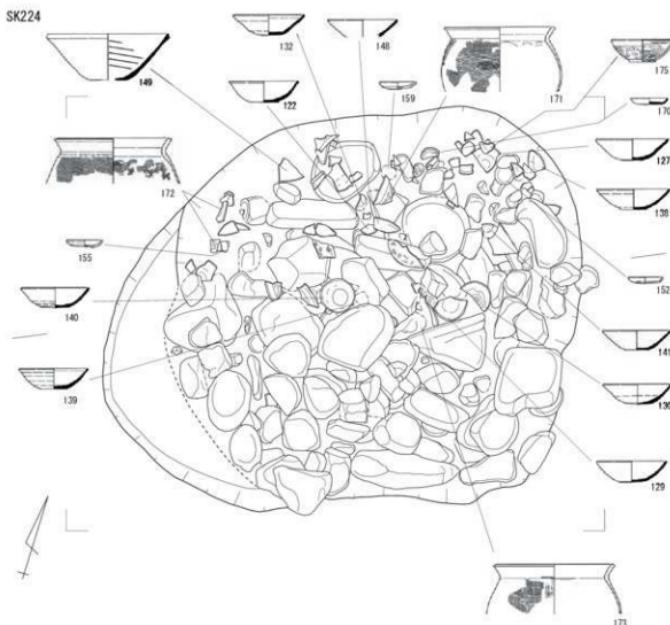
上段北地区掘立柱建物跡平面図

図版 16



上段北地区掘立柱建物跡断面図

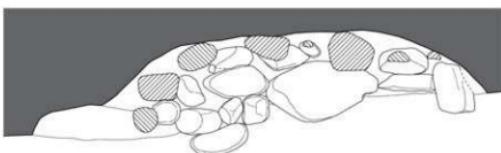
図版 17



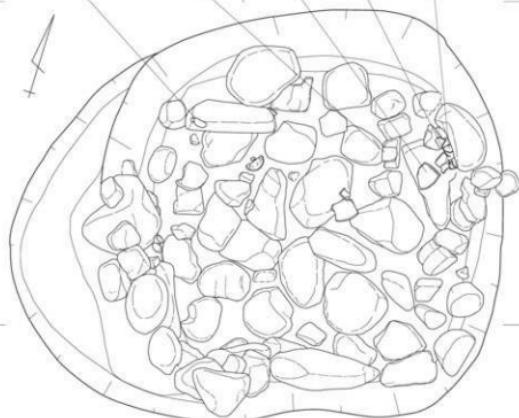
上段北地区 SK224

図版 18

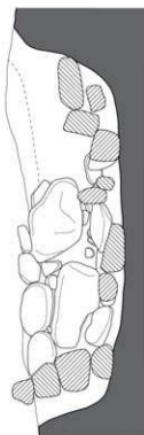
SK224



80.9.1



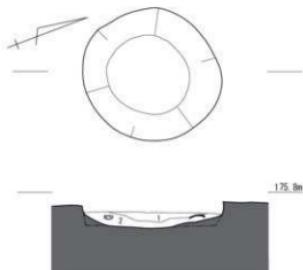
176.0m



SK224

図版 19

SK323



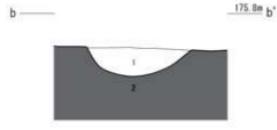
1. 10YR3/2 黒褐(暗灰褐色) 色
細粒粘土～細粒砂 中粒砂含む
中世初期の土器片・火薬質
2. 10YR3/2 墓場(灰褐色) 色
細粒粘土～細粒砂 中粒砂質

SD345



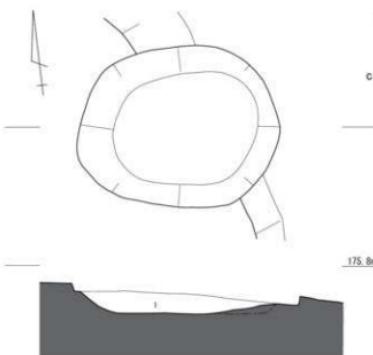
1. 10YR3/2 黒褐(暗灰褐色) 色 細粒粘土～細粒砂で
中粒砂含む 中世初期の土器片・火薬質含む
やや粘質

SD337



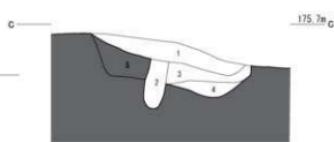
1. 10YR3/2 黒褐(暗灰褐色) 色 細粒粘土～細粒砂で
中粒砂含む 中世初期の土器片・火薬質含む
やや粘質
2. 地山 10YR6/6 明黄褐色 細粒粘土～細粒砂
粘質砂層に近い

SK329



1. 10YR2/2 黒褐(暗灰褐色) 色 細粒粘土～細粒砂 中粒砂含む
土器片・火薬質含む やや砂質

SD309



1. 10YR5/2 に近い黄褐色 細粒砂～粗粒砂
砂質 直径0.5～2cmの礫を含む
2. 10YR4/1.4 壤灰色 相粒シルト～粗粒粘土
粘質の層に近い 桟穴出土
3. 10YR4/1 壽灰褐色 中粒砂混じり粗粒シルト
～細粒粘土 粘質
4. 10YR4.5/2 黄褐色 粗粒砂～中粒砂混
じり粗粒シルト～細粒粘土 粘質
5. 地山 2. 3YR5/6 黄褐色 細粒粘土～粗粒砂
やや粘質



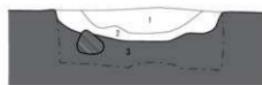
上段北地区 SK323・329・SD337 他

図版 20

SD363

d —————

175.8m d'

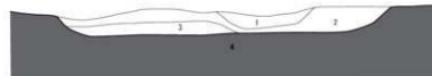


1. 10YR3/2 黒褐(灰褐)色 極細粒砂岩に細粒砂～中粒砂 砂や砂質 中性粘土の薄い付着層
2. 10YR6/7 明黄褐色 粗粒シルト～粗粒砂岩～中粒砂質砂層に近い
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂岩～中粒砂～砂質 地山

SK220

e —————

175.8m e'

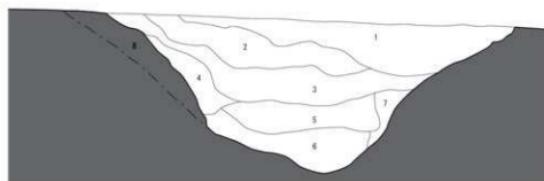


1. 砂層 10Y7/2 にぶい黄褐色 扇状砂～細粒砂 新しい時期の砂層と思われる
2. 7. 10Y5/1 黒褐(灰灰褐)色 極細粒砂～粗粒砂 砂層で多く含む 中性粘土の土層、現在含む 砂や砂質
3. 10Y4/2 黄褐色(乳黃色) 極細粒砂～細粒砂で細粒砂を少量含む 地山
4. 2. 3Y7/4 深黄(乳黃色)色 シルト質細粒砂～細粒砂を少量含む 地山 Mn・Fe 含む

175.8m f'

SD310

f —————



1. 10Y5/2/2 黒褐色 極細粒砂岩～細粒砂～中粒砂 Mn 含む 粘質砂層に近い
2. 10Y5/2/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂 Mn 含む 粘質
3. 10Y5/2/3 反黄褐色 細粒砂で極細粒砂少量混じる 中粒砂含む 砂や砂質
4. 10Y5/6/3 にぶい黄褐色 細粒砂岩～細粒砂中で中粒砂を少量含む Mn 含む 砂や砂質
5. 2. 3Y5/5/1 黄褐色 粗粒シルト～粗粒シルト 粘質 Fe 含む
6. 3Y5/5/1 灰色 細粒砂～中粒砂 砂層
7. 10Y5/1/3 黑褐(灰灰褐)色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂を含む 砂質含む Fe・Mn 含む 粘質
8. 2. 3Y6/7 明黄褐色 粗粒砂～細粒砂 砂や砂質 地山

0 1m

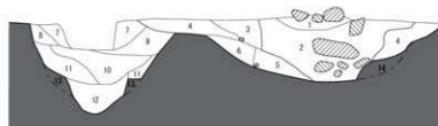
g —————

SD307

SD861

SD746

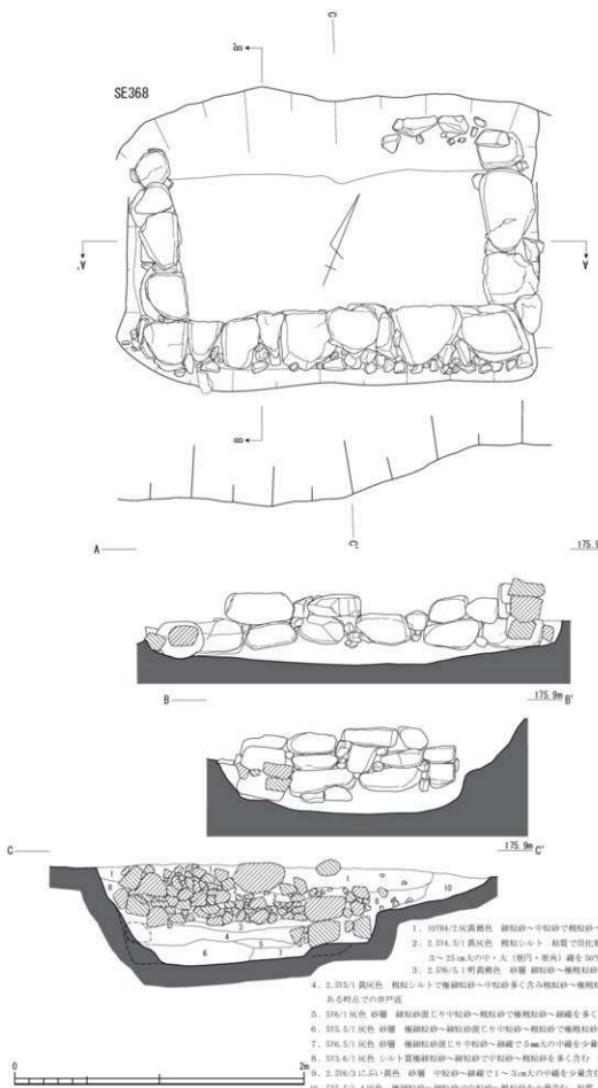
175.8m g'



1. 2. 3Y6/2/6 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含む 粘質 SD307 基底上
2. 2. 10Y5/1/6 反黄褐色 極細粒砂～中粒砂～細粒砂 粘質 Mn 含む SD861 基底上
3. 10Y5/1/3 灰褐色 極細砂で中粒砂～粗粒砂含む 砂質 Mn 含む SD861 基底
4. 10Y5/1/2 反黄褐色 極細砂で中粒砂～粗粒砂少量含む 砂質 Mn 含む SD861 基底
5. 10Y5/1/7 反黄褐色 細粒砂～中粒砂で細粒砂と粗粒砂を微量含む 砂や砂質 Mn 含む SD861 基底
6. 10Y5/2/2 反黄褐色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂～粗粒砂を少量含む 砂や砂質 Mn 含む SD861 基底
7. 第7層に 10Y6/6 黄褐色のブロックが多く混じる 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂含む Mn 含む SD861 基底
8. 第7層に 10Y6/6 黄褐色のブロックが多く混じる 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂含む Mn 含む SD861 基底
9. 10Y5/3/5 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む 砂や砂質 Mn 含む SD861 基底
10. 10Y4/1/6 反黄褐色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂含む 砂質砂層に近い Mn 含む SD861 基底
11. 10Y4/1/4 灰褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含む 砂や砂質 Mn 含む SD861 基底
12. 10Y4/1/4 灰褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含む 砂や砂質 Mn 含む SD861 基底
13. 地山 10Y4/8/6 黄褐色 極細粒砂岩～細粒砂で中粒砂含む 砂質砂層に近い Mn・Fe 含む
14. 地山 10Y5/4/4 にぶい黄褐色 極細粒砂岩～細粒砂～中粒砂 砂質砂層 Mn・Fe 含む

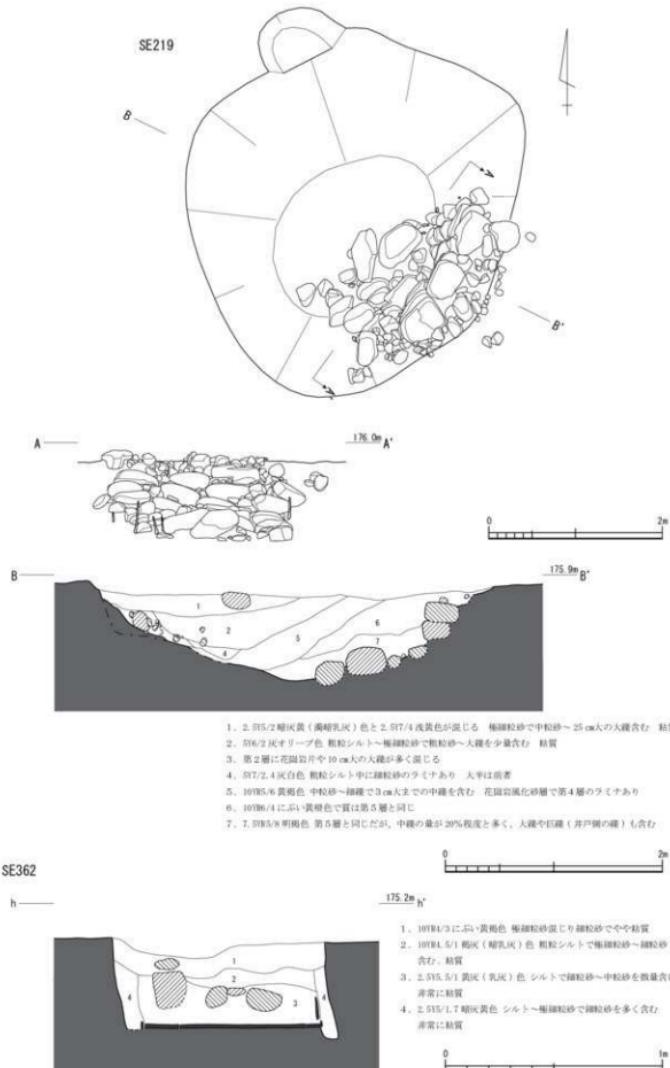
0 1m

上段北地区 SD363・SK220・SD310 他



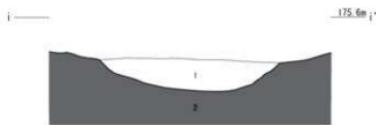
上段北地区 SE368

図版 22



上段北地区 SE219・362

SK819



1. 9TR3/2 黒褐色 塗付粒砂～粗粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む やや粘質 Mg 粒・炭化物含む
2. 地山 10TR6.5/6 明黄褐色 塗付粒砂混じり細粒砂～中粒砂～粗粒砂を少量含む やや粘質

SK834



1. 10TR3/1.8 黑褐色 塗付粒砂で細粒砂を含み中粒砂～粗粒粒砂を微量含む 下部に 2～4cm 大の中縫（巻角～巻刃）を含む やや粘質
2. 10TR4/1.7 黄褐色 塗付粒砂で粗粒砂～粗粒砂を少量含み細縫を微量含む 粘質

SK862

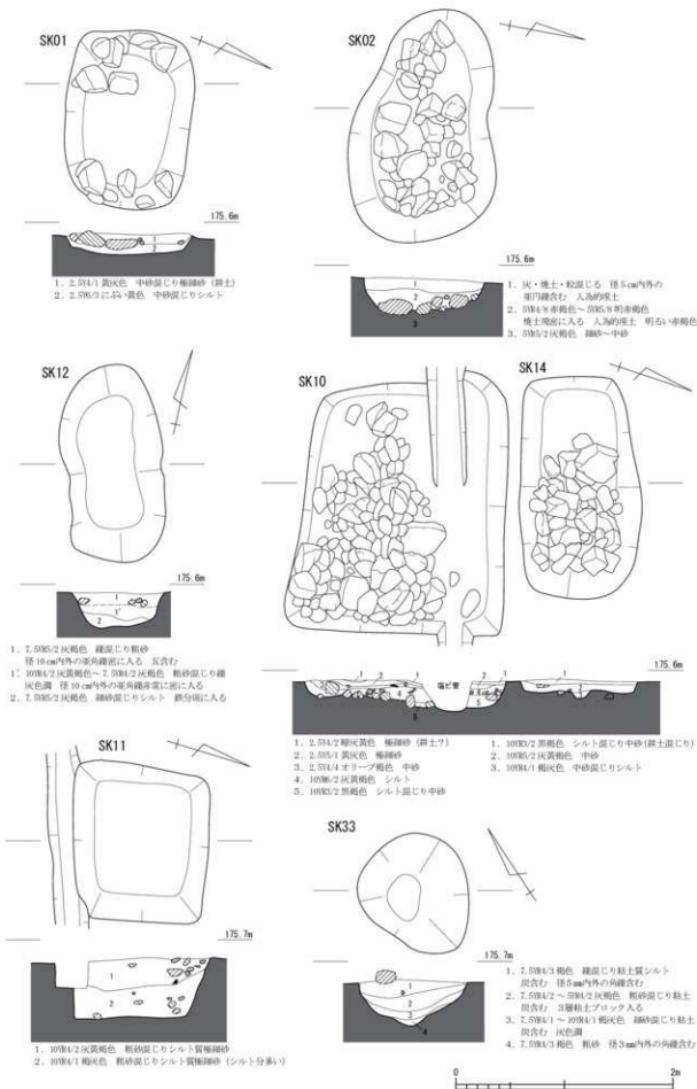


1. 10TR3.5/3 塗付色 塗付粒砂で細粒砂を多く含み中粒砂～粗粒砂を少量含む やや粘質



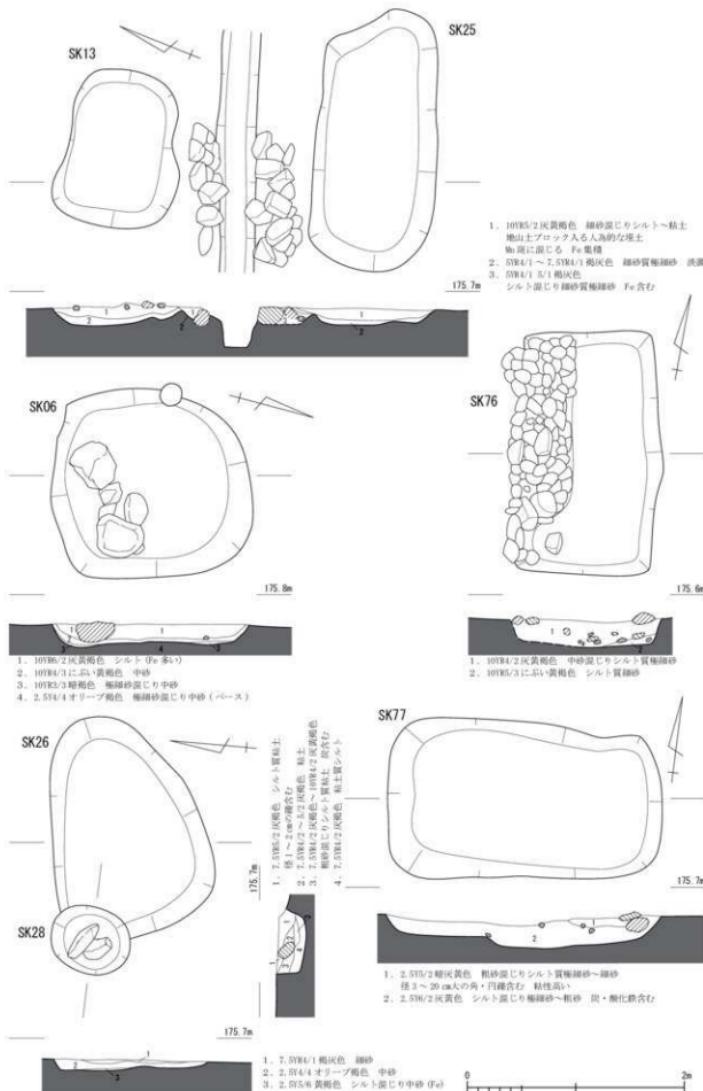
上段中央地区 SK819・834・862 土層図

圖版 24



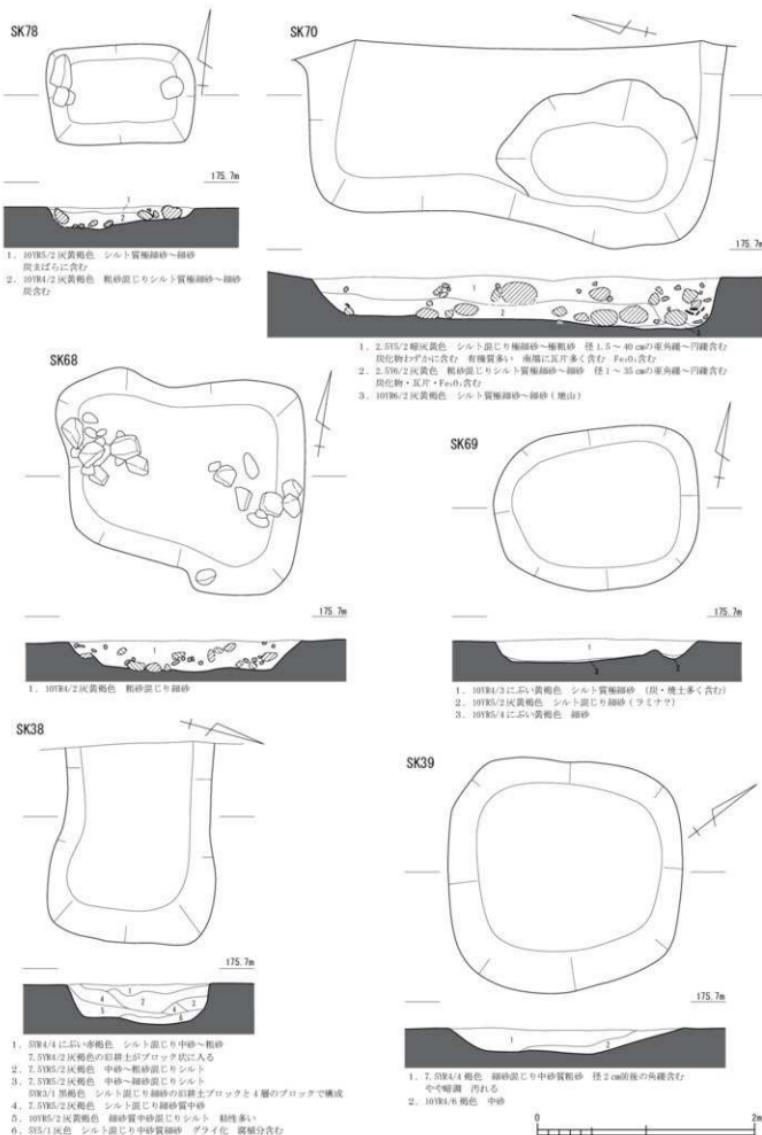
上段中央地区 SK01 · 02 他

図版 25



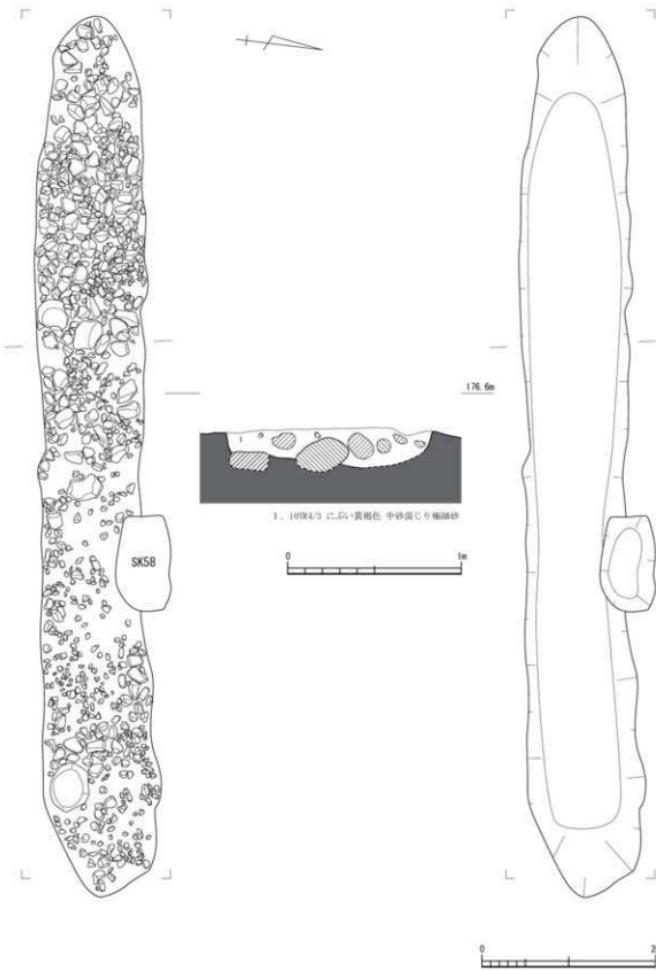
上段中央地区 SK13・25 他

図版 26



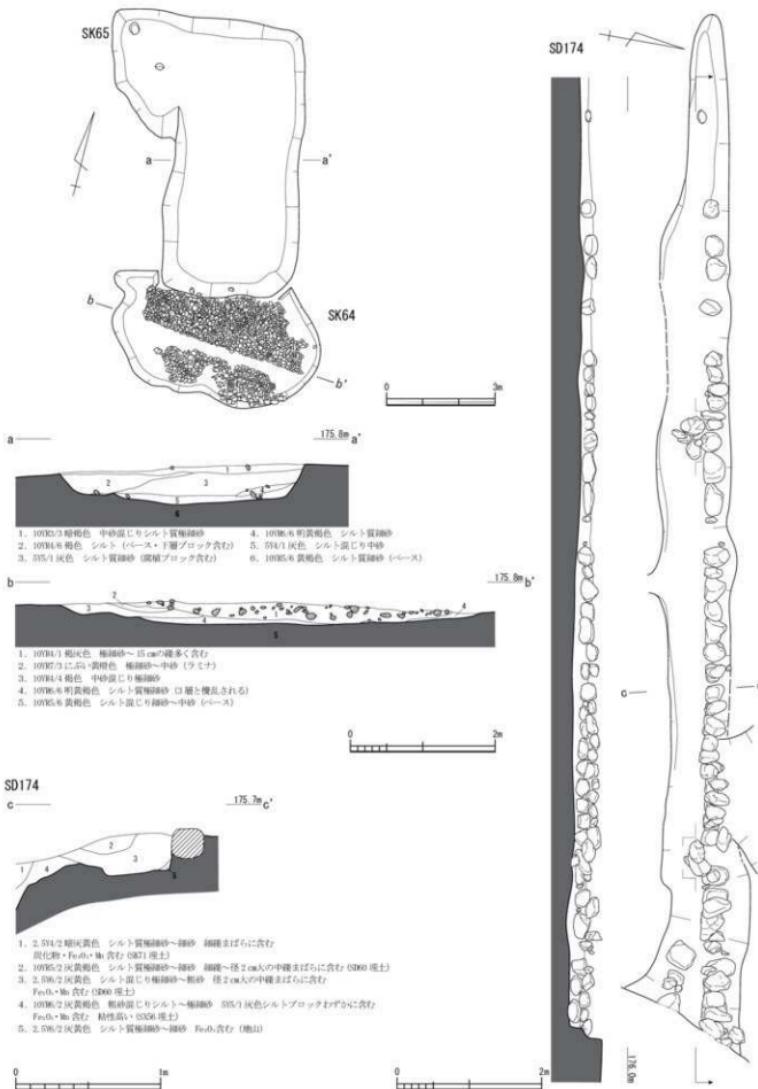
上段中央地区 SK78・70 他

SK43



上段中央地区 SK43

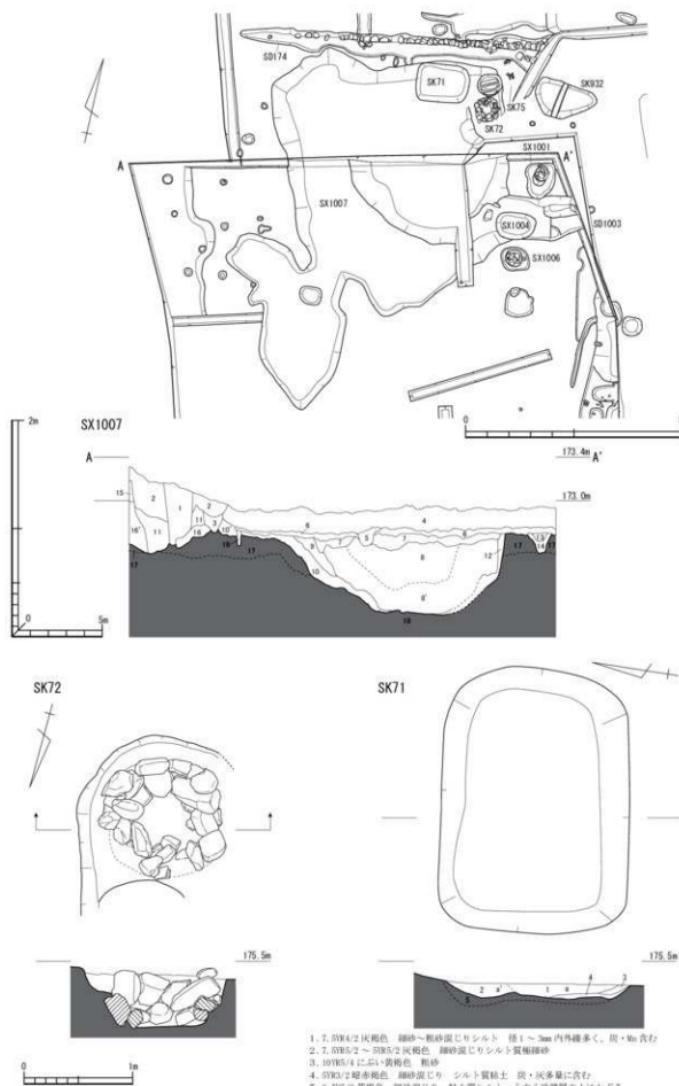
図版 28





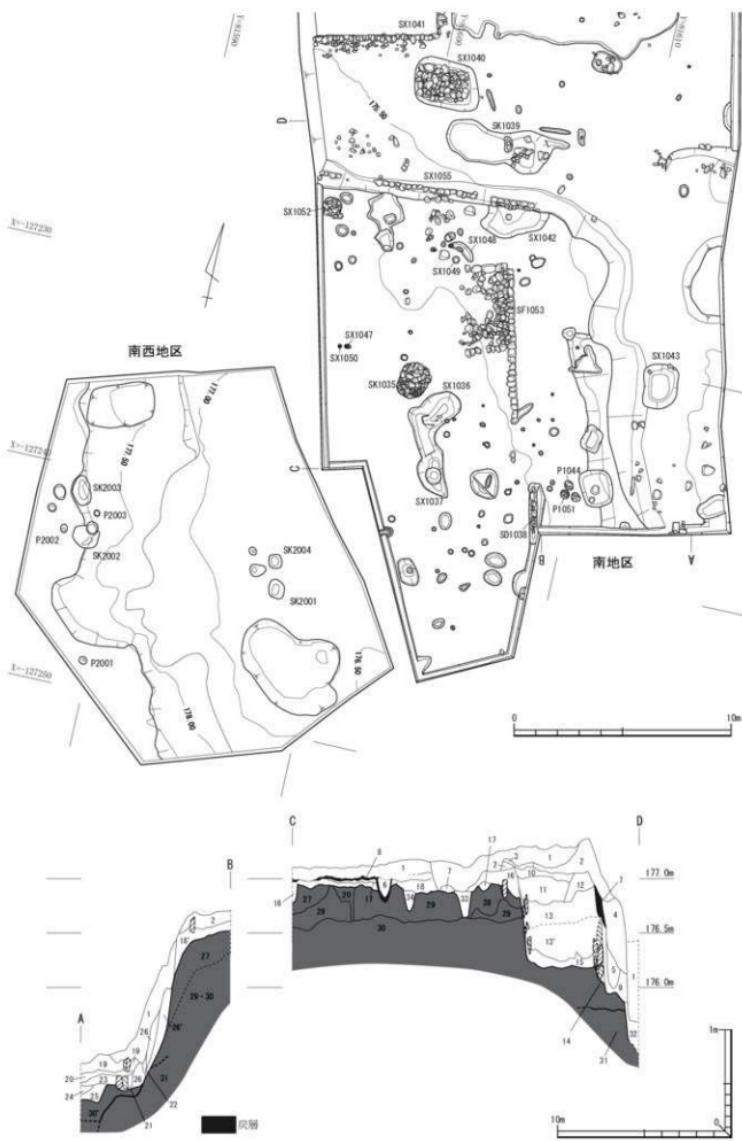
上段南地区遺構配置図

図版 30



SX1007・SK72・71

図版 31



上段南地区・南西地区 大歳神社旧境内

図版 32

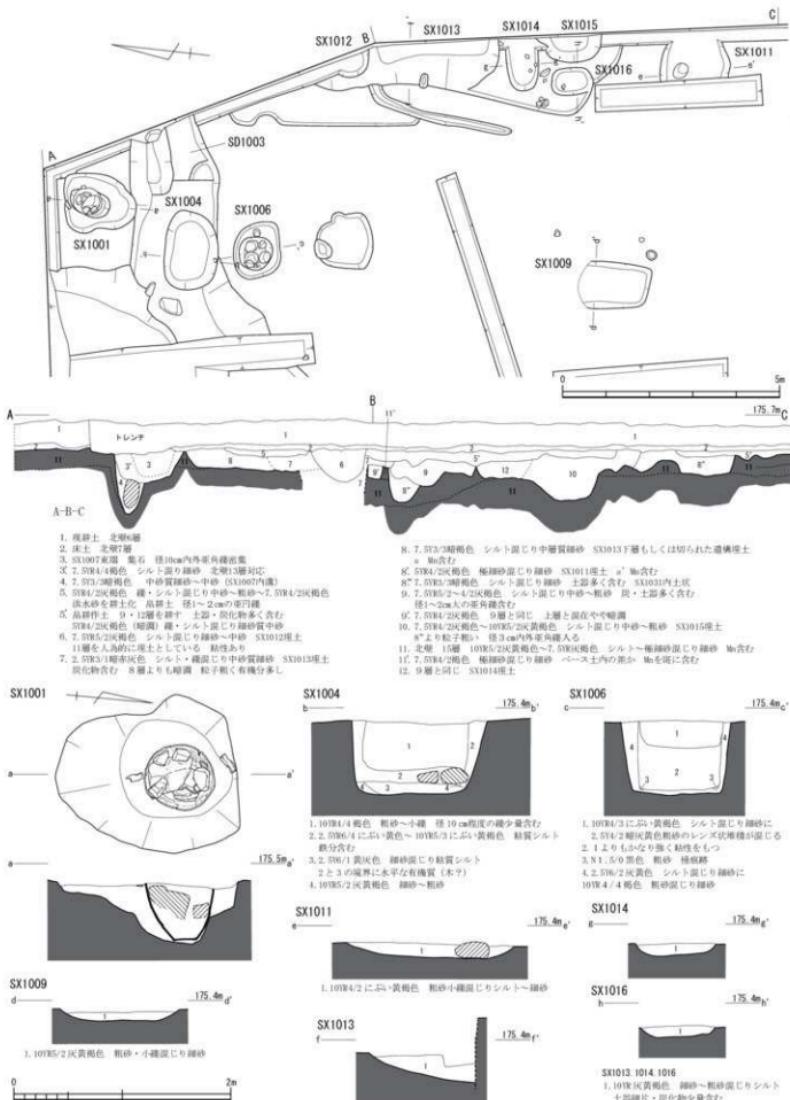
図版30 SX1007土層名

1. レンヂによる懷土
2. 橋巻土
3. 土壌土
4. 7. SR3/1黒褐色 細砂混じりシルト 現耕土
5. 10Y3/3~4/2黒褐色~灰黃褐色 シルト混じり極細砂質細砂 濁 土壤土
6. 10Y6/6明黃褐色シルト混じり中砂 底土、F集積層 層下は7層と同一質
7. 5Y8/2灰褐色 シルト混じり中砂 土壌化する 厚さあり
8. 7. 5Y8/4褐色 細砂混じり粗砂 径10~20cmの亜円錐を多量に含む 人為的な埋め土
- 8'. 8層より上 地円錐が多量
9. 7. 5Y8/2灰褐色 細砂混じり中砂混じりシルト 粒性あり 土壌化する
10. 7. 5Y8/2灰褐色 中砂質細砂混じりシルト 土器片を若干含む 9層よりも粒子粗く土壌化 耕作土と考えられる
11層と基本同じ
- 10'. 7. 5Y8/4褐色 シルト混じり細砂
11. 7. 5Y6/4にぶ~褐色 中粒砂と粗砂 透徑5cmの底角錐を含む
12. 5Y8/4褐色 細砂混じり中砂 地下水位付近の底角錐含む
13. 7. 5Y8/4褐色 細砂混じり中砂 地下水位付近の底角錐含む
14. 7. 5Y8/4褐色 細砂混じり中砂混じり粗砂 中砂化物含む
15. 10Y4/6褐色 極細砂混じり中砂と粗砂 透5cm前後の底角錐含む
16. 7. 5Y8/4褐色 細砂混じり中砂へ粗砂 透3~5cm底角錐入る 洪水砂疊
- 16'. 7. 5Y8/4褐色 粗砂 細砂混じり中砂 地下水位付近
17. 10Y5/5にぶ~黃褐色 黃褐色 ブルト混じり中砂 地下水位付近
18. 7. 5Y7/1灰色~S5/灰褐色 シルト混じり粗砂 廃植物含みグライ化する
19. 10Y4/4褐色 土器片 シルト混じり細砂 ピット埋土

図版31 南地区南北壁A-b・西壁0-0断面土層名

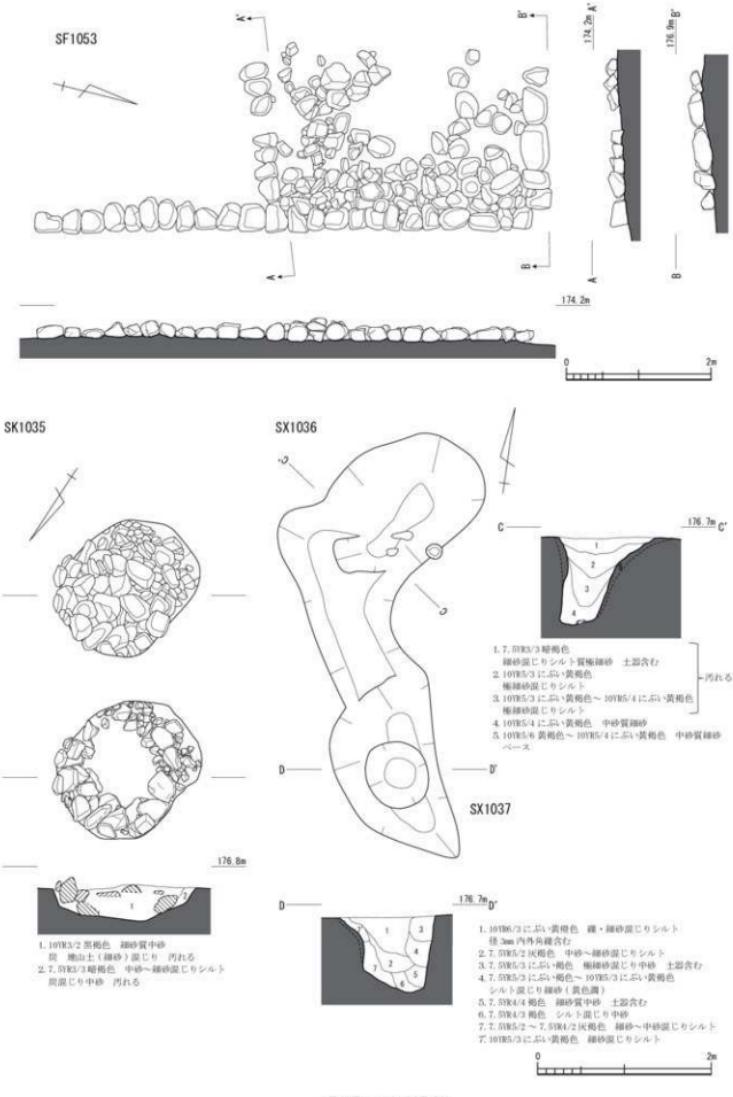
1. 橋巻土
2. 2. 5Y7/1赤褐色 細砂混じり腐植土 現表土
3. 大歳神社付近の土間コンクリート
4. 7. SR3/2褐褐色~1/2褐色 シルト、極細砂混じり中砂へ細砂 濁土
5. 7. SR2/2褐褐色 細砂・濁 地5cm内外亜円錐密集
6. 過現代の土灰埋土
7. 5Y3/1黒褐色 シルト・粗砂・混じり細砂 很多く含み内れる
8. 2. SR1/7/1黒褐色 極細砂混じり細砂 土、底層及び火災面・火災による炭層 下面が火化 上半は土壌化
9. 5Y2/3暗褐色~褐色 細砂・粗砂混じり細砂 瓦多く含む
10. 5Y8/2灰褐色 シルト混じり細砂 土壌化
11. 7. 5Y8/6褐色 細砂 透3~5cm縫合む 濁土
12. 2. 5Y6/1黄褐色 細砂 径~10cm亜円錐人為的に密集
13. 2. 5Y6/1黄褐色 細砂 径10~15cm亜円錐 亜角錐人為的に密集
- 13'. 2. 5Y6/1黄褐色 細砂 径30cm内外亜円錐 亜角錐人為的に密集
14. 5Y8/2灰褐色 細砂 近現代の大歳神社石組・瓦等
15. 7. 5Y8/4褐色 シルト混じり粗砂 若干土壌化する 石門SX1065構築よりも先行する
16. 7. SR2/2褐色 細砂・粗砂混じり細砂 透3mm外角錐含む
17. 7. 5Y5/5褐色 黃褐色 シルト混じり細砂
18. 7. 5Y8/4褐色 シルト混じり細砂
19. 10Y3/2にぶ~黃褐色 粗砂 山土による現踏道に伴う粗砂か
20. 7. 5Y8/4褐色 粗砂へ中砂 田舎道の踏道 上半が土壌化
21. 10Y4/5にぶ~黃褐色 若千シルト混じる中砂 石材の攤り埋土 やや汚れる
22. 7. 5Y8/4褐色 シルト混じり中砂
23. 10Y5/4にぶ~黃褐色 細砂混じり粗砂 透5cm内外亜円錐多く入る 砂利数
24. 7. 5Y8/4にぶ~褐色~7. 5Y8/3褐色
25. 7. 5Y8/3褐色~6Y8/3暗褐色 シルト混じり中砂
26. 10Y8/4褐色 細砂混じり中砂 透5cm外角錐発達する 27層の土壌化
- 26'. 10Y8/4にぶ~黃褐色~4/4褐色 中砂質粗砂 粒度ない 27層が若干土壌化
27. 10Y4/6褐色 細砂 透5cm外角錐 30~35層の土壌化
28. 7. 5Y8/2~3褐色 地盤へ10cm以上 黃褐色 シルト混じり細砂へ中砂 18層と同一質
29. 10Y5/4にぶ~黃褐色 シルト混じり細砂へ中砂
30. 10Y5/3暗褐色~7. 5Y8/3褐色 シルト混じり細砂中砂
- 30'. 10Y5/5にぶ~黃褐色 細砂質中砂 下半に透5cm内外の亜円錐流れ込む
31. 7. 5Y8/5灰褐色 粗砂混じり難 透10cm内外亜円錐多く含む 痕状地中の砂疊
32. 10Y5/4にぶ~黃褐色 細砂混じりシルト SX041解剖
33. 7. 5Y8/5にぶ~褐色~7. 5Y8/4褐色 細砂混じりシルト 透5cm内外の亜円錐・粗砂を含む 樹木の根直か
34. 10Y5/5にぶ~黃褐色~7. 5Y8/4にぶ~褐色 シルト混じり中砂 汚れる 樹木の根直か

図版 33

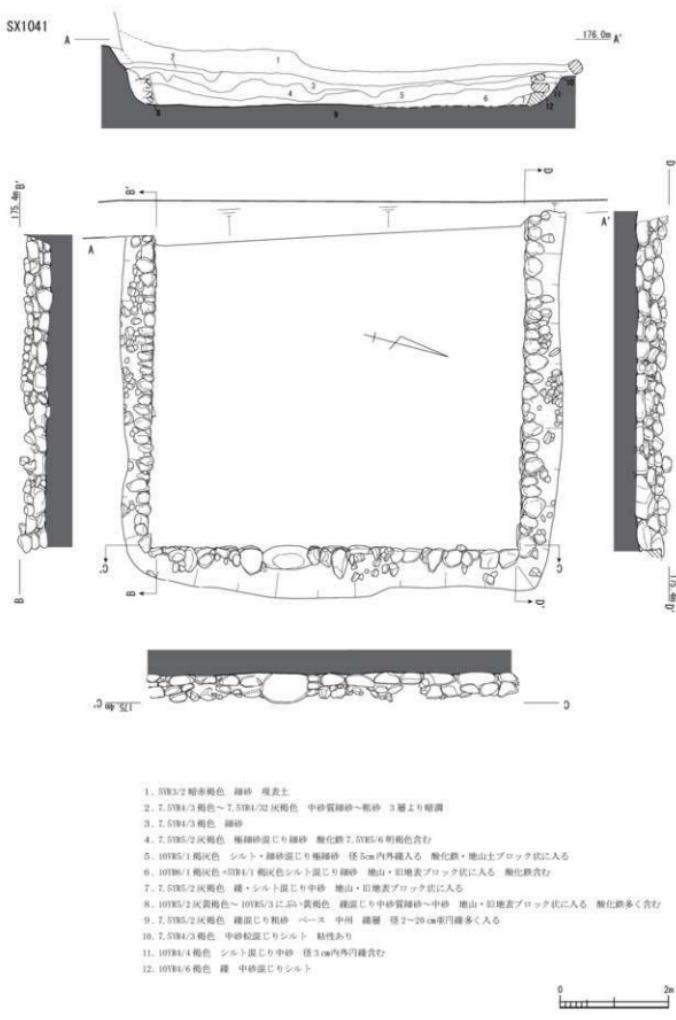


上段南地区南半遺構配置図 SX1001・1004他

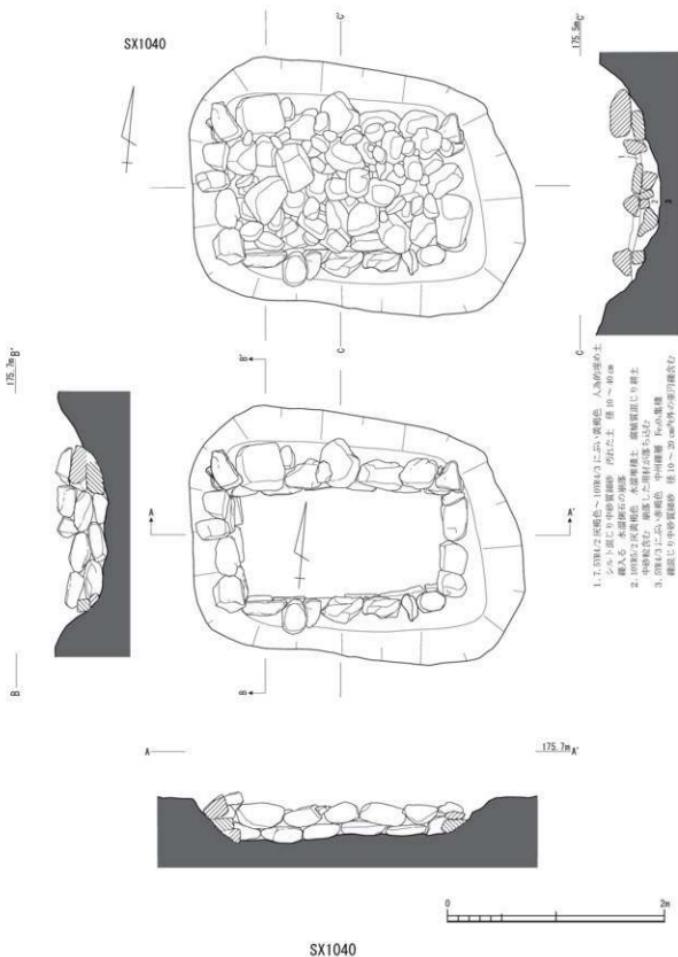
図版 34



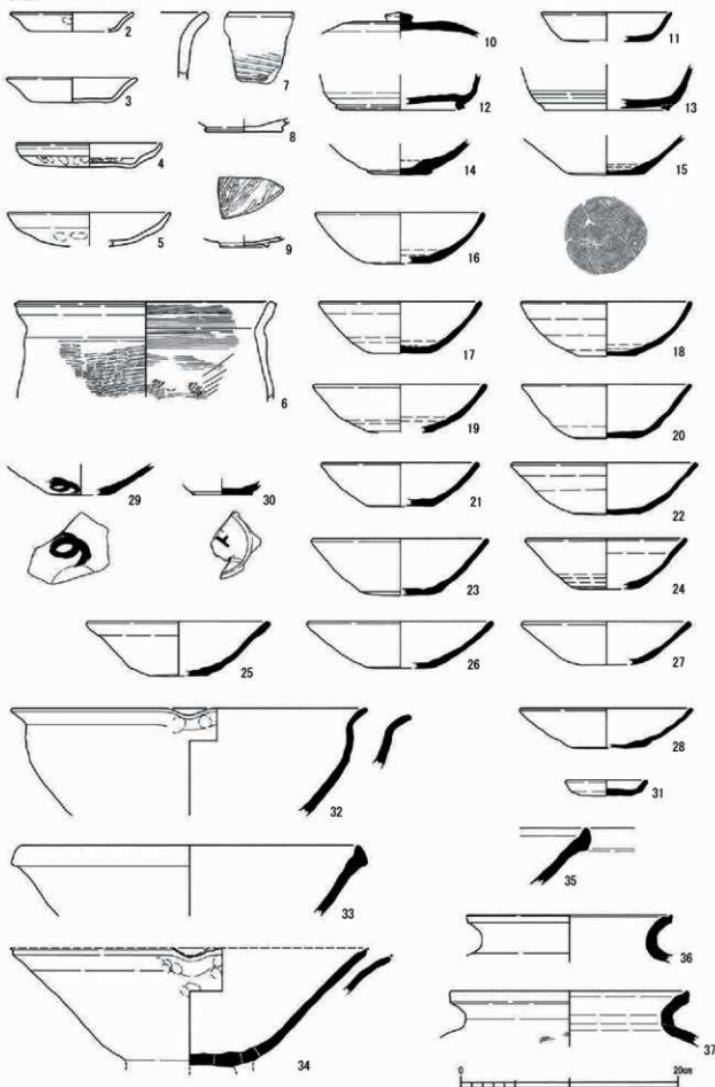
図版 35



図版 36

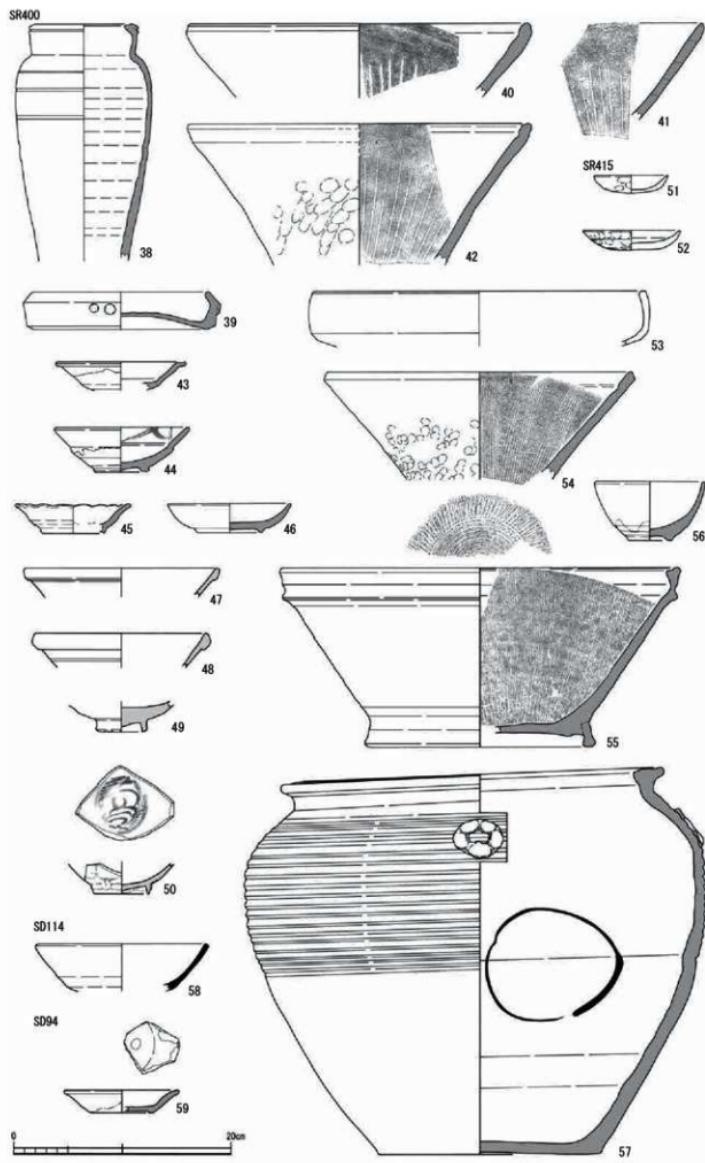


SR400

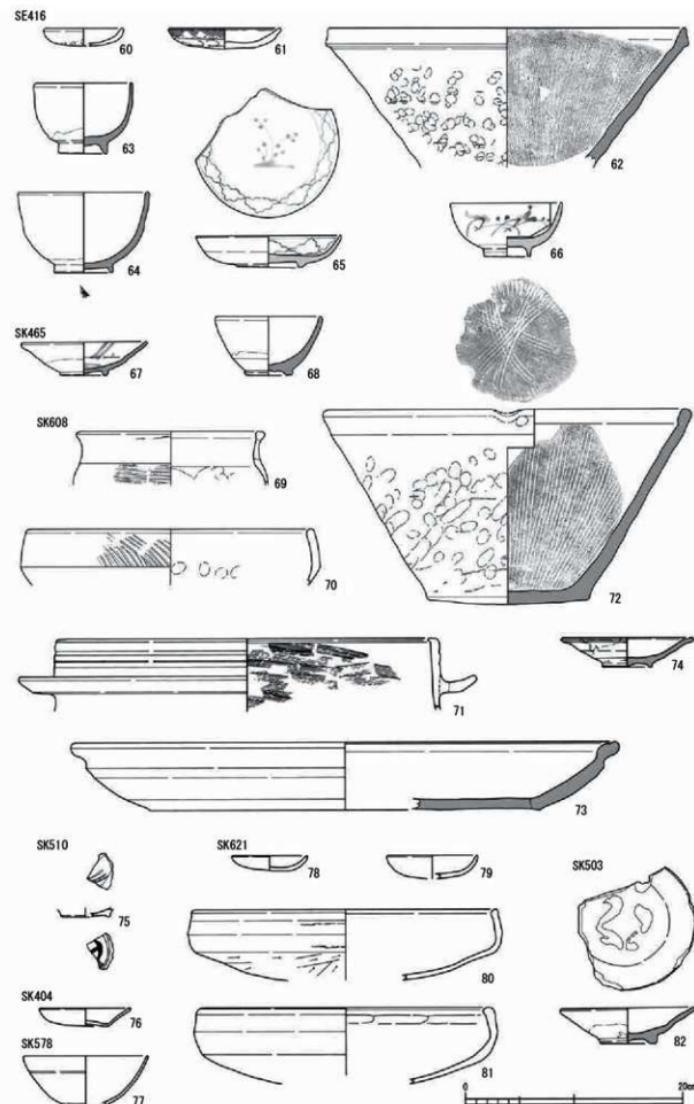


下段 SR400 出土土器

図版 38

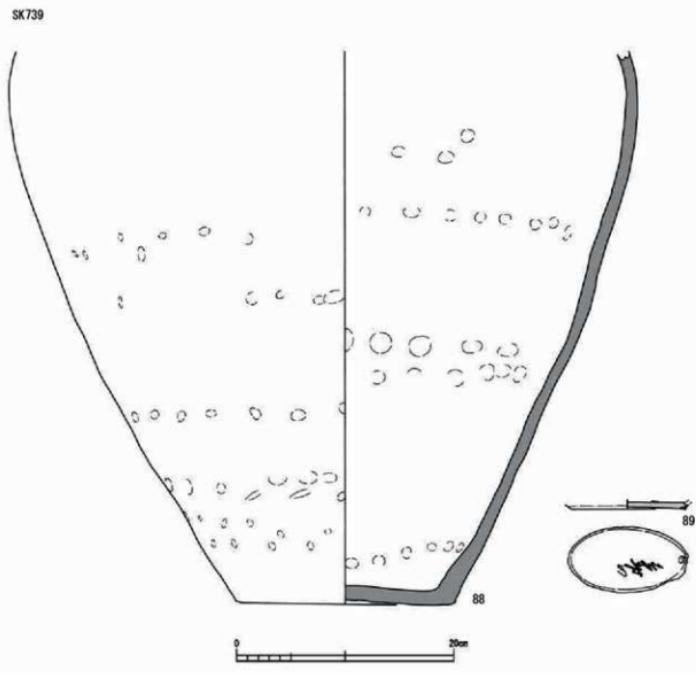
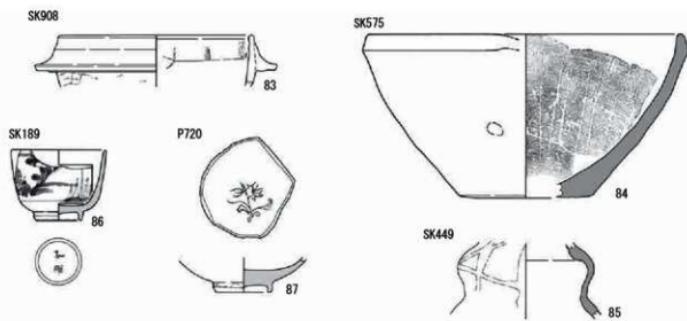


下段 SR400・415 他出土土器



下段 SE416・SK465他出土土器

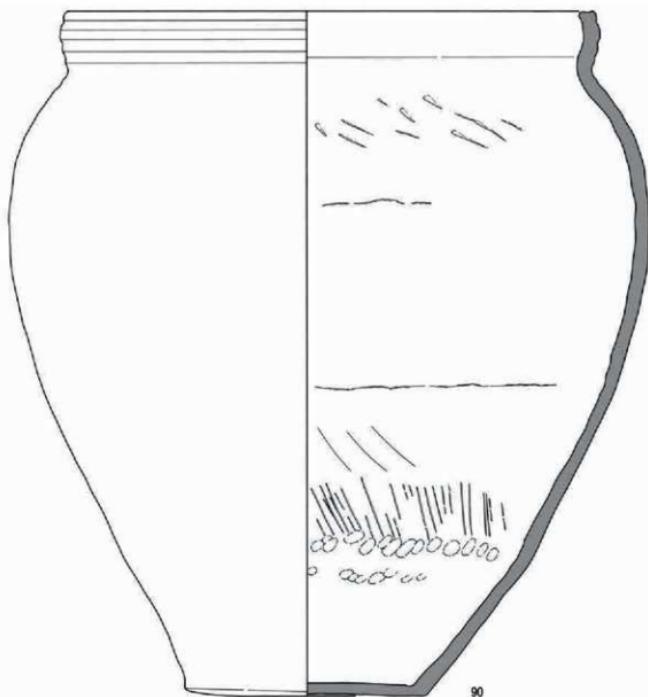
図版 40



下段 SK908・575 他出土土器

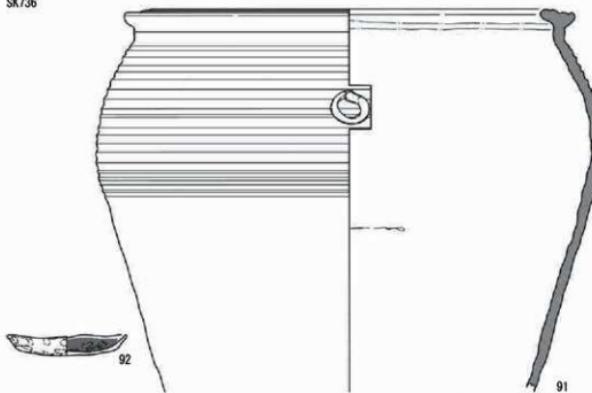
図版 41

SK435



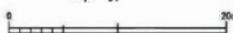
90

SK736



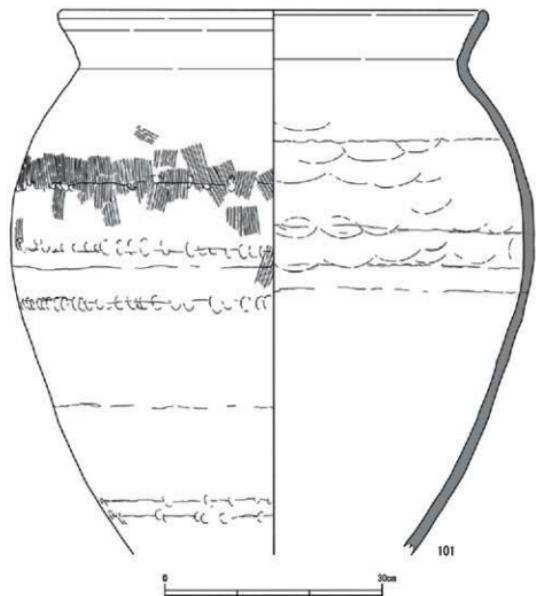
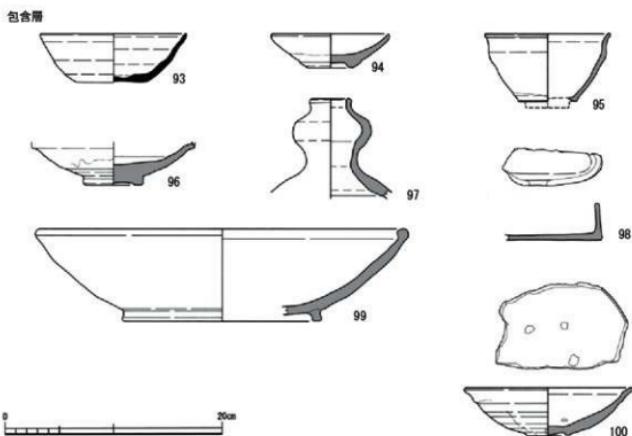
92

91



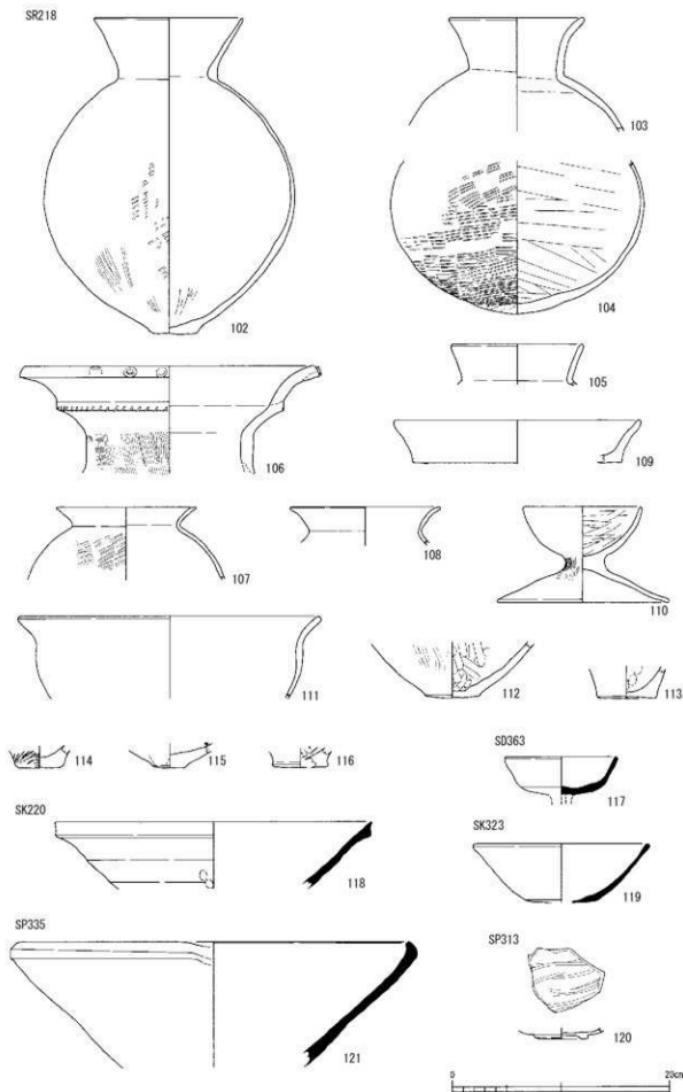
下段 SK435・736 出土土器

図版 42



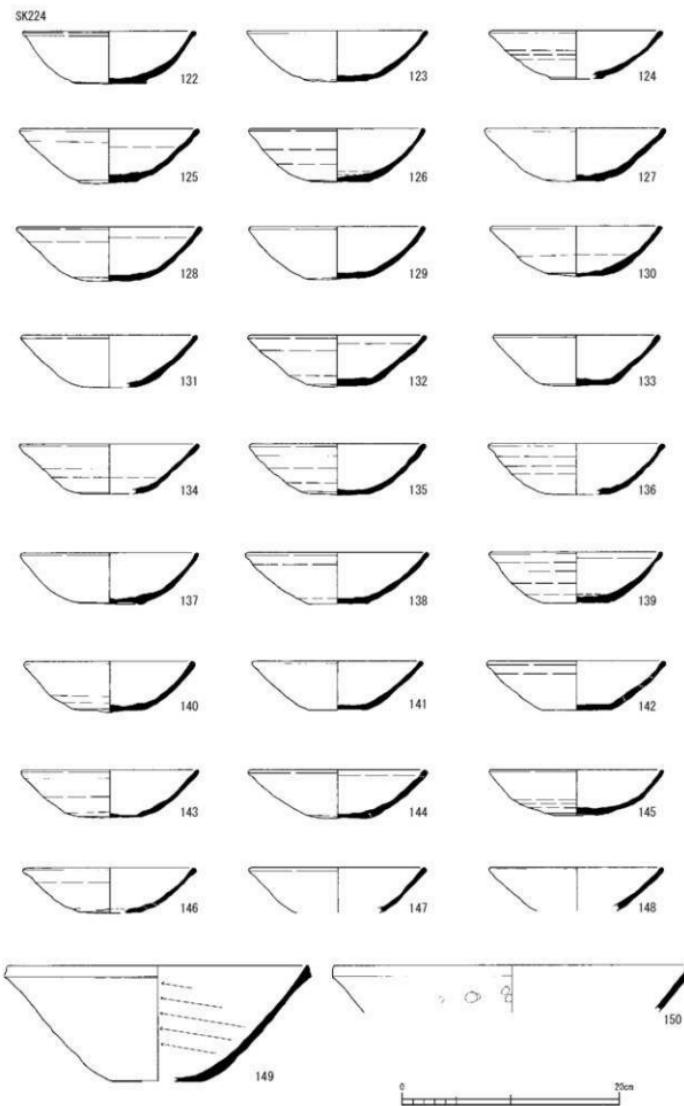
下段 包含層出土土器

図版 43



上段北地区 SR218・SD363 他出土土器

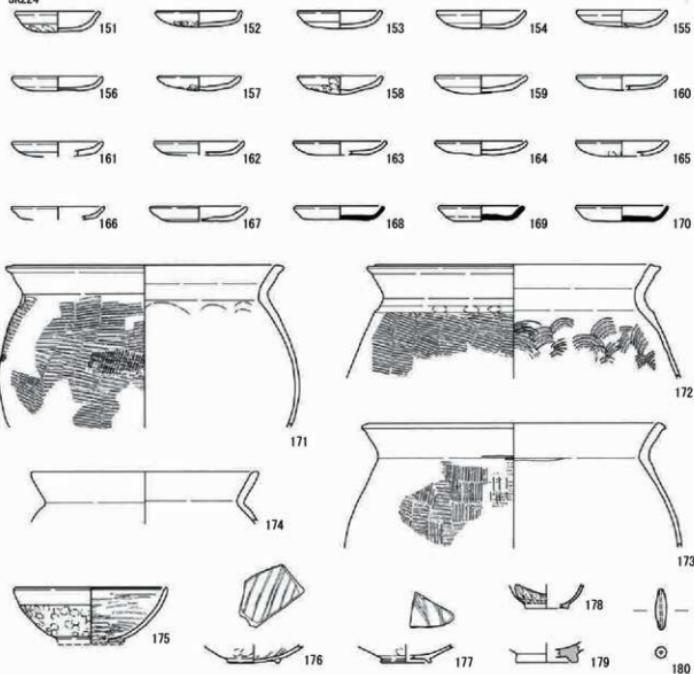
図版 44



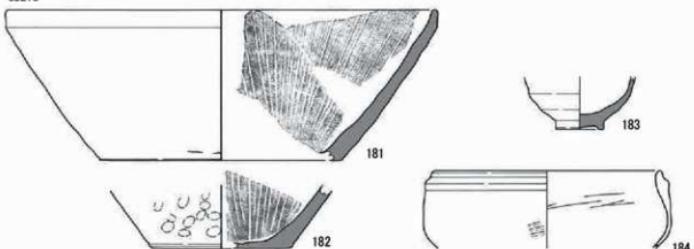
上段北地区 SK224 出土土器

図版 45

SK224



SD273



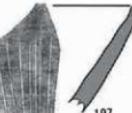
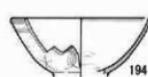
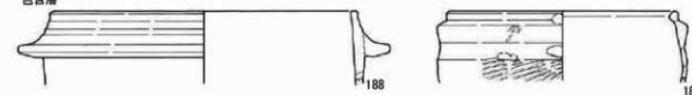
SE362



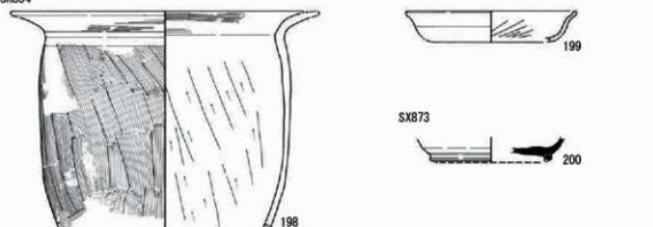
上段北地区 SD273 他出土土器

図版 46

包含層



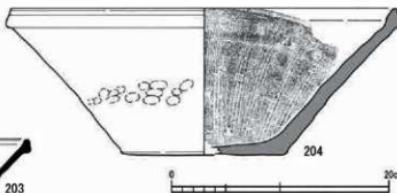
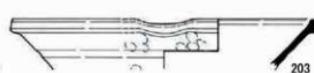
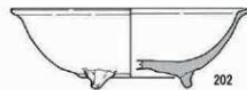
SK834



SX873

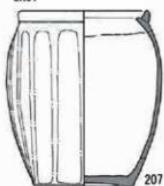


包含層



上段北地区包含層、中央地区 SK834 他出土土器

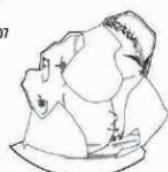
SK01



SK11



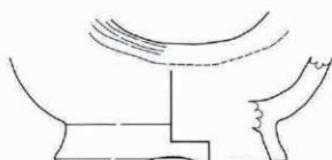
SK12



SK10

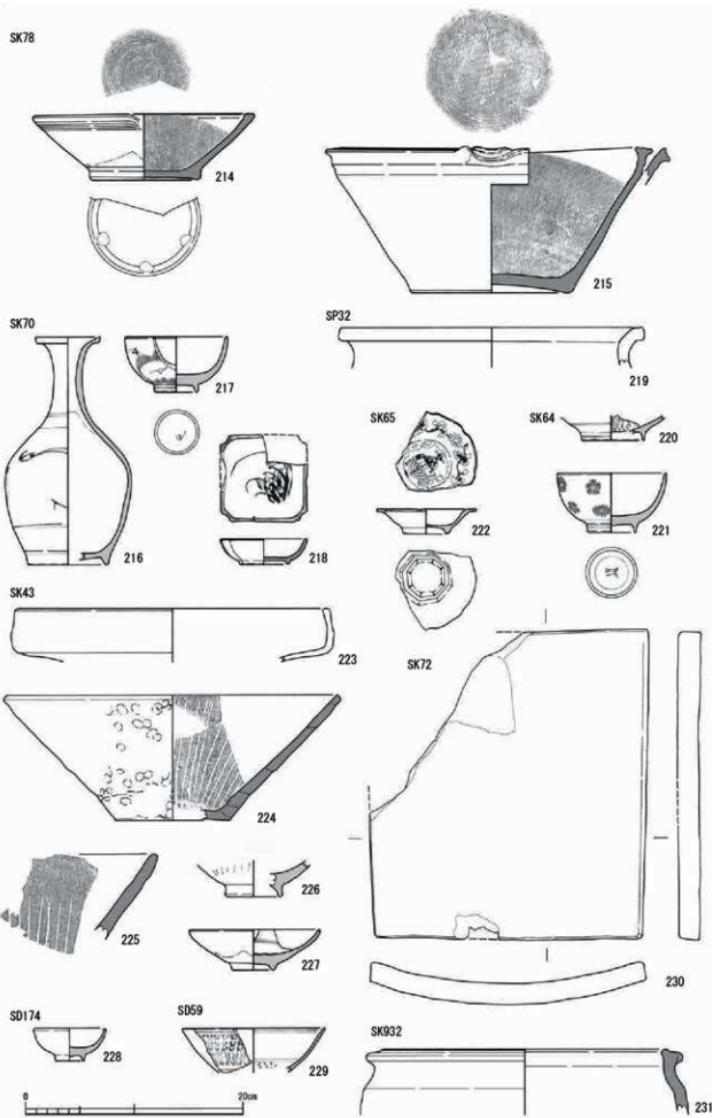


SK14

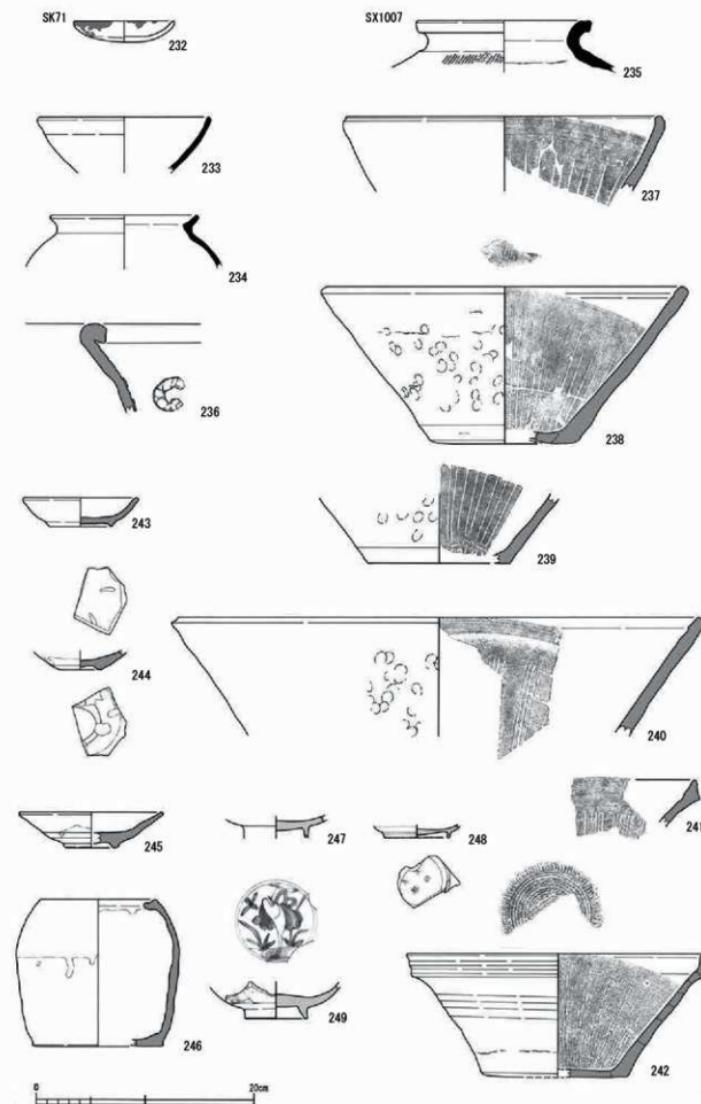


上段中央地区 SK01 他出土土器

図版 48

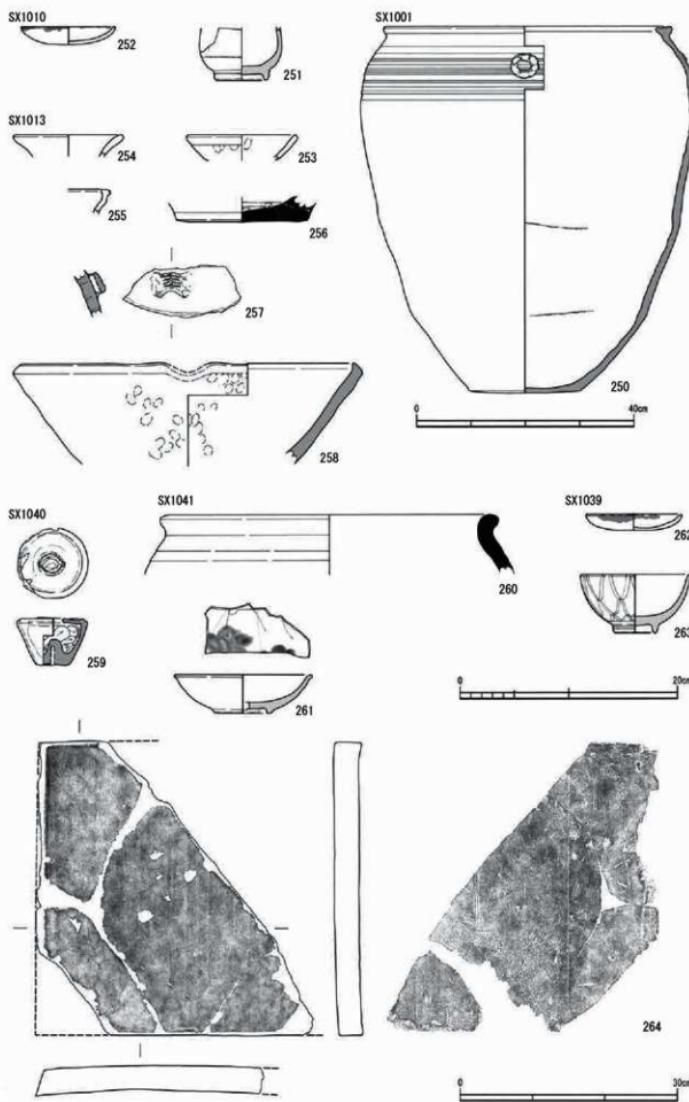


上段中央地区 SK78・70 他出土土器



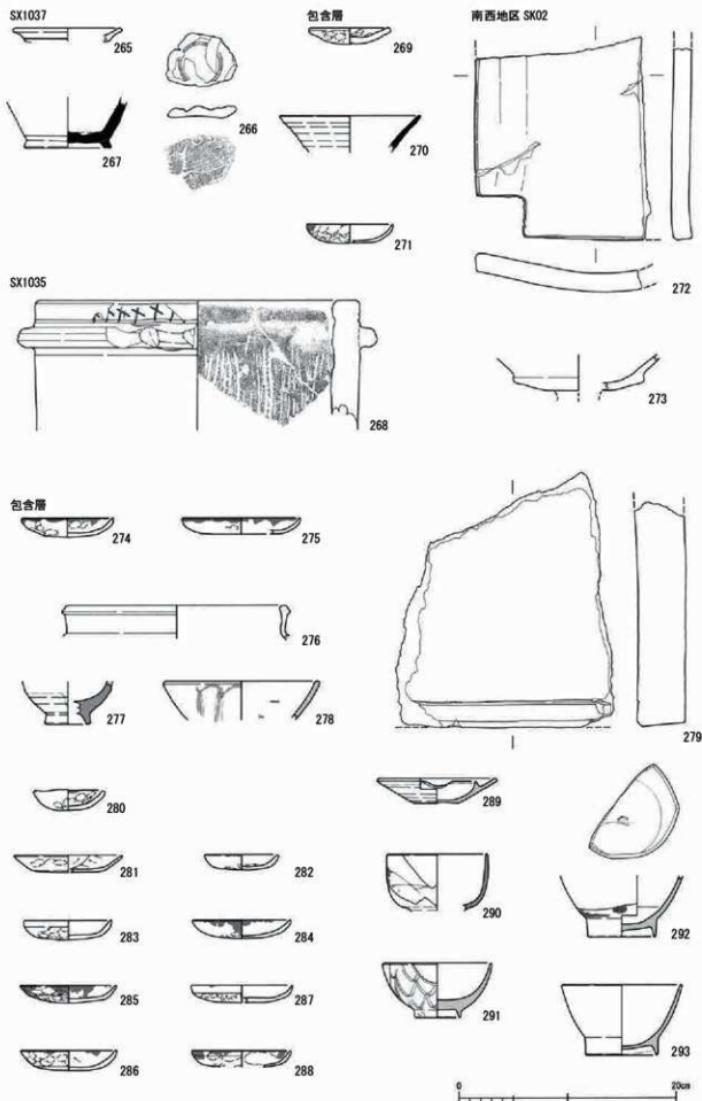
上段南地区 SX1007 出土土器

図版 50



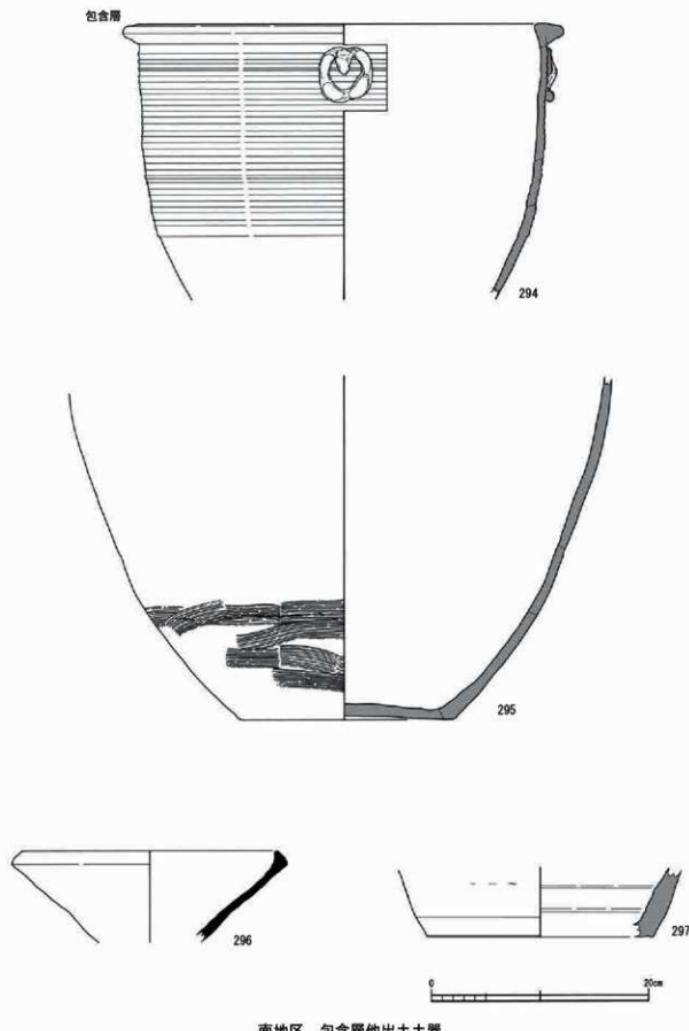
上段南地区 SX1001 他出土土器

图版 51



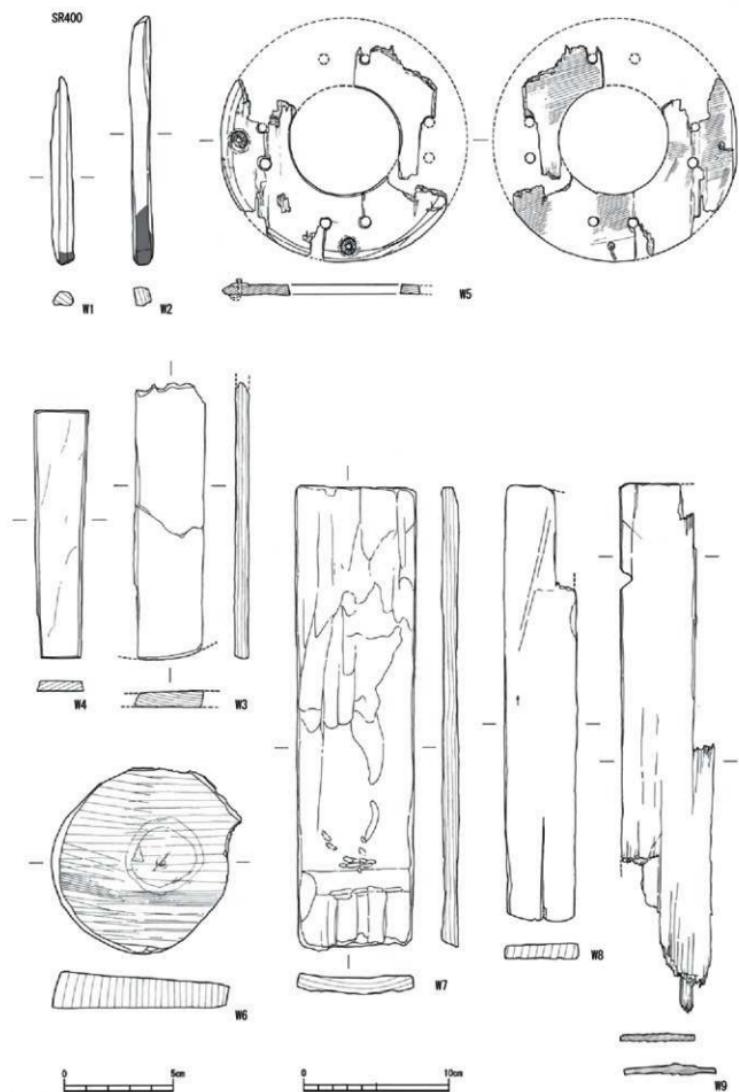
南地区 SX1037 他、南西地区出土土器

図版 52



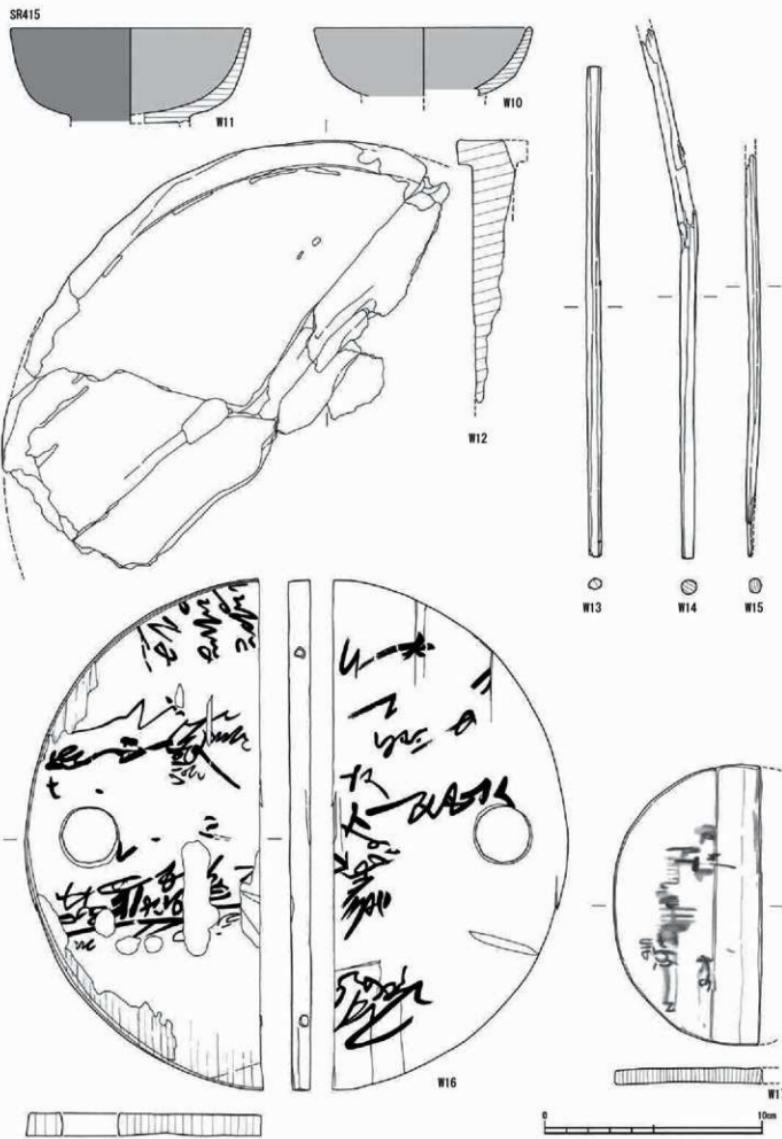
南地区 包含層他出土土器

图版 53

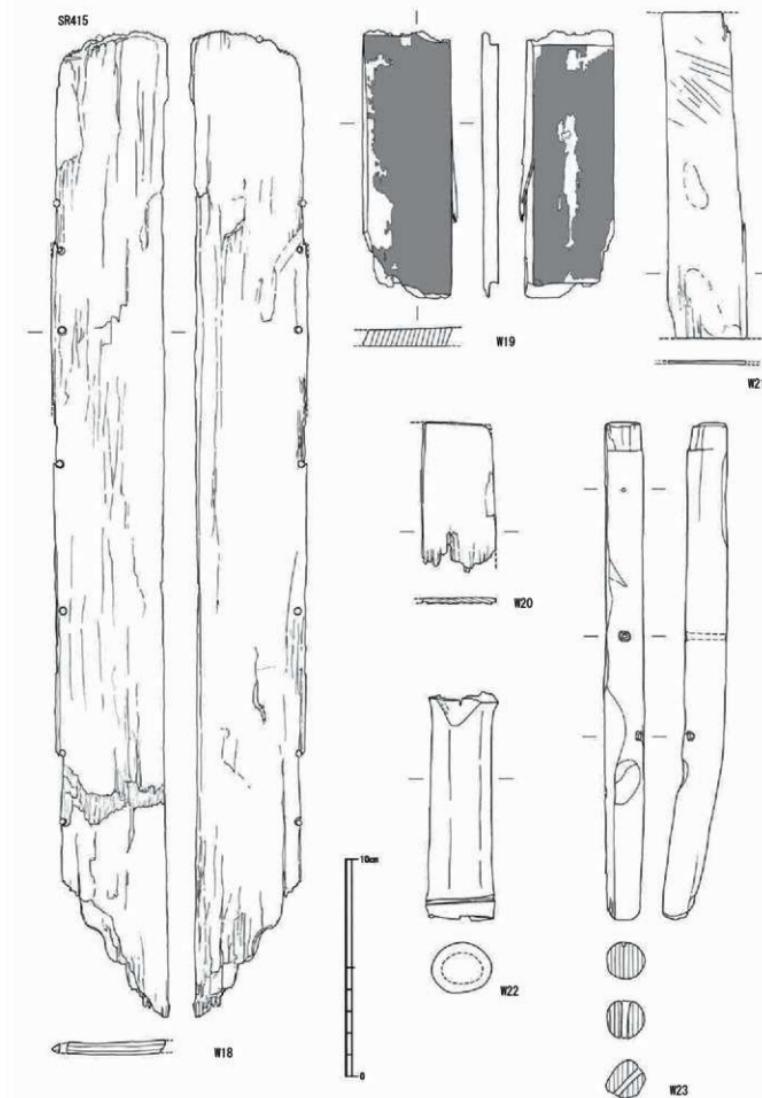


SR400 出土木製品

図版 54

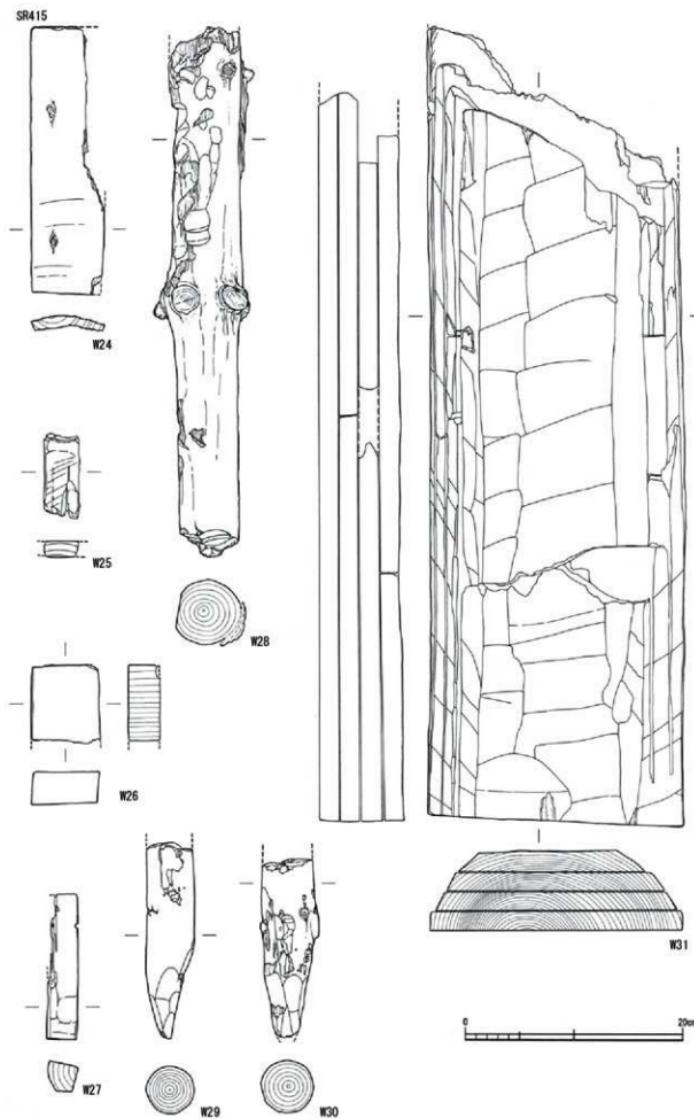


SR415 出土木製品 1



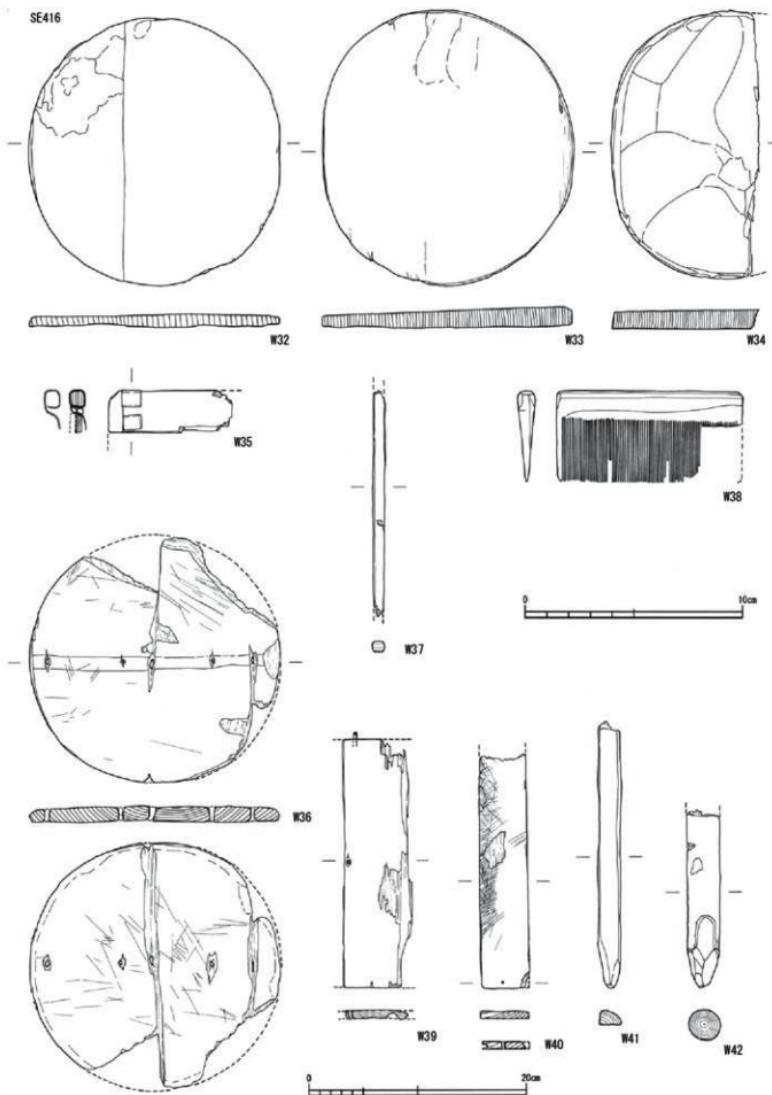
SR415 出土木製品 2

図版 56



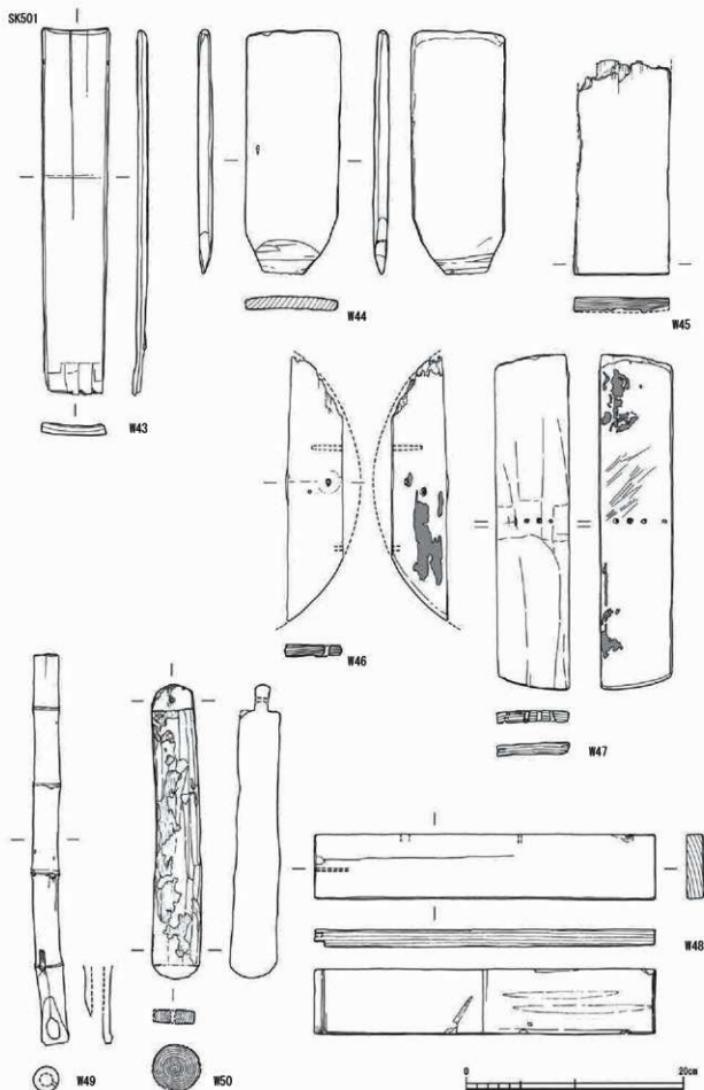
SR415 出土木製品 3

図版 57

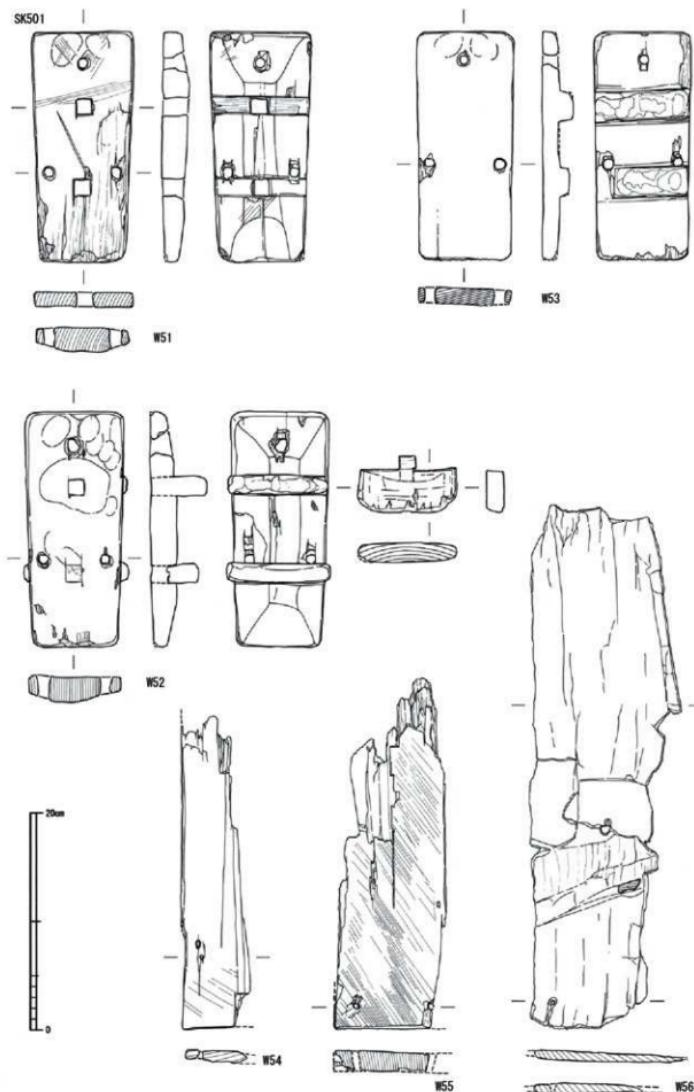


SE416 出土木製品

図版 58

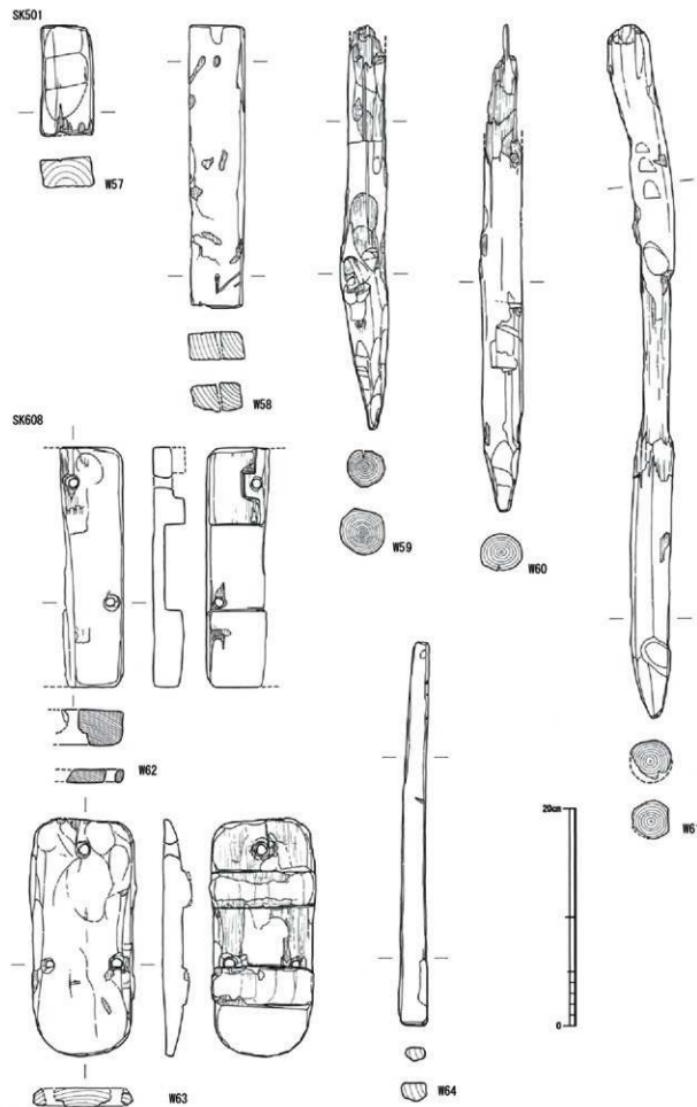


SK501 出土木製品 1



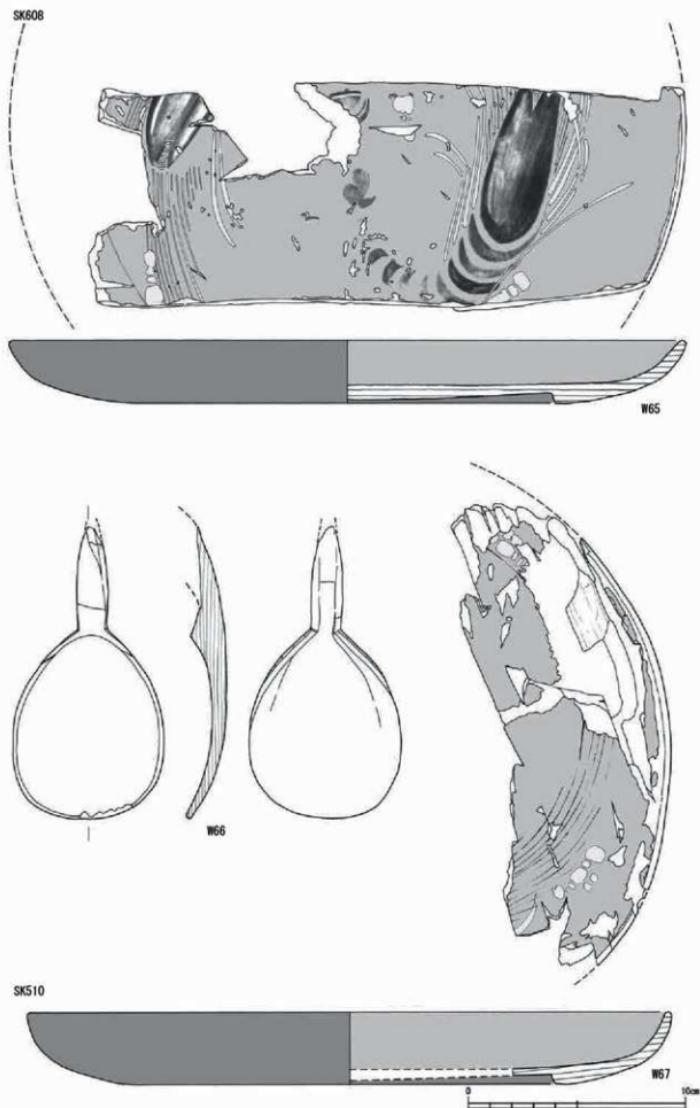
SK501 出土木製品 2

図版 60



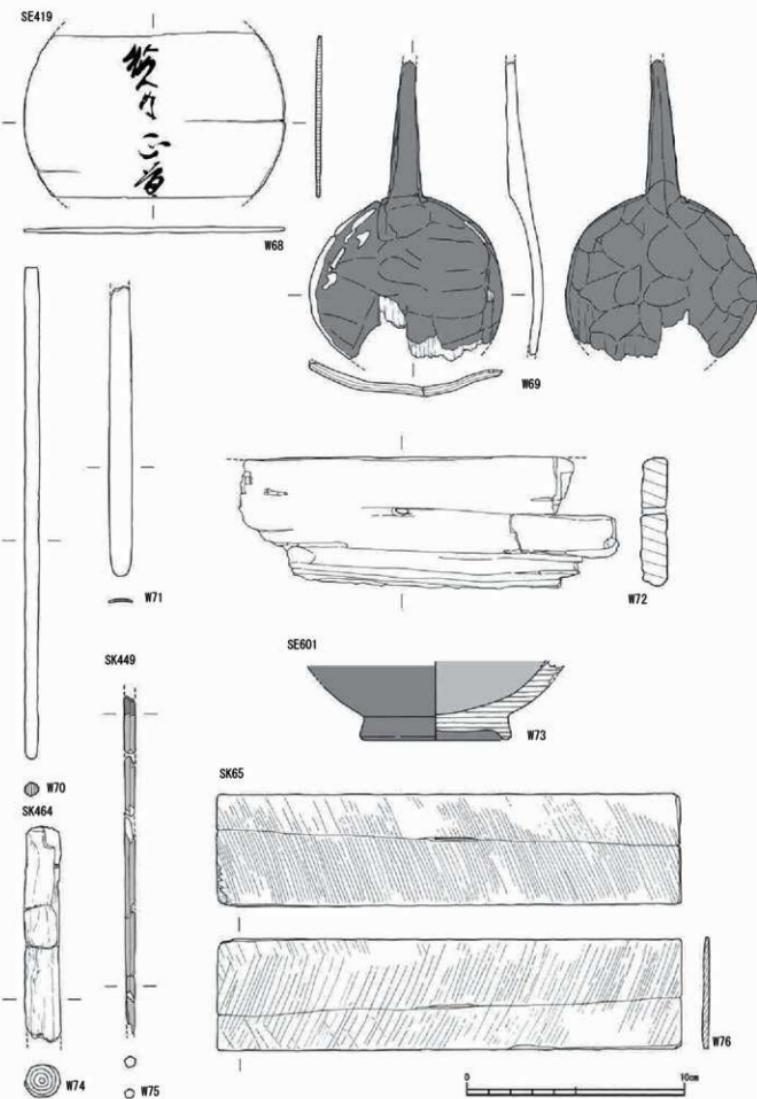
SK501 出土木製品 3

図版 61

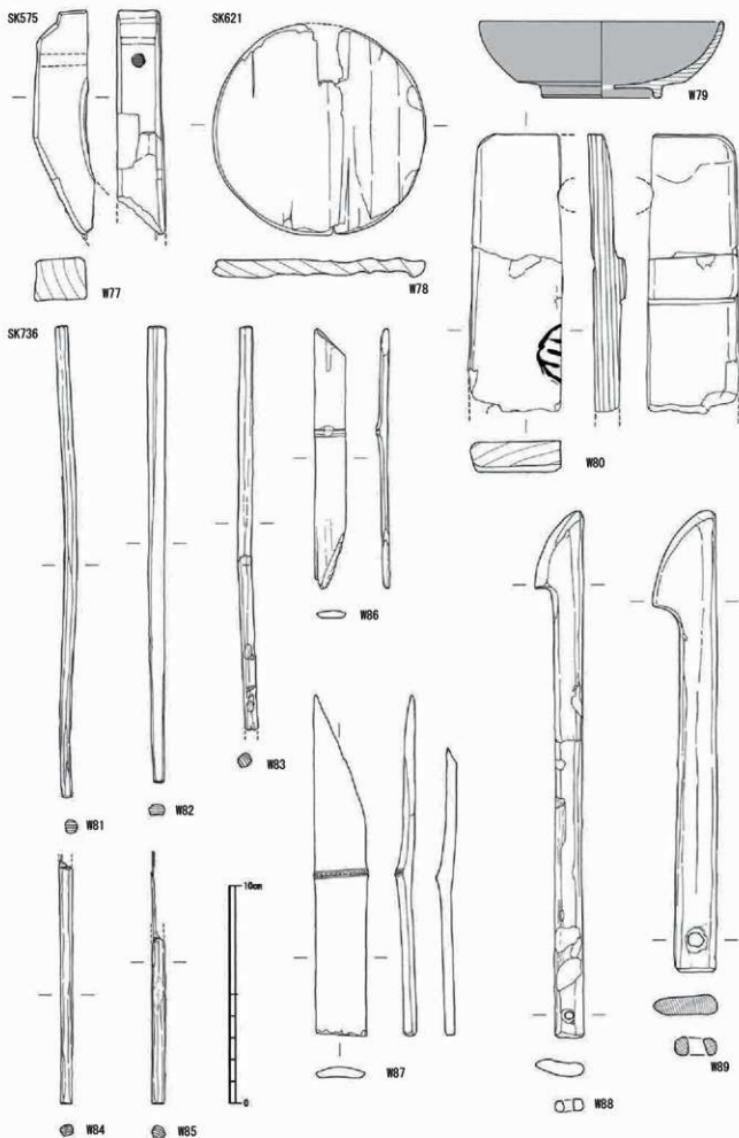


SK608・510 出土木製品

図版 62

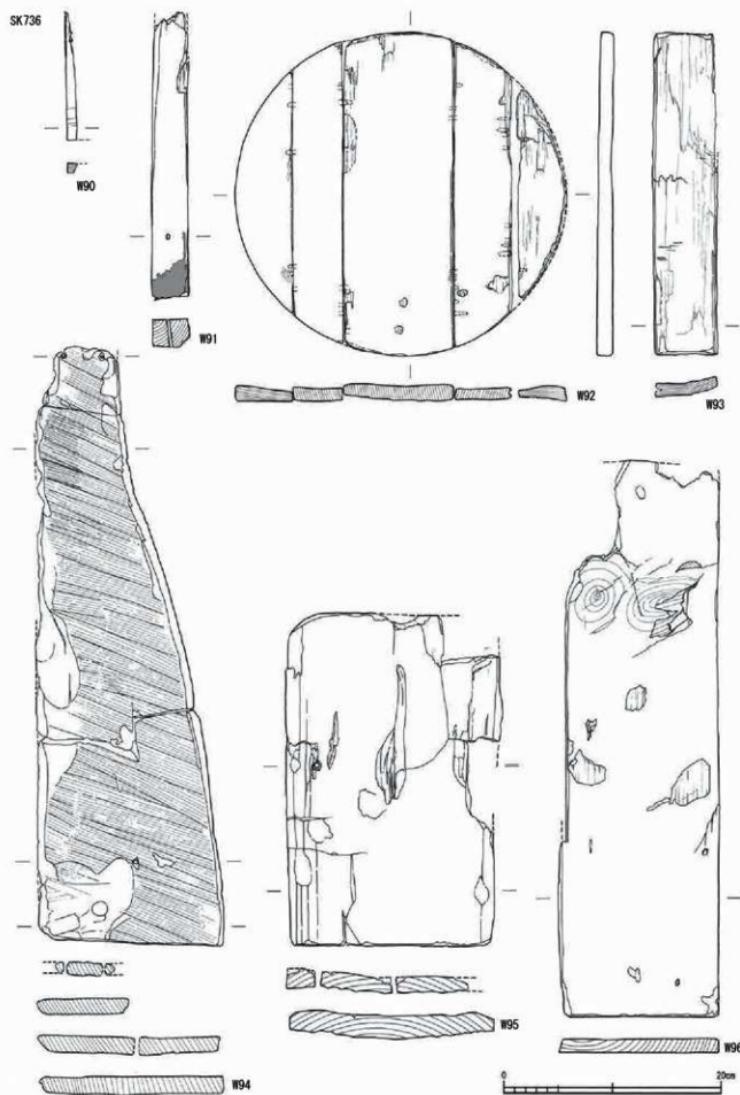


SE419・601 他出土木製品



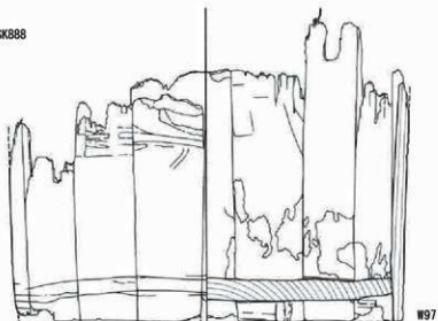
SK575・621・736 出土木製品 1

図版 64



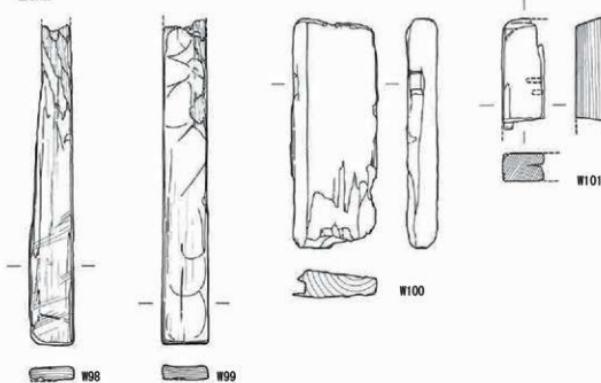
SK736 出土木製品 2

SK888



W97

包含层



W98

W99

W100

W101

W102

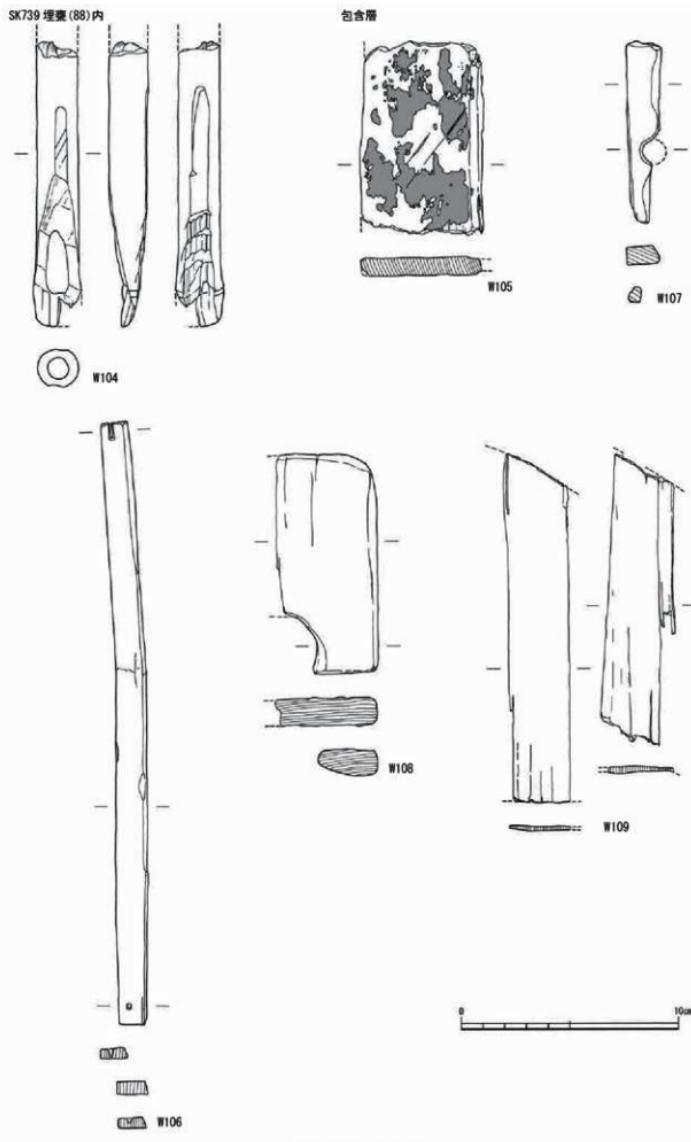
W102

W103

20cm

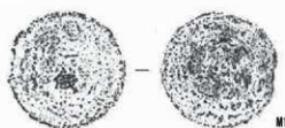
SK888 · 包含层出土木制品

図版 66



包含層他出土木製品

SK820



SK71



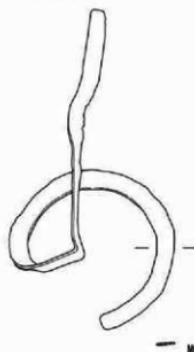
包含層



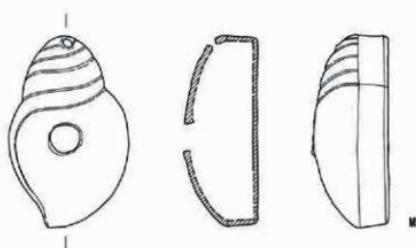
包含層



包含層



SK739 埋甕(88)内



SK450



SK68

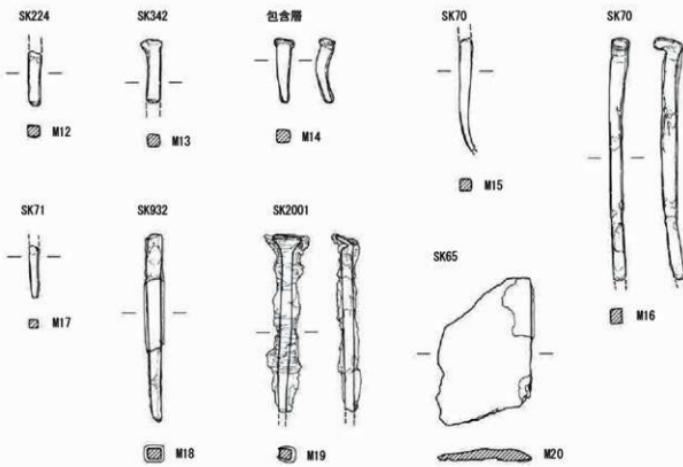
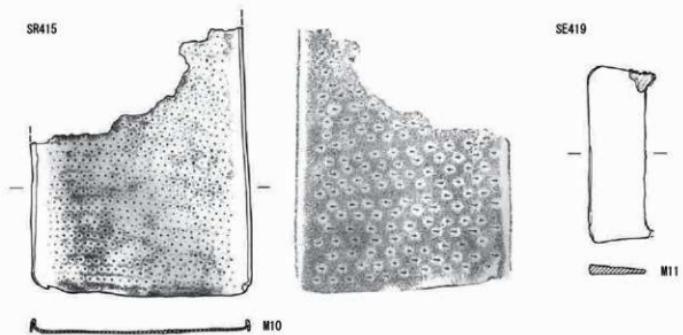


M15

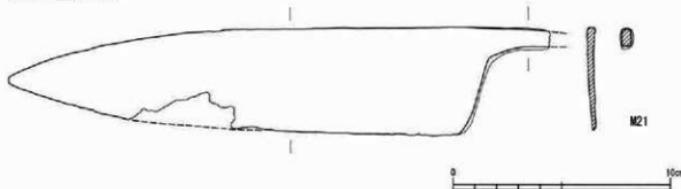
包含層



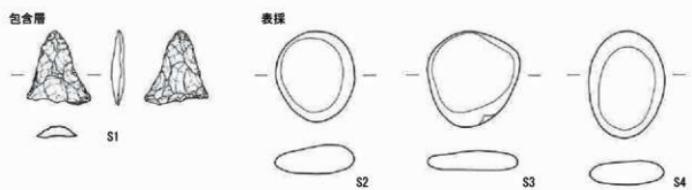
図版 68



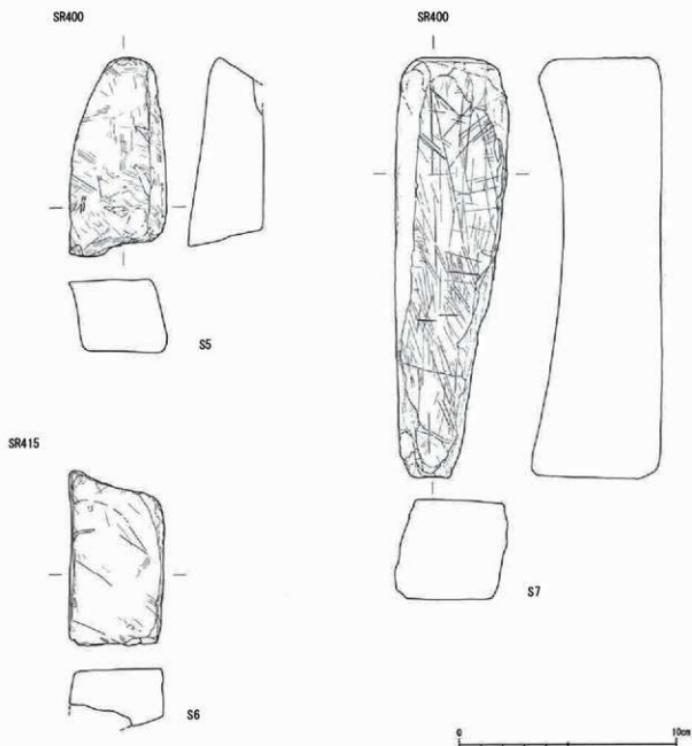
SX1001 埋壙(250)内



出土金属製品 2



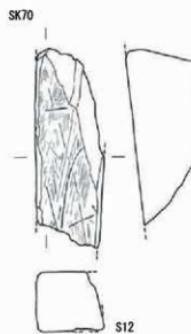
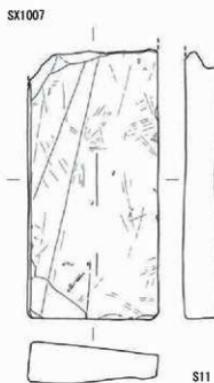
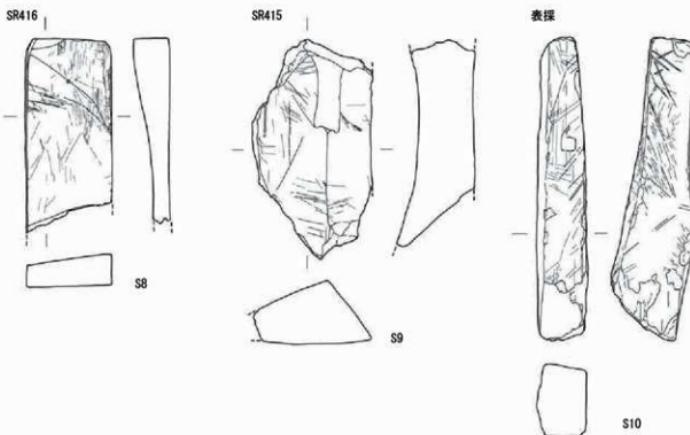
0 5cm



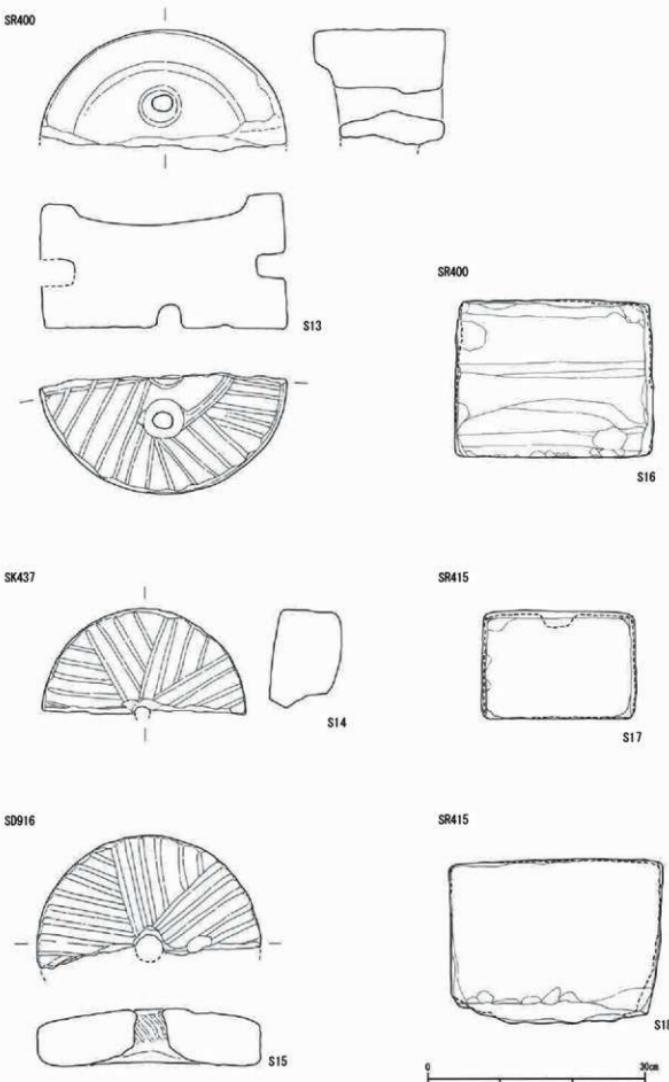
0 10cm

出土石製品 1

図版 70

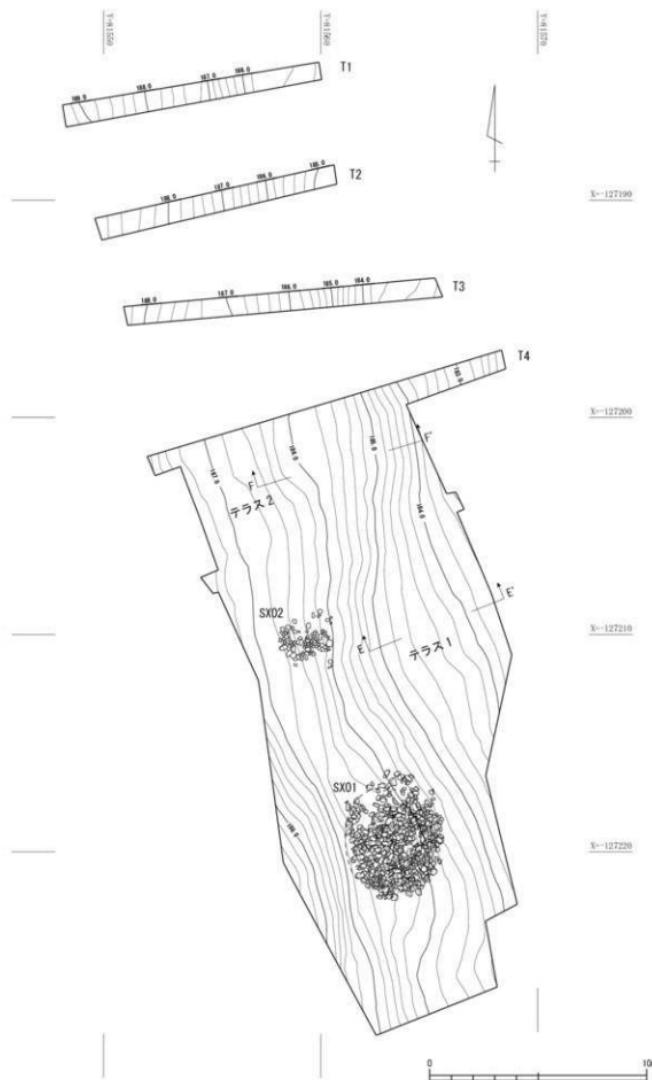


出土石製品 2



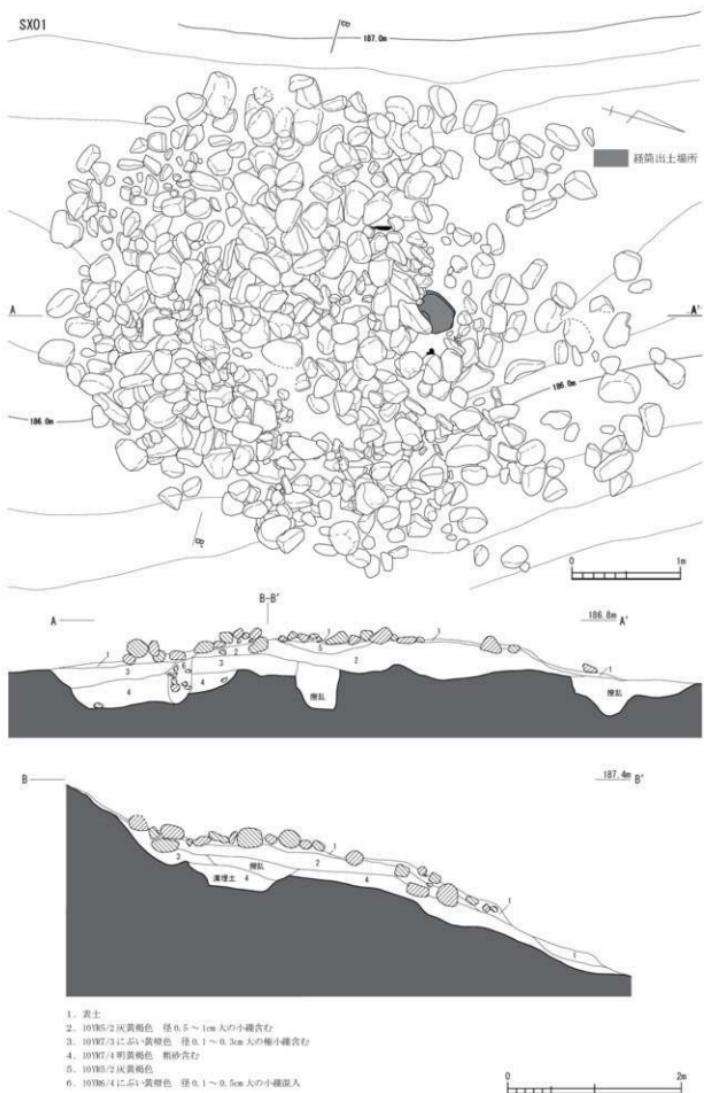
出土石製品 3

図版 72



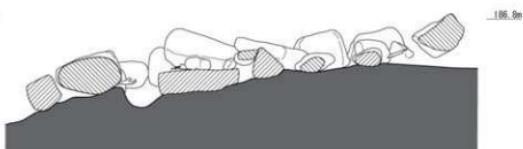
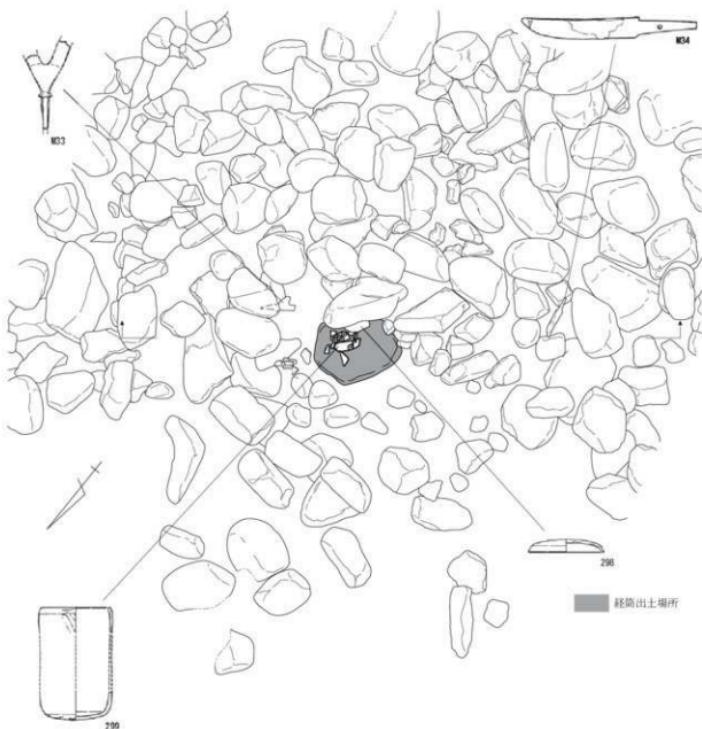
西地区全体図

図版 73

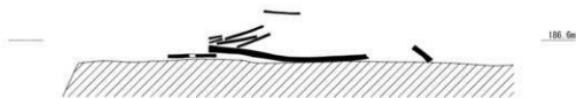
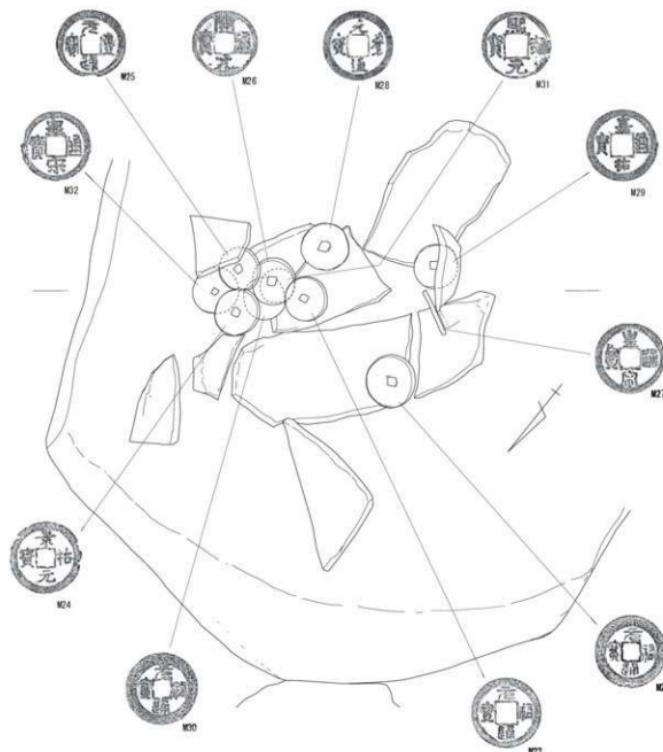


西地区 SX01

図版 74



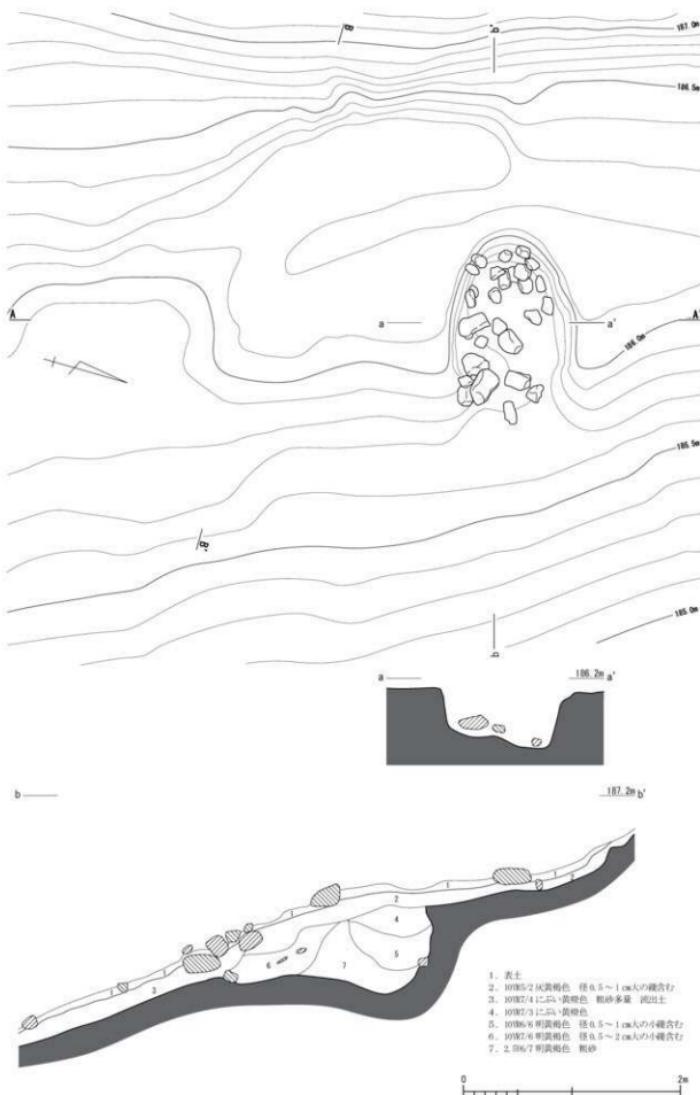
西地区 SX01 遺物出土状況



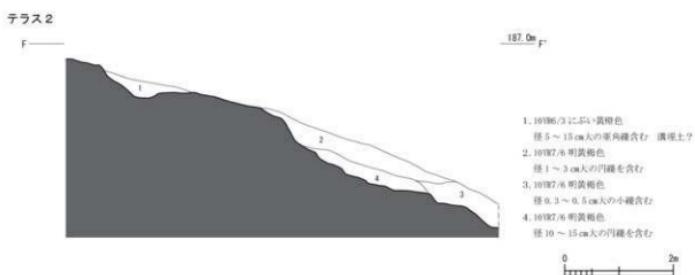
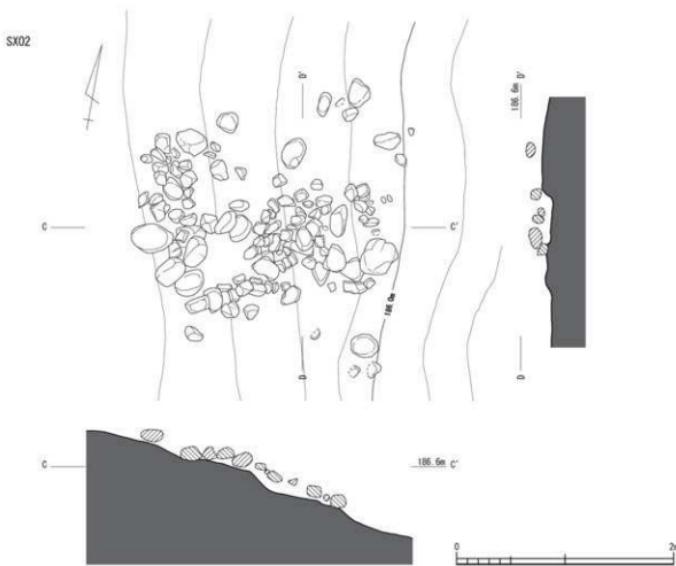
0 10cm

西地区 SX01 铜钱出土状况

図版 76

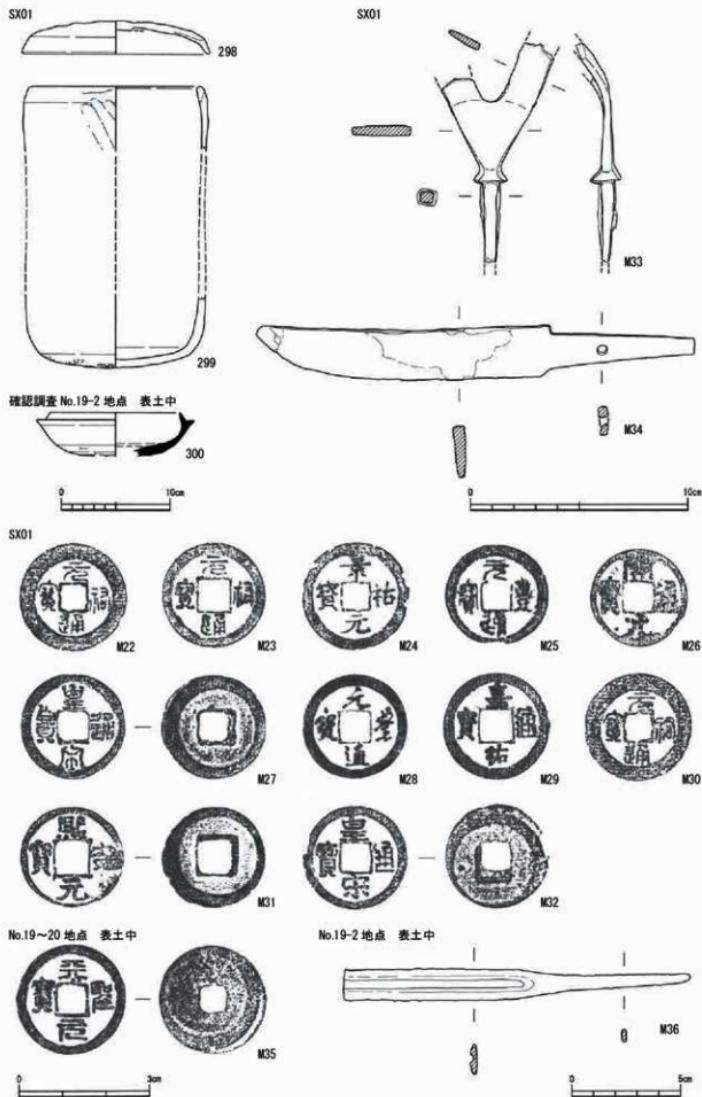


西地区 SX01 下層



西地区 SX02・テラス1・2

図版 78



西地区出土遺物